

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言談話資料（3）：青森・新潟・愛知

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002272

方言談話資料(3)

—青森・新潟・愛知—

国立国語研究所資料集 10-3

國立國語研究所

1980

——国立国語研究所資料集 10-3——

方言談話資料(3)

——青森・新潟・愛知——

國立國語研究所

1980

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から51年度にかけて、「各地方言資料の収集および文字化のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であり、昨年度までに、『方言談話資料(1)—山形・群馬・長野—』『方言談話資料(2)—奈良・高知・長崎—』を刊行した。本年度は、その第三集（本書）および第四集を刊行する。

本書に収めた録音・文字化資料は、もっぱら、松本宙（青森県担当地方研究員・宮城教育大学助教授）・佐々木隆次（同協力者・青森県立郷土館研究員）、剣持隼一郎（新潟県担当地方研究員・長岡工業高等専門学校講師）、山口幸洋（愛知県担当地方研究員）の四氏の尽力によるものである。また、話者もしくは司会者として、桜田鉄彌、棟方トミ、八木沢千代三郎（以上青森県）、高橋鹿之助、高橋清治、高橋孝宣、高橋チエノ、高橋初枝、高橋真、高橋マツノ、高橋ミサノ（以上新潟県）、武田初夫、武田ふさ、武田やすゑ、田辺正一、堤ふじよ（以上愛知県）の各氏の協力を得たほか、有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和55年1月

国立国語研究所長 林 大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 穀 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢（現在、大阪大学教授） 佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（研究員）

沢 木 幹 栄（研究員） 白 沢 宏 枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛 宿 八 郎 康 隆	五 十 嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	寛 大 城	加 治 工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄 一 郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼 一 郎	後 藤 和 彦	小 松 代 融 一	斎 藤 義 七 郎	迫 野 虔 德
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢 一 郎
日 野 資 純	広 戸 慎	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉 治 郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

「方言談話資料」(3) 編集担当者

飯 豊 穀 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者（協力者）

青森…松 本 宙（佐々木隆次） 新潟…剣 持 隼一郎 愛知…山 口 幸 洋

目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡例	10
I 青森県青森市大字牛館	
解説	13
1. 田打ちの頃	21
2. 繩縄い	28
3. つらい農作業	35
4. 堆と小作米	45
5. 牛館橋	61
6. 川のさかなとり	82
7. お山(岩木山)の参詣	91
8. ボサマ	113
9. 青森空襲	119
II 新潟県柏崎市大字折居字餅糧	
解説	139
1. 昔の労働	163
2. 冬の仕事	197
3. 養蚕	219
4. 雪の中の生活	242
5. 冬の楽しみ	279

III 愛知県北設楽郡富山村中の甲

解説	303
1. 身辺雑事	311
2. うわさ話など	335
3. 益唄のこと、亡き夫のこと	366

ま　え　が　き

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

録音・文字化を実施した府県は次の通りである。

青森,* 岩手, 宮城,* 山形, 群馬, 千葉, 新潟, 石川,* 福井, 長野, 静岡, 愛知, 京都, 奈良, 鳥取, 島根, 広島, 愛媛, 高知, 長崎, 宮崎, 鹿児島,* 沖縄

51年度は収録地点を4地点減らし(*印の県を割愛した), 19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、なお、このほかに収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。本書は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「青森県青森市大字牛館」「新潟県柏崎市大字折居字餅糰」「愛知県北設楽郡富山村中の甲」の3地点分についてのものである。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話（50年度）

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常の生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者で

も差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話（51年度）

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的な職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつけなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

- 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
- 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮したことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記

では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。

3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。

4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすこととした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名

2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）

3. 収録した方言の特色

①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

②音声・音韻上の特色

③文法上の特色

B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など。

C. 収録内容の概説

1. タイトル

2. 録音年月日

3. 録音場所

4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など

5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。

2. 発言や録音が不明瞭なため聞き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。

例 タエデ ハー <50ページ10段>

3. 最終的に聞き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。

4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。

5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に_____線をつけた。

例 A アマテ マタ ヤヅヨ。 (B アマテ マタダ)

6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分にxxxxxxをつけた。

例 カネ カネ トルアダエ。 <53ページ11段>

7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。

8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に*の符号をつけた。

I. 青森県青森市大字牛館

収録・文字化担当者 松本 宙次
" 協力者 佐々木 隆

A 収録地点とその方言について

1. 地点名

青森県青森市大字牛館 (収録場所 大字牛館字松枝73 横田敏光氏宅)

2. 収録地点の概観

位置 青森市の中心部から南方の位置し、青森駅から約6km。

交通 青森駅から南方へバスで約20分、荒川十文字停留所下車。東へ徒歩で15分。

地勢 青森平野のはば中央部にあり、北側は荒川が流れ、それを隔てて、大字八ヶ段の集落（ほとんど農家）が続いている。東西南側は田園がひらけている。

行政区画の変動

古記録では室町時代から人が住み、東の農業を営んできた。明治初期から行政区画上、東津軽郡横内村の一支部となつたが、横内村は昭和30年以降青森市に編入することとなり現在に及んでいる。

戸数・人口・主産業

青森市の人口は、昭和53年9月30日現在で、男136,100人 女144,991人 計281,091人。世帯数 86,838。

収録地の牛館の人口は、昭和53年9月現在で、約100人 世帯数22。この牛館は、米作りがほとんど、他の野菜等の生産がいくぶんで出稼者は一人もない。なみ、一家の支柱の父はほとんど勤め人であり、その妻が農業に従事している家庭が多い。

3. 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置、隣接語方言との關係

北奥方言区に属する。青森県は津軽方言地区と南部方言地区にて東西に二大別する。この調查地は津軽方言地区にある。津軽地区は四市五郡から成り、この青森市は江戸時代後期から港町として急速に発展した、いわば新興都市である。しかし、収録地「牛館」は海沿いに発展した青森市中心部から約6km離れた後背の地であり、記録では室町時代から林蔵の山、た歴史の古い地である。現在、周辺が住宅地等造

成で開発されてゐる中で、戸数の増減も少なく閑静な場所である。従つてここは古来開拓には青森の在郷としてから、古態が保たれてゐる。

青森市は陸奥湾岸沿いに平内町(東津軽郡)を隔てて南部地区へそれ程遠くない位置にあるが、南部方言の影響は少くないと言つてよい。津軽方言地区は互いにほとんど差はないが、この地点は内陸部の弘前市や南津軽郡に比して一般に話題が早く乱暴な感じがある。

(2) 音韻上の特色

音韻一覧とそれに応ずるカタカナを記す。

ア	イ	ウ	エ	エア	オ	ヤ	ユ	イア	ヨ	ワ	エア
a	i	ü	e	ɛ	o	ja	jü	jɛ	jo	wa	wɛ
カ	キ	ク	ケ	ケア	コ	キヤ	キュ	キヨ	ク	クア	キア
ka	ki	kü	ke	ke	ko	kja	kjü	kjɔ	kwa	kwe	
ガ	ギ	グ	ゲ	ゲア	ゴ	ギヤ	ギュ	ギヨ	グ	グア	ギア
ga	gi	gu	ge	gɛ	go	gja	gjü	gjɔ	gwa	gne	
ガ°	ギ°	グ°	ゲ°	ゲア°	ゴ°	ギヤ°	ギュ°	ギヨ°	グ°		
ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ
ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ	ঃ
サ	セ	セ	セ	セア	ソ	シヤ	シュ	シエ	シア	ショ	
sa	si	se	se	se	so	ʃa	ʃü	ʃe	ʃɛ	ʃo	
サ"	ゼ	ゼ	ゼ	ゼア	ゾ	ジヤ	ジュ	ジエ	ジア	ジョ	
za	ze	ze	ze	ze	dʒa	dʒü	dʒe	dʒɛ	dʒo		
タ	テ	テ	テ	テア	ト	チヤ	チュ	チエ	チア	ト	
ta	te	te	te	te	to	tja	tjü	tje	tjɛ	tjø	
タ"	ツ	ツ	ツ	ツア	ト"						
da	dzü	de	de	de	do						
ツ	ツ	ツ	ツ	ツア	ツ						
tsa	tsü	tse	tse	tse	tso						
ナ	ヌ	ネ	ネ	ネア	/	ニヤ	ニ	ニ	ニ	ノ	
na	nü	ne	ne	ne	no	ŋa	ŋi	ŋü	ŋo		
ハ	ヘ	ヘ	ヘ	ヘア	ホ	ヒヤ	ヒ	ヒ	ヒ	ホ	
ha	he	he	he	he	ho	ɦa	ɦü	ɦe	ɦo		

	フ	フ _イ	フ _エ	フ _ア		
	ɸü	ɸe	ɸɛ	ɸɔ		
パ	پ°	پ°	پے	پے	پ°	پ°
pa	p'i	pü	pe	pɛ	pɔ	pjü
バ	پ"	پ"	پے	پے	پ"	پ"
ba	b'i	bü	be	bɛ	bo	bjü
マ	ミ	ム	×	×	ミ	ミ
ma	mi	mü	me	me	mo	mjü
ラ	リ	ル	レ	لـ	ロ	رـ
ra	r'i	rü	re	re	ro	rjü
ン	ン	ン	ـ	ـ	ـ	ـ
ـ	ـ	ـ	ـ	ـ	ـ	ـ

ア) 「イ」ヒ「エ」が混同する。あるいは「イ」は「エ」に吸収されやすい。例、「息」「駅」は[igɪ]か[egɪ]であり「犬」「杭」は[inü] [küi]か、[enü] [küe]である。そして、どちらかといえばいすれも後者を多く発音する。

イ) 遠母音の「-アイ[-ai]」、「-アエ[-ae]」、「-オイ[-oi]」、「-イエ[-ie]」、「-ウエ[-ue]」は「-エア[-ɛ]」になることがある。例、「暗い」は[küre]、「お前」は[ome]、「おもしろい」は[omosüre]、「消える」は[kerü]、「食え」は[ke]。

しかし、変化しないこともあります、「え」になることがあります、となり恣意的である。

ウ) 「シ」と「ス」は区別がない。例、「獅子」「寿司」「煤」は[süssü] であり、「腰」「越す」は[kosü]である。

エ) 「チ」と「ツ」は区別がない。さらに鍵中尾尾の「チ」は有声化して「ヅ[dzü]」となることが多い。例、「糸」は[tshütsü]、「力」は[tsükara]、「内」「勝ち負け」は[iidzü] [kadzümage]。

オ) 「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」は区別がない。例、「時代」「鼻血」「鈴」「国画」は[dzüdae] [hanadzü] [südzü] [dzügä]。

カ) 「セ」が「ヘ」にならやすい。例、「洗濯」「稼ぐ」は[hen dagü]

[kahegū]。

- キ) 「ヒ」は「へ」、「フ」あるいは「ス」になることがある。例、「人」は[he to] [phüto] [säito]。「火」は[he] [sü]。「昼間」は[herüma] [phiirüma] [sürrüma]。
- ク) 読中語尾の「リ」、「レ」は「エ」になることがある。例、「借りる」「流れる」は[ka erü] [naha erü]。
- ケ) 「ヲ、グ、グ」、「フニ、フニア、フナ」は老年層(60歳以上)に多く残っていて使われる。例、「喧嘩」「馬鹿」「真娘」は[keN kwa] [magenta] [magwa]。「誠る」「笛」「百」は[cherü] [phü] [phiagü]。
- コ) 読中語尾のか行子音、夕行子音は有声化(濁音化)する。例、「駄」「向く」は[e gi] [münkü]。「歌」「者」は[iü da] [odo]。
- サ) 読中語尾のが行音、タ行音、ザ行音、バ行音は鼻濁音化する。同時に撥音便が生ずることもあるが、完全な撥音ではなく標準語の半分ほどの長さになることが多い。例、「鍵」「容」「水」「蛇」は[kayi] [mando] [miindzü] [hembi]。
- シ) 濁音が清音化することもある。例、「わずか」「何時頃」は[watsükka] [nantsükoro]。
- ス) 動詞終止形連体形の活用語尾「ウ」は「ル」になることが多い。例、「歌う」「買う」「狂う」は[iüdariü] [karü] [kiirüru]。
- セ) 形容詞終止形連体形の活用語尾「イ」は消滅することが多い。例、「苦しい」「恐しい」は[küriisü] [osorosü]。
- ソ) 形容詞連用形の活用語尾「ク」は「フ」になることが多い。例、「無くて」「おもいしろくて」は[nafüte] [omosürofütte]。
- タ) 形容動詞連体形の活用語尾「ナ」は「グ」となる。例、「変な」「静かな」は[hen da] [sündzügada]。
- チ) 長音、撥音、促音は完全に発音せず、標準語に比して半分ほどの長さになることが多い。これは、消滅することもある。綴って書き取るが非常にめんどりである。発音しない例、「放送局」は[hosokjögü]。「勝ち犬」は[kata]。

③ 文法上の特色

- ア) 普通は立候、固的格の助詞を省略する。例、「工又 エダ」。(犬がい
る)」「メス クタ。(飯を食つた)」
- しかし、強調したり、特に提示してクする事物等には「バ」「ゴト」「キヤ」「ダキヤ」「バダキヤ」を使う。例、「ハエバ タダケ(蝶
を叩け)」「ワゴト ドスノヤ(吾をどうするか)」「ワキヤ ネゲダ
(吾は逃げた)」「マバダキヤ フペエネ(鳥を引っぱれない)」「オエ
サダキヤ コネ(俺家には来ない)」
- イ) 名詞に接尾辞(指小辞)の「コ」が付く。例、「猫コ」「傘コ」
- ウ) 可能表現は「～するによい」、不可能表現は「～られない」の形式を
とる。例「見ルニ工」「見ラエキ」
- エ) 自発表現は「～サル」を使う。例、「書ガサル」
- オ) 現在の存在・継続「てある・ている」は「テラ」を使い、過去、過
去の存在・継続、過去完了「てある：ていれ、である：でいた」
は「テタ・デタ・テアッタ・デアッタ」を使う。例、「本 置エテラ」「
餅 有ッテラ」「魚 エデタ」「雨 降ッテタ」「坊ヅ人 アッテ
アッタ」
- カ) 形容詞連用形、形容動詞連用形はそれそれ「クテアッタ」、「クテタ」
「デアッタ」、「デタ」を使う。例、「良クテアッタ」、「大キクテタ」「静
ガデアッタ」、「変デタ」
- キ) 場所・方向を示すのに「サ」を使う。例、「家サ居ル」、「山サ行グ」
- ク) 理由表現「つて、から」は「ハンテ」、「ハテ」、「ドコテ」を使う。例。
「働くハンテ儲ケル」、「働くドコテ儲ケル」
- ケ) 仮定条件、確定条件は「バ」を使う。例、「良バ ソ へ。(良い
ならこうしろ)」「田ノ草取テエレバ ヘコキ キタゼアテ～。(田の
草を取つていると飛行機が来るぞ)～」
- コ) 遷接条件は「バテ」、「バタテ」を使う。例、「勝タバタテ後味恩リ」
- サ) 推量は「べ、べー」、例、「エフテタベ。(良か、たろう)」。また「
エンタ」、例、「何处サモ無エンタ。(何処にも無いよ)」
- シ) 意志は「ベス、べ、べー」。例、「行グベス、行グベ(行こう)」
- ス) 間投詞。実際には、副詞、接続詞、感動詞等のいずれか判別不可能

のものが多め、「ことばを引き出すため、尋ねることばつなぎのため、
復つぎのため」の役割を持っている。例、「マツ、マンヅ、ソエゴン、
ソステ、ステ、テ、コンド、コンドア、コンダ、ホラ、ホラー、ホロ、
ホロー、ロー、ウン、ウーン、ウ、アー、アン、ハ、ナ等」

セ) 文末のことば：標準語よりも数が多く、さきざまなニュアンスがあり、適切な標準語訳をつけることができないほどである。例、「ホン
ダエナー（とうだよなあ）。コナグナッタオナー（来なくなつたもの
なあ）。ワダラエネセー（渡られないと）。ネゲダアタ、ネゲダヤダ
ネゲダアバジ、ネゲダヤヅ（逃げたのだ）。ツクッタヅ（作、たつ）。
ケネヤー（くれないと）。マネヅヨー（止めなんぞよ）。クタジャ
（食、たぶ）。クタネ（食、たま）。マネキヤ（ためだよね）等」

ソ) 敬語は親しい間柄では年齢に關係なくほとんど使わない。せいせいの
改ま、人気持ちの際に「～ネス、～！」を使ふ程度である。例、「シン
ダネス（とうですねえ）。ホンダエ！（とうですねえ）」これらは最
高敬語であり、「！」より「ネス」が敬意は高い。

4. もうの他

① 地点選定理由

青森市は文化化担当者（佐々木隆次）の生育した地であり、文化化
の際には困難が少ない。収録地点は文化化担当者の母の生地であり、
条件に適した話者を求めてやがった。

② 協力者の氏名及び協力内容

- ・桜田敏光 農業 51歳。文化化担当者の叔父にあたり、この家を収録場所とした。また、文化化、標準語訳を行ふ際に不明の箇所を判断してもらつた。
- ・村上 譲 青森県立青森中央高校教諭（国語科） 49歳。事前に発音
技術の指導を受けていた。また、文化化の際、微妙な発音箇所を判定して
いたらしい。
- ・高山 治 青森県立青森南高校教諭（国語科） 31歳。文化化の際、
微妙な発音箇所の判定及び一部清書を手伝つていなさい。

B 表記について

長音、促音、撥音は標準語に比して半分程の長さで発音することが多い。ここではひとつひとつ表記はせず、標準語と同様の長さに聞き取った場合のみ文字化することにした。

あいづちは「ア-、ウン、ウ-、ウーン 等」にした。実際の音声は [a: , əN , ə:N , i: , ü: , ü:N , ə: , ə:N , N 等] で他のカタカナ表記と紛らわしいため、ほとんど標準語に近い表記に統一したものである。

C 収録内容の概略

全部、同一の日と同一の話者で収録したため、ここに一括して掲げ、各話題別には話者のみ記すことにする。

1. タイトル

- | | | |
|-------------|-------|-----------|
| 1 田打ちの頃 | 2 繩縄い | 3 つらい農作業 |
| 4 堆々小作米 | 5 牛館橋 | 6 川のさかなどり |
| 7 石山(岩木山)參詣 | 8 ボサマ | 9 青森空襲 |

2. 収録年月日

昭和53年9月5日(火) 午後 / 晴へ午後3時40分

3. 収録場所

青森市大字牛館室松枝乃番地 桜田敏光氏宅

4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・居住歴・言語的特徴

A 梅田鉄彌 男 明治36年12月1日生 農業(自営) この収録地主に生育し、まだ一度も他所に居住したことがない。ほんの少し耳が遠くなつんうしく補聴器をつけているが、言語動作共に常人と同じくらい。古いことは、発音を有している人はこの人が唯一である。例、〔中〕音。また、間接詞的使用として「それこそ(ソエゴン)。こんど(コンド、コンドア、コンダ)。ほら(ホラ、ホラー、ホロー、ホロ、ロー)」がしきりに発せられる。話好きで話題が豊富である。

B 八木沢千代三郎 男 明治43年9月4日生 農業(自営) のがたわら地元郵便局に太正14年~昭和37年まで勤務(配達業務) 昭和20年に約3ヶ月間、横須賀市海兵團に勤務。この3ヶ月間

以外は他所に居住したことはない。話しきの A ほどではないが、
「こんど、ほら」が發せられることが多い。話好きで話題豊富。

C 棟立トミ 女 大正2年1月20日生 農業（自営） この地
点から5km西方の「細越（現在は青森市内）」から嫁入りし、以
後この地に居住。「へをなす」の言い方を第三次海団使用するが、
これは、一種の簡略化表現法とも言えやうもので、前後のこじば
に明確な表現をしていることが多い。話好きで話題豊富。

上記三人に共通している言語特徴として間投詞「はあ（ハ一）」。

あら（アラー、アラ、ラー）」が頻発されることである。

（D 佐々木隆次（男）は司会役、録音係をつとめだが、タイトル
3.8 れおのおのの一回だけ發言がある。）

5. 録音環境

用席者一人。佐々木隆次（司会役、録音者、文字化担当者）
ほとんど自動車の通りない場所であり、家中の家族もいらず騒音の
障害はないなどだ。

長老様の桜田鉄彌氏が話のきり出し役をつとめた。三人は気心の
知れた者同志であり、なごやかな雰囲気で笑いなどしなかつた。予定
していた話題のみとれ渡ることなく自由に思ひをもんべん話しした。

1. 田 打 ち の 頃

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	梅田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

A ムガスタバナー ソエゴン サンガヅデバハ(B ウン) タ
昔ならなあ それこそ 三月とへえば(B ウン) 田(を)
ウヅ ウヅ スタオナー。(B ウン) エマダバ ゴガヅダ(××
打ち 打ち したものなあ。 (B ウン) 今なら
一(B ウンウン) ゴガヅサ ハネ ウヅ タ ウダネバタテ
五月(×) はいらな(×) うち 田(を) 打たなければ
ヤッパリ ムガス ホラ (B ウン) テデバリ ヤルドゴデ
や(×) ぱり 昔 ほう (B ウン) 手ではかり やろ(×) で
(B ウン) ハヤグネバ マエネハ(1) デハ(2) サンガツ ユギ
早く ないこ だめだから はあ 三月 雪(ゆき)
ケデハ(B ウン) ワンツカ カワゲバハ(1) ノ(2) ミンナ
消えてはあ (B ウン) わずか 乾くとはあ のう みんな
ハ(C ホンダネナー) サンボクタ デハ(1) ハ(2) ウンウ
はあ (C そうだなあ) 三本鉢で はあ (C ウンウ)
ン) ウッテ。
ん 打って。

- B アエ サンツコロネ エグ"ンデ" ネガ"ー、アサ"।。
あれ 三時頃に 行くん"で" ないか、朝の。
- A ウー サンヅ。ハエ ヘトダキヤヨー (B ウン) ハー ジュ
うん 三時。早い 人は よう うん はあ ナ
ニヅ スキレバ (B ウンウン) ホー オギデ エグヤデー
二時 遇ぎると うんうん ほう 起きて 行くの
ウン。
うん。
- B ウン メス カネデー。
うん 飯(めし) 食わな"で"。
- A メス カネデ。
飯(めし) 食わな"で"。
- B ウン ホスモヅ モッテナ (笑)。
うん テレ餅(もち) 持つてな。
- A ウーン ホスモヅ モッテ ホラ一 ウン ステハ一 ^ス_{xxx} ツヅ
うーん テレ餅(もち) 持つて ほらあ うん そして はあ ^ツ_(が)
スミデラハンデ クヅ ^{xxxx} ナンダ ワラグヅトカ。
凍つてるので 届(たど) なんだ 署(とど) 届(たど) とか。
- B ワラグヅ ハエデッタ モンダエナー。
葉(は) 届(たど) はいって いた もんだよなあ。
- (3)
A ウー ツマコ^ド ハグトカ ステヨー。ステハ一 クレドゴテ オ
うん 亂籠(つづき) 届くとか してよう。そして はあ 暗(くろ)いので
ドゴダバヨー (B ウン) カツカツカツツオド スバタ
男(おとこ) なら よう うん かっちか、ち かっちといふ 音(こゑ)するけれど
テ フト メアネヤダエナー。(B ウン) ンー。コンダ アガ
人(ひと) 見えな"い"だよなあ。(うん) うん。今度 明(あけ)

ルグ ナレバヨー ハンヅメデ コンダ エヨー アッコノ フト
るく なるとよう 初めて 今度 やあ あそこの 人

(5) ダネラー。ヅンブ ハイナーナンテ (B ウンウン) ホラ ウ
だよあらあ。すいぶん 早いなあなんて (うんうん) ほら う

一。

ん。

C エグ ツギハ一 ミンナハ一 オナコンドダバ キナガヤブ (B
行く 時はあ みんなはあ 女達なら 半人役

(8) ウン) オドゴンドダバー フトリエグタ ツギハ一 (A/B
うん 男達なら 一人役といつた 時はあ

ウン) ハンブガラ ウテマッテノ一 (笑) (A ウン) ,
うん (此の早) 半分から 打ててしまつてウラ うん)

B チョンド スヅソツゴロニ メス クーエンタナー。 ユヅガラ メ
ちようど 七時頃に 飯(お)食うようだなあ。 こちらから
スモテ エッテヨー。
飯(お)持つて 行つてよ。

A ウー コンダ エ エガラ ベント ウウ (9) モッテ エッテナー
うん 今度 家から 弁当(お) 持つて 行つてなあ
ウー。
うん,

B ベント モッテ エッテナ。 アノ一 スノリツル スノリー ド
弁当(お)持つて 行つてな。 あのう 布海苔計 布海苔 ど
ロドロテ スノリナー。 (C ウーン) アエ ニデ オツユニ
ろどろして 布海苔なあ。 (うーん) あれ(お)煮て カツサバ
ステヨー ウン (A ウン) (笑) マー ススルンダナ マツ
してよ うん (C ウン) まあ すするんだな ます

- ナー (笑)。ステ コンダ ビンサ ツメテ ウン テ スノ
 なあ 。そして 今度 瓶に 詰めて うん そして 布海
 リヅル カゲデ ホラ ウン (A ウンウウン ホンダ ホンダ
呑計(あ)かけて ほら うん うんうんえうだ えうだ
 . C ウン) ウン カポエデナ ウン。 オキ - オ xxxxxx ト^ンツ
 うん) うん 急いで 食てな うん。 当時
 / オキ タサ ハッテヨー ウン。
 の 大きい 囲に 入って よう うん。
 A エヤ アノ マンダ ムガスア マンダ タ ウツ ツギダンバ
 やあ あり また 音は また 囲(わ)おつ 時なら
 ニス アガテナー。
 魚東(ゆうとう)あがつてなあ。
 B ニス アガテナー。
 魚東(ゆうとう)あがつてなあ。
 A オモニ アラー ニスンバリハ。 ニス ヤエデー ウーン。
 主に あらあ 魚東 ばかりはあ。 魚東(ゆうとう)焼いて ラーく。
 B ニスンダバ アギデマルダゲ クタエンタナー。 ジェンコ アレ
 魚東 なら 飽きて しちうだ うだ 食(た)れようだ なあ。 錢 ニあれ
 バヨー。
 ばよう。
 A ニスダバ クタモンダナー。 ニー xxxx ニス アガテ ニス アガテ。
 魚東 なら 食(た)もんどう なあ。 魚東(ゆうとう)あがつて 魚東(ゆうとう)むがつて。
 C ナー クツコロテ ヘレバ ウッテマッテ デ エサ モンドテ
 なあ 九時頃と いうと 打ってしまった で 家に 戻って
 キテ - ノー ア ミンナステ コンダ ハー (A ウーン)
 来て のう ああ みんなで 今度 はあ (ラーん)

ワケモンド ワケモンドドア アスブネ ⁽¹¹⁾ アルエテ (A ウンダ)
若い者達(は) 若い者達(と) 遊びに 歩いて (そうだ)
(笑)

A チュハンメニアハーノー ウッテマッテ。
昼飯前にはみう 打てしまって。

B タエデハーデュンツ ジューエツツコロニ (A ウン) ナレ
たいでいはあ 十時 タ一時頃(うん) なる
バ ウッテマルシテ ネガナー。
と 打てしまってないかあ。

A ハイア ヘトダバハーチュハメニア ジュントツコロニ (A ウ
早い 人ならはあ 昼飯前に 十時頃(う
ン) ハースマテマルジャー。
ん) はみ しまってしまよ。

B コエダハンテ アサマニ ハエグ エグンダオナー ウン。
これから 朝(うん) 早く 行くんだもんがあ

A ソエデ コンダ ホラー チュハンニ ナッテカラ ヤスマヤツ
それで 今度 ほらあ 昼飯(うん) なつてから 休む(が)
(B ウン) ソレ マンダ モースレア ワゲセア。
うん それ また ぬめしろい わけよ。

B アレア アサマカラ バゲマンデタラ トテモ トサエル モンテ
あれは 朝(うん) から 晩(うん)半(はん)てなら とても 通される もんで
ネベオン。
ないだろ。

A アー トテモ (B ウン) カラダ アー カステマルジャー
ああ とても (うん) からだ(が)ああ 壊してしまよ

B ウン) ウン。
うん うん。

C エマ ヘバノ。
今 そうするとねえ。

B スタハデ バケ ネデデ ヤネノ ホゲア カンジョスイグレアノ
そうだから 晩 痢ていて 屋根の 重木(も) 勘定するぐらいの
ホラー (^A 笑) アガリニ (^A ウン) デ ネルンダ(14)
ほらみ 明る(は)うちれ 痢るんだ

ツテナー (^A ウー。 ^C ンダ) ハヤグヨー。
と言ってなあ うん。 えうだ 早くよ。

C ネネンデ ホゲ カンジョエベステ ネルアダモノー (笑)。
寝なで 重木(も) 数えよ; と言って 痢るのなんら。

B ヘバ ハルノ ホゲア カンジョステバ マー ナンダガテナー
そうると 春の 重木(も) 勘定するといは まみ なんらかと言ってなあ
アガリネ ネデマテハーロー ヨアゲ オギデ エグアダオン。
明る(は)うちれ 痢てしまつてはあ ほらあ 夜明け 起きて 行くのだも。

A スタテ ロー アサマニ ハヤグ オギネバ マエネハンデヨー¹
えいはいとも ほらあ 朝に 早く 起きないと ためだからよ;
(B ウンウン) スタハンド ハー アガリネ ハ ネル
うんうん そうだから はあ 明る(は)うちに は 寝る
ワゲセア。
わけよ。

注記

- (1) 「サンガツ」の「ツ」はこの場合ほとんど発音されていない。
- (2) 数少ない、敬意を含む間接助詞で、相手にあいづちを求める意がある。
- (3) 葉製の雪ぐつ。
- (4) 感動詞。少しひっくりした時に使う。
- (5) 「フトダネラー」の「ネ」は多く使用される文末助詞の一つだが、適切な標準語が見当らない。今後「よ」を当てておくが、勿論、婉曲な調子や敬意はない。
- (6) 「オナゴンドダバ」の「ンド」は複数を表わす。語源は「ども」。他に「ダヅ(達)」もあるが、少し改々ん言の方である。なお、「ンド」の「ン」がそれで「ド」を使うことが多い。
- (7) 日常会話では「キナギヤグ」と言う。録音を意識して「キナガヤグ」と発音したらしい。「キナガ」は「半分」の意であり、「日本国語大辞典 小字鏡」は「寸半」の字を当てている。「キナガヤグ」は、注記(8)の「フトリエグ」の半人分の作業量をいう。
- (8) 「フトリヤグ フトリヤグ ヘトリヤグ ヘトリヤグ」とも言う。一反歩(300坪、10アール)の水田を耕やす、男の一日分の作業量をいう。また、「タ」は「～といつた」の「といつ」を省略した表現。
- (9) 無意味の発音。
- (10) 接続詞「そして」をよく「ステ」と「ン」を脱落していうが、更に「ス」までも発音しないことがある。発音しても軽いため録音できないことがある。
- (11) 「ドア」の「ア」は無意味の発音。ここでの文意は「若い者達は若い者達同志で」である。
- (12) 背、茅葺き屋根の棟、丸太の垂木。天井板を張っていなかつたので見る見えである。別に「ホゲ」と発音する。
- (13) 「する(連体形)」は時には[s̩i]になることもあり、ここはその例。普通は「ス(s̩i)」である。
- (14) 無意味の発音。

乙 繩 織 い

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

A ヤハ一 ウグモンドダバ チュハメニア スマレバ (B ウン
 やはあ 若い者達なら 盒飯前に しょうと (うん
) コンダ ホロー ホガムラサ コンダ メラハンド ミニ 工
 今度 ほらあ 他村へ 今度 「娘 違(高) 見に行
 グナシテ。(C 笑) ウー ホガノ ホラ ソエゴン ゴサデモ
 く」なんて。 (ス) うん 他の ほら それこそ 合子沢でも
 (4) スンマツノデモヨー (B ウン) ヨゴウツデモ コンダ一 ウ
 新町野でもよ (うん) 横内でも 今度 (う
)
 (6) 一ムヅレキテ スレア サンジャグ スメテヨー (C 笑)
 ん 简袖 着て 白い 三尺帯 締めてよ
 オーハバノ一。 コンダ メラハンドノ ドゴサ エッテ エグッ
 大中の。 今度 「娘 違の 所へ 行くとい
 テ ハー アー ナンニモ ソロッテヨー ウーン ソー チュハ
 てはあ ああ 何人か 捕つてよ う一人 そら 盒飯
 (7) ンメニア ハー オラー フト フトリヤグ ウッテ メラハンド
 前に はあ 「俺 一人役 打って 娘 違

ミニ キターナンテ ハー ソステ アサグヤダエナー。
見に 来たあ なんて はあ そして 歩くつたよなあ。

(9) B マー アノ アダリ ドゴノ タエソレ ナンヅニ オワタナンテ
まあ あの あをり どこの 誰 それ(は) 行 時に 終つた なんて
マーテ ハー (A ウー) ウン マツ ,
まるで はあ (うん うん よす)

A ソエデモ マンダ ホガムラサ エゲバヨー (B ウン) マダ
それで も また 他村へ 行くと よう (うん) また
ウゲモンド エグドゴデ メラハンド マンダ カダマテー, (B
若い者 遠(め) 行くので 娘 遠(め) まれ かたまつて。

ウン) ウン アノ アダリ マダ ホラ ター ウッテマレバ オ
うん うん あの あをり まれ ほら 田(地) 打つて しまうと
ナコンド ワゲア ホラ メラハドンド アツバテ (B ウン)
女 遠(め) 若い ほら 女良 同名(ゆめ) 集 よつて (うん)
ナワー ナッテラダエナー。 (B ゴコナー) ウン (B ウ
シ尾(き) 調(しらべ) てるの よなあ) (午後なあ) うん (う)

ン) ハー ゴニンモ ロジニンモ スヅニンモヨー (C ホタ
はあ 五人も 六人も 七人も よう (ほた)

(12) コナー 笑) ソロテー ソレ ホラ ホター。
こなあ 痞(ひ)て それ ほら ほたあ。

(13) C ホタトリ コンダ (A アー) フロスキ カッタリ ホラー
ほた取(は) 今度 (ああ) 風呂敷(ふろしき) 買(め) る (ほさあ)
(B ウン) メア ンダリ (14) カッタリスト (A ウン) ナステ
うん 前 掛け(け) 買(め) る(め) して (うん) なして
エル ワゲセア ウン。
いる わけよ うん。

B ソユ ヴギ カヘンダ アタリ ミンナ ドゴノ フトモ オー
そういう 時 縁いに あたり みんな どこか 人も
オヤヅデ⁽¹⁶⁾ ネカキリ ミンナ ホッタデ アッタオンナー。 (A
親父で ない限り みんな ほつれて あ、たもつなあ。
ウン) ウン ヤスマネンデ⁽¹⁷⁾ ナワ ナッテナー (A ウン)
うん うん 休まないで 縄(を)縛(て)なあ (うん)
ウン。
うん。

A ミンナ スタテ ナワデバリ⁽¹⁷⁾ オモニ ホロー (B ウンウン)
みんな えいはいでも 縄でばかり 立た ほらあ (うんうん)
クーヤツ。 (B ウン) エマノ ヨニ テマ トル ワゲデ⁽¹⁸⁾
食うつだ、 (うん) 今つ ように 手間(を)取る わけで
ネス ゲッキュ (B ウン) トルタテ ソー ドゴサモ メツ
ないし 月 給(を) (うん) 取るといでも えう どこにしめ,
タニ ハル ドゴ ネアス エッカダ⁽¹⁹⁾ ホラー タド ナワ ナッ
たに 入る 手附(を) ないし 豊ら ほらあ 田と 縄(を)縛(て)
テ。 (B ウン) ハー ウー。ボンネモ ハー シュ⁽²⁰⁾ オモニ ナンダ
て。 (うん) はあ うん。 盆にも はあ 主に なんだ
ナ一 ショ一ガツ⁽²¹⁾ クレバ ジェンコ ネアドゴデ ナワ ナッテ
なあ 正 月(が) 来そと 錢(こ)ない ので 縄(を)縛(て)
(B ウン) ショーガツスベステ。ウー。ショガツノ モノ
うん 正 月(じよ)と 言って。うん。 正 月(の) 物(を)
カルネ (B ウン) ウー ナワ ナッテ ホラ。 (B ウン
買ひに (うん) うん 縄(を)縛(て) ほら。 (うん)
) セバ コンダ⁽²²⁾ ナワケアツモノ マンダ ナッタ ナワ カル
すると 今度 縄 買ひといふ者 また 縄(を)縛(て) 縄(を)買う

- (24)
 フト キテー ホラー オ
 人 来て ほらあ お
 B ショガヅヅゲ オエデ エゲテナー。 (A ウー) ウー エヅ
 正月 遺い(を)置いて 行けと言つてなあ。 (うん) うん 一
 エンダリ (AC 笑) ニエンダリ オエデ エゲテ カエデ
 円なり ニ円 なり 置いて 行けと 借りて
 ホラ マエガリスト テ スマヘネンデ ウン。
 ほら 前借りしこして 済ませなつて うん。
 A ソステ ナンダ タエデハ一 ムガスタバ ホロー ゴエンガ ジ
 えして なんぞ たいていはあ 昔 なら ほらあ 五円か ナ
 ューエン アレバヨ (B ウン) ショーガヅスニ エスタダエ
 円 あればよ (うん) 正月 しれ 良かつたのね
 ナー。
 なあ。
 B エヤー ジューエン アンダバヨー。 (A アー) オラ オベ
 いやみ ナ 円 あるならよう。 (ああ) ああ 僕 覚え
 デガラヨー ジューエン アンダバキ タエスタ モンダ。
 でからよう ナ 円 あるならば 大した もんだ。
 A スタハ ンデ ホロー ナワケアガラ (B ウン) アー ゴエン
 もうだから ほらあ 繩 買いから (うん) ああ 五円
 ダリ ジューエンダリ (B ウン) カエデヨー コエデ ショ
 なり ナ 円 なり (うん) 借りてよ これで 正
 ガヅステー ナンダ マダ ナワ ナッテ スマスペーステ。
 月して なんぞ まだ 繩(も)、縄(も)で 済ませと言つて。
 BC ウン) ウー。ソステ ハー オモネ ナワデバリヨ ナワ
 うん うん。えして はあ 立に 繩(はがりよ)、縄(も)

ナッテ コヅケアヘン トタ モンダ。

綱(ス)て 小道 錄(モ) 取(ル) もんだ。

B ナワモナモ ナッテ ナッテ ナッテ フラ ナグ ナッテマッテ
縄(ス) 何(シ) 綱(ス) 綱(ス) 綱(ス) 簡(ハ) なく なつてしまつて

ナ。 (A ウン) コンダ エガラ ワラケア デハタリ ステラ
うん) 今度 家から 簡買(ハ) 出(ル) してあら

一 ウン ナワコ モテ フトマワリデモ ヤーハンデ ユツテ
うん 縄(ス) 持(ル) 一 回 クでシ よいから 譲(シ)て

ケロッテ ウン。

くれって うん。

A ウッテ ニンジュ アッテ ナル フトダバヨー (B ウン)
うんと 人數(シ) あつて 綱(ス) 人ならよ;

ヅブンノ ワラ タエナグ ステ (B ウン) カテ ナルヤダ
自分の 簡(ハ) 足りなく して うん 買(ル) 綱(ス) のだ

エナー。

よなあ。

B モヅロン タサダキャー タエヘダンテアキャー ナモ ホントノ
勿論 1回には 堆肥のようものは 何(シ) 本当の

スピバリ モテタエナー。

豪(ハ)ばり 持(ル)て行(ル)よなあ。

A ウン スッカド ハー ナワネ ナッテマテヨ。 (A B 笑)
うん す、カク はあ 縄に 綱(ス) しまつてよう。

注記

- (1) 1. 「田打ちの頃」の注記(6)参照。
- (2) 実際の音声は〔リ〕と〔ス〕の中間音に聞こえ、しまりのない感じである。うなずく際の音声は、この他に〔ヨ〕〔ヨ:〕〔エ〕〔エ:〕などが多い。これらのカタカナ表記は以下「ウ」「ウー」「ア」「アー」とする。
- (3) 地名、青森市大字「合子沢」。^{じやくしやく}当地では昔から「ゴサ」という。収録地から約2km東方にある。
- (4) 地名、青森市大字「新町野」。^{しんまちの}収録地から、約1km東方にある。
- (5) 地名、青森市大字「横内」。^{よこうち}収録地から、約3km東方にある。
- (6) 町などへ出かける際に着用したが、晴れ着ではない。普段着より少し程度の良い衣類。
- (7) 「ソラ」とも聞こえないわけではないようだ。
- (8) 1. 「田打ちの頃」の注記(8)参照。
- (9) 時間的な意の「頃」。
- (10) 聞き取り不可能。
- (11) 文脈上、3行後の「ナワー ナッテラダエナー」へつながる。
- (12) ホタコの「ホタ」は臨時収入の金錢。「ホッタ」と中間に促音が入ることもある。「コ」は指小辞といわれ、東北地方特有のもので、ほとんどの名詞に行く。
- (13) 「ホタをトル人」のことで臨時収入金を得る人。語源は、領主地主の目の瘤がない「蟹(ハリ)搔(ホリ)して新しく開いた水田」の「隠し田」だろうという説がある。(鳴海助一著「津軽のことば」)
- (14) 忠実に漢字で書けば「前垂り」か「前垂れ」。
- (15) 「～をする」の意で「～をなす」を使うのは、話者の口ぐせである。この場合、直前の「カタリスト」の内容をそのまま受けている。
- (16) 注記(12)と同じ。
- (17) ナワテバリの「リ」は、この場合「舌先のふるえ音」であるが、これは当地の一般的な音ではなく、話者Aの偶然発した音である。
- (18) 「手間賃をもらつてする仕事」の意。

- (19) 「就職する」の意。
- (20) 認源は「^{“”}一方」だろう。
- (21) 「盂蘭盆会」。
- (22) 「ショーガツス（正月す）」は「正月を祝う」の意。
- (23)(24) 「ナワケアヅモノ」と「ナワカルフト」は同意。
- (25) 「正月に遣う費用」の意。
- (26) 「アンダバキャ」の「キャ」は、強く取り立てていう時に使う。認源不明。今後、考案を要する。
- (27) 「縄も何も」と訳してあるが、「モナモ」は「詠嘆・藝術」など
の程度が大きい際には使う表現で「縄も まあ なんともまあ」とでも訳せばよいだろうか。
- (28) 認源は「出張る」だろう。
- (29) 「一抱え」。
- (30) 「タエヘ（堆肥）」は、最近、当地で使用するようになつた語であ
り、昔は「コエ（肥）」と言つた。
- (31) 「ナモ」以下は「持つて行かないで」を補う。
- (32) 「スピ」を「薦くす」と訳したが、正しくは「縮の下葉」である。

3. つらい農作物

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	穂方 トミ	女	大正2年生れ
D	佐々木隆次	男	昭和10年生れ (司会役)

C ヤッパス タデモ ナンデモセア (B ウン) コエ ヘネアハ
 やっぱり 因でも なんでもよ (うん) 肥(め) 入れない
 (1)
 ンデ (B ウンウン) タ カデステ マエネテ。 ヴギ ハネ
 カウ うんうん 因(め) 壓くて だめだて。 肥料(めいりょう) はいらな
 (2)
 ハンデ カデステ マネテ。 ウッテモ カデステヨー。 (B
 カウ 壓くて だめだて。 打っても 壓くてよ。
 (3)
 ホンダエナー ウン) ウーン (B ラーン) ヘバ エマダバ
 もうださない うん ラーン すると 今なら
 (4)
 夕エ ホラ コエ ハルドゴデ (B ウン) ナンボデモ タ
 堆 ほら 肥(め) はいるので (うん) いくうでも 因(め)
 (5)
 アエダスナー (A アー) ン。 エマダキヤ ドーグエベ
 あれぞしのう ああ ん。 今は 道具(道具) 良いだ
 (6)
 ァ。 ムガスダバー バッコダナー (B ウン) ハルダノッテ
 ろう。 骨 なら 馬糞(ばく) の (うん) はろ; だのといって
 (7)
 一。 (A ウン) (C 笑)

- A テデバリテナー。⁽⁸⁾ (C ウーン) ハル カゲル ツキノ ヘツネ
手ではかりてゐる。 (ラーン) はろう(モ) カケル 時の つらい
ハヘヅナグ ネノテヨー。
の つらく ないつてよ。
- B ヤーヤ ハル エヅバン。アレア (A ウン) ハラサ コデア
やあや はろう 一箇。あれ (ラン) 腹に ころえ
ツテマッタナー。
て しおれなあ。
- A マニ フパラヘルヤツー。⁽⁹⁾ (B ウン) ソエサ オエノ タダキ
馬に 引はせるやつ。 (ラン) それれ 僕家の 田は
ヤ カデハ ンデヨー (B ウン) ツッパド オサネバ (C
堅いから よう (ラン) じゅうぶんに 押さないと
笑) ⁽¹⁰⁾ ナケラエデ マダエナー。 ゴロゴロゴロゴロテ コロゴル
捨てられて しまう(モ)なあ。 ごろごろごろごろと 転がる
べ。 マ ドンドド フッパルドゴデー オソエバ ハー ムツ
だろ。 馬(モ)どんどん 引はる(モ)で 違(モ)はあ いつ
タド ハー コエダアデー。 カラダ ハー ソラ ユツメデ。
ル 体あ これなの(モ)。 からだ はあ そら ゆらめ(モ)て。
- B アエ ハー ナンメモ ナー ウン。⁽¹¹⁾ フトリヤグダラ フトリヤグ
あれ はあ 行秋も なあ うん。一人役なら 一人役^(モ)
(A ウン) ⁽¹²⁾ カゲデ マワッテヨー。
うん カけて 回ってよ。
- A ナンニヤグモ カゲデ マルダジヤ。
何人役も カけて しまう(モ)。
- B ウン カゲデ マルダエナー。
もし カけて しまう(モ)なあ。

- C ハルデ ヤル ウツダバ エヤ (B ウン) オラタツンドダバ
 はろうで やる 豚なら 良や (うん) 延達 なら
 - マコ ネドゴデ (B ウン) サンボカデ プタエデバリ。
 馬こめないで (うん) 三本鉤で えねいではかり。
 (B ウン)
 (うん)
- A ウー マ ネ ヘトダバナー。
 うん 馬めない 人ならなあ。
- C ウーウン クダエデバリ ハー プタエデバリ タ ヤタ モンダ。
 うんうん 破ってばかり はあ れんってばかり 田(を)やった もんた。
- A ヤタモンダエナー。
 やつもんたよなあ。
- (14)
 B ウー サンバ。
 うん 三番
- (15)
 C ナンボガ スタハンデ クルスンダガサ ワガラネア。
 ピンパンか ズから 若しんべか わからない。
- B サンバウヅマデナー。
 三番打ちまでなあ。
- C ウン サンバウヅマデ。 エヅバンウヅステ コンダ ニンバウヅ
 うん 三番打ちまで。 一番打ちして 今度 二番打ち
 ステ (B ウン) コノ コンダ クデアダ ドゴ カダマルハ
 して (うん) ンク 今度 破いらん 所(を)固まるか
 ナデ (B ウーン) コンダ サンバウヅテ オゴステ (A
 う (うーん) 今度 三番打ちヒいて起こして
 サンバウヅステナニ) ホエガラ タ カグアジモノ。
 三番打ちしてなう) それから 田(を)かくつむもの。

B ニバンウツ エヅバン ヘヅネスタジヤ。

ニ番 打ち(か) 一 番 つらかつんよ。

C ニバンウツ エヅバン ヘヅネ, エーマダラ ヘバ ナンモ キ
ニ番 打ち(か) 一 番 つらい。今 なら すると 何な 機
カエデバリ ヤル モンダドゴテー ナ。
機でねが やる もつたつて な。

A ソエガラ コンダ アノ アダリダンバ ナンダエナー。
それから 今度 あの ありなら なんよなあ。

ソエゴン ジューサンガ ショーカッコ オワレバ ハー (B
それこそ ナ 三歳(か) 小学校(を) 終ると はあ

ウン) ホガサ (B ウン カロゴ ウン) タノマエデ サヘ
うん 他へ うん 借(け) うん 順(じゆ) まれて さへ
トネナー。 (B カロゴ カロゴニ エダリナー) ウン ワン
取り(と) なあ。 借(け) うん に 行(ゆ) なあ) ウン わ

(20) ツカダネ ハー (B ウー) ウ ショーカッコ オワレバ ハー
す(す) かな年齢(ねいりや) ではあ (うん) うん 小学校 終ると はあ
(B ウー) サヘ トネ ドゴダラ ドゴサ エゲーテ。ウー。
うん ミヘ 取り(と) どこなう どこに 行(ゆ) と。うん。

(21) ヘバ ハー ホレ アサマネ ハヤグ クレアガラ オギデ シ
すと はあ ほれ 朝(あさ) に 早く 暮(く) ちから 起きて 小
ヨガコ オワテガラ ハー ワンツカダ ヤヅヨー (B ウン)
学校 終(おひ) から はあ わずかな 奴(やつ) うん

(22) サヘ トネ デハテ ウッテ ブスカエデナー。
さへ 取り(と) 出て うんと だらめて なあ。

B ブスカエデナー。テ ホガサ タノマエデ ユゴサ (A ウーン
毗(ひ) られて なあ。そして 他へ 順(じゆ) まれて ここへ うーん

笑) ワラハンド ネデラヤヅ ムリニ オゴサエデ ホラ (子ども達は) 痞てへるのも 無理に 起こされて ほら

A ウン) トーガ ナンボ! ヅギナー。 (A ウン) ウン。
うん) 十歳か なんぼの 時なあ。 (うん) うん。

ステ アノ一 ハー ヤ マ ャット クッテ アッタケンドモ
もして あつう はあ いや まあ やつと 食って いたけれども

ヨー (A ウン) ウン オドナノ キモノ キヘヤダエナー。
よう (うん) うん 大人の 着物 着せるのよなあ。

(A ウー 笑) スパサミドリスト ロー (C ンダ) ビン
うん) 裾を端折りして ほらあ (うだ) びん

(28) ト コー ミンツカグ ャッテナー。 (B C ウン) ソエ コ
と こう 短 かく やってなあ。 (うん) それ(か) こ

ンダ ~~~~~ サガテ マルベ。 (A 笑) ヨゴエドゴテ ホラ。 ソエ
んビ 下がって しまうだろう。 汚れるので ほら。 それ

(29) サ ュー コゴノ ッチャ アノ コンダ アノ アラ カマ
に こう ここの 爺さん あの 今度 あの あらあ 鎌(も)

モテ キテ (A 笑) ジョロット オドステ (A B 笑)
持て 来て じょろりと 落して

オドステ ケデヨー。 (A ウン) ステ アン ヅギ エヅニ
落して くれてよう。 (うん) そして あの 時 一日

ヅ ニヅッセンテ アッテ ロー。 ウン メス ニキリメス カ
ニナ 錢で あつた ほらあ。 うん 飯 握り飯(も) 食

ヘテ ニヅッセン (A アー ニヅッセン) ニヅッセン ケダ
わせて ニナ 錢 (ああ ニナ 錢) ニナ 錢 くれれ

ウン。

うん。

A ホンダ ホダ。 (B ウン) ムガスタオナー。 (B ウーン
えうだる えうだる。 うん 背 だもつなあ。 うーん
) ムガスタアダラ ホダ。 (B ウーン)
昔 てあるなら えうだる。
(31)

C サヘトリダバ ハー エヴバン スギデ ネスタ。 オツケロ フ
さへ取りなら はあ 一 鶩 好きで なあ。 押つけろ ま
パレ オツケロ フパレテヤ (A ウン) コンダ スカエルドゴデ
ぱれ 押つけろ 引っぱれヒ (うん) 今度 叱られるので
(32)

ヤ コンド ホノ トーリ エゲバ エタテヤ クルッテ マルドゴ
今度 その とあり 行くヒ 良いケレビ 狂って しまうの
デ グルッグルッグルテ コンダ マ マワサヘデ マルキヤー。
で ぐる、ぐる、ぐるヒ 今度 馬(を)回させて しまうといふヒだよね。
(B ウンダエナー) エッカエニ フトヅドゴ ナンカエモ
えうだるよなあ 一 回に 同じ所(を) がけ 回ル

コンドア。(笑)

今度。

(34)

A コンダ マンガ[°] オス フト ナー ゾ ソステ コンダ マンガ[°]
今度 馬歛 押す 人は なあ ゾとして 今度 曲
レバ コンダ サヘトリバ サンジャグモ ナゲー ブヅ (B C
ると 今度 さへ取りを 三 尺 も 長.. 笈(を)
笑) モッテデ ヘナガ[°] フタグアダエナー。 ナー フェタデ
持つていて 背中 えんくのひよなあ。 お前(は)下手で
アステ ドンテ コノ ジャマー[°]。 ウーン (C 笑) ヘバ
どうだ この さ[°]よ といて。 うーん する
コンダ ダンダンネ ワンツカダ モンダベ、 ジューサンガ ジ
今度 だんだんね わずかな もんどう ナ 三歳か

ユースノ モンダベ ⁽³⁶⁾ ヘンカサエルドゴデ コンダ ハー アダマ
ナ四歳の 者 ガロ; なんかれるって 今度 はあ 頭

クルテ マッテ ハー。 (C 笑) ステル ウツニ ハー マ
瓶って しもて はあ。 んじいろ うちへ はあ 馬

- コンダ ホラ グルグレド ター フッテ マルアダエナー。
は 今度 はう ぐるぐるヒ 回⁽³⁷⁾ て しもうだよなあ。

(C 笑) (笑) ソタ ヴギモドタ ⁽³⁸⁾ モンダエナー。
もしいう 時 も あつた もりえよなあ。

D エヘデ マル ワケダ。 (A アー)
すねて しも わけだ。 (ああ)

B エヘデ マル。 ヴンブ スカス アノ アダリ クロー スタジ
すねて しも。 すいぶん しかし あの あたり 若者 したよ

マニ。

。

A エ エネ カルタテ ナー ムタド ハー カマデバリ ホレ ウー
~~エ~~ 稲 めるといつても なあ いつも はあ 錦ではがり ほれ うん
ミンナ ハー カマデバリ一 ソエゴン ニンジュモ サンジュモ

みんな はあ 錦ではがり それこそ ニナモ ミナモ

(41) ツクテモ一 (B アーアー) カマ ⁽³⁹⁾ ~~カマ~~ カマデバリ カッテナー。
作つても (ああ ああ) 錦ではがり めりつてなあ。

B カマデバリ トッテ一。
錦ではがり 取つて。

A ソエゴン ノ- エ エネ カル ヴギダバ ハー ムッタド ナンニ
それこそ のう 稲 める 時 なり はあ いつも 行日

ヅモ (B ウン) エッカケツモ カガタベーナー。
ル うん 一か月 も かかったるううなあ。

B ウンダナー エッカケツモー (笑) オラ サエキンマテ エッ
えうななみ 一か月の 俺 最近まで 一
カケツモ カガタドモタアテ。
か月の かかると思ひなけれど。

注記

- (1) 「堆肥」のことを昔「コエ」といいた。
- (2) 昔、「化学肥料」のことと/orいいた。
- (3) 脚取り取り不可能。
- (4) 次の「ホラ コエ ハルドゴデ」の「コエ」の言いかけ。
- (5) 指示代名詞「アエ(あれ)」を使っているが、「アエダ」は「朝しやすい」の意。
- (6) 「トラウ」。牛馬などに牽引させ、土地を耕す農具。
- (7) 「ハロウ」。牛馬などに牽引させ、碎土などに使う農具。
- (8) 語源は「せつない」。
- (9) 「ヤツ」は漢字を当てれば「奴」だが、前の発言者Bのこじばの中にある「ハル」をさす。
- (10) 誰か金般に「捨てる」「置きざりにする」を「ナケル(捨てる)」という。
- (11) 指示代名詞「コエ(これ)」を使っているが、「コエダ」は直接の「カラダヘユツメテ(いる)」(体が安定期を欠いている)をさす。話者Aはこの発言中、体をゆらせるしぐさをした。
- (12) 「メ(枚)」は田の区画単位。
- (13) 1. 「田打ちの唄」の詠記(8)参照。
- (14) 次の話者Cの発言後の話者B「サンバウツマテナー」の言いかけ。
- (15) 「ガサ」は標準語の女性使用的婉曲な疑問終助詞「かしら」に相当するが、「ガサ」は婉曲なニュアンスはない。
- (16) 「ナンモ」は文末に「つらくな」を伴うべきなのに省略した。
- (17) 農家の齊公人。主として男子。
- (18) 農耕牛馬の糞をとるためにつくる擗、糞をとるのは子どもの役であった。そして牛馬にバッコ、ハル等の農具を引かせ大人がそれを擗た。「サヘ」の語源は馬の進む方向を定めにするための「ササヘ(支え)擗」だろうか。
- (19) 詞句の元音。普通は「エタリ」「エッタリ」
- (20) 「ワンツカダ(トス=年齢)ネ」だが、普通(トス)は省略してま

わない。

- (21) 「オギテ」の後に「一仕事した後、小学校へ登校し」を補う。
- (22) 「デハテ」の前に「田へ」を補う。
- (23) 「ナ」は強意の接頭語。
- (24) 「ホガサ タノマエテ (例えば) コゴ(の表)サ(頬されて)」と補う。
- (25) 「コゴ」はこの会話を収録している家族(横田敏光家)をさす。
- (26) 「キヘルヤダエナー」が普通だが「ル」が聞こえない。
- (27) 「スパサミドリス」は「屁摸み取りする」。
- (28) 指定語「ピント」は、腰のあたりの帶をきり、ヒ締める様をいう。
「きりっと」と訳すのが適当か知れないが、指定語であるためそのままにした。
- (29) 「コゴ」は注意(25)と同じ。なら「コゴノ ヴッチャ」は昨年死亡。
- (30) 首を思い出している代名詞で「あれ」と訳すべきかも知れないが、方言のニュアンスを重んじる。
- (31) 「サヘトリ」は「サヘをとる人」。流記(8)参照。
- (32) 「サヘトリ(が)クルッテマル」。「クルッテ」とは「頭が混乱して」「判断に迷って」の意。
- (33) 「マ(を)マワサヘテ」。
- (34) 農機具の一種。
- (35) 当地は「ムツ(もち)」より「ヅヅ」と発音することが多いようだ。
- (36) 語源は「折檻」。
- (37) 「サヘトリ(の)アダマ(が)」。
- (38) 「ヅギモテアッタ」と発音したらしい。
- (39)(40) 「二十人役」「三十人役」のこと。1.「田打ちタ傳」流記(8)参照。
- (41) 「(田を)ツクテモ」。
- (42) 「(メリリ)トッテ」。
- (43) この場合「毎日」の意。
- (44) 「ヘドモタ」は「ト^想ツタ」の約克。津軽は必ずこのように言う。

4. 堆と小作米

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治44年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

C ムガスダバ スタデヨー ⁽¹⁾ (B アーン) エネ カッテ マッテ
昔なら それものはずよ (あめうん) 稲刈りしてしまって

ホステッテ ヘレバ (B ウン) エサ モッテ キテー (A
乾してと いうと (うん) 家へ持て来て

⁽²⁾ ウン) ニオ ツンデダベア。 (B ウン) ワンジャニ オッキ
うん) 堆 積んでんろう。 (うん) わざと 大きい

ニオ ツカネバ マネスタ モンダモノー。
堆 積ないと ためたぐ もんじもつ。

A ホンダー。

えうだ。

B センコギデ コエデナー。
せんこぎで こいてなみ。

A マッコサー ツケデナー。 (B ウン) ムンマロツヅツ ツケデー
馬これ つけてなみ。 (うん) 六束すつ つけて

ステ コンダ エサ モッテ キテー デッタダ オニヨネー
えい 今度 家へ持て来て 広大な 大堆に

ウ。 ジュ⁽⁶⁾ ニャグ ツグレバー オキ ニヨ フタツツグレアニ
ン。 十人役 作れば 大きい 堆 ニ フ ぐらん
ツンデナー。
積んでなあ。

B アー ツンデナー。 (A ウーン) ソレガ ホマレダ^{ンダ}ハシ
あみ 積んでなあ。 (A ウーン) ソレガ 養れなかつから
デナー。 (A ウーン) ウン エサタツテ ツガネ ウツ マネ
なあ。 (A ウーン) ウン 家にとはいえ 積まない うち 大め
ンダ (A ウン) マネンダ。 エマダバ ノゴステ オゲバ
なのだ (A ウン) だめなつだ。 今なら 残して 置くヒ
(A ウンダ) マネンダケドモ モド ドンデモ コー ソド
そだ だめなつだけれども 元 ビシテル ヒコ 外(を)
コー カンザルッテガサナー。
こう 飾るっていえばよいかなあ。

A ウー オエデ ソロー コノ クレアノー シエゴン オキ ニオ
うん 塗家で そらあ ンタ くらいの シルニ 大きい 堆(を)
ツンデ^ヅエンタ。 (B ウン) ウー メヘルニ ホロー。
積んでというよ^うな。 (B ウン) ウン 見せるに ほらあ。

B ウン ワラモ タステ ツンダリ ステ ラー。(笑) オキグ
うん 薫り 足して 積んだり して あらあ。 大きく
メヘルニ コンダ コエデ マッタ ワラー ハー。
見せるに 今度 こひて しほス 薫 はあ。

A ンニヨ オキグ メヘルニナ一。
ん 堆(を) 大きく 見せるに はあ

B ニオ オキグ メヘルニ ホラー。 ニオ ミンデ ヨメ ケダ
堆 大きく 見せるに はあ。 堆(を) 見て 嫁(を)くれん

トンヅダネ ホラー。(C 笑)

當時なん ほらみ。

A ウンダ ヨメ モラウデバ (B ウン) オエデ オニヨ ナン
えんじん 嫁 もううといえは (いん) 働家で 大堆 な人
ボ ツンダトガ (B ウン) ミツツ ツンダトガ ヨツツ ツ
ほ 積んじか (いん) 三つ 積んじか 四つ 積
ンダトガ ホラー。
んじか ほらみ。

B ヨグ ミニ キテナー。 (A ウーウン 笑) ニオ ミニ ハ
よく 見に 来てなあ。 (いん) 堆(き) 見れ は
ー (A ウン) ウーン カグマギ ⁽⁷⁾ ショッテ ハー。フタリ
あ (いん) いーん 角巻(の) 背負って はあ。 = 人
ソッテ ハー。 タエヅ ソノー ドゴテ ⁽⁹⁾ ケルテ ⁽¹⁰⁾ ヘ ナンタガ
背負って はあ。 第一 その どこで くれると なんとか
テ ヘレバ ニヨ ナンボ ⁽¹¹⁾ アル。 (B C 笑)
と 言えば 堆(き) なんば ある

A オッキ ニヨ オニヨ アッコデ ナンボ ツンデアナーテナー。
大きい 堆(き) 大堆 あ生こで なんば 積んであるなあと言へなあ。
オッソロスグ オッキ ニヨー (B アー) ミツモ ツン
恐 しく 大きい 堆 (あみ) 三つも 積ん
デヤーテ (C ウン) アコダバ ⁽¹²⁾ キット クラス エガビヨン
で ようひいて (いん) あ生こなう きっと 暮らし(の) 良いところ
テ。
といって。

B マンヅ ソレー エヅバンデタエナー。 (A アー) ニオ ツ
りす もれ(か) 一 番 であんよよあ。 (あみ) 堆

ミ ツンデ ニオノ オキグ⁽¹³⁾ メヘル _____。⁽¹⁴⁾
積んで 堆の 大きく 見せる

A エ エモナモ ハー エモ ミルバタテヨー (B ウン) エノ
家のへ 行くる はあ 家のも 見るけれどよう (うん) 家の
ツキニ コンダ ハー ソー オニヨ ホロー。 (B ウン) ア
次に 今度 はみ そう 大堆(を) ほらみ。 (うん) あ
ココテ ター ツクテ ドノ クレア ツクテ オニヨ ミレバ
えこで 田(を) 作つって ての くらい 作つって 大堆(を) 見るヒ
エヨー アエ タエスタ モンテ アレア。 (C 笑) ウー ア
やあ あれ えいした もうだ あれは。 (うん) うん あ
コダバ カマド エーイア。 アコダバ ケデモ エーナーテ ホ
えこなら 暮らしめ 良いよ。 あるこなう くれても 良いなあと そ
タ ハナス ス⁽¹⁵⁾ (笑) スタリ スー。
んな 話(を) しりり して。

B マー エマダバナー ター ツクテモ ヨメ ケネイア ホラー
まみ 今なう なあ 田(を) 作つても 嫁(を) くれないよ ほらあ
(A ウン) ウン。
うん うん。

A. ウン エマダバ オキ ニヨー ツム ワゲダバ ダモ ヨメ ケ
うん 今なう 大きい 堆(を) 積み わけなし 誰の 嫁(を) くわ
ネヤ。 (B 笑) クー ミルッテ (笑)。 ソノ コロ ナン
ないよ。 若(も) 見るヒツト。 ソク ピク な人
ダ ソノ ニヨー コンダー フユサ ナレバ コンダ ユギ⁽¹⁶⁾ ア
だ もの 堆(を) 今度 冬ハ なると 今度 雪
ル⁽¹⁷⁾ アルウツ^ツ コガネテ フユニネバリ コグ⁽¹⁸⁾ コグアダエナー。
あるうち こかないと 冬ハにばかり こくのだよ なあ。

B フユ コグアダエナー。 (A シン) トストリノ アダリ コエダ
冬 いくのむよなあ。 (ん) 年取りのあたり こいだ
リ ステゾデ ホラー。

り してるんだ ほらあ。

A シヨンガヅマデ (B シン) スコス ナンダンドバー ハー シ
正月まで (ん) 少し なしどうなう はあ
ヨカヅモ ナンモ (B ウン) ハー コス ツギモ アレアア
正月も なにも (ん) はあ 越す ゆきも あるタ
ダ。
だ。

B ハンブガラ ヨー トラエデ マッテナー (A ウン) ウンウ
半分から 余(ゆ) 取られて しおてなあ (ん) ウン
ン タデマス。
ん .

C ホタヨー オエノ エンドダキャーラー マッコ ネンデ アノ
えうえよ 俺家の 家などは あらあ 馬(馬) なくて あ
タ ツクツク モンダドゴデセア (B ウン) コンダ アノ
田(田) 作(つ)み もんどうから よ (ん) 今度 あ
一 エサ ソッテ キテダベア。 (B ウン) マッコデ クバ
家に 背負(せふ)て 来(く)れ。 (ん) 馬(馬) で 連
ラアデ ネアヤー ヘナガサバリ アケデ ソッテ キテダベア。
ぶ(の)で なくてよ 背(せ)中(なか)に ぱ(ぱ)かり 上げて 背(せ)負(せ)て 来(く)れ。

(A ウン) ホヤステ エサ キテ ヘンコギデ コエデダ
ん も(も)して 家(いえ)に 来(く)れ せんこぎで こいでだろ
ベア。 (A ウン) ソヤステ コンダ ドンデアステ フトリエ
う。 (ん) も(も)して 今度 ど(ど)うぞう 一人

アグガラテレバ ⁽²³⁾ サンビヨーガ (B ウン) ナンボオガ アケ
後からといふと 三俵か (うん) いくらかしか あげ

ネキャー。 (A ウン) ソエデ ニヒヨー タデマス トラエ
ないよね。 (うん) それで 二俵 小作米(25) 取られ

ルアデー ホラー。 ダンナサ オサメネバ マネアダ。 コン
ろのぶ ほらあ。 旦那に 納めないと だめなのだ。 今
ダ タ ツクテテ カッテ カネバ マネ ヤツヤ。 ウン タ
度 因(26) 作つていて 買つて 食わないと だめなのだよ。 うん 因(26)
ヨゲ ツクテ ネ モンダモノ (A ウン) ツギ ヘネアダト
多く 作つて ない もんどうもの (うん) 化学肥料(27) 入れないで

ゴテ ホラー。

う ほらあ。

A ウンダ タエデー ホンデタダネ。 (C ウン) ウン ター
えんだ えりてい えいであひぐど。 (うん) うん 因(26)
ハ一 オゲ ツクテモヨー オゲ ツクレバ ツクタエネ タデマ
はあ 多く 作つてもよう 多く 作ねば 作つよされ 小作米
ス オゲ トラエベーエ。 (C ウン) ヘバ ホロー ケッキ
多く 取られるだろ。 (うん) すると ほらあ 結局

ヨグ フトツギダエナ。 タエデ ⁽²⁶⁾ ハー。
同じだよな。 えりてい はあ。

B ダエエヅ ショガヅ トスト ツギ オラタヅドア クー コメ
第一 正月(28) 年(29) 取る時 塗達(28) 食う 米(29)
ネンダオン。 (笑) (C ウンダ) ショーガヅー ター ツア
ないだも。 (えんだ) 正月(28) 因(26) 作
テーデ ミヅメダ モンダアバナ ホラ。
てつてみじめな もんではないか はう。

- A スタテ タデマス サンゴー已 トラエル モンダモノ。
 んれもねば 小作糸を 三 織も 取られる もんじーもの。
- C トラエデサ コンダ (A アー) ネアドゴニ ダンナサ ネガ
 取られても 今度 (みみ) ないので 旦那に 頼い
 ネ エグベア。 (AB アー) ウアーエ ソヘバ コンダ マ
 ニ 行くだろ。 (あみ) あーい もするヒ 公度 町
 ツノ キンバダガ (B ウン) クスリヤサ エゲバ (AB
 ナ 木場か (いん) 薬 屋へ 行くと
 ウン) ネガネ エゲバ アノ カッチャニカッテ ニラメラエデ
 頼いへ 行くと あの 母さん に れらめられて
 ヨー (笑)。
 よう、
- B スカテ ヨゴサダエナー。
 ヒッて よこすがんよなあ。
- C ウー スカラエデ キラ ⁽³⁰⁾ キルスタデバ モドテ。 ワタキヤ カ
 うん ヒラれて 来るンヒがあんではないか 広って。 吾は 一
 ダテヨー。(笑)
 緒についでよ。
- A ホダ ホダ。
 んだ んだ。
- B ネガネ エグテナ。 (A ウン) コドス ヨノナガ ⁽³¹⁾ エグネハ
 頼いへ 行くといへ。 (いん) 今年 世の中 よくないの
 ナデ ウー ヴヌスア ネガネ エグテ ホラ。 (C ウン)
 で いん 地主に 頼いへ 行くといへ ほら。 (いん)
 ナンニンモ ソロテー ウー ヘバ スカエデ クレンダネ ホラ。
 何 人も 握って いん するヒ ヒラれて 来るんじよ ほら。

A ウー。サギニナ ソエゴン サギダヅ フト サギニ ナテ ホラ
えん。先へな それに先 立つ 人の先へなてほら
ヘッハガタ ヘトリ アッテ ハー (B アー) ミンナバ
世話方か一人 あつて はあ (あみ) みんなを
ヘテ エグ ワケセア。 テ カエテ ハー モキ⁽³⁴⁾ モキ⁽³⁴⁾ エッヒ
連れ 行く わけよ。 それで 働はりて はあ 粒レ一 粒
ヨーサ アギ リスト ステ ソラ モキ⁽³⁴⁾ マダ エットー リス
れ 狂 利子として から 粒レ 二 斗の 利子
シグアダエナー。 (B ウン) アー スタハテ カス フト
つくりよなあ。 うん ああ えだから 賃ア人の
モケ⁽³⁵⁾ アルドゴテ⁽³⁵⁾ スタハテー ヴッパドー マンダ テカダ
儲シけある うで えだから しつかりと ナス 手形ハ
カグ ワゲダー アー。 ジェン⁽³⁵⁾ ジェンコノー ジェンコ 力
書く わけだ あみ。 錄レ 二 倍
エダド フトヅテヨ。 テカダ ハー アー ナンボ ナンボ カエ
リたと 同じでよ。 手形 はあ ああ なんぼ なんぼ 強り
テ アギ エッヒヨーニ ツギ エットダラ エットノ リスタヅ
て 狂 一 粒レ 付タ 一 斗の 一 斗の 利子とい
テガミ テガ⁽³⁵⁾ テガダ⁽³⁵⁾ カグ ワゲダエナー。
手形ハ 書く わけだよなあ。

B ジョー ジョー ジョー／ モミ モテ コエテ ラー。 (A 笑)
上 上 上 の 粒レ 持マつて 来マいといつて あらめ。
エー ジョー ジョー／ モミ。 マンヅ エマガラ ミレバ コーリ
良イ 上 上 の 粒レ。 ナミ⁽³⁵⁾ ハから 見ると 高利
カスタケンタ モンダエナー。
貰マうよなあ もんアよなあ。

- A ン マ ホンダエナー ァー。
人 あ うじよなあ ああ。
- B デ ムロ ⁽³⁶⁾ ムロトアダリサ エゲバー シエク コンダ ⁽³⁷⁾ ツキ[。] ツ
あで 室 蔵ありに 行くと それへ 今度 キ[。] ツケテ ヨゴスタツケナ一 (A ウン) ウン。 アノー[。]
切れ(を)つけて よこすがうなあ (うん) うん。 あう;
ボロキレ ホラ。 ホエデ モモスキ[。] コヘダリ ナンタリ スタ
ぼろ切れ ほら。 それで 服 引(を) こしうたり かわしかく しむ
コ一 カダマタ モノ ホラ。 (C 笑) ソエ ナンボテ ン
シ[。] 固[。] な 物 ほら。 それ(を)なんぼ[。] ハ
エ ツケネバ カサネ ワケセア ウー。
れ(を)つけないと 貸さない わけよ うん。
- A アエ スタテ ホロー モメンヤテ ^{アマテ} アマテ マタ ャツ
あれ(は) だって ほらあ 木綿屋[。] ^{アマテ マタダ} ^{アマテ} 余って しまつ やつ
ヨ。 (B ^{アマテ マタダ}) ^{アマテ} 余って しまつ やつ フ
よ 今度 それ(を)んだ 今度 それ 今度 ほらあ 百
イ タクショ一 / ヘト[。] ド ヘヅネアドゴ[。] ムリニ ソレ ツケ
女性 の 人達 つら[。] つで 無理に それ(を)つけ
デ コンダ ソレ タダ ^{ツケテ} (B 笑) オゴヘバ エタテ
て 今度 それ(を)んだ つけて よこすと 良いけれど
ソノ ボドキレガラ コンダ カネ ^{カネ} トルアダエ。マン
^ツ その ぼろ切れから 今度 ^{金(を)} 取るのんだよ。ま
ダ オラタヅガラ。 ァー ホントノ エ コー コーリガス ミ
大 俺 達から。 ああ ほんとうの 高利貸 見
ルエンテタ モンダネナー エマダバナー。
るよ)で あん うん よなら 今 なうなあ。

B スタハデ ホラ ニヤクショーモ アノ トンヅダバ一 パー。
えいだから ほら 百 姉 も あつ 当時なら ああ。

A ジンテ クレスンダ モンダ。 スタハシテ ゴカヅ アガレバ
すいぶん 苦しんだ もんで。 もうだから 五月(か) あがるヒ
タエデ一 ハ一 ク一 ヤヅ ナグ ナッテナ一。 (B タエデ)
えいてい はあ 食う やつ なく なつてなあ。 (えいてい)
ソエダハシテ ホラ一。 (41) く間
それだから ほまあ。

ンダ ソエゴン ダンダン ク一 ヤヅ ナグ ナルドゴデナ。 (えいだ
えいだ それごく だんだん 食う やつ(か)なく なるのでな。

B ウン) ゴカヅ アガレバ ハ一 ク一 ヤヅ ネアンデヨー。
うん 五月 あがるヒ はあ 食う やつ ないんてよう。

(B ウン) ウ一 ゴカヅ アカxxxx アカタ トギ モフタリ
うん うん 五月 あがるヒ 腹(はら) み(み) 降(ふり)

ハニ チョト マダ フタ ブンア ハルサ ナレバ ハ一 ユ
はあ ちよと まだ 降(ふり) 分 春(はる) に なるヒ はあ 雪
ギ ケテモ ク ヤヅ ナグ ナルアダエナー。
ギ 消えし食う やつ(か)なく なるのだよなあ。

B ステ ラ一 コエデ マレバ スグ トネ キテナ一。 (A ウ一
えいれ ああ こいで しまさヒ すぐ 取りに 来てなあ。 (えいれ)

) マワッテ ハ一 ウ一 (A ンダナ) ステガラ マサー
回(まわ)て はあ うん (えいだな) えいしてから 馬(ば)に

(A ウ一) ウ一 ニヒヨ - ヴンツ ツケデ一 ウ一 モニモ
えいれ うん ニ猿 すつ つりて うん 持(も)て 数

(43) ミナ一 (A ウン) モテ エタテナ一。 (A ウン) ウン。
ミナ一 (A ウン) モテ エタテナ一。 (A ウン) ウン。
持(も)て 行(ゆき)たしなみ。 (A ウン) ウン。

(44) リストド ホラ ソノ ツキ[。] ツキ[。]クサテタエナー ムロツノ タバ
利子と ほら もの ^{xxxx} つきくさといふよなあ 室津の 束
(45) デヨー。(C ンキクサ) ツキ[。]クサテ ソノ アデモ ミナ 不
てよ。 つきくさ つきくさといふ もの 価値 みな ほ
ラ ハラテー。(A ンデアナー) ウン ジョーショー/モ[。]
う 扱て。 もうだなあ いん 上 上 の 枚
テ ホラ。(C 笑 ジョーショー)
セイセ ほら。 上 上

A (笑) ジョーショー/ モキデタエ エー モキデナー。
上 上 の 枚であるよ 良い 枚でなあ。

B ジョーショー/ モキ。 エー モミナー。ウエ/ ウエ/ モキダ
上 上 の 枚。良い 枚なあ。上の 上 の 枚を
ンダベナー。
んだろなあ。

A コンダ ホロー マー ネバ コンダ アノ ダエハヅブルマサ
今度 ほら 遅めないと 今度 みう 大八車に
ツケデナー。(B ツケデナー) ガラガラガラガラテ アレ フ
つけてなあ。 つけてなあ がうがうがうがうと あかぬ引
ッパテ アサガダエ ホラ ウン。エマ/ エー= テメアテ ^{xx}
つぱて 歩くのよ ほら いん。今夕 ようれ 自分で
(46) バ エマダバ クルマデ アサガタテ ウン マー モドダバ リ
^{xx} 今なら 車で 歩くけれど いん まあ 元なら リ
(47) アカーモ ネ[。] アノー フト[。] フグ[。] ダエハ[。] アノ クルマサ
あかー 必 ない あ[。] 人[。] 引く ^{xxxxx} 大八 あ[。] 車に
ツケデ[。] マヅマシテ[。] (B ウン) フハ[。] テ アサガネバ マエン
つけて 町 生で[。] (いん) そりはって 歩かないと あめ

ダエナー。

だよなあ。

B ソノ クルマダアテ コノ ヘンダキャ ナガネ ネフテ アタエ
の 車 だなんて ンツ 辺 は なかにぬ なかつんようん。
(50) ン、ホラー ヤシヤグノ アノー ヤマデンサ エゲバナー。 (A
ほらあ ハーツの あつ 山 伝 へ 行くとなあ。)

ウン) オーガゲデ ネバ。 (A オーガゲデ ネバ ネンデナー
うん 金持で ないヒ。 金持で ないヒ なくてなあ

) ウン スルメア カエレバ ジューゴセン (A ウン) ウ
うん 金前 借りると ナ 五 錢 (うん) う
ーン バケマデ カエレバ サンヅッセン。 (C ウーン) ソン
一人 晩 まで 借りると ミ ナ 錢。 (うーく) も;

ダスク[。] アギ ネアンドジャ マダ ホラ (A 笑。 C ホ
だ すぐ 空[。] ないん[。] よ みた ほら
(53) ンダネナー) クルマノ ツキツキド[。] ホラ。
だよなあ) 車の 次 次 と ほら。

A ミンナネ ネーハンデ ホラ。
みんなに ないのぞ ほら。

B ウー ミンナネ ネーハンデ ホラー。
うん みんなに ないので ほらあ。

A オーガゲネバリ アッテ ホラ。
金持にはかり あって ほら。

B オーガゲネバリ アッテ ホラ。
金持にはかり あって ほら。

A アー ツセア フトンド ミンナ ユンダ (C 笑) カエ^{***} カ
ああ 小さい 人達⁽¹⁸⁾ みんな 今度 借

エネ エグドゴア。(笑)

ウレ 行くので。

B トナリムラサ カエネ エグダエナ - (+ ウン) アノ - ハ
アヌク村 に 帰りて 行くのよなみ (うん) あう ; 荷

ス ネー カラメ フハモテ (A ウー) ホラ ウン。
ない 石川原 31,はて (うん) ほう うん。

注記

- (1) 「ステ」は、3. つらい農作業（直前の話）の最後の話者Bの「オラ サイキンマデ（稻刈りは）エッカゲツモ カガタドモタアテ」を受けている。本来「ステ」は連接の接続詞だが、この場合、本文標準語訳のように肯定的な意にすべきである。
- (2) いなむう。別に「ニヨ」とゆい。
- (3) 当地は「積む」をほとんどの人が「ツグ」という。
- (4) 農具の一つで稲扱き機（器）である。別に「ヘンコギ」とゆい。
- (5) 「マロ」は「東」のこと。六束で馬一頭分の荷となる。馬の背の左右に互束ずつつける。
- (6) 一人役は一反歩（300坪、10アール）の水田を耕す。男の一日分の作業量。
- (7) 昭和20年代まで、冬季間女性の用いた毛布様の防寒具。横六尺縦五尺程の長方形で縁に房がつき適度に折り合わせて着用する。頭からすっぽり被る：よりも多く、胸のあたりで左右両端をピンで止めぐ。
- (8) 積んでいる堆を見るのは暖秋か初冬である。夫婦二人がもつ頃の裏天候を予想して遠方から角巻を背負い、自分の娘の嫁ぎ先が祐福か否かを確実に來るのである。角巻の他に傘も背負って来たものだといふ。
- (9) 「（嫁を）ケルテ」
- (10) 次の「（ナンダガテ）ヘレバ」の言いかけ。
- (11) 「嫁をケルといひ、左歳の親が嫁入り予定の家のニヨを男に来て、ナンボ アルかなどと數える」と解する。
- (12) 「アコタバ」の「バ」はほとんど聞こえない。「ラ」と発音したかも知れない。
- (13)(14) 「ニオノ」の「ノ」は意味上無用の発音と思われるが、(14)の部分が削り取られず能のもの無用と断定もできない。
- (15) 当然、「ステ」とあるべきだか〔スミ：〕に聞こえる。
- (16) 「フユニネ」の「ニネ」はいずれも、時を表す接続詞だが、どうやら一つ不要である。なお「ニ」は改生、た場合に多く使ふといふ。
- (17) 大晦日の「年越し」のこと。

- (18) 「スコス ナンダングバー」は「ひょ、ひする」と意訳しあ方が
わかりやすいだろうか。
- (19) 明瞭に聞こえない。「タデマス」は注記(24) 参照。
- (20) 「ナタヨー」の「タ」は「ダ」と有声化すべきだが、軽く発音し
るめ清音となる。
- (21) 終止形「クバル」は「配る」である。
- (22) 「ドンデアステ」の「ステ」は古語の接続助詞「して」を終助詞に
使用したもの。余韻余情を作る。今は推量で訳しておく。
- (23) 「テレバ」は「～テ ヘレバ」の約言。
- (24) 語源ニ観を掲げる。(1)斗代、斗代米、年貢、年貢米、小作料。江戸
時代の頃から地主に金や米など納付することを「たてる」といづ。
小作米を地主に納める、その際、納税高に若干の余分を添えることには
ていい餘り余分。つまり「おまけ」が「立て増し」である。(鳴海
助一「津堅のことは」) (2)小作料、タデマダス(献て遣す)にもとづ
くものか。(松木明「弘前語彙」)
- (25) 地主。
- (26) 「タエデ ハー」と聞こえるが不確実。
- (27)(28) 「ダンナ」は青森市中心部で薬屋を営んでいた南藤忠一であり。
収録した歌や一部の話者の声筋に当る。
- (29) 「ヘニカッテ」は後に自分自身の語法を停うが、元めて不利益裏
事態の内容がくる。語源不明。
- (30) 当地では「キル」を意味するのである。
- (31) 「モドテ キルスタデバ」と逆転するとわかるやすい。
- (32) 収録。
- (33) 「ツヌスサ」の「サ(sa)」の[s]が脱落。よくあくろ変化。
- (34) 当地では老年層は一般に「モヤ」と發音する。個人差はあるが、少
し改まるべ「モミ」ともいふ。
- (35) 横濱音であり、その半生訛語とするべきだが、意が通じないため「し
かりと」と訳す;あるいは「さうんと」でもよい。
- (36) 「室藤」という読み。正しくは室津藤吉。青森市中心部に住んでい

た地主。

- (37) 場所。
- (38) 語源は「せつない」
- (39) 無意味の発音。
- (40) 「ゴガツ」は「固積」、「アガル」は「終わる」の意。
- (41) かなりの間を置いて再び話が続く。
- (42) 開き取りにくい部分である。前後の文脈は意味を把握しがたい。
- (43) 「モミ モテナー」と逆にするのがやりやすい。
- (44) 「布切れモノカタ。着物の破れなどを縫うのに使ふ布切れ」のこと。
- (45) 流記の事略。
- (46) 語源は「充て」か。
- (47) 当時は大八車は使用せず、もとと小型の手車だったといふ。三人の話者の感覚がいいろう。
- (48) 次の「エマダバ」の中間の「マダ」を脱落させて発音した。
- (49) 次の「アノ クルマサ」の「クルマ」へつながる。あるいは大八車でなく別の車だったかも知れないという意識がこのように言ひよどませたかも知れない。
- (50) 「アタエンタ」の最後の「タ」が聞き取り不可能。
- (51) 地名。青森市大字「ハッ後」。当地では昔から「ヤジャグ」という。当地のすぐ北を流れている川（荒川）を隔てた所にある。川に懸けての石牛館橋を渡るとそこ「ハッ後」である。200m程しか離れていない。
- (52) 屋号。正しくは山田伝蔵。
- (53) 「ホンダベナ（ホンダロウナ）」とも聞こえないわけではない。
- (54) 「クルマノ ッキッキド（借りるこど）」と解す。あるいは「ノ」は不要の発音とするより「クルマ ッキッキド（カエルンタエナ 借りるんだよな）」とごらえことになつるう。
- (55) この場合「オーヤケ」の反対語で、「金持でない」の意。
- (56) 水くのない石の川原。

5. 牛館橋

話し手

- | (略号) | (氏名) | (性) | (生年) |
|------|---------|-----|---------|
| A | 桜田 鉄彌 | 男 | 明治36年生れ |
| B | 八木沢千代三郎 | 男 | 明治43年生れ |
| C | 棟方 トミ | 女 | 大正2年生れ |

A オラホーテナ～ オラー ソエゴン ワゲー ヴギダバ ハス ネ
 僕方(1)でなあ 僕 それこそ 若い 時なら 橋(か)な
 ンデ ムッタド カワバリ コエテ ⁽²⁾アリテ ヴンブ クー ミン
 くて いつも 川(ばか) こいで 歩いて すいぶん 苦(き)み
 ダジャナー。
 れよ なあ。

B ナンボ ボンオドリ オドテ モドテ キテモ アノ カワテ ハ
 ハくら 盒 踊ク 踊って 床(くつ)て 来ても あの 川(か)で は
 一 ケツ タグレバ ハー (B C 笑) (笑) カラダ ハー⁽³⁾
 あ 補(を) たくり上げろとはあ らだ はあ
 スッカリ ステ マテナー。 (B C 笑) ウー。
 しつかり しつ しょてなあ うん。

A ナニスペア カニスペア ハス ネアドゴテ (B ウン) カワ
 行しよう かれしよう 橋 ないつで うん ^ウ (ち)
 コカネバ (B ウン) ホラ マエネヤダベア。 ウー スタハ
 こがないと うん ほら ためなのがろう。 うん ううだ

タ⁽⁴⁾ タンゲノ ホガムラデワヨー ウスタデ⁽⁵⁾ ハス ネアハシテ
から た“ていの 他村ではよう 牛 館⁽⁶⁾ 槩⁽⁷⁾ ないから
ウスタデサ ヨメ ケラエネナーテ ヘタ モンダエナー。 (笑)
牛 館に 嫁⁽⁸⁾ くれられないなあと 言つん もんぢよなあ。

B ワノ アネア スタハシデ オーノサテ エッタヤ ヨメニ ナル
吾の 姉⁽⁹⁾ えんだから 大野に 行⁽¹⁰⁾スケレビ 嫁⁽¹¹⁾ なる
ツギ^(A) (ア一) マー カミ ユテタマナー (A ア一)
時 ああ まあ 番⁽¹²⁾ 結⁽¹³⁾つけられどなあ ああ
ケツ タクテ ヨメ ケツ タクテ アサグタテ タンダデ ネデ
袴⁽¹⁴⁾ たくり上げて 嫁⁽¹⁵⁾ 袴⁽¹⁶⁾ たくり上げて 歩く⁽¹⁷⁾とも たとこで ないでは
バナ。 (C ウー ホントニナー ウー) ムゲサ ワダルネ
ないかなあ。 (うん ほんとうになあ うん) 何⁽¹⁸⁾へ 渡る⁽¹⁹⁾
ヨー。 ウー オヤジ コネダ⁽²⁰⁾ スンダバタテ (C ウーン)
よう。 うん 親父⁽²¹⁾ ニワ⁽²²⁾ 死んだ⁽²³⁾ ゲレビ (うーん)
エンマデモ ホラー (A ウー) ケ⁽²⁴⁾ ケツ タクテ アノー
今で⁽²⁵⁾ ほらあ (うん) 補⁽²⁶⁾ たくり上げて あのう
オメダガラ ヨメ モラテ キターテヨー。 (C アー。 A
お前の家から サ様⁽²⁷⁾ もうて また とつてよう。 ああ。
ンー) ウーン アーユ ツダエモ ホラナー ウー。
んー) うーん ああいう 時代か ほらなあ うん。
C ウッテ ミヅ キレバ ドンデ アッタベア。⁽⁹⁾ ホエデモ コエデ
うんと 水⁽²⁸⁾ 来れば どうで あ、こうう。 それでも こ⁽²⁹⁾で
アリテ。
歩いて。

B ワダラエネセア。 コガエネセア。
渡⁽³⁰⁾されないよ。 こがれないよ。

- A ミンヅ クレア ⁽¹⁰⁾ コガエネー。 (A ウー) 水 来れば こがれないと
えん
- B ヘバ ツリバス ワダテヨー ⁽¹¹⁾ (A スエドーバス アラー) すると 吊り橋 ⁽¹²⁾ 渡ってよ 水道橋 あらあ す
えドーバス 渡ってナ コスタ アラー ウン。
水道橋 渡ってな こういと あらあ えん。
- C ウン ⁽¹³⁾ コノキン エダ カガッタ ドゴ。 ⁽¹⁴⁾
えん これくらい 枝 ⁽¹⁵⁾ 縦 ⁽¹⁶⁾ 所
- A エッシャグバリカ ネア一 ⁽¹⁷⁾ ハバコナ一。
一 天 ばかりしか ない 中 こなあ
- B コノ ハス ワダテ一 ウン (A ソステ ハ一 ナ一) ナン
この 橋 渡って えん そして はみ なみ なん
タテ ショユ エツゴー カネ エグタテ ツーット オーマリ
といひても 醬油 一 合 買いに 行くべつても すう、ヒ 大回り
ステ (A ウー) ウー。 ヤ ⁽¹⁸⁾ ヤ ⁽¹⁹⁾ ヤジヤグサ ⁽²⁰⁾ エグネヨー。
して えん えん ハツ後ハツ へ 行くのれよう。
- (C メヘ ネア ドゴテノ一 ウン) メヘ ネア ドゴテ ホラー
店 ⁽²¹⁾ ないので えん 店 ⁽²²⁾ ないので ほうあ
ウーン。
うーん。
- A オラホーネ メヘヤ ネア ドゴテ ホラー コンダ ドドンド サ
俺 方 に 店屋 ⁽²³⁾ ないので ほうあ 今度 又達 ⁽²⁴⁾ 酒
ゲ ムテバヨー ヤジヤグサ ナンタカタ コダ ワラハンド
飲むと言えば もう ハツ後ハツ へ どんじめ 今度 子ビカ達 ⁽²⁵⁾
ヘバ ロー ビールビン ミンタ ⁽²⁶⁾ ピンクレア / ピンコサ
すると ほう びーる瓶 みたいな あれくらいの 瓶 これ

ニンゴーが サンゴー。 (B ウン) ムガスダハンデ ニンゴー
二合か 三合。 (うん) 音 んから 二合
ガ サンゴーバツツ ハー サゲー メアバゲー カネ エガアダ
か 三合 はかりずつ はあ 酒 (e) 每晚 買いに 行くだ
エナ。
よなみ。

B ワダラ エヅゴーヨリ ヨゲ カタ ゴト ネア ンタジヤー。 (君なら 一合 より よけい 買ひ こと なかつねよんだよ。)

A 笑) ショユデモ エヅゴー ナー。
醤油でも 一合 なあ。

A オラダツダバヨー タエテー ニンゴーバツツヨー ウー ユマニ
俺達 なうよう たいてー 二合 はかりずつよー うん タ方へ
コンダ ホラ ノマハンデ。 エマノ ヨネ ダモ エッショダ
今度 ほら 飲みから。 今の ようれ 誰も 一升石
ナンテー。 ショカツガ ボンダバナー (B ウン) エッショ
なんて。 正月か 盆 なうなあ (うん) 一升
オグアタテ ダーモ エッショツ サゲダキャ カエネアダネ。
置くけれど 誰も 一升といふ 酒 は 買えないとだよ。

B ウン スタテ スポービンコ モッテ ショ ショユ カニ エ
うん えねのれも四合瓶 (e) 持って 醬油 (e) 買いに 行
ゲバ エヅゴー カウアダアタテ スポービン モテ エゲバ ネ
くと 一合 買うタレ (keirebi) 四合瓶 (e) 持って 行くヒ お前
(7)
アサダー キテ エテアテ ハー ショユ カネ エゲバ ハー
の家に 誰 (ka) 来て いるのかと言つてはあ 醬油 (e) 買いに 行くヒ はあ
ナンモ ショユダナンテ クタ クタ ゴト ネアンタナー。 ((9)
何 ル 醬油 だなんて 食 (shoku) 食 (shoku) ないよななあ。

A ウー) ボンガ ショーカヅテ ネバ ショユ カネ ツギダ
うん 盒か 正月でないと 醬油(あ)置かない時ど
べホラー。

うほらあ。

C トーフダナンテ ホンダキヤー。
豆腐(だ)なんて そうだよね。

B ウンウン ショーユ ショーユ。
うんうん 醬油 醬油。

C ナニガア ツギデ ネバナー。 (A アー)
何かある時どでないとなあ (ああ)

B エヅコー／ ショーユ ホラ ピンモテ エゲバ ネアサ ダー⁽¹⁹⁾
一合の 醬油(あ)ほ； 瓶(び)持(も)て 行くと 前(まへ)の表(ひょう)に 誰(だれ)
アノー ソエゴン オキヤグサマ キテランツエンタ (A アー)
あのう それこそ お客 様(が)来ていろんだといふよ； あ
ー) アンベデ ホラ キグンダエナ。 エマダバ ダーも ショ
あ ぐあいで ほ； 開(あ)くわよな。 今 な； 誰も 醬
ユ エヅコーダアンテ カウ フトダキヤ ネアア ⁽²⁰⁾ミンナ エッ
油(あ)一合だなんて 買う 人は はいけれど みんな 一
ショ ニショ エバ フトタルダナンテ マー フトハゴナー ウ
升 = 升 良(りょう)れば 一樽(そん)だなんて まあ 一箱(ばこ)なあ；
一カッテ オグアンタ モンダバテ ホラー。

人 買うて 置くよ； ものん； わざん； けれど ほら。

A ウー エー エットモ カッテ エマダバ オガダバーテー。 ソエ
うん 一斗(まい)も 買つて 今は； 置くけれど。 それ
テ コンダ メアリ ⁽²¹⁾アンマリー ムッタド カー カウバウリ コ
で 全度 あんまり いつも ^マ川(かわ)ばく こ

エデ アサグドゴテ ダーンモ ステ コゴウ オラホーノ コゴ
いで 歩くのて 誰も そに ここへ 疲方の ここ
サ ハス カゲテ ケル フト ネアベガテナー。 (B ウンウ
れ 橋(を) 縹けて くれる 人は) ないがうかとひてなあ。 (うんう
ンウン) ソエゴン ハー コゴサ ハス カゲテ ケル フト
んうん) それえ はみ ここへ 橋(を) 縹けて くれる 人
アレバ カミサマネ マ ~~マツ~~ マツテモ エー マツテモ エーナー
あれば 神様(ハ) 然(ツ) ても 良い 然(ツ) も 良いなん
テ ヘッタヤダエナー。
て 言ふれどよなあ。

C ソヘバセア コノ フユサ ~~マツ~~ ナ アキサ ナレバ コンド コノ
とうすとじ; この ~~マツ~~ な な 紫(シ) なると 今度 ンヲ

カリバスヅ モノ カゲダアダベオナー ウー。
仮り橋(を) もの 縹けたまうらうなあ うん。

B カゲダアテ。 アギ。
縹けんのぞ。 紫。

A カリバス ウー。
仮り橋 うん。

B ブラブラブラブラテナー。
ぶらぶらぶらぶらとなあ。

C フュダバ コエデ アサガエネハンテア。
冬(ナニ) ここで 歩かれな(カ)。

B コエンデ アサガエネハンテア ロー。 (C ウン) マー フハ
ニ(ヒ) で 歩かれな(カ) ほら。 (うん) 馬(キ) 引^ハば。
テ アリテモヨー (C ウン) ソリタキ フハ^ハテ アルグン
て 歩^ハて よう (うん) 橋(を) は 引^ハばて 歩くの

ダキヤ アブナフテ。 (A ウン) アノ一 ソエゴン スモゲ
なら 危くて。 (うん) あつう それこそ 下肥

ア アケデナー (A ウン) ツケデ キレバヨー アブネテ
上げてなみ (うん) つけ 来ればよ; 危いと

ユ一 エイグ モンダドゴテ ユラユラテ ホラ (C ウン)
ニう 動く もんだから ゆらゆらと ほら (うん)

ウン。 アエサ マ一 ツケテ クル モンダベ。 (C ウン)
うん。 あれれ 馬(を) つけ 来る もんだろ; (うん)

ヤット ソエゴン キタ モンダジヤナー。

ヤッヒ それこそ 来た もんだよ なあ。

A ソエサ コンダ ソエデ一 エル ウヅネ オラホガラ コンダ
それれ 今度 それで いる うちに 働方から 今度
ホラー サグランダトスローヴ フト コンダ ソンチョ一ネ ナ
ほらあ 挑 因 後 郎(の) 人(の) 今度 村長 に な
ツタエナー。 (B ウン) ソエデ コンドア ホロー ソノ
つれよなあ。 (うん) それで 今度 (ほらあ) もの
フト ソエデ マエネテ。 ワ ソンチョ一 ステラハンテ ソン
人(の) それで だめだと言って。 爺(の) 村長(の) しているから 村
チヨ一 スタハンテ ワ ソンチョ一 ステ エラ ウヅネ コゴ
長(の) しから 爺(の) 村長(の) して いる うちに こ
サ ハス カゲデ ケラテナ (B ウン) アー。 ソエデ コ
ね 橋(の) 繋けて くれると言つたな (うん) ああ。 それで 今
ンダ ホロー オラホガラ ソンチョ一 デダハンテ コンダ ハ
度 ほらあ 働方から 村長(の) 出たから 今度 初
ンヅメテ ハス カガタダエナー。 (B ウン)
めて 橋(の) 繋つたんだよなあ。 (うん)

C ウン ヘバ ホロー ソノ ツギタネ。 (B ウン) ワ ヘバ
うん すると ほらみ もの 時だよ。 (うん) 無(ゆ)する
アノ一 ヨメニ ナッテ キタ ツギヨー。 (A B ウン) ショ
あつう 娘に なつて 来た 時だよ。 (うん) 昼
ーワゴネンニ ヨメネ ナッテ キタキャー (A B ウン) ヴ
和五年に 娘に なつて 来たよねえ (うん) ラ
一。 ジューガツノ ジューハツニツニ キタ ワゲセア。 (A
人。 十月の 十八日は 来た わけよ
ホテタベノー) ホノ ツド コンダ ホロー コノ カリバス
もうでありますから 先の 時 今度 ほらみ この 仮(カイ)橋
(B ウン) ソノ ツギ ユギ ハヤヅ フタ トスデア (A B
うん もの 時 雪 早く 降る 年で
ウン) ジューガツノ ジューハツニツニ コンダ アノ一 バ
うん 十月の 十八日は 今度 あつう 馬
ソリデ ホラー (B ウン) マッコサ ナステ スッテ キタ
橋ではらみ (うん) 馬 これ なして 来つて 来た
ワゲヨー。 (A B ウンウン) テ マンダ ユギ ジューハ
わけよ。 (うんうん) んれて まだ 雪 十八
ツノス ユギ ケアデア エマノ カノ²⁵⁾ ケームショノ ドゴサ
の日 雪(ゆ) 消えて 今の あの 刑務所⁽²⁶⁾ の 行に
キタキャ コンダ ユギ ネンデヨー ソリ カツテナ一
来たら 今度 雪(ゆ) なくてよう 橋(はし) 担いでなあ
ウンウンウン) ヴー。 ソステ コンド マット マッコ フハ
うんうんうん) うん。 そして 今度 せと 馬(イヌ) 引(ひ)
テ コンダ ユノ ハス ワタタツヤー。 (A ウーン) カリ
て 今度 こつ 橋(はし) 渡つたんだよ。 (うん) 一人 仮(カイ)

バスー。^(B ウンウン) エマ ハジレサ コンダ ンニヤ
橋。^(うんうん) 今 はずれへ 今度 いやあ
⁽²⁸⁾
オワテ⁽²⁹⁾ マルタキヤー モスコステ トックラガッテ マル ドゴ
終って しまうといふ時 も少しで ひっくり返って しまう ところ
スタダエナー^(B 笑) ウー。ナ ヨメ トックラカステ
しんんだよなあ^(うん) お前(ゆゑ) 女家(よけい) ひっくり返して
マル ドゴ スタテ^(笑) ウー。デ ホノ ヴギ カリバ
しまう ところ したと見て^(うん) そんで その 口音 仮名 橋

ス ワダッテヨー。^(A ウー)
渡^(よ)。

3 ホンデタエナー。 ナンボモ マダ フルグ ネンデナー ンリ
もうでありますよなあ。いくらか まだ 広く なくてなあ 橋^(ゆ)
アサゲハ ナンボモ一マー。
歩くと いくらか まあ。

ロクシャグー ロクシャグ アー ロクシャグガ^(B ウン)
六 尺 六 尺 ああ 六 尺 か^(うん)
ナナシャグフレアスカ ネフテタナー^(C ウン) クギ^(ヨ)
七 尺 ぐら^(ハ)しか なかつたなあ^(うん) くぎ^(ヨ)
ゴサ ウテ ロー。ステ コンダ⁽³¹⁾ ナガラ^(ウ) スタサ。ナガラ
横に 打て ほみ。そして 今度 丸太^(ゆ) 下^(ハ)。丸太^(ゆ)
スードタガー^(B ウン ナガラ ウン) ステ コンダ^(C ウン) コ
数いていんか^(うん) えいて 今度
モー^(B ウン) ワラデ^(ウ) モー クンデ^(B ウン) ワラ ミラ
猫^(ウ) 猫^(ウ) 薙^(ハ) 猫^(ウ) 組んで^(ウ) 薙^(ハ) どう^(ハ)
テ アヘテナー ウーン^(ウ) ソレサ コンダ ジャーリ
テ 歩いてなあ うーん^(ウ) それへ 今度 砂 利

アケテ ラ⁽³²⁾ ナー。ステ アヘタ モンダ。 (C ウン)
上げて ああ なみ れして 歩いた もんだ。 (C ウン)

オエ！ ヴー モヨ (B ウン) オノ アタリ コンダ ホロ一
俺家の 節⁽³³⁾ よ (C ウン) わの みちり 今度 ほらみ
タデマス モテ アケグ ヴギダドゴ⁽³⁴⁾ (B ウン) バサン
小作農⁽³⁵⁾ 持て 歩く 時 なつて (C ウン) 馬車撫

リサ ロー バシ⁽³⁶⁾ バソリサヨー (B ウン) タデマス ツ
に ほあ 馬車 馬撫⁽³⁷⁾ よ (C ウン) 小作農⁽³⁵⁾ つ

ケテ (B C ウン) ヴッピョーダガ ツケダエナー。 (B C
けて (C ウン) タ 猶 どうか つけぬよなあ。

ウン) ステ ソノ ソノ カリバス コンダ ユギ フテガラ
いん るして もの 傾き橋⁽³⁸⁾ 今度 雪ゆき 降ってから

ソリサ アーア ホロ一 ツケテ オヤジ フハテタ ウゲセ。
撫⁽³⁹⁾ に ああ ほあ つけて 親父 引はげて行ん わけよ。

(B C ウン) スタキャー マー マンダ ウダデグ ダンジ
いん もしら 馬めぐ よく ひとく 手こず
⁽⁴⁰⁾ ャグダ マテヨー。 (B C ウン) エグネ マテタネ。 (B
うせる 馬でよ。 (C ウン) 良くない 馬であるよ。

ウン。 (C ウンウーン) コンダ マー アマステ マッテヨー。
いん (C ウン) 今度 馬⁽⁴¹⁾ もてあまして しまってよ。

コンダ ホロ一 ソリ コメ ヴッピョー ツケテ カワノ マ
今度 ほあ 橋⁽⁴²⁾ 稲⁽⁴³⁾ タ 猶 フリて 川の 真
ンナガワー トックレアガッテ マッテ (C ウーン) コメ
ん中に ひくひ 通て しょて (C ウーン) 稲⁽⁴³⁾

オドステ マッタアゲ ホロ一。 (C オヤオヤオヤオヤ) (B
落して しまつんのん ほあ、 (C オヤオヤオヤオヤ) (B

ウン) ウン ステ コンダ ハー ムラノ フト ミンナ カ
ン) ジン んして 今度 はあ 村の 人 みんな 備
エデヨー (B ウン) コメ アゲテ (C ウン) ソエ マ
クでよ; (ジン) 米を 上げて (ジン) ソエ マ
ンダ エサ モッテ キテヨ (C ウン) コンダ ドース。コ
れ 家に 持って 来てよ (ジン) 今度 どうする。今
ンダ タデマス ダンナサ モテ エガエネベー。 (C ウン)
度 小作来 旦那に 持って 行かれないとろ; (ジン)
ソエデ ⁽³⁷⁾ コンダ オニヤサ ホラー ミンナ モスロ スエデ ステ 木
それで 今度 お庭に ほらあ みんな 蓬⁽³⁸⁾ 敷って そして 乾
スタ ヴギモ アテ ホロー。 (B C ウーン)
した 時も あつま ほさま。 (ジン)
C へバ ホラー コノ ハス コンダ ナスタ ヴギ ⁽³⁹⁾ (A ウン)
すると ほさま ニク 橋⁽³⁹⁾ 今度 なしと 時 (ジン)
ウスタテバス カゲダ ヴギ へバ ショーワナナネンノ アキ
牛館橋 黒けん 時 すると 曜和七年タ 秋
コンダ ユノ (A ウン) ウスタテバス (B ウンウン)
今度 ニク (ジン) 牛館橋 (ジン) ジン
カゲダ フゲセア。 (B ウン エマノ マエナー。 A ホン
黒けん わけよ。 (ジン) 今タ 前なみ。 ジン
デタエナー) マエノ ハス (A ウンウン) ウン。 ホノ
であんなよなあ) 前の 橋 (ジンジン) ジン ジン
ヴギ コンダ アギ コンダ アノ一 ホラ ヨゴウヅノ ⁽⁴⁰⁾ スカナ
時 今度 狩 今度 あう; ほ; 橋 内の 鹿内
エヅ フトガ マンヅ コノ ハス ウグモッテ ⁽⁴¹⁾ (A ウー ウ
とい 人が りす ン) 橋 受け持て (ジン) ソウ

ンダ⁽⁴²⁾) ソエサ コンダ⁽⁴³⁾ オナゴ⁽⁴⁴⁾ンドモ (B ウン) カダワク
だ⁽⁴⁵⁾ れん 今度 女 達⁽⁴⁶⁾ (うん) 形 枠
ナサキバ⁽⁴⁷⁾ マエネハシテア (AB ウン) クキコ スガステモ
なさねば⁽⁴⁸⁾ たゞ⁽⁴⁹⁾から (うん) 金⁽⁵⁰⁾ 扱かしも
エヤー ハデッテ (B ウン) フタリ コンダ⁽⁵¹⁾ オナゴ⁽⁵²⁾ンドバ
良⁽⁵³⁾って⁽⁵⁴⁾ と⁽⁵⁵⁾て (うん) 二人 今度 女 達⁽⁵⁶⁾
マヅ⁽⁵⁷⁾ テマ⁽⁵⁸⁾トニ⁽⁵⁹⁾ ナス⁽⁶⁰⁾テ ソエサ コンダ⁽⁶¹⁾オラ⁽⁶²⁾キタ⁽⁶³⁾ワゲ
ます⁽⁶⁴⁾ チ⁽⁶⁵⁾間⁽⁶⁶⁾取⁽⁶⁷⁾れ なして れん 今度 疲⁽⁶⁸⁾来⁽⁶⁹⁾わケ
セア。 フタリ。 (B ウン) ヤナド⁽⁷⁰⁾フタリ。 (B ウ
ン) よ。 二人。 (うん) ヤナ⁽⁷¹⁾と 二人。 (う
ン) ホノ ヴギノ ヴダエノ オナゴ⁽⁷²⁾ンドノ テマドリヅ⁽⁷³⁾モノ
ん⁽⁷⁴⁾ その 時の 時代の 女 達⁽⁷⁵⁾ 手間⁽⁷⁶⁾取⁽⁷⁷⁾り もの
ネステ アッタハシテア (B ウン) ニヤ コンドア ホノ
な⁽⁷⁸⁾か つん うで (うん) ハヤア 今度 そ⁽⁷⁹⁾
スカテーヴ⁽⁸⁰⁾フト⁽⁸¹⁾スカテ⁽⁸²⁾スカテ⁽⁸³⁾スカテ (笑) サギダヅバ。⁽⁸⁴⁾
鹿 貞⁽⁸⁵⁾ 人 比⁽⁸⁶⁾て 比⁽⁸⁷⁾て 比⁽⁸⁸⁾て 先 立⁽⁸⁹⁾すを
(AB ウン) オナゴ⁽⁹⁰⁾ テマドリ (A ウンウン) ツカ
うん⁽⁹¹⁾ 女 の チ⁽⁹²⁾間⁽⁹³⁾取⁽⁹⁴⁾る⁽⁹⁵⁾ うんうん⁽⁹⁶⁾ 使
ル モンダナテア。 ニヤ ウッテ ホノ ツカタ⁽⁹⁷⁾フト⁽⁹⁸⁾スカエダ⁽⁹⁹⁾
う ものでない⁽¹⁰⁰⁾と⁽¹⁰¹⁾て。 いや うんと その 使⁽¹⁰²⁾つん 人⁽¹⁰³⁾ 比⁽¹⁰⁴⁾られ
タ。 オエノ アラー。⁽¹⁰⁵⁾
タた。 疲⁽¹⁰⁶⁾家の あ⁽¹⁰⁷⁾あ。

B アノ ヴギ⁽¹⁰⁸⁾ホラー = ンブ⁽¹⁰⁹⁾ホラ⁽¹¹⁰⁾エヅエンテテア⁽¹¹¹⁾ホラー。
あの 時 ほらぬ 人 夫 ほら 一 円 であつんよ⁽¹¹²⁾ほらみ。
ハヅヅ⁽¹¹³⁾セングラ⁽¹¹⁴⁾エヅエン。 (A ンダビヨン) フトリメア
ハナ 錢⁽¹¹⁵⁾から 一 円。 (えうんぞう) 一人 前

/ ニンブヂ。

の 人夫で。

C へバ コンド ホエサ オエノ モガスダバー ア アニ アニテ
すると 今度 それに 僕家の 背 なら ^{××} 兄 兄ヒ
ヘタハ ンデナ一 (A ウーン。 B ウンウン) オエノ ア
言ひ从から なあ (うーん うんうん) 僕家の 兄
ニンド コンダ キテタドゴヂ ⁽⁵²⁾ サキタッテアドゴヂア オラバ ヘテ
遠(か) 今度 来てひたつて 先立つて いるつて 僕を 違れて
キタ クゲヨー。 (A B ウー) ソエテ コンダ キテ ウ
来ス わけよ。 (うん) それで 今度 来て う
ツテ スカタテヨー。 (A ウーン) ホエカラ オラ ナンニ
んと 口づくつて ょう。 (うーん) それから 僕(は) 何日
ヅモ コンダ コゴサ キネスタバタニア。 エンマ へバ オナゴ
も 今度 ここに 来なかつんけれど。 今 すると 女
ンドバリノ テマドリ ヨゲダッキヤ。 ン スタハデ ソノ ヴ
違ばかりの 手筋取(か) よけいぶよね。 人 そばから その 時
ギ オナゴ ンド ツカタヅ ⁽⁵³⁾ ハヅメテ アッタド。
女 違(を) 使(つか)たつ 初めて あつたといふ。

A ウーン ホンデタベナー。
うーん そりであんろうなあ。

B ンダベナー。
そばろうなあ。

A ツヅエノ トクサスヅ フト マンダナー コーヴ (C ウーン
筒井の 德差(せり) 人 まんなあ 工事
グンバノ ウー ヤヅメテー。
現場の しん がじよて。

C ウンダ (A ウー) ッテ トアサスバ スカタド。オナコ⁹
えうだ いん いんと 德善を 比ひたとい。女
トバ ツカタテ スカタテア。ウーン ショーフナナネン/
達を 狹ひと 比ひたとい。うーん 昼 和セキツ
トス カゲダンダネ ホラー。
年 豊けんなんよ ほらあ。

A ウンウン ⁽⁵⁶⁾ ホダエン ×××× ホンデタナー。 (B ウン ホデタナー
いんいん そいであんななあ) いん そいであんななあ
ウンウン) ソステ ~ カゲタモ エバタテ ムガスダハ ンテ ナ
いんいん そして 豊けとも 良いけれど 音 なつて な
ンボー ナンボバリ アッタベ。 ニケ ^{×××} ニゲンダキヤ ネジヤナ
んばー なんぼばかり あんまろう。 ニノ開 は なんよ な
ー。
あ。

B ハスガ一 ウンウン アノ ムガスノー ウンウンウンウン。
橋か うんいし あの 音の うん いん うんいんいん。

A ウー ハスノ アラー モドノ ムガスノ ハスヨー キュー キ
いん 橋の ありあ 元の 音の うん いん うんいん
ユーシャグバススカ ネフテタベーナー。 (B ウン) ニゲン
尺ばかりしか なかつて ろうなあ。 (B ウン) ニノ開
ダキヤ ネフタナー。 (B ウン)
は なかつて うん

C ネステ アッタ。
なかつた。

B エヤ ジドシャ キレバタキヤ ジット ネバテ マネバ。 タタ
いや 自動車 来れば すつと くつて しまわないと。 たた

アリテ エガエネデア。

歩いて 行かれないか。

- A キュー シャグバリスカ ネフタベ ウン。 コンダ ミヅ クレバ
九 尺 ばかり しか なかたろう うん。 今度 水(が) 来ると
ナーノハスノウエ (B ウン) ミヅ コスヤダエナー。
なあ あの 橋の 上(を) うん 水(が) 越すのよなあ。
モドノハス アレア ヘヤ コノ ヘンモナモ ミヅ クレバ
元々 橋 あれえ そするヒニタ 辺めなれも 水 来ると
ナーツックド ハー ウミド フトヅ。 (B ウン) (C ホ
なあ もくくはあ 海と 同じ。 うん うん そ
ダエナー ウン) ミヅ クレバ エキ ⁽⁶⁰⁾ ワガエンネ ユノ ヘン
だよなあ うん 水(が) 来ると ⁽⁶¹⁾ 若 橋 ^(つばり) ヒタ 辺
カワノハダノエニネ ミンナ ⁽⁶²⁾ ナガエデ (B ⁽⁶³⁾ ナガエデ
の 端の 橋(み) みんな 流れて 流れて
ナーユン) ウーン モガスノナガスキ ナガエデ クルナー。
なあ うん ラーん 音の 流し木(き) 流れて 来るいなあ。
B ウン リンゴ ナガエデ クルナー。 (A ウン リンゴ 笑)
うん リンゴ(を) 流れて 来るいなあ。 (うん リンゴ
ツリバスニ エテ リンゴ トンダエナー。 (C 笑) ハス。
吊り橋に いて リンゴ(を) 取る人だよなあ。 橋
(笑)

- A アノスエドーバスダテ ヴンブ ムガス ⁽⁶⁴⁾ ウウ タガフタエナー。
あの 水道 橋だて すいぶん 音 高かれよなあ。
(B タガフタエナー) アノハス ハー ツグダゲ ⁽⁶⁵⁾ クルア
高かれよなあ あの 橋 はみ ひるるだけ 来るの

タエナー。

んよなあ。

B リンゴ^アミテ^{xx} スグル ワケセア ロー ウン。
りんご(え) 納^て すぐう わけよ ほひ うん。

A ソエデ コンダ ホロー。
それで 今度 ほらあ。

C ナンタテ マー アノ ハス カガタテ エーステナー ウー。
なんといつたて まあ あの 橋^(ゆ) 異^(い)なといつて 良くて なあ うん。

A ウー ソエデモ マンダ エー ハス カガッタテ ウー。(笑)
うん それで も よそ 良^い 橋^(ゆ) 異^(い)なといつて うん。

B ウン (笑) アエッカラ コンダ ヨメ モラウニモ ケルニモ
うん あれから 今度 嫁^(め) もらうんも くれるんも
ハ^{xx} ハゲデナー。(笑)
きはけてなあ。

A エー アンベスター^テ (B ウン) (笑) ウー ソエデ コン
良^い あんばいしんといつて うん それで 今
ダ ホラ サグラダツ フト ソンチョー ステ コンダ キネン
度 ほら 桜^(さくら) 人^(ひと) 村 長^(おとこ) して 今度 記念
ヘ ホラ ホートアヘテ ハー キネンヘン タデダ ワゲダ^ア
碑 ほひ 報 縮碑^(しゆひ) はみ 記念碑^(ひ) 建てん わけだ^ア
一。
あ。

B ホダエナー。アノ フトダキヤ ソンチョー サネバタキヤ マ
えいたよなあ、 あり 人が 村長^(おとこ) しづひならば ま
ンダ^{マダ} マンダ^{マダ} キヤ コーユー ハスダキヤ タタ^ネ
ズ ナダ^{ナダ} ナダ^{ナダ} まび こうひう 橋^(ゆ) は 建ない

ン \vec{P}_P 。

んだ。

A ウン タグネナ。

うん 建たないな。

C カガネ⁽⁶⁸⁾ カガネ。(笑)

建たない、建たない。

注記

- (1) 「俺方の村でなあ」との意。
- (2) 終止形は「コグ」。「川をコグ」とは「川にサバサバ足を踏み入れてわたり歩く」ことである。昭和7年まで橋がなかつた。
- (3) 「ケツ」は「尻」をいうが、着物の場合には「裾」をいう。別に「ケツ」といふ發音する。
- (4) 「大概」だが、「左いてい」と読む。
- (5) 収録地の名。
- (6) 「テ」は「といって」の意に解されしむるが、むしろ無意味の発音。
- (7) 文脈上、遂接の助詞で解される。この類の「や」はよく使われる。
- (8) 「自分の家」を「オエ(俺家)」「オエ(俺家)ノエ(家)」。それに対して「相手の家」を「オメダ」「オメダノエ」という。次に語源説をあげる。「オメダ」お前立人の家。アチタ ソチタ コチタ『タ』は場所を表す接尾語(松木明「弘前語彙」)。「左『他』ほかのところ、よそ、他所。あと『他、異』例、物類称呼外(そと)の事を西国にてあらへ云。但言集覽 備後みちうの在辺にて外をあらと云。」(日本固有大辞典)
- (9) 話者Cは嫁入り前の、牛館の様子は詳しく知らないため疑問の助動詞「べー」を使つた。Cは牛館より約5km西方の細越(現在青森市)の生まれである。
- (10) 「クレバ」の「バ(ba)」の「b」の脱落。
- (11)(12) 同一の橋。水道管を吊り橋状に渡しているため、人々はどうして「吊るが」。現在、以前よりも主派に同じ場所に繋つてゐる。
- (13) 「キン」は副助詞「きり」だが「くらい」と讀むのが適當。「コノ」等の連体詞に付属して使われることが多い。話者Cは手まねで板の中の狭さを示した。次の話者Aがその中を説明している。
- (14) 一定程度のゆれと言つてゐるが、實際には12cm程度で「のびがす」と向う岸まで渡していなといふ。
- (15) 地名、青森市大字「八ヶ瀬」。昔から「ヤジマグ」という。収録地から川(荒川)を隔てて200m程離れた最も近接してゐる地である。

音、橋が整っていないのか、古い木造橋（吊り橋）を渡して醤油等を買ひに行くにはかなり遠回りして行かることになると話している。直線距離を行くならば「川をコブ」ことになる。

- (6) 「コ」は指小辞。2. 「纏綿い」 沢記(12)参考。
- (7) 「ナ(汝)エ(家)〔na e〕」が〔ne〕となる。
- (8) 「エニア」は基本的には「エダ(いた)」である。標準語的扱いをするなら過去だが、実際は現在を表わす。誰かが家に「来た」という行動を完了してそこには存在していると説明してみる。この文は簡略化すると「タ(誰)エダ(いる)」の構文であるため訳は「誰」という疑問代名詞に応じて「いるのか」と訳す。
- (9) 「キャー」「キャ」が文末に使われる場合の訳はむずかしい。「～よね」を当ててみるが、方言は婉曲・敬意は含んでいない。語源不明。
- (10) 「安配」
- (11) 「ネアヤ」の「ヤ〔ja〕」の〔j〕の脱落。沢記(12)参考。
- (12) 次の「アンマリー」の「ンマリー」の言いかけ。「ア」が脱落した。
- (13) 「(川を)コエア」
- (14) 次の「ヌッテ」と同意。「へをなす」を練るのは話者とのつぶせ。
- (15) 「あの」の意味「カノ」を使ふことはないため接ぎの発音。あるいは次の「ケームショ」の「ケ〔ke〕」の〔k〕音を意識して発せられたと解釈すればよいか。
- (16) 「担ぐ」は「カツプ」の他に「カツグ」とも発音する。
- (17) 当地特有の表現で、ईいへんな事態の際に使う感動詞。
- (18) 「渡リオワテ」
- (19) 「キャー」「キャ」が文中に使われる場合の扱い方もまだむずかしい。文末に使ふのと併せて今後の研究すべき課題である。
- (20) 木の杭状のもの。釘でない。
- (21) 当地の人は簡明に「丸太のことを」と解答したりでそのままで訳にしなが、「全体が細長い木で、直径が先端ほど大きくなり小さくなる製材しない木」 参考として「細長い木。ナガカラ(長幹)の意か」(松木明「弘前語彙」)

- (Q2) 代名詞「あれ」に相当し、遠い過去のこととを示す。
- (Q3) 語源は形容詞「うちでし」。
- (Q4) 「情弱」だろうか。「ダンディック」駄々をこねること。情弱にちむづく。(松木明「弘前語彙」)
- (Q5) 「(馬を)アマステ」
- (Q6) 驚きの表現。
- (Q7) 屋敷内の家の前のやや広い通路のあたり。「オ」の尊敬接頭詞がついているが、敬意は失せ、接中に固定している。
- (Q8) 「(お庭)全体」の意。
- (Q9) 後の「(ウスタデバス)カゲダ」と同意。証記(24)参照。
- (Q10) 地名。青森市大字「横内」。収録地から、約3km東方にある。
- (Q11) 「バス(の工事を)ウゲモッテ」
- (Q12) 「～をなす」の表現は話者Cの口ぐせ。この場合「作る」の意。
- (Q13) 「テーマ(を)ト(り)ニ」。「手間を取る」とは「手間費を取る。日雇として働きに行く」の意。
- (Q14) 「雇って」の意。証記(24)(39)(42)参照。
- (Q15) 当時、話者Cの隣人である同年齢の女性。
- (Q16) 「マドリ」は「日雇人夫」のこと。
- (Q17) 本名「底内寅作」。話者Cは「スカティーフト スカテスカテ」の同音による読みしろさをねらって語している。
- (Q18) この場合「監督者」の意。「スカター氏」をさす。
- (Q19) この「ナ」は今後考察を要することばだが、反説的に誤りなくければいけない。
- (Q20) 話の内容は5行後の同じ話者Cの「オエノ アニンド…」へつながる。「アラー」の意については証記(32)参照。
- (Q21) 「人夫賃」のこと。
- (Q22) 「スカター氏より上役だ、なので」の意。
- (Q23) 「牛館」をさす。
- (Q24) 「ヅ」は「ヤヅ」(漢字を当ててなら「奴」)の「ヤ」の脱落。
- (Q25) 地名。青森市大字「筒井」。収録地からは約5km東北方。現在、青

森市中心部から峯並みが連続して、昔の農家の面影は失せん。

(56) 「ホダエント（そのようだ）」と言おうとしたらしい。

(57) 「ダキャ」は「強意」を表わすが訳しうがない。泣き(?)可憐今後考慮を要することばである。

(58) 泣記(?)参照。

(59) 「ヘバ〔heba〕」→〔he 〕→〔he ja〕。

(60) 「ひとつ」

(61) 無意味の発音。

(62) 当地では「若稿」と熟語にするこれは珍しい。しかし、あくまどもいう。

(63) 山で伐採した大きな木を川の上流から流して運ぶことからこの名がついた。これを乾かし、割って冬の薪にする。上等の薪である。

(64) 無意味の発音。

(65) 「(川の水が流れて) フルアダエナー」

(66) 「ナ一」は〔Nɔ:〕に聞こえる。

(67) 「ハゲル」(基本形)は「はける=割ける」

(68) 「(橋は) カガネ」

6. 川のさかなと'」

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

A モドダバー アツ ヅギ アツグ ナレバー カワネ マスガラ
 元なら 曙い 時 曙く なると 川に 鮎から
 (B マス ウン) ナニガラ サガナ エテ エデ"テ"ナ ラー ワ
 鮎 うん 何から 魚、(ウ) いて いてな。あらあ 子
 ラハンド ミズ アンブル。オドナド マス トルー ウー。
 ども達(は) 水 浴びる。大人運(は) 鮎 捕る うん
 B ヤー コドスマエネ 又ケエヅギ 又ヶア ワゲダラ ナンボモ
 やあ 今年のように 曙い 時 曙い わけなら いくらでも
 (1) トネ エフタデア。マス バガイ ナッタテ バガイ ナルッテナ
 捕りに 良かったよ。 鮎(が) ばかに な、たといって ばかに なるといってなあ。
 -。(A 笑) アリ トンツ バガ ツケテナ一 マス マス一
 あの 当時 ばか(を) つけて なあ 鮎
 (2) バガエ ナルテ (C ウー) ウー トニカグ ハー ブラブラ
 ばかに なるといって うん うん とにかく はあ ぶらぶらヒ
 テ カラダ キガネグ ナッテ マルダオナー。ワラハンドデモ
 体(が) きかなく なって しまうだものなあ。子ども達でも

トニ エグナッテ マルダネー。 (A アンマリ アツドゴデ)
捕りに 良くなつて しまうのだよ。 (あんまり 暑いので)

アツドゴデー (A ウン) テテ リョーホーテ ラー ドット
暑いので (うん) 手で 両方で あらあ じ、ヒ

(3) ナケレバ ナー コー オガサ ナケデ ヨゴスタリ ステヨー。
投げると なあ こう 隆に 投げて よこしたり してよう。

A マス エデー マス エデー。 (B ウー) エヤ マスバリデ
鰐(か) いて 鰐(か) いて。 (うん) いや 鰐(ばかり)で

ネヤー ソエゴン ャット ハルサ ナレバ オーケ ナー。 (B
なくて それこそ 早く 春に なると うぐい なあ。

(4) ウン オケ) ウーン オケ エデ ドンダノヤテ (B フトアミ
うん うぐい) うーん うぐい(が) いて どうなつたといつて - 緋

ウツンダバナ) ウン マスヨリ チョト ワンツカ ツチャケ
打つならなあ) うん 鰐(か)より ちょっと わずか 小さい

モンダバタテ ウン ハル ャット ヨケ^{××} オケ エデ コンダ
もんだけれど うん 春 早く うぐい(が) いて こんど

ゴガヅ タウエ スマレバ コンダ一 ヌググ ナラハ ンデ マス
五月(い) 田植(た) 清むと こんど 暑く なるから 魚尊(う)

エデ ラー (B マスデア ホロー) ナー。
いて あらあ 鰐(で) けらあ なあ

C ゴガヅノ 卫ア ツメネ アー カンツカ トテ ウー (B ウー)
五月(い) 植えじまいに ああ かじか(を) 捕りて うん うん

(5) カヘルテ ナー カンツカ トネ ミンナ エッテブ ナステレー。
食わせるといつて なあ かじか(を) 捕りに みんな 行って なにしてあれー。

B ウン チュハン ケバ ハー タンケ ハー ウーン ネドリ ンド
うん 昼 飯(は) 食うと はあ かなり はあ うーん 苗採りの人(は)

ナー ウー アー アノー タ カグヅア ンデ スゲデナー。 (c
 なあ うん ああ あのう 田(や) かくといふので 抜けてなあ。

ウー スゲデー) ウー ソステ コンダ コー オステロー。 ウ
 うん 抜けて) うん そして シンビ こう 押して ほう。 う
 (6) (7)

一 マグラ コヘデ。 ヤナギ キタケテナー。 (A カンツカト
 ん 梶(や) ニレエテ。 柳(や) 切てなあ。 かじか 捕
 (8)

リテナー) アエデ カンツカトリテ ホラー バンケノ オワリ
 リと言てなあ) あれで かじか 捕りといって ほらあ 晩の 終りに
 (9)

サ ソエ コンダ ツグ ワケダ。 ウー ハダキ スタリナー。
 もれ シンビ つく めけだ。 うん はたき(10) せたりなあ。

(A アー) カンツカ (10) ドゴデモ ャッタ モンダエナー ウー。
 ああ かじか (は) どこでも ゃった もんだよ なあ うん。

A ウー ナンスロ フルマサ ナレバヨー ムガスタバ カワ ソツ
 うん なにしろ 昼間に なればよう 昔なら 川(川) もち

ヘ マガル コイヤ マガル スタドゴデー マガリカンド ミン
 曲る こちへ 曲る したので 曲り角(か) めん

ナ フンヅデ (B ウー ウニ ウン) ヘー タダネンタエナ
 な 潟(は) うん うん うん 背(か) 立たないのたよ なあ。

一。 ヘバー ソゴネ ホラー フケア ドゴデ マスードモ ナン
 するべ そこには ほらあ 深い ので 鰐(アザラシ) でも なん
 デモ エードゴデ ソノ マガリカンドノ フンヅネ ドゴモ カ
 でも いる わで もの 曲り角(か) 潟(は) ピニモ か

スコモ ミンナ ハー マストリ ホレ フルマヤミス ヤスマニ
 しニモ みんな はあ 鰐(アザラシ) 捕り ほれ 昼間 休みに

コンダ ホレー ホロー オラダツ コンダ ナー ハー (B
 シンビ ほん ほらあ 倦(うと) 達(たつ) シンビ なあ はあ

ウー) コンダ フルマヤスミタハニテ マス トネ エグベス一テ
うん) こんど 屋間休みだから 鮎(イ) 捕りに 行こう といって

コンダ ワラハンド ワラハンドド マンダ アツドゴテ ミニツ
また 子ども達(は) 子ども達用(で) また 暑いの(イ) 水(を)

アブネ エテヨー ワラハンドモ オドナモ コンダ マンジャテ
浴びに 行てよう 子どもも 大人も こんど まがって

(B ウン) ヤー ット オラホノ カミガラ コツマテ ハ
うん やあ いっぽい 倦方(イ) 上から 二今まで は

(12) (13)
一 カワ ソックド ハー フトダラケ。
あ 川 全部 はあ 人だらけ。

B マストリナー (A ウン マス マス トレテ) ウン クグッ
鮎捕りなあ (うん 鮎(イ) 捕る) といって うん もぐっ

テ アラー (A ウン) ウン テ テガキテナー (A ウン)
て あらあ (うん) うん 手鉤(イ) といひなあ (うん)

テデ コー ャッテ クグッテ ギュット カゲルダエナー。
手で こ う やって もぐって きゅっと 引かげたよなあ

A カギコ モッテナー クグッテ エテー アノー ガラス ハ ハ
鉤(イ) 持ってなあ もぐって 行って あの ガラス 箱

(14) ゴサ ガラス (B ウン メガネ) ツダ ャッ クグッテテ
い ガラス (うん 眼鏡) ついた やつ(持つ) もぐって行つ?

コー フンヅサ ハッテ エテ ソステ ツグ ャッ ハラサ コー カ
こう 淵(イ) はいって 行く そして 突く やつ(イ) 腹(イ) に こう 懸
ゲテナー ステ ハー ホロー フンヅガラ コンダ アガテ キテ ウン。
けでなあ そし(イ) はあ ほらあ 淵から こんど あがって きて うん。

C ナー ホレホンド エデタタテ エマ ホラ ナンモ エナグ ナ
なあ それほど (15) いであつたけれど 今 ほら 何も いなく なつ

ッテ マタエナー。 (A ウン)
しまったよなあ。 (うん)

B ラー アユナー。 (C ウン) アキ コンダ サゲダベ ウン。
あらあ 鮎なあ。 (うん) 秋 こんと 魚塙(3)う うん。
サゲモ マンダ ショーカヅ モヅ トストリノスノ サゲ トタ
鮭も また 正月 (6) 年越の日(7)の 魚塙(を) 捕いた
エナー。コゴデナー。カワサ ミヅ アブヘニ エテ ホラー ウ
よなあ。 ここではなあ。 川(8)に 水(9)沿いセニ 行って ほら う
ン。
ん。

A サゲモ アエ (×××) アエモ マンダナー。 (B エテター) アエ エ
鮭も 鮎も またなあ 。 (いたなあ) 鮎(か) い
テ アエ エテ ナモカモ ハー カワ コケバ一 アエサ アカ
て 鮎(か) いて 何もかも はあ 川(を) ニクヒ 鮎(に) あがつ
テ アサグアデアナー (B ウン ウン) ウン。
て 歩くのなあ (うん うん) うん。

C ホントニヨー カニ エテ カニ エテセー。 (B ウン)
ほんとうによう 蟹(か) いて 蟹(か) いてよ。 (うん)
ホントニ アメ フレバヨ (B ウン) オラダツ タッコアミツ
ほんとうに 雨(か) 降るよ (うん) 僥連(10) たも綱って
テ ア) マス ツケテ⁽¹¹⁾ ラー。 (B ウー ホンタ ホンタ) アエ
あの 鯽(を) つけて あらあ。 (うん そうた そうた) あれ
テ コッタ オッキ ガニ ンニヤ サンビキモ ススキモ ハッ
で こんな 大きい 蟹 いや 三匹も 四匹も はい,
テ キテサ。 システ エサ モッテ キテ コンダ ナヘバ コ
て きてさ。 もして 家(12)に 持(13)て 来て こんど なせば 子

- ハッテ。

(a) はいって。

B イワスノ (c ウン) アタマ (c ウニ ウニ) ツケデナ
鮎の うん 頭(を) うん うん つけてなあ

- コ コ コーユー マレイノ スメアモ ゴメアモ ジュメア
xx xx こういう 丸いの 四枚も 五枚も 十枚

モナー (c ウン) (21) トゴロドゴロサ オエデヨ ツカソ
もなあ うん 新々に 置いてよ 時間か

キレバ コー アゲンダバ ヤー (22) ドンダガーテ。
来ると こう 揚げよなら やあ どうだうかと

C (ヤ一) オエノ ワラハンドンドダケア (B ウー) モスロ
俺家の 子ども達は うん おもしろ

カッテ コンダ ハステッタ ツケルアタエナー。ソヘバ マンダ
かって こんど 走って行って つけようだよなあ。こうすみと まだ

ナンボデモ ツデ キルアツ ウン。

いくらでも フリテ くそりだ うん,

B ヤノ ガニ エマ ドコサ エッタ モンダガサ ハー ナー。ア
あの 蟹(は) 今 どこに 行った もりかしら はあ なあ。あ

レホド エタモナナ。

れほと いたものなあ。

C ホンダキヤ ミステモ エネア。
そうだよね 見たくても いたまい。

A チヨ ンド アレア ツギダバ (B ウン エマ コエカラ) エ
ちょうヒ あれは 時期なら うん 今 これから エ

ネガリ一 (B コエカラダネ ウン コエカラダネ) コエカラ
霜刈り これからだよ うん これからだよ ショウカラ

ダネナー、ンヘバ チヨンド ガニ コエテヨー (B ウン) ア
たよなあ。うん すると ちようび 蟹(蟹) 肥えよう (うん) あ
ー ガニノ コーラノ ミソ メアテ アラ ナー (B 7 7
あ 蟹の 甲羅の みそ うまいといひて あらあ なあ
マガニッテナー アー アー) (笑) ナガニモ メガニ メアフ
熊蟹ってなあ あひああ なかも 比雄蟹(蟹) うまかっ
タエナー。
たよなあ。

B メアフター ウン。

うまか、た うん

C メアガニノ コ一ハッテナー コーステ ナヘバ タナ コ一
雌蟹の 子(蟹) はいって な こうして なせば いやもう 子

ハッテー。

はいって

A ミンナ ハー ナモカモ ハー ツット カミガラ ガニ ツル
みんな はあ 何もかも はあ ずっと 上から 蟹(蟹) 鈎(魚)
フトア (B エギアッテナー) エギアッテ マッテナ。
人は 行き会ってなあ 行き会って しまってな。

B マツガッテ トナリ! アツ アケタ オエノ アツ アケネッテ。
まちか、で 脇(脇)の やつ(や) あけた 俺(の) やつ(を) あけない いって。
(笑)

C ケンカ ステナー (笑) アー。
喧嘩 してなあ ああ

注記

- (1)(2) [n̥i] の [n̥] の脱落。そして [i] は [e] と発音が混同する
ことしばしばである。あるいは [i] は [e] に吸収されてしまう
ことが多い。
- (3) 「(オガサ) ナケレバ」。「オガ」は後文に出るが、この場合「岸
辺」の意。
- (4) 「ヤ」は感動終助詞。「オケ」がたくさんいることに対する感嘆。
- (5) 「～なす」「～をなす」の言い方は話者 C の口ぐせ。この場合「捕
つて」の意。
- (6) 「マグラ」は柳の枝を束ねたもので即製の漁具。
- (7) 前行の「コ一 オステロー～」から以後の文脈を整理すると「ヤナ
キ(の枝を) キタケテ マグラ コヘテ コ(川の中を) オステ(
行く)」の意。
- (8) 「晩の、仕事が終り食事に」の意。
- (9) 魚料理の一つ「丸焼き」。酢をかけ大根おろしをフツテ酒の肴にし
たり、すり身にしてからぼこのように煮て食う。
- (10) 「カンツカ(のハダキは)」
- (11) 文脈上、5行後の「フルマヤスミ」へかかる。
- (12) 「オラホノ(村の)」
- (13) 「えっく(の) まなぶ全部」
- (14) 「箱眼鏡」のこと。底にいる魚を見て捕る漁具。
- (15) 「エデタ」は標準語にない過去完了の表現法。
- (16) 「ヅ」は聞き取りが困難。「正月持つ(正月に使ふやめ蓄えておく
こと)」の意か。それとも「モヅ」は不要のことはか不明。
- (17) 「トストリノス(の駒走に使う) サゲ」の意。
- (18) 「(馬を) カワサ ミヅ アブヘニ(連れて) エテ」の意。
- (19) 「マス(を餌に) ツケテ」
- (20) この場合「煮て甲羅をとると」とか「食ふと」の意。注記(5)参照。
- (21) 聞き取れ不可能。
- (22) このあと「どうぞうかと思ってみるとすごい大漁だ」という内容

のこしばを省略している。

- (23) 「これからが蟹を捕る時期だ」の意。収録日が9月5日であり、9月下旬になると蟹の時期に入る。その頃が蟹を捕る時期である。
- (24) 「アガニノ（腹の中に）コー」
- (25) 「蟹の甲羅をとると」の意。注記(5)参照。
- (26) 「カミ」は「川の上流」のこと。

7. む山 (岩木山) 参詣

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

B ウー マー コナイダノ オヤマサンケーテ エマ サベタ ト～
 うん まあ この間々 お山参詣 いって(4) 今 しゃべった とあり
 リ ウー ソー ナンデ ソテ ナフテ アッタケ ンドモー マー
 うん そう なんだ といって なかだに けれども まあ
 ムガスサ クラベレバ ナンダナー オヤマサンケモ ウー ダン
 音 に ヒベヌと なんだではあ お山参詣 も うん だん
 ダンダンダンダン ア カンヅモ スグナグ ナッタスナー アノ
 だんだん だん あ 数も 少なく なつたしねあ あり
 A ウーン) ブブブ サイキ サイキ バタラバタラヨー (A
 うーん) ×××× 祭祀 祭祀 ばたらばたらよう
 ウーン) ムガスワ ビッツドダモッタケドモ エマダバー (A
 うーん) 昔 は 村人みんなだと 鬼ったけれども 今 なら
 ウー ウン) サッパリ コー ダンダンダンダン コー サカツ
 うん うん) さっぱり こう だんだんだんだん こう さがっ
 テ キタデ ネアガ一。 ウー。
 て 来たか? なりかなあ。 うん。

A *~~~~~* コネンダモ エッテモ エフテタベーナー。

この間も 行っても 良かったんだろうなあ。

B ウー イー エー エー テバ エンタ モンダバタテヨー。 ハ
うん 良いといえば 良いような もんだけれどよう。 善

ガスサ クラベレバヨー ムガスサ クラベレバ コヅガラ コー
に 比べるとよう 著に 比べると こっちから こう

ウー カラダ キヨメテ エッテ オナコンド アノ ハエラエ
うん 体後 清めて 行って 女達(めしやど) あの はいられ

ネーナ (A アー ム) アーユ ザダエガラ クラベレバ
まいような ああ xxxx ああ いう 時代に 比べると

三

47 ३

A ウー ムガスダバナ一 ソエゴン マ オモネ ワケア フトバリ
うん 昔ならぬあ それこそ ま 主に 若い 人ばかり

ウー コーリ トテ マー ムラノ オミヤサ ナ (B ウン
うん 培養(を) とて まあ 村の お宮に な うん

) エッ シューカンモ チヨンド エッ シュカンダナ (C エッ
一 週 間 も ちょうど 一 週 間 だな
(?)

シユ カンダタ _____) コーリ トッテ ホロー。
週間 たつた) 堀離(を) とて ほらあ。

B カラダ キヨメネ トマツテナー。
体 清めに 泊ってなあ。

A アーツマッテー アー トマッテ ハー ハー ナー エ
 ああ 泊って ああ 泊って はあ はあ なあ
 ×× ××

ソ エグネア ゴト ハー サエネア ワゲタ。
×× 良くない こと はあ されない わけだ。

B (笑) ウン エグネ ゴト。

うん 良くない こと。

A ヘバ ⁽⁸⁾ハツ⁽⁹⁾ネカテ エグネア ゴト ステ エゲバ ウー トカメラエデ ^{ゲデ}
するヒ 八に 良くない こと して 行くヒ うん ヒがめられ?

⁽¹⁰⁾ ゲデスー^テ (B ウン) ウー ヤマサ ノボエネア テナー。
懈怠するといいて うん 山に 登れないといつて なあ。

(B ウン) スタハデ ハー ワケモノ ハー エグネア ゴト
うん どうだから はあ 若い者(は) はあ 良くない こと
⁽¹¹⁾

サネア エッショケンメア ホラー (B ウン) アノ一 ミ
しないで 一所懸命 ほらあ (うん) あのう

ンナ カワ ソバネ アルグドゴネ (B ウン) ウー オミヤ
みんな 川(は) そばに ある 所(い) うん お宮(みや)

⁽¹²⁾ アレハ > デ。
あるから。

B ヨル エサ ニケデ キタリ スタ ヘトダラ ゼッタエ マエン
夜 家に 逃げて 来たり した 人 なら 絶対 だめ
だなあ。

A マイネ。 (B ウン) コンタヨー アサマネ ハー クレアネ
だめた。 うん こんビよう 朝に はあ 暗いうちに

オギデ (B ウン) ユーリ トルアダエナー。 (B アー
起きて うん 始離(は)とるのだよなあ。 ああ

⁽¹³⁾ サンブエ ゾギダエナー ウン ヤー ゴサノ ウン ゴサノ
寒い 時だよなあ うん やあ 合子沢の うん 合子沢の

アノ カワノ ミサミ ^ミンヅ (B ウー シャコイ ミヅ)
あの 川の 水(みず) うん 冷たい 水

サッコエ^ンダベ。イヤ シャッコエノ サッコク ネアノッテヨー
冷たいんだろう。いや 冷たいの 冷たく ないのってよう

(B ウン) ソステ ホロー コーリ トッテ。
うん そして ほらあ 堀離(を) とって。

C ホンダ"ヤー オラ! エネ エデ ツセア ツギタバヨー (B ウ
そうだよう 僕の 家に いて 小さい 時 ならよう う)

(A ん) オエノ エー チヨ^ンド オミヤノ ソバダアツ。 (A
俺の 家 ちょうど お宮の 側^{わき}なのだ。)

アーン B ウン) スタドゴ^テセア一 コンダ アノ一 サンケ
ああ うん そうたからよう こんど ありう 参詣

トド ヨル (A アーア B ウン) テーゴ タダエ^テア コリ
人達(が)夜 ああ 太鼓(を) 叩いて 堀離

(5) トニ エグ= サーイキ サーイキ^テ サイキ ョンテヨー (A
モ ヒリに 行く^タニ 祭祀 祭祀^{とい}って 祭祀 読んでよう)

A アーア B ウン) ソステ コンダ カワサ コーリ トニ
ああ うん そして こんど ハニ^ニ 堀離(を) ヒリに

エグアツ キゲバセナ (A ウン) ナンボ ワラハ^ンドナガ
行く(を) 聞くとよな うん いくら 子どもながら

ラデモ レア (B ウン) ナミダ デルエ^ンテ アッタテー
にでも あれえ うん 涙(か) 出るようで あったよ

(A ウーン) ウーン。
うん うん。

B コヤ カゲデ トマテルンダエナー。
小屋(を)かけて 泊まってるんだよなあ

A ウー オミヤ (C オミヤ^テ) ネア ドゴダバ。
うん お宮(を) うん ない 所^{ところ}なら。

C オミヤノ ネア ドゴダバ。 (B ウンウンウン) ホンダバテ
お宮の ない 所なら。 (うんうんうん) そうだけれど
(16)

オラホーダバ オミヤ アッテタハ ンデ (A アー) コンタ
俺の方なら お宮(か) あつたから (ああ) こんど

ハヤス (B ウンウン) ハヤステ ホラ ハヤスネ エデヨー
林 (うんうん) 林といへ ほら 林に いてよう

ティゴ タダ エデナー。

太鼓 叩いてなあ。

(17) B ヤジヤグノ フトンド コ コゴノ カラ カラメデ ソエゴソナ
ハッ役の 人達(は) ニコニコ 石川原で それこそなあ

二。

(18) A コゴノ スタヌ エデナー ヤジヤグダバ ラー。
ニコニコ 下に いてなあ ハッ役なら あうあ。

B ウー マタエナー オナコンド オナコンドテバ マー ナンダケ
うん やったよなあ 女達 女達といえは まあ なんだ

ドモ ゼンゼン コノモノ モッテ キタリ (A アー アー アー
けれども 全然 この 物(を) 持って 来たり ああ ああああ

二) ナニ モッテ キタリ スノ ウゲヅゲネアツ ワゲデネア
なに 持って 来たり するの 受け付けないという わけでないのか

ガ ヨラエネア ンダツケナー。 (A ウンダ)
寄られないんだという話だなあ。 (そうだ)

C スタテセア ズット コー ナフ ハッテ マッテヨー (B ウ
だってさ ずっと こう 縄(を) 張って しまってよう

ンウン) ゼッタエ ハー オナコンドダケア (A アー)
うん 絶対 はあ 女達は ああ

コッチャ ハッテ エガエネヤダモノ。

ニッちへ はいって 行かれないのでもの。

- A ソゴサ コー ナワ ハッテ ゴフェ ツケデナー ステ ハー
そこへ こう 縄(を) 張って 御幣(を) 付けてなあ そして はあ
エツデモ ホロー コリ トネ エグ ツギ テアゴ タデアデ
いつても ほらあ 埼離(を) とりに 行く 時 太鼓(を) 叩いて
ハー (B ウン) ウー サーイギ サーイギテ ハー (C
はあ うん) うん 祭祀 祭祀といひ はあ
ウン) ョンデ ソラ (B ウン) コーリ トネ テアゴ タ
うん 読んで ソラ (うん) 埼離(を) とりに 太鼓(を)
デアデ (B ウンウン) ウー ステ エグ ワケセー ウー。
叩いて (うんうん) うん そして 行く わけよ うん
(20)
B ステ ムラマワソダエナ (A ウン) ムラメア ムラメアテ。(C
そして 村回りだよな (うん) 村めえ 村めえといひ
C ウー) ウー (A ウー) ムラマワリ。アノ一 エーセン
うん うん (うん) 村回り 。あのう 一 錢
ダラド ニセンドラ モッテナー。
だうと ニ钱だら(を) 持ってなあ。
C ジェンコ ミガエデヨー。 (B ウー ンダベ) コッチャ スレ
錢ニ(を) 磨いてよう。 (うん そうだうう) こっちに 白い
(21)
ア アレ キヘデナー (B ステナー ジェンコ コゴサ ヘデ)
あれ(を) 着せてなあ そしてなあ 錢ニ(を) ここに 入れて
(22)
A アノ一 サンジヤク^{スメラヘデ} スレア ヤツ^{ハヅマ}
あのう 三尺帶(を) 締めらせて 白い やつ 鉢巻き
(23)
ギ サヘデー。
（を）させて。

B アレー カンドカンドデ コー ジェンコ マグエンタナー。 (A
 あれえ 門門で こう 銭こ(を) まようだ(ぬあ)。
 ンダ) カンドカンドデ ウー。
 もうだ) 門門で うん

A ナニ ナニセヨー アノー スレア ヤツキテ ハツマギ ステ
 なにせよう あの 白い やつ(を)着て 鉢巻き(を)してな
 ナー (C 咳ばらい) ソステ ココサー クレア アノ ヤツ
 あ そして ここに 黒い あの やつ
 一 ハラオ ノビダガ ナニ ヌッテ コゴサ サンケヘン ヘテ
 腹帶か 何(を) 空って ここに 参詣錢(を) 入れて
 (C ゾブンノナー テオ ハガヘテ) ヤー アレ ヘンダグ
 自分の なあ 手覆い(を)はかせて やあ あれ(は) 衣装(を)
 ミンタ バリデモヨー。 (B ホンダエナー) ウー ステ ミン
 見た ばかりでもよう。 (どうだよなあ) うん そして みんな
 ナ ワケモノ ナンジュ - ニンモヨ ニジュニンモ サンジュニン
 若い者 何十人もよ ニ十人も ミ十人も
 モ アー ソツコツ ミシナガラ エグハント ボンジュニンモ
 うく さちニチ みんなから 行くから 五十人も
 ログジュニンモ アエステ ⁽²⁵⁾ ゴフェー モッテ (C アンマ
 六十人も あれして 御幣(を) 持って あんま
 リ オキ ゴヘ モッテナー) ⁽²⁶⁾ ムラ マワテ アサゲバ ホント
 り 大きい 御幣(を) 持ってなあ 村(を) 回って 歩くヒ ほんと
 ネナー マーマー。
 になあ まあまあ。
 B ウー エー エサモ コー アレ ハッテナ ソゴイ エサナー。
 うん 家にも こう あれ(を) 張ってみ もの 家になあ。

- (30)
C トスナバナー トスナ。
年縄をなあ 年縄。
- B ンダ トスナ ハッテナー。
そだた 年縄(を) 張ってなあ。
- A エク ホレ ソノ ワケモノ サンケト エク エダバ ハー ソ
行く ほれ その 若い者(か) 参詣人(じゆにん) 行く 家なら はあ
エゴソ ジューニグツサ サオサ コンタ ホラー トスナ ハッ
それこそ 門口(に) 等(に) こんど ほら 年縄 張って
- (31)
テ ゴフエ ツケテー アー ヘバ ハー (B ~~~~~ ウン)
御幣(を) つけて ああ すとひ はあ うん
- ノー ドゴノ フト キテモ ハー コッカラ ソロー エワキ
う ピニの 人(ひと) 来ても はあ ここから そあ 岩本山に
- サンサ サンケニ エク フト ワケモノ アルナー ウン。
参詣(に) 行く 人(ひと) 若い者(か) あるなあ うん。
- C フタリ アレバ フタツ トスナ ハッテナー。(B ウンウン)
二人 いふと ニツ 年縄(を) 張ってなあ。(うんうん)
- アラ コゴテ フタリ エグナツ コト ワカルアタ(笑) ()
あら ここで 二人 行くなあといふ こと(か) わかるのだ
- A ウーン) ウン。
うん) うん。
- (32)
A ハ ^x アラー ヤット エタ ゴト ネンテ^{~~~~~} ハツメネ エケバー
あらあ や、ヒ 行ったニ こと なくて 初めて 行へと
(ハツマエリ) ^{x x x} アケ^{~~~~~} ハツマエリ ^{ニタ} アケ ゴフエコ コ
初詣(り) 初詣(り) (の) 赤い 御幣(を)
- ンダ マンジエテナー アー。
こんビ 洗せでなあ ああ。

(36)
 C ツケテ マンジエテ コゴカラ ハツマエリ エクアデア ホロー
 つけて 混せて ここから 初詣り (は) 行くの (よ) ほうあ
 (笑)。

A アコゴノ オドゴンド ホロー エマ ハツメダナ アゲア コー^{××}ゴ
 ああ この 男達 (は) ほらあ 今 初めだな 赤い
 フェコ アノ キタケタ マツ コー サケルドゴテ スレア ヤ
 御崩^(ご) あり 切た やつ (を) こう 下けるので 白い
 ツバリ サケ[。] レバ オー コゴテ ナンクアエモ ハー エッテ
 やつは[。] 下げてると あれ ここで 何回も はあ 行って
 ルアタベナー。 (B ウン) アゲ ヤツ サケ[。] レバー ロー⁽³⁷⁾
 いろのださうなあ。 (うん) 赤い やつ (を) 下げて いると ほうあ
 コゴノ ワケモンコ エマ ハツメテ エクアダナテ (C 笑)
 ニニの 若い者ぬ 今 初めて 行くの (よ) といって
) ソステ ワガル ワケダ。 ドゴカラ キテモ ミレバ。 ステ
 光れて わかる わけだ。 どこから 来ても 見ると。 そして
 エッペ マー ソエゴン マー ロー ムラマリスー ツギタバ
 いっぽい まあ それこそ まあ ほらあ 村回りする 時なら
 (38)
 オラホス[。] ゾブンノ ムラバリデ ネヤネナ ナンクアツモ カケ
 僕方 自分の 村ばかりで ないよなあ 何月も かけて
 テ アセアテ。 (C 咳ばう)
 歩いて。

B エヤ オヤ オヤクマギノ フト一 ソエゴン (A ウン) オ
 いや 親戚の 人 それこそ (うん)
 ヤクマギタテ エッタテバ ワラハ^xンドド^xタバ ソエゴソ 力
 親戚といつても 行ったというと 子どもたち ほう それこそ

A ドニ マツデデナー (A ウン) ヤー エノ フトモ マン
門口に 待っていてなあ (うん) ゃあ 家の 人も また
タ" ホロー ドコノ ダエダーテ ワラハンド キテネベガーツガ
ほらあ どこの 誰だといふ 子ビも達(が) 来ていひだうかヒム(思ふ)
ソノ ソノ フト マンダ パット ジェンコ ケテ エグダエ
その 人(は) また ばつと 錢(こ) くれて 行くのだよ
ナ"。
なあ。

C ジェンコ ケルドゴテナー (B ダエタリ カシダサ ジェンコ
錢(こ)を くれるのでなあ 誰なり 彼なりに 錢(こ)
ケルンデ ネンタエラー) ミンナ テハテ ヤラゲテ ジェン
くれるので ないだよあらあ みんな 出て 奪い合って 錢(こ)
コ モラネ テハラタベア。 ウン ジェンコ ツッパド オヤク
(も) もらいに 出るだう。 うん 錢(こ) (も) いっぱい 親戚
マギ ヨケダ フトタバ ジェンコ ツパド ワラハンドデモ モ
(か) 多い 人なら 錢(こ) (も) いっぱい 子ビも達でも
ラレキヤ。 ホレ モスレアテナー (笑)。
もうよね。 それ(が) おもしろいといつてなあ。

B カドサナー マツデテ。
門に なあ 待っていて。

(41) A ソエテ 口一 アル ソエゴン ドゴムラサ エテモ オミヤ ア
それで ほらあ ある それこそ どこ 村に 行っても お宮(か)
レバ ソゴサ カナラソジ ソラ オミヤサ ホロ ミンナステ エグ
あるヒ そこに ぬす そら お宮に ほら みんなして 行く
フトンド サンケス ワケタ"。 ター コンスサマサ エケバ" コ
人(は) 参詣する わけだ"。 ああ 庚申様に 行へと

ンスサマサ (B ウン) エグエネナー。
庚申様に うん 行くようになあ。

C ソゴサ エッテ ジェンコ フララダエ ロー。 (B ジェンコ
そこには 行って 銭こ(を) 拾うのたゞよ ほらあ。
銭こ(を)
フララダエナー) オミヤノ ナガサ サンケ サネデ コンタ"
拾うのたゞよ なあ お宮の 中に 参詣 しないで こんど"

ケヨンド トリヤドゴノ ホゴ マワテ トッラ エグドゴデ (42)
ちょうど 鳥居門の そこ(を) 回って 通って 行くので

A ウン) ホゴサ コンタ⁽⁴²⁾ ナゲ^{××} マグキャー。 ヘバ ミンナ
うん そこに こんど 投げ まくぬ。 すると みんな
ワラハンド ヤラゲデ コンタ" (笑)。

子ども達(が) 奈い合って こんど。

B コーモリ サガサニ スタリスト ラー。 (C 笑) フラハン
こうもり傘(を) 遂々に したリして あらあ。 子ども達。
ド。

A ウー コーモリ コステ サガサニ スース ワラハンドモ アッ
うん こうもり傘(を) こうして 遂々に いいいろ 子ども達も
タエナー。 サガスステ ロー。 コーモリタバ ロー ツット
あつたよなあ。 賢しくて ほらあ。 こうもりたば ほらあ ぐ、ヒ
ナゲレバ ハー ハエリヤスベー。 (A C 笑) ウン ソタ ワ
投げると はあ はりりやすいたゞう。 うん そういう
ラハンドモナー アテ。 コンド マダ アラー タムラサ マワテ
子ども達もなあ あって。 こんど また あらあ 他村に 回って
エゲバ ソラー オエノ オマグマギノ ウスタデタラ ウスタデ
行くと どうあ 俺家の 親戚の 牛館 なら 牛館の

1 タ"レソレア アノ エク"ヅテ エマ オラホサ クルゼ"テ ハ
誰それ (が) あり 行くといつて 今 僕方に 来るよって 言
レバ マツ"デ"テ (B C 笑) アー コンダ サンケヘン ア ケ
えば 待っていて うん こんど 参詣錢 (を) うん くれ
(43)
レ ワケセ ア。 コエテ マ サンケ アー ステ コエジャ一
る わけよ うん、 これで ま 参詣 うん して 来いよといつて
テ ウン。
うん。

B トニカグ" アノ アタ"リ サンケニ エク"テバ ソノ カマド ハ
とにかく あり あたり 参詣に 行くといふと ソノ 家庭 (は) はあ
一 タンケ コー ナー ジェン スタク" サネバ マネフタスヨ
かなり こう なあ 錢 (を) 支度 しょいと だめだったしょ。
一。 (A ウー) サンケヘンタテナー エマド ツガテ エッ
うん 参詣錢 いってなあ 今と 進って 一錢
セン ニセントテ タエスタ モンデタダオナー。 (C ウン
ニ 錢 いっても 大した もんであつたんだものなあ。 うん
タエスタ モンデタ) ナンボ カガルテ ラー ウン タエスタ
大した もんであつた) なんぼ かかるといふ あらあ うん 大した
(44)
ソエサ カマドノ ナンデアタデア ウン。
それに 家庭の なんび あつたんだ うん。

A ヘン ヘンタグ" ホラ ノースレア ヤツ" キテ ハツ" スレア
*** 衣装 (つむり) ほら のう 白い やつを 着て 白い
ハツ"マギステ コゴサ コンタ" アノ クロエ キハシ アレ
鉢巻 して ここに こんど あの 黒い 脚絆 あれは
ア マグヤデ" ナグ" タタ" コー ヤラツ" ハエテ" テ ワラツ"
巻へで てよく てよく こ やまや (を) はいい ねじ めらじ

ハエテ (C ハエテナ一) ナー。アーステ ナンダ エマ
はいて (はいてなあ) なあ ああして 何だ 今
カンカエレバ ヨー アリ ヘンダグ ナー ムガス アーヤテ マ
考えると よう あゝ 衣装 (は) なあ 昔 ああやつて
がナテ エタ ヘンタグ エマサ ナレバ ナンモ アーユー カ
まかなかで 行た 衣装 (は) 今に なると なにも ああいう
ダツ ナグ ナッタス。 (B アー) ホントネ ケアッテ オ
形 (か) なく なったし。 (ああ) ほんとに 却って
ユワキサン ナンダ オヤマサ サンケニ エグネタバ ムカス /
お岩本さん (かわみ) 何だ お山に 参詣に 行くのなら 昔の方
ホー エーフタ ナー。

(a) 良かった なあ。

B エーフテ アッタ。ソステ カエリ バッタラ ヤッテ クルテ
良くて あった。そして リ吊り (ひ) ばつたら やって 来るといひ
テーシャバサ コンダ ハラジュー ムゲアネ (A 笑) エ
停車場に こんど 村中 過ぎに
グアダエナー。ウー ソステ コンダ テーシャバメア ガラ テ
行くのだよ なあ。うん そして こんど 停車場 前から
一ゴ タデアテ (笑) (A ウン) エマ オモエバナー。
太鼓 (は) 打いて (うん) 今 思えば なあ。

(A ゴフェー タデテ アリ) バッタラ バッタラ バッタラハ
御幣 (は) 立てて あう ばつたら ばつたら ばつたら
タラ バッタラテ オドテ クル ワケダ ホロー ウン。
ばつたら ばつたらと 踊って 来る わけた (まう) まう うん

A ヤマ カゲダテ ナー。
山 カケタヒイケ なあ。

C ヤマ カゲル ツギ スタハゾデ ヴー アノー カダテテヤ アノー
山 かける 時 だから 畏(が) あのう ついで行って あのう
オミヤノ メーサ アノ メヘヤ テハベア。 (B ウー) アノ
お宮の 前に あの 店屋(が) 出る所(ご)う。 (うん) あの
メヘヤノ ナガサ コンダ テント カゲタ ドゴサ コンダ
店屋の ゆに ニんど テント(を) かけた 所(ご)に ニンド
フトリ エアサ アカテタス (B ウン) ワ コンダ ワラス
一人 上に 上がっていたし (うん) ワニ(は) ニンド 幼児
ヘテ エテ トマタ ワケセア。 (A B ウン) ステ コンダ
連れて 行て 泊(と)ま ゆけよ。 (うん) といで ニンド
ホラ ホッチャ コンダ ネデーヤツヨ。 (B ウン) ネデデ
ほら えに(に) ニンド 寢ていろよ。 (うん) 寝ていて
コーヤステ オドガテ テンジョ ミタヤツヨー。 (B ウン
こうやって 目覚めて 天井(を) 見たのよう。 (うん
(46)
) ヤ ジャックド コノ エアツパラノ ホス ジャックド カ
いや すらりと この 上(は)らの 星(め) すらりと
ダメッテ ホス アラアツ。 (A ウン B アーーー) ヤー
固ま(て) 星(め) あるのだ。 (うん) ああああ やあ
ヤ ナーテ アコネバリ ホス カダマテル モンダベガステテ。
やあ どうして あそこにはかり 星(め) 固まってる もんたうかと思(て)。
(A ウン) スタキヤ ムガスタバ ハヤク エクドゴデ タエ
そしたら 音なら 早く 行くので 松明
マツ (B ウンウン A ウンウン ウーンウーン オユワキサ
うん うん うん うん うん うん お岩木さん
ン) タエマツ アガステ ユイ オユワキサン! エヤツパラ
松明(を) 明して いき お岩木さんの 上(は)ら(を)

コ - アリテラアツ ホスネ メタ ワケ。 オモエテニ +
シテ 歩いてるの(め) 星に 見えた わけ。 思い出に

ル アレ (B ウー) ウン。
あれ あれ (うん) うん

B エマ アレガラ ミレバヨ - (A ウン) エマノ ホ - ツッ
今 あれから 見るヒょう (うん) 今の方 ずっと

ト コ - ウー サ (A シャ サビスエナ) サビスエンタ。
シテ うん (しゃ さびしいな) さびしいよだ。

C エマ ステモヨ - オナゴ ンド (A ア - ア - ア -) アガル
今 それでもよう 女達 (あ) ああ ああ あめ 上がる

ヨノナガダ モ!。 ナンモノ - (笑) 。

世の中だ も!。 何ものう 。

A コンダ ヤマ カゲデ クレバ ホロー ン コンダ ナンダナ -
こんだ 山 かけで くろと ほら うん こんだ なんだ だあ
ミンナ コニダ メンコ カテ - アレア (B オゴス カテ
みんな こんだ お面 (を) 買って あねみ (あこしき) 買って

) カブテア。
被って。

C エ - ヤマ カゲダジャ。 ツダツヤマ カゲタジヤテヤ
「良」 山 かけたじゃあ。 一日 山 かけた「じゃあ」といって。

A エ - ヤマ - (C 笑) カゲダー。 コア - ツダツヤマ カ
「良」 山あ (あ) かけたあ。 一日 山

ゲダジャーテナー。 (C バタラ バタラテナ -) バタラ バタラ
かけた「じゃあ」といってなあ。 (ばたら ばたらといつてなあ) 「ばたら ばたら

バタラヨ - テヨ - ミンナ ハ - ナンシュー - ニンモステ ステ
ばたらよう といつてよう みんな はあ 何十人 もして として

ホロ一 オリテ キティア ステ ハー ヘロサギマテ アノ ツ
 ほらあ 下りて 来て といひ はあ 34 前まで あの
 ギタバ アヘテタベアナー。 (C アヘテバリダ ウン) ヘバ
 時なら 歩いていたう なあ。 (歩いてばかりだ うん) すと
 エギマントエ エゲバーアラ一 コンタムラノ フトコニタ
 駄まび 行くと あらあ こんビ 村の 人(は) こんビ
 マンダ ヨー アー ジェアンゴノ オラホノ サンケトモド
 また よう ああ 田舎の 俺方の 参詣人(は) 戻
 ルヅテ ミンナ ワゲア エガネ フトンド (C 笑) ワ
 3といひ みんな 若い 行かない 人達
 ゲモノガラナー (B ミンナ ムゲアニ エグダエナー) トシ
 若い者からなあ みんな 迎えに 行くのたよなあ 年
 ヨリガラヨ コンタ テアゴ モテテ コンタ テシャバネ マ
 寄りからよう こんビ 太鼓(を) 持て行って こんビ 停車場(に)
 ツデル ワゲセア。 エー ヘバ コンタ オリテクレバ ラナ
 待っている わけよ。 ああ すると こんと 下りて来ると あらあ
 一 コンタ マダ ソノ フト。
 なあ こんビ まだ その 人
 (49)

C マダ ハスコ バダう バダラテ一 アー (笑) .
 まだ 階段(を) ばだう ばだらヒィ、
 おあ

B バダラ バダラテナー。 ウー コレマテ キタダエ。 ホロ一, (C
 ばだう ばだら といってなあ。 うん これまで 来たのたよ。 ほらあ)
 笑) クレバ ハー。
 来ると はあ。

A コンタ アオモリノ ホロ一 ソエゴン テシャバガラ コンド
 こんビ 青森の ほらあ それこそ 停車場(から) こんビ

マタ" ベジニ マンダ" ハー ケンキ ツテ" ミンナ メンコ カ
チタ 別に また はあ 元気 ついで みんな お面 (色)

(50)
アテ ユンダ" ハー マツ" アー エー ヤマ カゲ" ジャー^一
被(て) こんど" はあ 町 (色) ああ 良い 山 かけた" ジャあ

ツーダ" ヤマ - カゲ" ジャー テ (C 笑) ラ テアゴ" タテ"
一日山あ かけた" ジャあ といひて あらす 太鼓 (色) 叩

アテ" フエ フエ ツア" アノ - ラ フエ ツケテ" テ ハー エ
いいで あう あらす 笛 (色) つけて といひ はあ 実

マテ" ハー クレアダエナー。

まび はあ 来るのたよ なあ。

(51)

C テ" キルアタ" モノナー。
で" 来るのた" もの なあ。

B エサ キテモ マタ" フトスコド" タエナー。
家に 来ても また 一仕事 たよ たよ なあ。

C エサ キタタテ コンド ムラ マシタ" マワッテ アレグアタエ
家に 来たとい、とも こんど" 村 (色) また 回って 歩くのたよ なあ
ナ - ア - 。

ああ。

A ニキヤガテ ニキヤガデナー。

にきやかで にきやかで なあ。

B テ スエガ フトキリサ オゴス (A ウン) メンコ (C
えじ 西瓜 - カル) あこし うん お面 (色)

(52)
ツケテナ - A アー) ソカラ アエ エヌノフェテ" ネアス
かけたのう ああ) ソカラ あねは どくたみで" なはし

(53)
ナンダ" キャ (C センフリ) センフリダ" ガー (A ミヤケニ
なんた, た, け センブリ) せんブリ い 工産に

ナ一) ミヤケニ ニケア アツヨ - アエ ツケテ" ハ - コ -
ナメ) 土産に 苦い やつよう あれ つけて はあ こう

マワス ワゲタ一。

回す わけだめ。

A カナラツ (C ウンタ) イサ エサ クレバナー ミヤケ マ
必ず (そうた) 家に 来るとなあ 土産 ま

ワステ。

回すといって。

B テ タエスタタ エマダハ ヴユーダバタテ ホラ タエスタ カネ
もれで 大した 今なら 自由だけれど ほら 大した 金か

カガタタタバ。

かかるたのだよ、

C カガタ ウン。

かかるた うく、

A ウン ダエエツ ハー ユワキサン / メンコタハ ハー ナント
うん 第一 はあ 岩木山の お面 なら はあ どうしても

カタタナ。ミヤケニ ツケテ。

だなあ。土産に つけて。

B ナントカタ ツクアタ。

どうれでも つくのだ。

C メンコド センフリタバ ナントカタ オゴスト。

お面と せんぶりなら どうしても あこじと。

B テ スエガ ホラ フトキリ (ヒ 笑) (笑) .

もれで 西瓜 ほら 一切れ。

A ソエテ コンタ ホロ - コンタ ミンナ モドテマレバ ツ
それで こんと ほら こんと みんな 戻ってしまうヒ

(54)

キノス コンタ アンゴワガレタテ ホレ ミンナ コンタ マタ
次の日 こんど 解散・宴会だといひて ほれ みんな こんど また

ツキノス アヅバテ ソラ ノミクエステナー (B ウン C
次の日 集まつて そら 飲み食いしてなあ うん

ウンタ) ウン。
そうだ) うん。

C マジ ニキヤガタ一。
ます いきやかで あつた。

B エッテモ エガネフテモナ一 (A ウン C ウン A ミンナ) ウン
行つても 行かなくとも なあ うん みんな うん

スタハ ンデ アリ アタリ ソエゴソ ハー ナンデアタネ ウー
だから あり あたり それこそ はあ なんで あつたよ うん

ビンボモ! ヨク テアキガテ タウッテ (C 笑) マタ
食乞者 (は) よく 大儀がつて 田 (た) 売つて じまた

ツ アッテタテバ。ナンモ ヤエヌス ホラ。 (A ャット エ
という者 (か) あ、たとえことだよ。 なんにも やれまいし ほら。 ジット

グテ ヘレバ ャット ヤルアタモ!) ャット ャルタベア。エ
行くと 言うと やつと やるのたるもの やつと やるのたとう。

(55)
がネ フトモ スタ ハタ一 ^{×××} ハネバ マエベ一 ホラ一 ウー
行かない 人も たゞから はいうない ためたう ほら うん

ナン ^{××} ナンサテモヨー。ウー ゾンブ テアキガチタ モンタ一
なんにぞもよう。 うん すいぶん 大儀がついた もんだあ

ウン。
うん。

注記

- (1) 古山尊翁は別次「ママカゲ」とも言う。198月1日12部落12岩木山へ集団登拝して、卒後無事と墨作を祈願する行事。
- (2) 「エマ サベタ」とは、この説が始まる前に該者Bが2日前(9月3日(日)=198月1日)に岩木山へマツク12バスで最近流行の觀光旅行ふうに参詣してきた(頂上登拝しない)が、取り立ててまことにことはなかつて旨話し合っていたことをさす。
- (3) あとの「バタラバタラ」の「バ〔ba〕」の〔B〕の言いかけ。
- (4) 「ビツツド」は擬態語であり、「びつしきヒ」に当るだろう。標準語訳は意訳した。
- (5) 「ビツツドダ(ト,オ)モッタ」
- (6) 「(古山尊翁に対する熱の入れ方か)サカツテ」
- (7) 開き取り不可能。
- (8) 岩木山頂の奥宮に祭つてある御神体「八大金剛童子」をさす。「八ツ」は頭文字の「八」。
- (9) 「~ネ(ニ)カテ」は後に多汗身の説法を伴うが、或いは不利な悪い事態の内容がくる。語源不明。
- (10) 「落位する」の意で使う。別に「ゲテ」は「下等」の漢字訳もある。
- (11) 「サネヤ」は〔sanaja〕-〔sanea〕-〔sane〕。「ヤ」は開音助詞。
- (12) 「グ」は無意味の発音。
- (13) このあたりに、「兄上で坂離をとるのだ」の意の内容を有感している。
- (14) 地名、青森市大字「合子沢」。当地では昔から「ゴサ」といふ。42鏡地から約又km東方にゐる。
- (15) 「サイキサイキ」は唱えごとの最初の文句である。次に金文を揚げ
る「祭儀祭儀 同行病儀 古山に初用饗 金剛堂 一一石井洋 南
無帰命頂礼」
- (16) 「オラホー(の村)ダバ」
- (17) 地名、青森市大字「八ツ宿」。当地では昔から「ヤジャグ」と呼ぶ。
当地のすぐ北を流れている川(荒川)を隔てた所にある。約200m北側。
- (18) 「水のない石の川原」

- (19) 収録場「桜雨歌」のすぐ下が喜川のカラメで、ハッ紋部族の人々はここで太鼓を叩いたりなどしんじい意である。
- (20) 行人すつの組んで近郷各村の神社を回ってみ学りすること。有職して「ムラメア」といふが、これは「村参り」か。
- (21) 「スレア アレ」とはお山参詣用服装の「白装束」のこと。
- (22) 豊北地方特有の指小辞「コ」である。
- (23) 「スレア ヤヅ」はすべふとの「ハヅマギ」をさす。「匂い錦巻き」。
- (24) 「洗濯しみきれいな衣装」から一般的に「衣装」のこと。
- (25) 「ミンナ(つ家庭)ガラ」
- (26) 指示代名詞の「あれ」だが、この場合「アエステ」は「集めて」。
- (27) 一般的使い方ではなれば、「あんまりにかゝつ意で使っている。
- (28) このあとに「ねぎやぬでびくくりしたもつぶ」といふ内容がくる。
- (29) 「トスナ」のこと。
- (30) 「としな『御縄、としなわ』で村のお宮に奉納する『しめなわ』のこと。」(鳴海助一「津軽のこころ」)
- (31) 読法不明。「序の口」か。
- (32) 割き取る不可能。
- (33) 「よ；やくの思ひで」の意であり、「ハヅメネ エゲバーへ」へある。
- (34) 「センタ」は無用の発音。あるいは前に「アゲ」と書いかげがあるため、「アゲエニタ(赤いよ；な)」と言ひたか、なつか、ここでつい出てしまったのがも知れない。
- (35) 「コ」は指小辞の接尾語。
- (36) 今あと「と言、たらんが。」といふ内容が有職。
- (37) 「コ」は指小辞の接尾語。
- (38) 「オラホヅ」の「ヅ」が無声化となり、たり。
- (39) 「オヤジマギタテ」以下、文脈は前略がある後解である。内容は「親戚Aが村固りに生じてゐる」と、親戚Bの家族が隣に隣くとBの子らは自分たちの立てる所で生じてゐる。また、子らの親B達も何村の親戚Aがやつて来たと子らに知りせりする。一方また、村固りのやつて

来た A は親戚 B の子うかこの辺に私を待ちこがれて来ていないだろう
かと思って、もし、いふとすぐは、と B の子に錢をくれて行くのだ。」

- (40) 「 よけいな 」
- (41) あとの「オミヤ アレバへ」の「アレ」の言いかけ。
- (42) 「 賽錢をよく 」が普通の表現だが、時には「投げるようにしてよく」
ため「投げる」と言うことがある。その言いかけである。
- (43) 「 ケル 」は「くれてやる」
- (44) 「 経済負担がたいへんだつん 」といふ意で使っている。
- (45) 加山孝輔の帰途の踊りの様子そのものを言い、また、歌の文句にも
そのことばを取り入れている。
- (46) 標準語では「ずうりと」に当るよ；ぶか、「いっぽいだが数を數え
られるよ；うに整然とある様」を言う。
- (47) 菓子の一つ。
- (48) 無意味の発音。
- (49) 漢字は「梯子」だが、青森駅構内の跨線橋の階段のこと。
- (50) 「 青森市の町中を 」
- (51) 売き取る不可能。
- (52)(53) 共に漢草で当時の貴重な家庭薬品（漢方茶）である。 (52) は「と
くだみ」のことで毒消し用に、(53) は「せんぶり」のことで腹薬用。
- (54) 「 アンゴウガレ 」は「網子別 渔期が終ること。方言 別れの会合、
送別の宴」（日本国語大辞典 小学館）
- (55) 「 スタ ハター 」は「スタハデー」の不完全な言い方であり、また
「ハネバ」の言ひかけにもなって混乱した発音。

8. ボサマ

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	猿方 トミ	女	大正2年生れ
D	佐々木隆次	男	昭和10年生れ

- A ムガスナー ボ⁽¹⁾サマヅ モノ アッテー (B ウン) ヨグ ボ⁽²⁾
 昔なあ ほさまでい 者(や) あって (うん) よく (ま)
 サマ キル キル スタ モンダエナー。
 きよ(ゆ)来 来 しス もんぢよなあ。
- B ホンダエナー ウー ワラス オボタリ ステ アノ ツエゴト⁽³⁾
 もうだよなあ うん 幼児(ち) みぶつたり して あの 枝を
 コー モッテナー ウー。ムスメアンタ フト マナグ⁽⁴⁾ メアネ
 こう 持ってなあ うん。娘(むすめ) ひと 人(ひと) 目(め) 見え
 ネア。タンケ⁽⁵⁾ キマテンダエナー。 (ABC 笑) ヨグ マ
 ない。ぬいがい 決まりでるんだよなあ。
- アーステ アヘテー フグロ アノー フロスキサ⁽⁶⁾ オンブロ
 あ ああして 歩いて 簾(のれん) あのう 風景(ふうけい) 大風景
 スギサナー (A ウン =モツ) ニモツコ ソッテ ウン。
 敷(ひらみ) うん 荷物(に) 荷物(に) 背負(せふ) うん。
- A ウン マナグ メアネドコデノー アッパネ コンドア ツエ モ
 うん 団(だん) 見えないのでウニ 妻(めぐみ) 今度(こんど) 枝(枝)持

タヘテー (B ウン) ウー アッパネー。コンドア スタンダ
なせて (うん) うん 妻に。今度 そのようだ
アッパバ サキタデアテ ズブンデ ハー ソノ トーリ アハ
妻を 先立てて 自分で はあ その ソノリ 歩い
アテ。
て。

B アヘテナー。
歩いてなみ。

C ナンダガ ツヅエノ ボーダツガサテー。

なんか 筒井の ほうんとか いって。

B ウーン ウ ツヅエノ ボーダ。アーア アッテ アッタウー。
うーん いん 筒井の ほうんか。あああ い う うん。

(A ツヅエテ ヘッテ エタタエナー) ⁽⁹⁾ アエタキャ タンケ
筒井と 言って いえよなあ) あれは かなり

トスイ ⁽¹¹⁾ ナッテナー。

年に なつてなみ。

C ステ アッパド フタリ ソロッテ キテヨア (B ウー ソロ
そして 妻と 二人 握って 来てよ) ⁽¹²⁾ いん 握

テナー) アッパバ スカタリ プタエタリ ステー。
つてなあ) 妻を 比ひれり 口ひれり して。

B ウン オエサ ダ ツギ ⁽¹³⁾ ア / ア / フト トマッテヨー
うん 疋家に だ 時 ⁽¹⁴⁾ あつ 人 握つてよ)

A C ウーン) アッパバ ツエテ フタエタアツ ⁽¹⁵⁾ ワ オベテアツ。
うーん) 妻を 枝で 口ひれり ⁽¹⁶⁾ 吾(は) 審えてるやだ。

(A 笑) プタエタアツナー。 (A パー) エンツ コフ
ぶ、口ひれりやだなあ。 みよ き 地張り

テ ホラ - ウン。
で ほんめ うん。

C ⁽⁶⁾ ウダネ ワンツカ エグナグ エケバ アハハ プタカダ。 (笑)
歌に わずか 良くなく いくと 妻を 叩いた。

A アー アー トマレバ ロー コンダ ロー ボサマ トマタハ ^ンテ
あみあみ 油まると ほうあ 今度 ほむけ ほさきゆう 油まるつて
アー コンニヤ ウダ ⁽⁷⁾ キグネ エグベスッテ (B ウンウン
あみ 今夜 歌(モ) 聞きに 行こうと うんうん
) ウン コンダ ミンナ アヅバッタンタエ ステノー。
うん 今度 みんな 集まつねようであつりしてつ。

B ヨグ キタ モンダシヤナー。アーユ ボサマ エマ ハー ナグ
よく 来る もんじょ なあ。ああい (ほさり) 今 はみ なく
ナッテ マッタエ ホロー。
なって しまつねよ ほうあ。

A エマダバ ボサマヅ モノ ^{メツタ} エヤ メツタネモナモ コナ
今なら ほさまとい 者 (モ) ハヤ めつたれにぬ何も 来な
ア ナッタオナー。
く なつたオナ。

B ゼンビ。コ ⁽⁸⁾ コブホ - ダシヤー エマノ ボサマダバヨー。
全然。コブホ - ダシヤー 今ノ ほさまならよ。

A ウー ナダ。マナダ ムガスダバ ロー ヨゴウツ = マナダ ヘ
うん もん。モモ 香 なう ほらあ 横肉に また 寿
⁽²¹⁾ ンノヅ - ヴー ヴー。
え ャン ン。

B ウソノ ヘンノ ウカラネンダバタテ ウン オエノ コノ ハ
モモの 事 元々 わからぬんだけれど うん 捜家の ン。

ハオヤント (A ウン オヤ) ホンケサ ヨグ トマル - ナ
母親達 (母) うん よのとおやく 家に よく 泊まる 行
ンニヅ トマタテナ -。

B 泊まるといつてたわ。

A オラ サット オベデラバタテヨ。

俺 (母) うらと 覚えていろりれどよ。

B トンカブ ショーヴギダ"ンダツキ。 (A ウン) ショーヴギデ
とにかく 正直 なんぞヒ川話をよね。 (うん) 正直で
ショーヴギデ (C ウン) ウン。
正直で (うん) うん。

注記

- (1) 漢字は「坊様」と書き、「ボサマ」と発音する。玄に盲目の男の人で、妻に引かれて三味線を弾き門掛けして歩いた人をいう。妻が歌を歌つた。また、場所によつては、鍼・按摩をした盲人や早口などば掛筵等娯楽を与えてくれた人もいゝだ。特に津軽の農村地帯がその本場であつた。
- (2) 「いろ」が「ある」に統一されてしまふことがある。この場合、玄語のボサマといふ過去の人の名前を遺物のように把握して「アル」を用いた。
- (3) 「ゴト」は名詞、代名詞に付いて目的格を強める働きをする。本来は「事」であろう。歌は仮りに「を」を当てておく。
- (4) 「筒方言」の音化。
- (5) 漢字は「大概」。
- (6) 「／-」は[ne:]と[ne]に之る。
- (7) 地名、青森市大字「筒井」。牧銀地の牛館から約5km東地方。現在は青森市中心部から赤道みが連続して昔の農家の面影は失せぬ。
- (8) 「坊様」の「坊」をとつて「ボー」といつたうだろ。注記(1)参照。
- (9) 「アッテアッタ」は過去完了に相当する表現であり、標準語の單純な完了ないしは過去を表わすものとは異なる。(此島正年著「青森県の方言」)
- (10) 「エダッタ」は「エデアッタ」の約言である。注記(9)参照。
- (11) [ni] の [n] の脱落。
- (12) 「叩く」は「フタグ」「フタグ」「ブタグ」または「フタラグ」「フタラグ」「ブタラグ」といろいろの言い方があるが、「フ」は「フ」よりも、「ブ」は「フ」よりも強意であるといふ關係にある。
- (13) 無意味の発音。
- (14)(15) 「アヅ」は「ヤヅ(jadzū)(奴)」の脱落。(14)共に強い断定を示す表現に転用されている。正確れ表すなら「叩いた^{アヅ}」といふことを吾覚えている^{アヅ}」
- (16) 文脈が乱れている。「ウダネ」の「ネ」は文脈上、不要の表現。あ

- るには「ネ」を生かすとするならばその後を「エグネ ドコ アレバ
(良くないところがあれば)」と直さなければいけない。
- (17) 当地では連体形に「へに行く」が付く。
- (18) ここ数年来、全国的に有名になつた青森県東津軽郡平内町出身の青
島の津賀三味線弾き、高橋竹山氏を想定して國宝級だといつてゐる。
- (19) 「昔の話をするなう」の意。
- (20) 地名、青森市大字「横内」。収録地から東方約3km。
- (21) 「尊え助」とかの名で明治期のボサマの一人。
- (22) このあたり、文脈が少し乱れている。「コノ」は不要の發音。「俺
家の母親達は尊えが本家によく泊、たと言つていん」という内容。
- (23) ごく普通の便り肯定の表現。話者Bより年長者のAは話題(2)の内容
を知つていれつである。
- (24) 当地では本来「ヅ(dzū)」(へという)が無声化したものである。

9. 青森空襲

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	榎方 トミ	女	大正2年生れ

A アノ クーシュートーヴアバ ⁽¹⁾⁽²⁾ (B ウン) ホントネ オコナフ
 あの 空襲 当時ならば (うん) ほんとうに あっがなく
 テ オコナフテナー。 (B ウン) ウーン ナンガ ビニシュ
 て あっがなくてなあ。 (うん) ラーん 何か B エフ (か)
 ーク ⁽³⁾ トナー グングダゲー ⁽⁴⁾ ⁽⁵⁾ トンデ キテ スルマネ スコド
 いやもう ぐんぐん者がる程 飛んで 来て 盆間に 仕事 ⁽⁶⁾
 ステレバナッ (B ウン) ⁽⁶⁾ アメリカノ スコキ キタ キタテ
 しているとなあ (うん) アメリカの 飛行機 ⁽⁷⁾ 来て 来て
 ヤ ナンモカモ オコナガテ ヘゲサ ハテ カグレダリ ステ
 やみ どじにもじゆも あっかながて 堀に はいり 隠れたり して
 ョ (B ウーウー) ウー。
 よ (うんうん) うん。
 C ンダ オラキヤ アノ一 ラー タノクサ ⁽⁷⁾ トテ (B ウン)
 もうだ 施は あのう あらあ 田の草 ⁽⁸⁾ 取て (うん)
 ステ エレバヨ (A ウン) コンダ ヘコキ キタゼアテ ヘ
 んして いふと よ (うん) 今度 飛行機 ⁽⁷⁾ 来たんだと 言

レバ アノ一 タノクサ ト ツギ ステ ラ ノー キー コー
うと あう 田の草(も) 取る 時 もして あらあ う 木(も) こう
ヤナギ マフッテ (A B ウー) ホレサ コンダ クサ コ
柳(も) めくして (ん) もれに 今度 草(も) こ
一 カブヘテ (B ウン) ソステ ヘナガサ ショッテア ソス
う 被せて (ん) もして 背中に 背負って もし
テ ホラ アダマサ ツット カブテテ タノクサ カマス ワケ
て ほら 頭に ずっと 被っていて 田の草(も) 握り固め わけ
ヨ。 (A ウーン) アオエハ ンデ メネアハ ンデ (A ウウ
ム。 ウーン) 青いって 見えないって (ん)
ーン) ウー。 ソステ コンド エサ ワラハンド ノゴステ オ
ーん) ん。 もして 今度 家に 子ども達(わ) 残して 置
グトゴテア コレア ヘコキ キタアゼアテ ヘレバ ホレ カブナ
くので ニクヤ 飛行機(も) 来えうしいと 言うと もれも 被りな
ガラ (A ウン。 B ウンウン) エサ ハケテ エグ ワケ
がら (ん。 んん) 家に 走って 行く わけ
セアナ。 マーンツ オコネア メネ アタ モンダ ウン。
よな。 もす わかないと 目に あくま もんだ ん。
A オラダバ ハー ヘゲ アレバ ハー (C 笑) ヘゲサ ハッ
俺(わ) はあ 堀(ほ) あるヒ はあ 堀(ほ) 入
テ マルアダエ。 (B ウンウン) ウン ヘバ ハー メネ メ
え しまうりだよ。 (ん) ん) うるさ はあ xx xx 思
ネベツ ワゲデヨー イー。
えないだろい わけで も もも。
C ウー ナンダッテ (A ヘゲサ カグエデ) オラエサ ワラハ
うん なんといへしも 堀(ほ) に 隠れて 俺家に 子ども

ンド ノゴステ オグモンダドゴテ。 ホラ エサノ一 ウーン。
達(たつ) 残して 置くもんだから、 ほん 家に い いへ。

A エカタハキレバハオドヘバハアキタ
事(こと)はあ来るとはあ音(おと)するとはあああ来る
キタキタアテハ(βウン)キカゲデモドゴデモ
来た来(き)あといてはあ(いん)木(木)陰(かげ)で(れど)こで(る)
ハカゲエデマルヤツ(βウン)ウン。ナンボカグ
はあ隠(かが)れてしま(うん)。いん。いくら隠(かが)
エダタテナンモカモドースモナシネヤダバタテ(βcウ
れんといつもどうもこうもどうしゃうかならないんだから(いん)
ン)ウン。ソエカラコンドアレアナシダガクーシューノ
ん。それから今度あれ何か空襲(くうしゅう)の
バケアレスヅカツノニシユースヅ(βニンジエスヅニツ
晩(ばん)あれ(はい)七月(よなつ)ナタヒ(日)日
ノウンバンダオナウンソダ(βスヅニツダナ)。コンダコ
のうん晩(ばん)だめな(いん)う(いん)スヅニツダナ。⁽⁹⁾二日(ふたひ)だな。今度今
ンニヤアノクーシュクルゼーテ(βウン)ウミ
夜(よる)あり空襲(くうしゅう)来る(いり)いんみ
ンナホラアノ一ナシダウエノホガラヨオグミノホー
んはほんねうなんなん上の方(かた)かん上(うわ)の方
ガラミンナツーツクルドゴデヨ(βウン)ウエエ
かんみんな遙(とほり)来る(いり)いん; いん
ツダラエツノバケワルグヘバクルハシテミンナ
ツだらいつの晩(ばん)思(おも)うほと来る(いり)みんな
キツケローテ(βウン)ウンコンダアノバケ
気(き)つけろといつて、いんいん今度あれの空(くう)

オロー ハー エノ フト ンド ミンナ コンニヤ クーシュ
ほゞめ ねみ 家の 人達(お) メーナ ハ夜 空襲(か)
クルゼアテ ウ。マ- クーシュッテ クーシュッテ ⁽¹⁰⁾ ヘ ドッ
来るうしのひ ん。まみ 空襲(か) て 空襲(か) て ふん ど;
タ モンダエヅヘノテ ウン ヘナガラ コンダ ミス クテ バ
した もりなつだい なんて ん 言いなが; 今度 飯(め) 貪(む)て 晚
ケ ミス クテガラヨー (*B* ウン) ワンツカ タッタケヨ
飯(め) 食(め)て から よ; (*うん*) わずか なんら よ
~ (*B* ウン) コンダ オド ステナ (*B* ウン) ウン
うん 今度 音(か) してな (*うん*) ジン ジン
ゴンゴ ゴンゴテヤ クルノ コネノテヨ。 (*B* ウン) ヤー⁽¹¹⁾
こうじ; ジンジヒヨ 来るウ 来ないウ。 やあ
コンダ エヅバン サギネ コブノ ツヅミノ ホサ (*B* ウン
今度 一 箭 先ハ ニコリ 堤 の 方に (*うん*)
ウン ミョーケンノ ホサ オヅダジヤ。 (*B* ウン) オラ
うん 好 見の 方に 落ちたよ。 (*うん*) ジル 施
マシダヨー チョ ンド ツバネ メテ (*B* ウン) アコ ツ
チタヒ; チヨヒド わば近くに 見え (うん) あき; 吊
リバスサ オヅダガドモテヨ (*B* ウン) ステ エダヤダエナ
リ橋(は) 落ちたかと思ひよ (*うん*) われ ひそかによ;
(*C* ウン) ウン。 ステ アドカラ キタキヤ ホロ 夕
うん ジン, われ わとか; 肩(かた) いた; ほら
タキジャサ オヅダザエロ- (*B C* ウン) ウン。 コンダ
泣 泣に 落ちたとい; われ ジン ジン ジン。 今度
ソエガラ ハー ニツド ハー エヤ クルノ コネノテ エゲ
たれか; はあ ひ; しつ; はあ ハヤ 来る, 来ない; 行く

バ クル (B ウン) ソゴサ エゲバ フル ステ (B ウ
と 来る いし もに 行くと 来る して (う

ンウンウン) ウー。
んうんうん) いし。

(17)
ホタ。オラキヤ ボーグーゴー コヘデ ユンダ アノ ボーグー^もだ。俺は 防空壕(も)こしらえて 今度 わの 防空

ポーサ フラハンドバ ヘデセア (B ウン) ソステ コンド
壕(も)に 子ども達を 連れてよ (いし) いれで 今度

ナゲバ キケルテナー (A ウンダ) ナゲバ ヘコキ トン
泣くと 聞こえるといでがち (いだ) 泣くと 飛行機 飛ん

デル ヤツサ キケルハンド フラハンド ナガヘレバ マネッテ
でいる 奴に 聞こえかす 子ども達(も)泣かせると だめだといで

ボーグーゴサ オエデ モノ カゲテア ソステ ホラ コンド
防空壕(も)置いて 物(もの)掛けて いしで ねう 今度

アノー タタ コノ キモノデアキヤ マネハンドテ コンダ ワ
あひう ぬた ンツ 着物(きもの)では だめだかすといで 今度 も

アノー フトン トネ コンド キタ ワゲセア。 (B ウン)
あひう 布団 取りて 今度 来た やりま。 (いし)

スト モドタラ ストメテ アッテ。 (B ウーワンウン) ス
元 ほの 部(ぶ) いって あて。 (いへいへい)

(18)
トメガ ホラ。ソステ フトン トネ キタ ツギ ナンモ オヅ
部(ぶ) ほう。 いして 布団(ふとん)を 取りて 来た 時 何の 薙(なつ)

テ ネヤダバテア フトン モッテ キテ テハル キナタキヤ
て いたいんだ"わね" 布団(ふとん)を持って 来て ある 気になつ;

ウンダ ハー コノ マツサ (B ウン) オヅダアヅ。アノ
今度 ほお ンツ 町(まち)に (いし) 薙(なつ)さん。 あつ

エマノ ショーエダソ。 (A B ウン) ドーン ドーント
今ノ 火薬 弹。 (ウン) ドーン ドーンと
⁽²²⁾ ヘレバ ンニヤ オヅダ ⁽²³⁾ コノ ハリ キモノノ ウラ ハリコテ
するつで いせ 薙さん ンヲ 钵 着物の 裏 钵にて
モ ミンナ メアルエニ アガルグ ナテ マルダエナー。 (A B
も みんな 見えるよしれ 明るく なって しまふよなあ。

ウン) ヤー ハノ フトン カブタ ママ ユノ ボーグーゴ
ンし やあ その 布団(毛) 被つた ナミ ンヲ 跳き壊
サ ハステ エガエネヤダシキ。 (B ウン) フトン ガッパド
へ 走って 行かれないだよ。 (ウン) 布団(毛) がっぽと
ストメノ ドゴテ カブテ コヤステ ホノ オヅラ ヤツ ビ
部の 所で 被って こいやつて その 薙ちら やつを見
ンデラツ モノヤ アノヘ キレーナデ エマサ ナレバヨ (A
てみるから ものよ あのへ きれいで 今に なるとよ
ハシナビド フトツダエナー) ナニ キレンダ カニ キレン
花火と 同じだよなあ 行く きれいだ おれおれきれ
ダテヤ (A B ウン) ウン オコネモ オコネ。(笑)
だっこで (ウン) うん あがないうち みがないう

A キレンダモ キレンダナ オコナブ キレンデヨ。 (B ウン)
きれいだも きれいだ ねかなく きれいでよ。 (ウン)
ウン。 オエアダキヤ ホロー コヅノ オニノ ボーグーゴワ
ンし。 倭家では ほうみ こっちの 倭家の 防壁 壁に
ハツテ エダバタテヨ (B ウン) テヨンド ハー ホンゴエ
入って いえけれども (ウン) ちよど けあ 細趙
ノ ホーガラ コッケヤ コー オヅテ オエノ エサ コー チヨンド
の 方から こっちへ こう 落ちて 倭の 家に こう ちょうビ

オツルエネ オナルアエナ。 (B ウン) ハエテ コンドア
落ちるがんばるがんばるがんばるがんばる。

(26) クメダノ ホーフー・ゴウ (B ウン) ハロー ネケザヤツ。
久米田の 跡 空 壊に ほんの ほんの 逃げんタヂ。

アーテ コンダ ミンナ ネケデ ワ コンダ ミンナネヨー
ああ いへ 今度 みんな 逃げて おの 今度 みんなへよ

ミンナ カダマテ ネケレバ (B ウン) カダマテ スンデ
「みんな 困るって 逃げれば」 ほん 困るって 死んで

マレバ (B ウン) アド テアッテ マラハシテ (B ウ
しまえは ほん あく 絶えて しまえか; う)

ン。 (C 笑) ウー ミンナ ホレ一 ツラバッテ ソエゴン
ん。 ほん みんな あれ 散るって ソホニギ

ツラバッテ ネケロット (B ウン) アンマリ カダマナーッ
散るって 逃げろ」といって ほん 「あんまり 困るな」

テ (B ウン) ウン テ ワ コンダ サベタキヤ オエノ
といつて ほん ほん おの 今度 やべたら 僕家の

(27) ババヨ ダーエステ。 (28) スヌアダラ ミンナ スヌビステ (C 笑
婆 よ 「娘が死んだ。 死ぬのなら みんな 死のう」といって

) フトゲアリニ ミンナ スネバ エドナテ (B 笑) エヤ
「一 例 に みんな お姉と いひでばなが」といって 「いや

ソンデ ネア モンダテ リ ヘルアッガ ダエガ カレガ エサ
えじで ほん もんぞ」と おの 言うと 「誰か 彼か 家に

エギデ (B ウン) アド タデネバ マエネ モンダハシデ
もきて ほん あく おこなうと おめな もんだか;

(B ウン) スタハシデ ワ シャベルマツヨート。 (B
ほん えじでか; おの しゃべるのと」と。

ウン) オナコンドヅ モノヨ (c 笑) スメヤダラ エッシ
ン) 女達 といひ めつよ 「ゑぬのな」 一語
ヨニ ミンナ スネバ エーッテ。 (笑) ソステ コンダ ドロ
ニ やんな 死ねば 良心 (30) シレコ 今度 (31)
一キメア アエテ。
あ 腹 (32) 立てこ。

B オコネハシテ フトリコダバ ナンダオナー。ウー バラバラド
あつかないから 一人 たゞ なんじめなあ。 (33) ほん ほんばうと
ネゲタグ ネオナ。 (A ウーン) ミンナヤ フトノ アド カ
逃げなく なれまな。 (34) みへなす 人々 続 つ
ダテ アヘテ ウー。
ひて 歩いて いん。

C オエデモ スタンテ ダンモ エッショネ エネアンデヨー オエ
俺家でシ もうかう 龍也 一緒に ひないでよし 俺家
エマノ トッチャ カギノ キサ ノボテア (B ウン)
の 今ク 父さん (35) 椿の木に 登て (36) いん
オエノ オド モゴノ ヤナギサ ノボテア (A ウーン) ソ
俺家の 亭主 (37) 向ひの 那に 登て (38) いん
ステ オラタツコドモンド ホラ ボーグー ゴサ ハッテ (B
して 俺達 子ども達 (39) ほし 防空壕に入つて
ウン) テンデバラニ クラステ エデタ モンダ。 ソノ バ
ン) てんではらばるに 蓦らして ハル もんだ。 もの 晚
ゲ。 (B ウン) ウン。 ミンナ スンデ マレバ ソエゴツ コ
。 (39) いん いん。 「みんな 死んで しまひと それこそ 困
マッテ マルテ (B ウン) ダエガ カエガ ノジネバ マエ
って しないで (39) いん 「言葉が 彼が 入らないと だめ

ネテ ホラ。

な^レといひて ほ^レ。

A ンダベア、(B ウンダエナ。 C ウン) フモ ソノ ホロ一
えだる⁽³³⁾、(もだよな。 うん) そも ソウ ほじみ

デ⁽³³⁾ デン ヤッタバテヨー (B ウン) ウン ナンモカモ
手^{**} やつんけれど よう (うん) うん どうもこころ

キメア^{***} アド キメア ヤエダリ ウダテフタエナー (B ウン
あと 腹^内 立てたり ひとかのひよなあ (うん

) ウン。
うん。

C ナー ホントネ アノ バケタラ (A ウン) マツ ヤゲテ
なあ ほんとね あの 晩な; (うん) マツ 焼けて
マテ ツキノ ヘ コンダ トンダガタキヤ ミンナ マツ ヤゲ
しきて 次^ク 日 今度 ビ^ト かいつと みんな マツ 焼け

デ マテー マツテ ミンナ スンデタテ コンダ ウー (A
で しきて 行^くで みんな 張んでいた^{いて} 今度 うん

ウーン) ソカエ ステ ナス ヘトンド コツア エテ ミン
ーん) 鮎^{アマ} して なす 人達^{ヒト} こっちへ 行^くで 見

デモ コヅデモ アエダテー。

エル こっちでル あめだと言^て。

B ミンナ オヤジ^{マギ} アルンダスナ一 (C ウーン) ウン。
みんな(お) 親類^{がい} あるのな^シしなあ ーん ーん。

C コンダ ヤゲネ ヘト^トド^シバヨー ミンナ コンド エサ ミン
ハ度 焼けない 人達^{ヒト}なすよ; みんな 今度 家^ハ みん

ナ モドテ キテア (B ウーン) ウン.
な 床^ベで 家^ハて みん。

A ミンナ ナー アノ バケー マヅガラヨー ネグテ クル フト
 みんな 在み あり 晩 町からよ； 逃げて 来る 人
 (B C ウン) ミン ⁽³⁷⁾ フトン カブタリ (B ウン) タン
 うん みんな 布団(ゆ) 被(お)る うん 丹
 ジェン カブタリ ステ (B ウン) エヤー ドンダカダモテ
 前(ま) 被(お)り して うん いやあ どうだかと思って
 アノ スエドー／＼ ハス／＼ アツツア エタキヤ (B ウン)
 あの ぐく 道の 橋の あちへ 行くうん うん
 クル／＼ コネノテ ミンナ モノ カブテ クレアダエナ。
 来るの 来な(ハ) ミンナ 物(もの) 被(お)て 来るのだよな。 (38)

B C ウン
 うん

C エゾオーツカエステ キテ コンダ アノ バケ ミンナ モド
 一 広 跡聞(アシテ) して 来て 今度 あり 晩 みんな 広
 タタオーナー (A ウーン) ウー コンド キネア コンダ
 つねにせつ なみ うーく うん 今度 来な(ハ) 今度
 アエダツテ ヘテ ソカエステ キテテ モドテッテ (B ウ
 めれだヒ 言って 跡聞(アシテ) して 来て(ハ) 広(ハ)行(ハ)
 ン) モドッタ バケ コンダ コ ナタダハテ ホラー (B
 うん 広(ハ) 晚 今度 こう な(ハ)るから ほら
 ウン) ウン。
 うん ウン。

B オエテ アノ ヴギ ベゴ タテテタ ヴギダエナー。 (C ウン
 俺家で あり 晩 牛(牛) 飼(アシテ)いん 晩 なん(ハ)なみ。 うん
) ベゴサ クルマ ツケテー (A ウーン) ウー アノ 口
 牛(牛) 車(キ) ツケ(アシテ) うーく うん あり あ

アーヴサマ シカエス ドア トネ エッタ ヴキセア (A
あ 爺様 跡聞する 道具を取つて 行つた 時 も
ウーン) チョンド マツサ レンラクセン。 (A ウーン) ツ
ラーン) ちようど 町へ 連続船。 (ラーン) タ
ンヅギ オーノマテ エッタキャ ホロー (C ウン) ソー
の時 大野まで 行つた ほうあ (ウン) ジン もう
キタダエナー。 (A ウン) アエテ ベコタ モンダドゴテ ヤ(笑) ドー
来たのによなあ。 (ラーン) 相手 牛な ものなので やあ どう
スツ ゴトモ ナンネゼ。 (E ウー) ベゴ コンタ ケアンドサ タ
するということも ならないという。 (ウン) 牛 こんび 街道に 立
テテ コンタ (笑) (C ソー ンダネナー。 A ウーン) ウー ソエ
てて こんび んー そうだぶなあ。 (ラーン) うん それ
デモ エッテ ホラ オワッテガラ ツケテ キタツバテヨー ウ
でも 行つて ほう 終つてから つけて 来たといけれどよ
ン ベゴ フパテ。 ウン。 アノ トンヅ ナンダエナー カンヅマ
人 牛(牛)引ひはて。 うん。 あの 当時 なんじよなあ 鎌治町
(41) ッド ダエグマツド ソエカラ テラマツ (A C ウン) /
ヒ 大エ町ヒ えねから 寺町 (ウン) の
フトンド コツツア キタングエナー。 (A ウーウーン。 C
人達(おとこ) ニチハ 来たんだよなあ。 (ウン) うん
ウン) ステ オエテ クチョー ステラドゴテ ロー フト
して 缶家で 区長(お) していつたで ほうあ 人(お)
ワゲテヨー (C ワゲテ ミンナ ナ トメテ) ウー ウン ト
分けでよ; (分けて みんな なみ 泊めて) うん うん 泊
メテナ一 オエサダキャ ブゲンモ ロッケンモ トマテ ホロー。
めでがあ 缶家には 五軒ル 六軒も 泊まつて ほらあ。

A ミンナ エッケンサ (B ウーン ウン) ア- ゴログニンバ
みんな 一 駆ハ ラ-ん ン あ 六人ばかり
ヅヅ オッキ ドゴ ジュ-ニンバ⁽⁴⁶⁾ ツヅデモナ (C トマタナ-
ズツ 大きい 行ハ ナ 人 ほんぐでもな (泊ハスナア)
ミンナ ドゴ/ エサモ ロ- ネケデ キタ フトンドダバ
みんな とこの 家ハル ほんハ逃げて 来ハ人 連ハる
タシケ^ハ ハ- エッ シュカンエ (C ホンダ" ウン) オエテ
たハがい はあ 一 過ハル (をいた ン) 置いて
タベナ。ミンナ ミス タエデ カヘデー。
いろうな。みんな 飯(モ) 炊ハて 食わせて。

B ホダツケナ- ウン。

えんた"といふこと"なあ ン。

A ウー ホントネ ドンダモ カンダモ ヤケダ アドサ エゲバ
えん ほんとうれ ビシハル ニシハル 燃ハム 跡ハへ 行くと
スンダ フトモ ナモ (B ウン) ソツコツネ ゴロゴロゴロ
死んだ 人も 行ハ (ン) そちこちれ じろごろごろ
テヨー ウン ヤヤ ミラエダ モンデ ネフタエナー。 (B ウ
ヒョウ ン やあやあ 見うれた もんで なかんよなあ。
ン) ウン。ソステ ネケデ フル ヴギデモヨー オナゴンドー
ン ン。そして 逃げて 来る 時ハリ ベ 女 連(モ)
ワラス オボテヨ (B ウン) ネケダ フトンド アンマリ ホ
幼児(モ) みぶってよ ン 逃げれ 人連(モ) あんまリ ほ
ロ- ヘデ ヘデ (B ウン) ヘナガ オボテダ ワラス ロ-
らめ せて せて (ン) 背 中(モ) みぶって ン 幼児(モ) ほ
ヘナガガラ オヅダ スラネデー ウー ネケデ キタ ロ-
背 中カ あ 産ちゃん(モ) しらないで ン 逃げて 来ハ ほ

ソスター ヘトモ フトンドモ (B ウン。C ンダナー ウン)
ソイイジ 人々 人達々 (ソウル ン ンダナリ ン)

ナンニンモ アッタゼア。(C ナー) ウン。マンダ ホロア ド
行人ル あつたとい。 (ソウル ン ンダナリ ン) また ほうあ ど

ントドントド (B ウン) クーシューホラー クルドゴテ
ソウル ン ンダナリ ン 空巣 (ソウル ン ンダナリ ン) ほうあ 来るのて

モエルドゴテ (B ウン) ソエゴン ワラスサ スヅガテレバ
燃えるのて (ソウル ン ンダナリ ン) ソルニキ 幼児に かまていろと

ヅブデモ (B ウンウン) マンダ ホロ エノヅ ナグスペ。ス
自分で (ソウル ン ンダナリ ン) また ほう 命 (セイ) なくするんぞ。

タハニデ ホロー スタ ゴド ナンモカモ ハー コドモモ ナ
タカラ ほうあ ソウル ニヒ ビシモニカ はあ 子どもカ 何

ンモ アッタ モンデ ネヤ ツブデ フトリデモハ (B ウン
ル あつん ソウル ネヤ 自分で 一人でカ (ソウル ン)

ネケルエネ (B ウン) ソユーホロー キモヅネ ナテ マ
逃げるよに (ソウル ン ンダナリ ン) ほうあ 気持に なって し

テ エル モンダビヨン (B ウン)。
エ いる もんぞろ (ソウル ン ンダナリ ン)。

C ナツ ホントニ ホントニ コンダ クエモノネ コマテ マテ。
なあ ほんとうに ほんとうに こんど 食の物に 囲って しまして。

(B ウンウン) オラタツンド アノー ナッパ ヘダリ ヨコ
ソウル ン ンダナリ 俺達 (ソウル ン ンダナリ ン) あのう 葵の葉 (ソウル ン ンダナリ ン) 入れぬ 違

(47) ミ (B ウン) ヘダリ タエゴンダバ オナスモ ダエゴンド
(セイ) 入れぬ 大根 (ソウル ン ンダナリ ン) な (ソウル ン ンダナリ ン) 同じもの 大根 と

(48) マタダバヨア (A アーパー ウーンダ) フト キテモ メグサ
立 (ソウル ン ンダナリ ン) ああああ ソウル 人 (ソウル ン ンダナリ ン) 来 (ソウル ン ンダナリ ン) 取 (ソウル ン ンダナリ ン)

グ ネア ンデタバタテ ナニハダノ ヨゴミタノテ アタ アヅ
レ ながれんけれども 葉の葉だの 違うと みんな やつ

(B ウン) ヘダヅ モノ一 マックロニ ナッテ マルドゴデ。
ン 入れねいじ もの 真っ黒に なって しまって。

アレ コンドア ミンヅ ダップド ヘテー オ ⁽³⁰⁾ ケアダケアニ
あれ こんど 水(ホ) たっぷりと 入れて 猫のようだ

ステ ニデ ク モンダ モナ ー。
して 煮て 食べ もんな もの なあ。

A スタテ クエモノ ^{ネア} _無 (C ウン) ホラ ナグ ナツタドゴ
だつて 食物 _無 (ン) ハシ 無く な、んで
テ。 (B ウン) テアゴナー (B. ウン C. ウン) ケンツテ
。 (ン) 大根ちみ (ン) (ン) 削って

コマヅ キジャ ンデヨー。 テアゴド コメド マンジエテ ミス =
細かく 刻んでよ。 大根と 米と 混せて 飯に

タエダリ (C ウン) アー ソステ ミンナ クタ モンダエ
炊へたり (ン) あみ もして みんな 食べる もんでも
ナ。 (B ウン) ウン。 サドデバ ナンモ ネア。 サドモ サガ
なあ。 (ン) ン。 砂糖といふと 何も 無い。 砂糖も 魚
ナモ ナンモ ネアアダエナー。
も 何も 無いんだよなあ。

注記

- (1) 第二次世界大戦で青森市がアメリカ軍飛行機約20機による空襲を受けたのは昭和20年7月28日夜である。一夜で市内90%は焦土と化した。収録地は南方へ約7kmの郊外にあるため被害は少なかつたが、焼け出された人々の宿泊、食糧等に尽力した。なま話者には二ヶ月間、横須賀市海兵團に勤務していた不在であることを付記する。
- (2) 「タバ〔dab〕」→〔dab〕、〔d〕の脱落。
- (3) アメリカ軍重爆撃飛行機。空の要塞といわれた。
- (4) 普通「タナー」である。
- (5) 「以前にも、偵察機など二、三機程度飛んで来ていつのに今度はグングンうなるようだ」と高音がする程多く」の意。「ダゲ(だけ)」は限定的副助詞であり、このよくな使ひ方が一般的か否かは今後考案を要す。
- (6) 「アメリカ」の「ア」にアクセントを置くのは当地では一般的でない。当地は「アーリカ」である。
- (7) 「稻の間に生える雑草」のこと。
- (8) 「搔き回して除草する」こと。
- (9) 実際には空襲の日は7月28日だ。注記(1)参照。
- (10) 当地特有の表現で、せせら笑う際に使う感動詞。
- (11) 注記(10)と同じ意だが、訳は「～なりたい」の中に含めた。
- (12) 地名、青森市「堤町」。収録地から直線距離で約8km北東方。
- (13) 地名、青森市郊外にある。収録地から直線距離で約3km北東方。当時は大量神社のみで人家はなかった。
- (14) 収録地のすぐ北側にかかる正在する水道管を吊り橋状にして通している橋。別に水道橋とも呼んでいる。
- (15) 「～ドモテ」は「トモテ」の約定。譯では必ずこのようにする。
- (16) 地名、青森市太字「瀧沢」。収録地から東北方へ直線距離で約12km離れた農村。字中心部から川ほば川距離。
- (17) 「木タ〔hoda〕」の〔d〕の無声化。
- (18) このあと文脈が整わない。「屋内から布団を持ち出して戸口の薪の所へ來たら焼夷弾が落ちた」のである。この収録地には弾は落ちなか

これが、あまりにも多數ある、その音と明らかに感情を感じていかぬのである。

- (19) 「コノ」は不要。あるいは強めのためには使つてかかるかもしれない。
- (20) 「マツ」は旧青森市。
- (21) 「ジ」はほとんどの場合に之ない。
- (22) 終止形は「ヘル(言葉)」であるが、実際は「者」であるたゞ「する」と訳す。
- (23) 文脈上「オヅテ」と言ふべきところである。
- (24) 地名、青森市大字「網越」。^{ほぞく} 収録地から西方約5km。
- (25) 「才工(庖翁)」、「工(翁)」は「翁」の誤り返しであるが、当地ではよくいう。また「才工」だけをも使う。
- (26) 障礙の名前。
- (27) 話者Aの妻。
- (28) 「ダーエステ」の「ステ」の扱い方はむずかしい。正確に訳すなら「誰がそんなことをする必要があるか」となろう。
- (29) この「ナ」は当地特有の表現。自己の意見を主張する際に用いる。
- (30) 「キメアヤブ」は「肝を焼く」が誤解。
- (31) 「エマノトッチャ」は「自分の長男」のこと。
- (32) 「テンデバラバニ」というのが普通の表現。
- (33) 手段、方法。
- (34) 「～なう」、「～をなす」の表現は話者Dの口ぐせ。この場合、前の「ソカエス」の意である。
- (35) 代名詞の「アエ(あれ)」は「収容できない」の意。
- (36) 収録地「牛館村の人はみんな」の意。
- (37) 「ミンナ」の「ナ」が間違取り不可能。
- (38) 「ドンダガダモテ」の「ダモテ」は「ドモテ」の誤記。^{沈記(5)參照。}
- (39) 「(青函)レンラクセン(加入の意味)」と補足。この話は7月28日のことかどうか不明。話者はこの頃子の川内横須賀市海兵町に勤務していた在である。多く、7月15日アメリカ軍艦載機(グラマン戦闘機)の青函連絡船を襲撃したのだろう。

- (40) 地名、青森市大字「大野」、収録地から北方約4km。当時、青森市
には13^{丁目}近接していな村である。
- (41)(42)(43) いずれも青森市中央部で互いに接してい町名。
- (44)(45) 「五世帯より六世帯以上」の意。
- (46) 収録地牛館の「罹災者を多く収容できる大きい家」の意。
- (47) 「ヨモギ」を一般に近郷近在で「ヨコミ」という。
- (48) 「景の葉」は「ナノハ、ナニハ、ナツバ」と揺々れてい。
- (50) 「おつゆ」か「お粥」か、いずれかを言及さとした。

II. 新潟県柏崎市大字折居字餅糧

収録・文字化担当者 剣持隼一郎

<A>

I

収録地点名 新潟県柏崎市大字折茂 宮崎 餅糰

II

収録地点の概観

1. 位置

越後の上越地方（頸城地方）と中越地方を隔てる米山の海岸段丘が海に没する「米山三里」の崎を西から越えて、中越地方に入り、左側が旧宿場町の柏崎市である。この柏崎市の旧市域に南から流入する鶴川（24Km）の上流に小さい鶴川盆地があり、これが旧鶴川村である。その東南の傾斜地に位する大字折茂の小字、餅糰が収録地である。

2. 交通

柏崎旧市域から鶴川に沿って、南方に上条地区野田地区を経、中越峰（海拔160m）を越えて鶴川盆地に面する、県道柏崎保倉高田線が交通の幹線である。この道は宮原から餅糰を経て、阿賀島から南の桜坂峰（417m）を越えて、中頸城郡吉川町の岩野に至り、更に東頸城郡大島村太平に至る。宮原と柏崎駅との間に越後交通の定期バスが13往復する。所要時間片道45分である。宮原から中頸城郡岩野まで一時定期バスが廻ることもあったとか、今は廃止された。岩野は柏崎市の経済圏に属している。然し各期は常に公共交通でない。

最近上記の柏崎保倉高田線は昇格して国道353号線となり、路線が一部変り、餅糰を経て柿庭まで開通した。将来柿庭から東頸城郡松代町・魚沼郡津南町等を経て猪鳥峠に面する計画などといふことである。

南方の黒姫山の地蔵峠（海拔約600m）を越えて刈羽郡高柳町に面する山道がある。若木馬も通り高柳町の石黒枕崎等の人々は周辺から鑿石（いはき）にてて柏崎市に面するバスかでさすがでは、この峠を越えて柏崎方面へ去るのであつて、鶴川地区に縁組みもあるとか、現在よこ（道）の交通は少ない。

以上は南北の交通路で、柏崎から西の方、頸城地方や東の方の中越地方の文化が強力に入ってきており、東の方からはさして強力ではなくても魚沼郡・東頸城郡の山地の文化が入ってきていたと思われる。

これに対して東西の主要道路もある。鶴川地区の北に接する野市地区から、西は小村峠（328m）を越えて中頸城郡柿崎町黒岩を経て米山の南をまわって柿崎に達し、東の方は野田川・鮎石地区と経て小千谷市に通ずる、県道小千谷柿崎線がある。郷土の歴史とこれらによればこの道は古来からの重要な主要道路で上越地方の文化の入って来るひとつの道であつた。鶴川地区からは市野新田を経て、小村峠の南を並んでいる桂枝峠（368m）を越えて、黒岩の手前で小千谷柿崎線に接続する市道がある。定期バスは走っていないため自動車の通行が可能であり中頸城との交流もあり、市野新田はことはじめ頸城色が強いと土地の人々は感じている。冬期は交通は絶する。

3. 地勢・気候

鶴川地区は標高600m～800mの山々に囲まれた山村である。海拔1500m位の山麓傾斜地に耕種集落がある。鶴川地区全体として耕地率は10.8%にすぎない。平地の少ない傾斜の耕地率はもっと低いであろう。

鶴川や吉野の観測によれば、昭和38年～41年の平均最高積雪は、216cm、根室開拓116日となっており、最高積雪は昭和38年の360cmとなっている。豪雪地である。

4. 行政区画

この地方は6～7世紀は米山沢地に新羅王丸山、高志深江間に屬したといわれる。702年には越後七国の中の三島郡（柿崎町・三島の駅）に属した。その頃先に述べた頸城地方から米山の南と小村峠や桂枝峠を越えて中越に通する道路が開けたといわれる。

平安時代927年に「鶴川庄」の名が不うわれ、海岸を通す米山峠の開拓は、鎌倉時代柿崎が沼津と荒達をはじめ五ヶ所と名えられていく。室町期に三島の郡は芦羽郡と改称されるかこの頃から鶴川地区以東へ上杉氏の支配と受けられる。

江戸時代のはじめ1616年鶴川地区は妙羽郡の山野に属し、左近藤蕃物頭忠成領となつて、(妙羽郡の大部は高田藩の沼井家治の領であつた。) 1619年高田藩松平忠昌領(一部妙羽郡椎居藩領)、16

ス 4 年 鶴岡、松平党領、1681～1711の頃は幕府領となつたが、
1711～1847年幕末まで150年間、率多・奥州向川藩、松平氏
領となり、1742年松平大久保に柏崎陣屋が立ち、その支配下にあ
る。

1868年(明治元年)柏崎陣屋が廢され、明治6年まで柏崎守護所が、
頃城。左志・刈羽・魚沼の五郡を管理したが、守護所の爲する折居村は刈
羽郡下にあつた。柏崎守護所は明治6年新潟守護所に統合された。

1876年(明治8年)刈羽郡折居村がてす、1901年折居村は女
谷村と合併して鶴川村となり、1956年また野田村と合併して里姫村
となり、1968年に柏崎市に合併した。

5. 戸数・人口・農業

大字折居は餅籠・梓庭・上向・北向・阿相島の五つの小字から成る。大
字の戸数をみると、明治34年の170余戸が昭和40年には116戸
に減少している。(65年間に68%にへつている。)餅籠は以前は40
戸あつたといふが過疎化進む、現在は30世帯137人である。

農業は主に稻作と水稲栽培が二本の柱である。一時盛んであった製糸
業は今は皆無となり、歴史の古い養蚕も現在では殆ど行なわれない。一
時高齢にもとめし老いたる者のが糸の制約の爲失職したといふ。

水田一ヘクタール平均所有7反、畠5畝、山林1.5垧にすぎず、窓細で生産性
は低い。春播農家は昭和33年44.7% 35年21.4%，40年8.2%
と激減している。鶴川地区の40年の統計によつて職業の構成をみた。
職種 勤労勤務 借労勤務 家稼 日雇人夫 自営農業
40 13.9 9.3 45.6 18.5 12.7

このように自営が非常によいが、その職種別は次の通りである。

酒造工	40人	峯鍋	11
食品加工	31	荷揚	11
土工	29	鋳造工	11
染色工	14	合計	561

自動車駕達 12

(昭和40年鶴川村統計)

70%以上が酒造工である。いわゆるサカヤモンである。この地方は江

戸時代から古都地帶であった。冬期11月から4月半旬まで富子は遠く関東、中京、大阪方面へ出稼ぎに行く。以前出稼ぎに行くことと「上州行き」、帰ることと「上州帰り」と言つたといふ。魚沼地方を通り、三国峠を越えて群馬・栃木方面へ行く人が多かつたことから起つて、そこが「上州」である。その多くが海造工としての仕事であつた。サカヤモシ（鰐屋森）はトウジ（杜氏）に率いられておかれたのである。

現在餅糰の30戸へ中又のアガ出稼ぎに出かけた。

III

収録した方言の特色

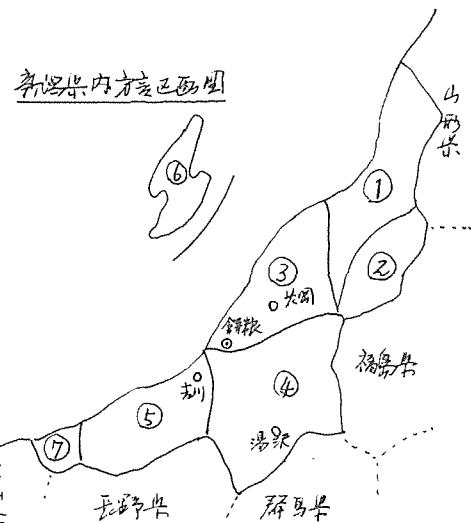
1. 方言区域上の位置

左の地図は加藤正信氏の「新潟県内方言区域圖」と簡略化したものである。収録地筋糰は③に属している。これは新潟三条長岡柏崎市と西・中・南の蒲原郡と古志・三島・妙羽の諸郡を含む、越後の中心地帯であり、加藤氏もこれを新潟華の代表的方言と考えて居られる。

加藤氏は①②は共に東北方言的要素一派地帶だが、文法面では①が關西的、②は關東・東北的だとされる。これと下越地方方言としよう。

③と④は音韻上は共通点が多いが、文法は③が關西的で、④は關東方言的であるとされる。③と中越北部方言、④と中越南部方言あるいは魚沼方言といふことにしよう。⑤は音韻文法の点で最も古、通俗の古い地域とされる、これを上越地方方言または頸城方言としよう。⑥は西部方言色、濃い佐渡方言、⑦は西頸城郡の方言で、春日地方で東西二大方言の接觸地帯であると言っている。

餅糰は上の③の中越北部方言地域の西南端にある。被服を賣うならば



(方言講座第二巻中の加藤正信氏の図による)

既に見て来た様な地域的位置からして、先制方言といふべき北地方言の偏するケイ侗方言、音韻方言的でなく、魚沼方言と多くの共通点を持つ、又の領城方言、鶴巣方言られる、要するに餅粋方言は中越方言の序で最も上越方言の影響を強く受けている方言といふことができるよう。

2. 餅粋方言との關係

「餅粋方言」を前述の④の魚沼方言、⑤の領城方言とし、それを作りか湯沢町方言、志川町方言となりあひ、また同一区域内から長岡市方言となりあひ、これらと餅粋方言との關係を説明しよう。地図の位置は先の地圖の上に示しておいた。志川町方言については昭和29年の私の調査結果、湯沢町方言については私の方言の内観、長岡方言については方言集や昭和26年麻氏の御調査等によることとする。

(1) 上越地方の志川町方言との關係

音韻の共通点

- /ヒ/を/シ/と發音することが多い。並し志川方言の方がより多い。
- i > e, hi > he, ri > re, ni > ne, ju > jo の前りや kwa, gwa 音の存在、これらが強調に立つことがある点など共通である。並し餅粋方言の方がより強い。

音韻の差異点

- いわゆる関合兩種の音が餅粋にはある。志川町では正斜は残っていらずか餅粋ほど多くなく、鶴城地方の西山道山に残る所もある。
- 志川町には [kam] (窓) [em] (部) 等の連母音があるか、餅粋ではこの外 [ko:] [jo:] とも言う。
- 志川方言では p > t の変化は少々ないが、餅粋方言では中越の影響でかなり多い。
- 餅粋には /fi/ (重り) があるが志川にはない。
- ラ行音が擦音化することは両方にあるが志川方言の方が多い。例えば、キンタッテ(切れ左て) ワスンタ(忘れた) <志川町>

文法の共通点

- 過去完了とも言われるタッタ、ダッタが両方にある。但し志川町では、「キータコトタッタ」(聞いとこりやもった) という言い方の方が多い。

い、餅粋ではタッタ・タッタの方が多い。

- 推量打消の助動詞マイはどちらも助詞の連用形に接続する。カイマ
イ(買ひまい)〈吉川〉 カエメー(買ひまい)〈餅粋〉
- 詩詞次用法には差はあるが、両方とも準体助詞「ガ・ガン」があり
これは北陸地方まで及んでいる。

支法の差異点

- 吉川町方言は促音便が多く、ウ音係は少ないが、餅粋はウ音便が少
かんであり、またカーテ(買つて)と言ふ方も少かれである。(西阿
城郡・長岡地方もカーテである。)
- サ行四段活用助詞のウ音便が吉川町にある。餅粋にはないが糸羽郡
刈羽村の老人のシヒバにはある。
- 吉川町には尊敬の助動詞ナサル・ナハル・ナルがある。餅粋でもナ
サルもやゝ使われるが、一般的なのはルル・ラル・シャルである。
- 推量の助動詞は吉川ではダロウを多く用い、ロウを用いることは少
ないが、餅粋は反対である。
- 吉川では目的格助詞にヲバを用いるが、餅粋ではヲを用い、又それを
省略することが多い。送接の助詞は吉川はデモ、餅粋はドモである。

(2)魚沼地方湯沢町方言との関係

音韻の共通点

〔O:〕〔ɔ:〕の別、〔E:〕〔KWA〕〔gwa〕〔Wɔ〕〔we〕〔wɛ〕の存在、〔I〕 カミイニ
と、促音化擦音化の多いこと、エグ(行く) ドキ(咚) 等の語彙の済音化
エとヨ、イとエ、ウ能音とオ能音の混濁などとの点において共通である。

音韻の差異点

- 湯沢町方言では擦音の促音化がある。サッピロー(三俵) オッズ(三升)
北魚沼郡ではセダク(洗濯)もきかれる。この現象は餅粋にも認め
られるが、湯沢ほど強くはない。
- 湯沢町方言ではヒをヘと訛ることのが老人のシヒバが多い。餅粋に
この傾向はあるが、それよりもヒはシに訛ることが多い。
- 餅粋方言では助詞ニとネと訛るが湯沢方言にはこれがない。
- 餅粋に多いダ行ヲ行音の混濁は湯沢方言にはない。

文法の共通点

- ・ノセル・ノシテなどの一段活用、シム(死ぬ)の二行活用、力行変格活用の候立形コエバの存在など共通である。
- ・尊敬の助動詞としてシャル系の語がさかんである。
- ・接続助詞としてスケー、ンガ、ドモがある。

文法の差異点

- ・湯沢町方言では動詞形容詞のウ音便は極めて稀であり、促音便がさかんであるか、餅粋方言ではウ音便がさかんで促音便は稀である。
- ・ア行立役活用の給止形は湯沢町方言では[waraw] (やう) [kaw] (賣う)であるが、餅粋では[warc:] [ko:]とも言う。
- ・之後文の已然形と同じ用法が餅粋方言にあるが、湯沢町方言はない。
- ・打消に湯沢はナイを用い、餅粋は四段にソ、他にナイを接続する。
- ・湯沢町方言でサ変動詞はサレル・シル・シレバと二段に活用するか、餅粋方言ではセーバが加わって三段に活用する。
- ・動詞命令形は湯沢町ではオキロ、シロであるが、餅粋方言ではオキレ、シレであってオキロ、シロは少ない。
- ・形容動詞の連体形は湯沢町方言ではシズカノなどであるが、餅粋ではシズカナなどである。
- ・湯沢町方言では尊敬の助動詞にレル、ラレルは多く、ナサルも多くシャル・ラ・シャル類が用いられる。餅粋方言ではレル・ラレルが普及して多く用いられる外、シャル・サッシャル、ナサルがそれより当位の高いものとして用いられるなど敬語の発達が目立つ。
- ・湯沢町方言の可能の言い方にはレル・ラレルをつけたり3言い方の外に ~イル・~エル、~イタ・~エタと言3言い方があるが、餅粋ではレル・ラレルの外に、カケル・カケレル(何れも書ける意)という言い方が多い。
- ・湯沢町方言には過去完了的を言い方にカイテアッタ(書いたことがあっただ)ヨンダアッタ(読んだことがあっただ)という言い方がある。これは魚沼郡の外三島郡、伊頃城郡の南郷にもある。餅粋方言では、ヨンダヌ、カイタツトと、コアテアッタ(倒ってあつた)の両形がある。

- ・湯沢町方言には推量の助動詞に、関東的ベーをほうか、鋸根方言ではロー〔ロウ〕をほう。
- ・湯沢方言で推量の打消へ助動詞マイは助詞の終止形（サ変は連用形カ変は未終形）に接続するか、鋸根方言では連用形に接続する。
- ・準体助詞は湯沢町方言ではガ(の)、ガタ(のタ)であるか、鋸根方言ではガン、ガンタ、アンタといふ。
- ・湯沢町方言には関接助詞ネーの未形と考えられるナイガ(の)が、鋸根ではノーカ(の)である。

(3) 中越北部方言長岡方言との關係 差異の共通点

- ・[O:] [ɔ:] [kwa] [gwa] の存在、[i] ガミイ、ju>jo の混同など。

差異の差異点

- ・鋸根方言及び刈羽郡にある土音は長岡方言にはない。
- ・鋸根方言は頸城方言の影響でヒカシに变化ニヒカ多いが、長岡方言ではわずかに後量に限られる。
- ・う行音の後齊化及び促音添加が長岡方言には多い。例 ホルナ(惚れるな) ミテラッル(見ていいられる) クッズ(呉れる) ヤスイ(安い) 鋸根にもこの傾向はあるものの、長岡ほど強くはなく、クッズという類はない。
- ・捲者の促音化も長岡方言の方がが多い。例 コッケー(こんな)
- ・ダ行者かう行者に就ることは長岡方言の文法の特色であり、母音間のみならず該語にもあらわれる。これは三島郡刈羽郡の中間地方まで広く行なわれ、鋸根方言にも影響とよえており、しばしばd>rの混同かさか此るけれども一部の語にかぎられる。

文法の共通点

- ・動詞・形容詞の活用の仕方、ウ音便の存在、助動詞ナイ、ンの接続の区別等共通の点が多い。身内の者のことを言うのにも敬語を使う。

文法の差異点

- ・長岡市では尊敬の助動詞ナカルが多用され連用形にナシタがあり、周辺ではレル、ラレルカラッル、ラッズと発音される。これに対する鋸根

- ではナサルはあまり用いられず、レル・ラレルが多用される。
- 長岡は城下町であるを始め、田土族のこじばが残っていると言われている。オミシャン(あみを)オクリヤエ(おきりや)オシ(しきさり)～ザア(～しきかれば)～マイカ(動植物現)などの表現があるといふ。錦糸にはこうしたことは見当らない。
 - 接続助詞について、錦糸には特殊なものがある。エニ・エネ(理由をあらわす)モンガ(理由をあらわす)ツガヤ(と、すると)接続をあらわす)トサイニワ(と、すると)接続をあらわす)等である。長岡方言にはモンガの変化を考えられるシガは存在するが他のものは見当らない。「けれども」に当たるドモは長岡では口モと発音される。

3. 语音上の特色

(1) モーラ表

'u	'o	'ɔ	'a	'ɛ	'e	('i)	ju	jo	ɔj	ja	je	wɔ	wə	wɛ	we
KU	KO	Kɔ	KA	KE	KE	KI	Kju	Kjo	Kɔj	Kja		Kwɔ	Kwə		Kwɛ
gu	gɔ	gɔ	ga	gɛ	gɛ	gi	gju	gjo	gɔj	gja		gwa	gwe		
su	sɔ	sɔ	sa	se	se	si	sju	sjo	sɔj	sja	sje				
zu	zɔ	zɔ	za	zɛ	zɛ	zi	zju	zjo	zɔj	zja					
	to	tɔ	ta	te	te										
cu	co	cɔ	ca			ci	cju	cjo	cɔj	cja	cje				
	do	dɔ	da	dɛ	de										
nu	nɔ	nɔ	na	nɛ	ne	ni	nju	njo	nɔj	nja					
fu						fi									
	ho	hɔ	ha	hɛ	he	hi	hju	hjo	hɔj	hja					
ɸu	pɔ	pɔ	pa	pɛ	pe	pi	pju	pjo	pɔj	pja					
bu	bɔ	bɔ	ba	bɛ	be	bi	bju	bjo	bɔj	bja					
mu	mɔ	mɔ	ma	mɛ	me	mi	mju	mjo	mɔj	mja					
ru	rɔ	rɔ	ra	rɛ	re	ri	rju	rjo	rɔj	rja	rje				
u	o	ɔ	a	ɛ	e	i									
N	Q														

(2) 音声的特徴

1. いわゆる開音の別がある。/o/ はほぼ基本母音の[O]に当たり、普通音の才段母音よりもかなり狭いようと思われる。開音の/O/は基本母音の[O]にあたるが普通音の才段母音に近いようと思われる。

例 e ^Q KO	(一個)	e ^Q KC:	(一向)
t ^O :dʒi	(冬至・社氏)	t ^O :dʒi	(当時)
d ^O :	(胸)	dɔ:	(堂)
s ^O :rjɔ:	(姫領)	sɔ:rɛ:	(葬礼)
bimboda	(魚子)	bɔ:	(擣)
ts ^O :ʃi	(調子)		

[O:] は次第に減少して行く傾向がある。

庖丁 hɔ:tʃɔ: > hɔ:tʃɔ > hɔ:tʃɔ:

帽子 bɔ:ʃi > bɔʃi > bɔ:ʃi

船頭 sendo > sen dɔ:

総理 sɔ:ri > sɔ:ri

印刷のことと [hankɔ:] と言っているのはこの音の誤濁が「版行」であることを示すものかもしれない。開音はオーバー表現とも。

2. /ai//ae/ が変化して [ɛ:] となっている。[əmɛ:] お前 [ere:] えらい。これらはオメー、エレーなどと表される。

3. 单音の[i] は普通音の強い影響を受けて音江外には存在しない。いちじもえいちじもすべてえいちじと発音される。その/e/は[i]と[e]の中間母音 [ɛ] に近いものであろうか。子音と合った場合には [i] と [e] の区別はあるが、時にはイカエに統合されることがある。特に助詞「に」は「ね」となり締め先人においてヒカヘと統合してヘラテ(年々)、ヘラク(聞く)、ヘラスミ(虚偽)などとなることがある。り段音の場合ではイカ[i]に近く発音されたり、[i][i]のせんく発音されたりする。

4. [g] は送續以外でも [g] であって [ŋ] は存在しない。

5. 老人に /fi/ 発音がある。フィシモケ(菓子) フィヤザケ(漬物) 等で [ɸi] であろうか。

6. /sjɛ/ は [sirassɛ:] シラッシャー(しゃさい)などにあらわれる。

7. [cjε] は暑いの変化 [accjε:] 等にあらわれる。[jε] の例) [hajε:] (早い)

8. [ca] はツアツア(次) アンツヤコト(あんなことの事後)、[co] はゴツツオ(御馳走)、ジッタク(十束)、[ct] はアッタツヤー(あつたとき) 等。

9. [wɔ] は威嚇詞 ウォーエ [wɔ:e]、食おう [kwawɔ:]、[we] は具合 [gwawε:] [we] は上 [juwe] 積み棧えたり [kwa:juwetari] 等にあらわれる。

10. [rje] は [harje:nε:] (強姦等) 等にあらわれる。

11. [Kwa] は [kwa] 着 [kwaseru] 食わせる、[gwa] は [gwa:gwatsum] 正月等にあらわれる。

以下唇声の変化について述べる。

12. 促音について

◦ 促音が該頃に立つことがある。ッジャー(それで) ッテ(それで)

◦ 行者が促音化することがある。エッテ(入れて)、ツダ"ラッドキ(寄てる時)、オッドヤ(下りるよ)、オッテクレ(下りてあれ)

◦ 促音が添加される。アツイ(暑い)、アツキ(小差)

◦ 摺音が促音化となる。ナッテモカツモ(なんでもかんでも) ガッキ(雁木)

13. 摺音について

◦ 摺音が該頃にくることがある。

ンメー(3まい)、ンラサキ(皆)、ン一ネ(ほんとに) シーナ(皆)
ンダ"ドモ(先づきやねども)

◦ 行者の摺音化 カウンネー(震われない)、ソンネ(それには)、
カウンニ(代りに)、オウレンガンモ(遙われるのも)

14. 長音化について

◦ 一音節語は特に長音化する。マー(馬) フー(麁)

◦ 形容詞は長音化は固定しているものがある。= -ゲー(若い)、-ケー(若い)、ナ-ゲー(長い)

◦ 強調するための長音化することがある。ミンーナ(皆) ゼンーブ(金額)、ホン一ネ(ほんとに) マエーンナ(毎日) リーレカ(それが)、リーッ(それす)、サーンゾク(三束)

15. 流音化について

カ行・タ行の音がもずかし混ざれを語りついで渾ることがある。

エグ (egu 行く) ドゴエエカッシャル (ビニヘおいでか) ガニ(かに)
セギ (堰) ハタケ(畠) ワラハダキ(藁叩き) ツダラッドキ(音で
る聲) ソンドキ(その時)

16. ヒシの混用

シ(日光) シカル(光る) エトシキ(年引が蟹介)、シンナカ(虫の中)
から國旅賓のニヒ)、シダナ(火耕)、シト(人)、シトツ(ひと)等の
ようにかなり固定づけた。中にはヒシの仲間鳥の名前を取る場合もある。
表、雲雀には混用させがちである。ヒシの混用は中國城邦方言の影響である。シフヒはチ古く軟くにあらわれた程度である。

17. 魚沼郡に似てヒトへの混用もややある。ヘー(稗)、ヘリ(屋)
ヘロガル(広がる)、ヘロー(捨て)、ヘンガワリー(品が悪い)

18. ザ行者 > ル行者 ホーシテ(をうして)、ホアテ(をうして)

19. ハ行者の脱落がある。

アナズラ(鼻面一直筋)、キノア(木の葉)、クロエメ(黒姫)
エヤシリ(冷や汗)、ンーネ(ほんとうに)、オンネ(ほんとうに)
ニヤク(ニ古)

20. ラ行者の脱落

モーラ(幕うて)、ヘナンク(へならないよ)。シネケナン(しき
ければならぬ)、ホドコ(みところ)

21. ヲ行者の擬音化促音化 12a 12b 参照

ヌスダ行者のう行者化 長岡地方の影響でしばしば見られる。

オラロコ(おらどこ、私の家) センゴラック(駄便なつを) ネラック
(ねなつを)、~ガレヤナンレヤ(~がれなれを)

ダラの中間層に発音される場合もある。[rgɔ:g idra] (ごうさぎ)

23. ザ行ダ行の混用

シンゴーディン(新五左衛門)、エゼテ(ゆでて)、ナゼ(なぞれ、なで)
オカンホード(置かぬといぞ)

24. ウ段者とオ段者の混用

スル(刺す), ノエハリ(縫い針), フーノキ(朴), ホドコ(櫻)
アマコ(雨具), モコ(奴), ヨーガタ(夕方)

4. 文法上の特色

(1) 動詞について

1. 二段活用がある。ノセル、ノシテ(戴せる)ヨセル、ヨシテ(寄せる)
2. 「死ぬ」は十行にもて行にも活用する。二行四段に活用する点は関東の西面都地方・福島県に似ている。(中頸城郡にはが行四段に活用する。これは花野、猪木、落城、御奈川西郷、山梨と共通である。)
3. 四段活用の動詞の連用形は「者便」か「かん」であり、これについて「カーテ」(累って)という「ア者便形」が多く、促音便は極めて稀である。この状況をやゝ詳しくみると、明治生まれの老人(明治29年生れ)には「者便」が多かっただろう。今回の文書化の中の「4. 着衣」について、「飼う」という語についての「者便」と「ア者便」のあたりわれ方の比をみると、明治30年代生れの男女においては、ほぼ3対1であり、大正生まれの者においては逆転して1対3となっている。
- 「ア者便」は中越の長岡地方、妙高郡内、柏崎市旧市域及び中頸城郡をとび越えて西頸城郡に多い現象である。鏡物ではアラテ(洗って)クテ(食って)の様に経音化された形も存在する。
4. 二行五段活用の終止形は例えば、[kɔ:] (累る・飼う) (warɔ:) (笑う)の外 [kaw] [waraw] ともなる。中頸城郡では [waraw] [kaw] と連母音になる。
5. カ変動詞の未然形にセーバ、セバ、命令形にセー・シロ・シレがある。またシレバ、シル、シロ、シレと一般化の傾向もある。
6. カ変の未然形はコエバである。マイが接続する場合はキマイである。
7. 文添動詞の終止形と同じ用法がある。

セーフテ キメテ エラレバ ゼン エッパー モラウンネシサエ。
(政府で決めていらっしゃるから、錢を左くさん貰われまいし。
(大正七年生れ男子)
- ワーシタレバ(そう(石う)(著述かる)) トイタレドモ(と言つ石が)(著述)
8. 一段活用動詞の命令形には起キロ、受ケロといふ形と起キレ、受ケレという形と二つが行なわれている。老人の著述では起キロ、見ロ寝ロが圧倒的で、起キレ等は皆無に近い。口命令形は豊活用から関東につきかぎり、レ命令形は中越から東北地方に分布しているものである。

おから餅粋では口命令形が左く、レ命令形が新しい形であろう。

(2) 形容詞・形容動詞

1.形容詞の連用形はウ音便が圧倒的に多用され、ヨワクテの様な例は稀と云ひ得ない。ウ音便は絶く發音されてハヨし界く)のようにも云ふことがある。

2.形容詞の活用は单纯化し無活用化する傾向がある。終止形がひろく他の活用形に用いられたり、複数をまとめる形のみが用いられることが多い。アシガ ナンギーテ(足が苦しくて) スズシナッテ(速しく走って) オモシロエカッタ(おもしろかった)

3.形容動詞の連体形はヘナの形で重複初の~/とい形に対応する。

サカンナコニ、ラクナ姉、マックニナ、マッカナ。

(3) 助動詞・助詞

1.敬語が發達して広く用いられる。最も多用されるのはレル・ラレル類である。若者にレル・ラレル類によく用いられ、誰もが広く用いす。普通該がるするものでは若く在住語の直訳と思われる。しかし、レル・ラレルは本地の尊敬の助動詞よりもや>敬意の軽いもののようにある。詳説は省ける。

2.前期上方語や前期江戸語として丁かんに用いられるとしてされるシャル類がレルラレル類より敬意の高いものとして用いられる。

オトツアンガ エワッシュアルヨーネ(明治34年生女→29年生男)

オメアサン ジョーズデ エサシック(明治39年生女→35年生男)

3.シャル類に「ラッシュアル」「サッシュアル」がある。一段活用・力変、サ变に接続する。

オメアサン ユーテ ミラッシュエ(明治29年生男 > 34-39年生女)

ユーテ エサシック。

4.旧柏崎市域や中越、妙高地方で最も標準的で尊敬の助動詞である、ナサル(江戸後期の代表的敬語)は、餅粋では大正生れの男女に少し見られることで、明治生れの老人には普及しているようである。

5.近世上方語、江戸語とされる「ヤル」という尊敬の助動詞や「マイル」などの語も若者にみえる。若者には「オヘ=ナル」もみえる。

下がつた方からまいりやれの（下がつた方からお食へ参下さい）

若狭さんかみんそめえらしをひうだ（若狭様かみんそお食へに参ら
うしい）

6. 打消の助動詞ナイは一段活用。サ変・カ変の動詞の未然形に、ンは四
段活用動詞の未然形に接続する。助動詞ルルラルにはナイ、マスに
ほンが接続する。但しナイは「ねど」と発音される。

7. 推量打消の助動詞マイ〔めど〕は動詞の連用形に接続する。

ヨミメー（読みまい）アリメー（有るまい）キメー（来るまい）シメー（はまい）

8. 理由原因をあらわす接続助詞が豊富である。

○明治全般の者かさかんに用い、また若狭にも多用され、また大正
生れの者も時には用いるものに「エニ」「エネ」がある。

セガレモ チョット キタエネ オラ キヨーワ ドッコモ エカンデ エル
格助詞「ニ」の変化したものであろうか。

○明治生れの者に用いられる「モンガ」があり、その変化と思われる
「ンガ」は広く用いられる。

トショリバカ アエンデ エカンケ ナランモンガ カナンヨーダ
コラネ（年寄りが歩いて行かなければならぬから困るよな）
カネ トル ドコガ ネー ンダ"ンガ ハー（金とお預け無いの
だから、はい）

ンガは広く中越地方で用いられる。

○關西系のスケー・スケーデ・スケーニが最もさかんに用いられる語
である。既まつて場合には普通語のカラと用いられる。

9. 二つの動作用同時にあらわす接続的に起ることを示す接続助詞に次の
ようものがである。

○ドコテモンガ・ドコテンガ・ドコガ

追っかけておらどこてもんが、落しおに爺さんが落ちてしまつて。

猿がまあぬがづいで、そして来などこてもんが、土牛へ来なとこても
んが、桜がそれとて咲いていて。

…と言うなどこか、そのアニが弟の腹さいでアラヒ。
接続は「所と言うものか」であろう。（「黒姫の若狭」より）

◦ ツカヤ

ソーレガ オメアサン アッタケー カゼン ハテ クルツカヤ クチ
ンナカマヂ ニゴーナル (高齢者用語 明治34年左右)

◦ トサエニヤー

アキン ナルトサエニヤー シトワ コノ デヤノサカオ オメアサン
ツナギン ナッテ エネ カズクテショアネ (用前)

この三つの語はいすれも老人のことばで、若者にはしばしば用われる。
特にトサエニヤーが多くあらわれる。「と際には」が後際である。

岐阜三重滋賀山口のトサイガ、石川能郷・加古屋千尋のトサイニヤ
佐渡のトセーカ、中頃城跡の(タラ)サイナ等と同類である。

トコテンガは魚沼湖にちなんだようである。

10. 接続助詞のドモがある。中頃城・高城と同じくドモと発音されることもある。

11. 助詞が省略されることがある。移助詞ヲの場合特に多い。

オドリー ミル (踊りを見る) エキ ホル (窓を開ける)

ハシコ - オシテ (刀を押して) カエコ カーツ (糞を蹴る)

移助詞ヲと共に次いで省略されることが多い、また前の語と連合するところもある。

ヨーサン オツカタ (着物はおきかつた) ツラー (それな) ユラー
(それな) オラー (俺は)

「=。へ」もわざかに省略されることがある。

トマリー エク (泊りに行く) トナリー エッテ (泊へ行って)

12. 「ではまいか」という文語の表現をする時、

カータンダ ネアカ。デルヨアネ ナッテルンダ ネアカナ。

のように言うこともあるが、「では」に当るる語を省略す、「ネアカ」が直接助詞や形容詞や助動詞(レル、ラレル、タ、マス等)に接して、ユータネアカ(立つてではまいか) アルネアカ(あるではまいか)のようになうことが多い。佐渡方言にもこの表現がある。

オツカツカガン ネアカネ (遅かつたのでまいかね)

のような例もある。

その他の

1. 地点選定の理由

(1) 調査地の方言は、新潟県の中越後側の代表的方言と考えられる、中越方言に属すること。

(2) NHK の「全国方言資料」に中越地方の方言が採り上げられたこと。

(3) 調査地は旧市街から又ロキロメートルしか離れてない農山村であるが古い方言が保存されていることが多い所であり、また著者のお読みも多いこと。

以上のように各理由で選定した。

2. 採用者の氏名と採用内容

高橋慶宣氏

調査地に生れ育ちそこには住み、柏崎市役所總務課庁報係でいらっしゃる方から採用願った。就者の紹介と対話会話の命令をしていただき、また懇々と/orの困難な部分について意見をきいたり、就中のぜひ見る方言やこれに隣接する語彙・音韻・修辞について教えていたりなど、地元の概観のための資料の一部の提供を請つたりした。

田村彦雄氏

新潟県立西郷高等学校施設で生物学専攻。刈羽郡周辺の植物の調査をしていらっしゃるので、植物の方言名について教えていたりなど。

〈B〉

表記について

表記は表音的カタカナ表記によった。そして次の方式に従つた。

1. 長音には「ー」の印を用いる。

2. 全拗音の [kwa] [gwa] はクワ、グワ のように表わす。

3. [ʃe] [dʒe] はシエ、ジエ のように表わす。

4. [ɛɪ] … はエイ のようにあらわす。

5. [ɛ] [kɛ] [sɛ] [ʃɛ] … はエア、ケア、セア、シェア のようにあらわす。

6. [ɔ] [ko] [so] [kjɔ] … は オア、コア、ソア、キヨア … のように表わす。

アクセント、イントネーションは表記しなかつた。

カナの表わす島体育场について。判断に迷つた微細な音声の処理原則について。

1. エア、ケア、セア、シェア 等で表記した音声は、共通語のオ段音より少し開いて居り、基本母音の [ɛ] と同じくらいか、あるいはそれよりいくらく開いている音声のように思われる。

2. いわゆる閉合の弱っている地方なので、オー、コーで全音と、オー、コーで閉音を表わした。オーは基本母音 [o:] に近く、共通語のオ段音より少しでも大きいように思われる。[o:] に近いかもしれない。コーはほぼ基本母音の [ɔ] にあり、共通語のオ段音に極めて近いか、あるいはわずかに開いている音声のように思われる。

3. 表記に迷つたのは [i] ~ [e] の音声群である。この方言には單体の [i] は存在しないから、教員やマスコミ等の影響で、教養ある人々には [i] に近い音声もそれがよろしくて思つて居つてゐる。しかし段音の場合など特の [i] に近く音者とすることがある。[e] であつたり [ɛ] であつたり微細である。調査音もこの地帶の音うちこれらの音声に対して敏感でないこともあり、判断に迷うことが多かつた。それで [i] に近いと思われる場合 [i] を表記し、[e] に近いと思われる時はエと表記することとした。

4. ウは非元音、[u] であると思われる。

5. ヒ [fi] はシ [ʃi] に近くすることがあり、時にはその中間の音になりうることもある。[fi] に近い場合、ヒ、[ʃi] に近い場合、シと表記した。

6. 母系の漢字化は日本東京流と同じいと思われるが、竹子の付帯がある。

< C >

収録内容の概要

1. タイトル I. 昔の労働

2. 録者年月日 昭和50年(1975)8月10日

3. 録者場所 柏崎市大字折茂宇新郷 病者Bの自宅産敷

4. 話し手の氏名 A. 高橋鹿之助

性 男

出生年 明治29年

職歴 農業

就職歴 古の司法保護団28年間、民主年次17年間、村委会議員2年間。鶴川地区老人会長。(現)

居住歴 柏崎中学校在学2年間、柏崎市口下宿して江外は銅粒江在住。

言語的特徴 80歳を越す老年であるが、話すことは元気でしゃべりしている。郷土史著草学の関心が深く、古の村の生活やことはを保存している。新しさなどではなく、古のことはよく、経験の関係で甚直简化もかぎり見受けられるが、聞覚の弱さと併存し、古いことばを保有する傾向がある。故老人であるので、誰かが知らぬ、説明的行為などがある。対話会話においてとかく発音を強調する傾向もみられる。はじめ社会若手調査者に対して説明する傾向があるが、改善によって後には改まつた。文文化した部分はそう(左矢生の少ない部分である)。

この人の話しぶりと「キャリが多い」と批評しながら、左、右、話がわざ遣はされることが多いことらしい。この人だけではないが、他の人の話し、絶えぬ中に話しが多いところがある。

説し手氏 A B.高橋エリ

性 女

生 年 明治34年

職 務 主婦・農業

役職歴 及し

居住歴 同鶴川村大字女名字下野に生れ育ち(祖母・母とともに餅
籠身)餅籠に嫁いである。14歳の時東京にて3
ヶ月お仕え工さんとしていたことがある。

方言的特徴 説し手は鳥取方言が主体的で、具体的には「おなじ」と
「おなじ」と書くのみである。古い方言を保有している。接続助
詞トサルヤー、工木等を多用する。記憶も古くで、
昔の伝承者でもある。話者Aと同じく他の話者の
説しの終りを多く聞き入ることもある。

説し手氏 C.高橋春宣 (司会者)

性 男

生 年 大正15年

職 務 地方公務員

役職歴 鶴川郵便局員2年、林役場・市役所乗務員24年間、現在
柏崎市役所総務課広報係長

居住歴 餅籠に生育し、猪俣学校(場所不明)在学の為12年
間他府県に居住したことがある。

方言的特徴 低音でややかめの少しの持主。役職上共通語を話す如
果薄の人とは方言で話す。

5. 餅籠の環境

同僚も少なく、他の施設の机も止めてもらい、翻訳部屋で、三つのマイ
クを使用して録音した。司会者の持筆もあり、紙面が又見合いで、餅
籠の小スムーズに進行した。

1. タイトル Ⅱ. 冬の仕事
2. 録音年月日 昭和50年(1975)8月22日
3. 録音場所 横崎市大字折居字餅糰新第Bの自宅座敷
4. 話し手氏名 A. 高橋 清治
- 同 性 男
- 同 生年 明治35年
- 同 職歴 餅糰で農業、一時製炭に従事し、各期間は酒造労働者として40年間を稼ぎました。
- 同 居住歴 鳥羽で高崎市に居住。昭和11年高石3町で内地遷還。江戸時代から40余年間各期3ヶ月間の当稼に東京湖西多摩羽(2年)落城岩籠洞在(今0年)落松在(3年)に出向いた。
- 同言語的特徴 言語がなめらかでよく口にこもったり、ビルのように詰しきりで、連續する音がちぢまつたり飛躍するようなどころがあり、とうえにくいところがある。他の著者に比し話しか組み。
- 長い当稼によりどこかの普通語化は特許認められないようである。「オマエ」となどといふこの地方のあそびことばとさかんに使う。
- 話し手氏名 B. 高橋チエ
- 性 女
- 以下「著の労働」に記述したもので省略
- 話し手氏名 C. 高橋ミサ
- 同 性 女
- 同 生年 明治39年
- 同 職歴 農業・主婦
- 同居住歴 生家は餅糰と同一大字の字北向、母は大字清水谷出身。北向の音ち餅糰に似ていて、他の居住経験はない。
- 同言語的特徴 上下の前歯が抜けていたが登場に際してはまだ。鶴川地区に於ける代表的な普通話伝承者で、その語り調子は走り書きとして、内容も整っていと評されている。

他の土地の居住歴も全く方言の保有度が高い。詰者 A C とは満洲同士で、特に B とは親しく、しきりに行き来して旅してゐる仲である。

5. 錄音環境

I, II の場合と同じく、詰者 B の自宅座敷の音がほとんどで行ない、同房者なく、司会は調査者が行なう以前以てお会せをし、司会者の発音は全くとどろみスムーズに進行した。

1. タイトル

III. 養蚕

2. 録音年月日

昭和 50 年 (1975) 11 月 8 日

3. 録音場所

梅崎市大字折屋字餅糀 詰者 A 高橋眞氏 家庭敷

4. 詰し手の氏名

A. 高橋 真

同 性

男

同 生 年

大正 7 年

同 職歴

農業

同 居住歴

餅糀に生育し餅糀に居住。但し昭和 14 年より 6 年間当役の在外東京都及び外地で過ごした。(在外期間が 3 年を越えて、望ましくないか、他の通住者がなし。)

同 言語的特徴

元氣に大声で頗るかに詰す。詰のテンポが早く、二とばの跳躍があり、單江で、ときどりにくい声がある。しかし方言を保有し、また会話をリードして行く、

同 氏名

B. 高橋マツ子

同 性

女

同 生 年

大正 3 年

同 職歴

製糀工女・農家の主婦

同 居住歴

餅糀に生育し中学校卒業後嫁与與前務者へ女工として行き、六年間そこで居住した。(在外期間 3 年以上となり望ましくないか、去るが心苦しく思ひ得ない。)

同言語的特長 静かに明瞭に話す。年令・居住歴へ関係もより財源主の老人より共通化していき、話者3人の中で共通語化が最も多くなりしている。

同父名 C.高橋 初枝

同性 4

同生年 大正2年

同職歴 女工・農家の主婦

同居住歴 銀座に生家、高等小學1年修了後、女工として玄線紡し、前橋市に6年、高柳市に4年居住の後隣郷し、農業に従事した。

同言語的特長 母は中頸城郡に最も近い有野新田生れで、銀座に嫁いだ高橋サヨ子で、著語の伝承者である。朝うかで話し好きである。但し若めは孫と面会後にはひざに抱いて対話と会話を口づけたり、その孫にすまなければして発言を制約されることが多い。鼻をつまみ口でいじらしく見苦しい。

(同会話)
話者の氏名 D.高橋 康宣

同性 男

同生年 大正15年

同職歴 地方公務員

同経歴 鶴川郵便局員2年、林従場市役所吏員4年現在市役所総務課庶務係

同居住歴 銀座に生家し、飛行学校(場所不明)在学のため1年間他處に居住し、以外は銀座に居住。

同言語的特長 低声でややかすれ呟声の持主。從属上共通語を話すが看護の人との話し合いの方差加多し。

5.録音の環境

A氏宅は道路に面しているため、時折道路を通るバスの音が入り大きくなると、録音機にはマイク3個と接続され、他の左右から少し録音が入ってしまう。話者Cは家庭内翻訳で孫、子守りをしておれば

うが、そこで、はじめ聲に震い、後にはこもって煙の上に抱き合はれる。今朝はのぞれ左、強が退席していますが、左の声も銀髪工芸の都合もあり、また詠者にもそれには発言を制約される事もあつた。司席者として詠者十の車がお茶の接待をしたり、講堂のところで見守つておられました。司会者のリードで詠はスムーズに進んだ。

1. タイトル IV. 雪の中の生活

2. 録音年月日 昭和 50 年 11 月 8 日

3. 録音場所 柏崎市大字折居字餅根 詠者 A 高橋真氏自宅座敷

4. 詠し手氏名 A. 高橋 真 男 大正 9 年生れ

B. 高橋初枝 女 大正 2 年生れ

(司会) D. 高橋春宣 男 大正 15 年生れ

(詠し手の職業以下の方項については III, IV 参照)

1. タイトル V. 冬の楽しみ

2. 録音年月日 昭和 50 年 11 月 8 日

3. 録音場所 柏崎市大字折居字餅根 詠者 A 高橋真氏自宅座敷

4. 詠し手の氏名 A. 高橋 真 男 大正 9 年生れ

C. 高橋マツメ 女 大正 2 年生れ

(司会) D. 高橋春宣 男 大正 15 年生れ

(詠し手の職業以下の方項については III, IV 参照)

1. 女の勞働

詠歌手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 高橋鹿之助 男 明治29年

B 高橋千エノ 女 明治34年

C(同会)高橋 寿宣 男 大正15年

C ソレー マーイツ ナラータ モンデス。オンナシユーワ イツ=
それをまあいつ習つた もんですか。女衆は
モイリガシーンデスガ。
やせいいのですが。

A ガッコーオエテノ一。
学校が終ってねえ。

B ソレワネー ハルン ナッテカラ。マーマー オショーグワツニ
それはねえ 春に なってから。まあまあ お正月に
ナッテカラ ヤマエ デルマテ。セッキウチワ ⁽⁸⁾オメアサン ⁽⁹⁾オ=
なってから 山に 出るまで。節季うちは あんた お
ハリシル ⁽¹⁰⁾~~~~~ アッテスコテ……。
針する ~~~~~ あれですよ……。

A シアーフエウチ シノアノ オハリシシヨーテノガ "ドコニ=
ああ 冬うち その あの お針師匠といふのか" どこにも
モアッタカラサ ⁽¹¹⁾オーアザニ シトリグレアーズツワノ - オシ=
あったからさ、 大家に ひとりくらいずつはねえ、 教える。

(13)
エル。

- B クノ ウカワデモッテ エケバン ハリノ カテア一 ヒトワ 木=
この 鶴川で いちばん 针の 壓い 人は それ
レ オメアサンタ ホンケノ マルトカラ コラッタ ⁽¹⁴⁾ ⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾ オッカサン。
あそとの家の 本家の まるとから 来られな おかさん。
(A シニシノ。) ソレカラ シモノノ ドーシノヤ ⁽¹⁷⁾ ⁽¹⁸⁾ ⁽¹⁹⁾ アレガ
えん、西の。 それから 下駄の 道正の大家 あれか
アノ ~~~~。 アノ オッカサンタチガ エケバン ~~~~。
あの ~~~~。 あの おかさんたちが いちばん ~~~~。
A ソコエ オーカタ アノ サエホー テダカネ ナラエ。 ⁽²⁰⁾ ⁽²¹⁾ ノエハリ
そこへ 大方 あの 裁縫と言うのかね 習いに。 縫い針
テッタ アノ ノエハリ ノエハリダ。
と言つた、 あの 頃は 縫い針 縫い針だ。
B アソッテ ~~~~ ショークツツワ ワリアエ ---- =グツ
あ それで ~~~~ 正月は わりあい ---- =月
サングツツ ショークツツカラ ショークツツ ニグツツ サングツ
三月 正月から 正月 二月 三月
ツ マ ミツキグレ一 エキマシタネ オハリナラエ。
まあ 三月くらい 行きましるね、 お針習いに。
A オハリナラエノ一 オハリナラエ----。ソッテ サン ミフユグレ
お針習いにねえ、 お針習いに----。 それで 三冬くらい
エカソケア フユクケ----。 アン ----。
行かななければ 冬うち ----, あ ----。
B ミツキグレーネ一 ミツキグレ一 ミフユグレ一 エカンケラ
三月くらいねえ 三月くらい 三冬くらい 行けなければ

オマエサン (A ツアーソー。) (23) ハー スーテ コター デキネー。
あなた (そ)う。 (はい) 缶(つぼ)といふことは ござない、

A エッチャヨーメアーナ マー ワフクオ エッチャヨメアーッテ マー
一人前な まえ 和服と 一人前と言っても まえ
(24) ソンガノ アノ アノ ホラ シューゲンニ キルヨーナノマテ=
そんな あの あの それ 複音ハ 着るようまでには
ウ ノワンネアーデモネ アタリメアーノ---ン。
縫われないけれどね、普通の… うん。

B ソアーソー。 マー ホントノ エー キモンワ ノワンネアーデモ
そ)う。 まえ 本当の いい 着物は 縫われないけれども
(25) アッデスコテ コドモニ キセルグレーヴ。 コドモネ オラカ" (26)
あれですよ 子供に 着せみくらいは……。 ×××× 私どもか
(27) コドモオ ソダ" ドキワ アッデスエネ エーノガ" ヒトカサネ
子供と 育てる 時は あれですよ いいのか" ひとかさね
ソレカラ キルノガ" マエンチ キテ アエクノガ" フタツ ナケラ
それから 毎日 着て 歩くのか" ふたつ なれは
(28) ヨゴシテ キタ ドキ カワリガ" ノアーテ コマルスケア…。 ソレガ" (31)
汚して 来る 時 代わりが" なくて 困るから…。 それか
(32) アキ ハハル アノ アワセト ハダコト ワタエレト ソレガ"
秋 春 あの 桜と ひとえ物と 編入れと それか
(33) ミトーリ ネアケラ…。 タスケア オメアサン ハケクツワ アッデスエネ
三通り なれは…。 から あると 八月十五 あれですよ
(34) ホレ エマミテヤージー アリマセンスケア アノ一 ヒマダ"スケア-
それ 今みたいでは ありまへんがシ、 あの 頭皮だから、
(35) ミンーナ ハリモソ シテ ホエテ オラカ" ノーナ キミカ" (36) (37) (38) (39)
みんな 針物を しておいて そして 私が まったく きめが

(40)

ワリースケア エネカリノ ハジマルマテ^ヌ ヨーサリ ヨナベニ
 懸いから 締めりの 始ままでに 夜 夜なへに
 ミシーナ フユモナー ワタ エレテテ リレカラ ヨーサリワ
 みんな 冬物は 締ゑ 入れておいて それから 夜は
 オソテモ ハヨテモ デコアテモ ケーソアテモ ツノ ウタエレオ
 遅くとも 早くても 大きくても 小さくても その 締入れを
 シトツズツ マトメチャ^ニ ネタモンテスエヌ。 (A ヨメネ…^ア
 ひとつずつ まとめでは 締なものですよ。 ^{嫁に…あみ…})

(41)

エネカリガ^ハ ハジマルト ホレ アカギレガ^ハ キレチモア^ハ アノ
 締めりか^ハ 始ま^ハ それ あかぎれ^ハ セカれてしまって あの
 マウタガ^ハ クツツイケモア^ハ ワタエレニ ナリマセンスケア
 真締^ガ (指に)くついてしまって 締入れに たりませんから、

ココノツテモ トーテモ ゼンーブ^ハ ハリナオシ エマノ
 九つでも ナで^ル 金額 強り直し、 今の

モンミテア^ホ マエトシ アタラシ一 モンナ カワソネアスケア
 者みるに 毎年 新しい 物は 買われないから

リレオ ホグシテ アラテ⁽⁴²⁾ ハツテ ツシテ アッテスエヌ ツノ ゼンブ^ハ
 それと ほぐして 洗って 張って そして あれですよ その せんぶ^ハ

フユ アレシル^{××} スータンテスエヌ ハー。
 冬 締^ハるのでですよ はい。

A アノ ホレ ヨメネ エテカラ マー ソノ エーノ ジジョニモ
 あの それ 嫁に 行ってから、 まあ その 家の 事情にも

ヨルドモ ナンネング⁽⁴⁴⁾ レータ^ハ アノ ハケグツ^ハ ホラ ホラ
 ポカケル^ハ 何年間、いとうか あの ハル^ハに そ^シ そ^シ

トテアテテ コドモガ^ハ シタリモ サンニンモ デキテ^ハ マー
 斗代^ハと書いて 三供^ハ 二人も 三人も できても、 まあ

(43)

テッカー コワ ヨメネ エタウチ = オイテキテモ ケーセー
大きい 子は 嫁に 行つて 家に 置いて 来て 小さい
ユドモノ シタクグレーワ ブータリ テー ヒータリ シテ
子供の = 人くらいは 負つたり 手を ひいとり して
トテアヤスミテノガ…… リレカ ソノ ホニ ツスクル……⁽⁴⁶⁾
斗代休みといふのか……、 それから 先の ほろと 違く……^(B笑)

⁽⁴⁷⁾
ウーリノー。 アラ ハチグツタ ネーカ。 キュレキノ
ムー ののねえ。 あれは 八月では ないか。 四曆の
ハチグツ。 ン キュレキノ ハチグツタ"テ"ノ一 エネカリノ
八月 うん 四曆の 八月をよねえ、 稲刈りの

ハジマル メー=。
始まる 前に…。

B オラカ"マダ" ヨメ ハー ヨメノ コロワ アリマシタコテ。⁽⁴⁸⁾
私どもが また 妻家、 はい 妻家の 頃は ありましたよ。
ハー。 ウチエ ホニ ヒトリエ カズイテッテ ゼンブ⁽⁴⁹⁾
はい。 実家へ ほろと ひと背負い かつて"行って せんべい."
ウチデモソレネー……。 マー オラ ドコワ アレ
実家で" それをねえ……。 まあ 私の 所は
オラ トショリカ" トショリダッタスケ⁽⁵⁰⁾ ソノ ツトメワ シマセン
私の家の 年寄りか" 年をとつていなから⁽⁵¹⁾ その 勧めは しません
カッタガネー。 (A ン-) ホア ウシガ" エルスケ^(Aリ-.) イヤ
でしろか"ね。 (3ん-) そして 牛か" いるから、 (そ-) いや
マヌマヌアノ コロワ マーデ" フシガ" マエーンケ マエンケ
馬馬 あの 頃は 馬で" あらか"、 毎日 每日、
ホレ トツアンテ モンナ マエーンケ ヨリエ デネケ ナラシ⁽⁵³⁾
それ 主人と云う者は 毎日 よそへ 出なければ"ならないし、⁽⁵⁴⁾

マノ クサカリ シネアケ ナラン。 (A ンーン。) 今 ヨーガ⁽⁵⁵⁾
 馬の 草刈りと しあげねば ならない。 (3ん 3ん。) もう 夕方
 (56) ススシ⁽⁵⁷⁾ ナッテ クルト ンマノクサ シトソエズツ⁽⁵⁸⁾ カッテ キテ…。
 疲しく まつて 来ると 馬の草を ひびきいすつ あって 来て…。
 (A ハー。) ソレガ⁽⁵⁹⁾ アッテスエネ (A ン。) アレン⁽⁶⁰⁾ ナッテ⁽⁶¹⁾ アキン
 それか⁽⁶²⁾ あれですよ⁽⁶³⁾ 穂に
 ナルトサエニヤー ソノ シトワ コノ デヤノサカオ⁽⁶⁴⁾ オメアサン
 なると タの、人は この 出会の坂と みなを
 ツナギン⁽⁶⁵⁾ ナッテ エネ カズクテ⁽⁶⁶⁾ ショアーネ (A ン。) オラ リレー
 繁がって 稲を かつぐで⁽⁶⁷⁾ ようね、⁽⁶⁸⁾ ホース⁽⁶⁹⁾ 穂と
 マエーンチ⁽⁷⁰⁾ アッテスエネ ソノ ハケグツ⁽⁷¹⁾ シトノ ヤスム⁽⁷²⁾ ドキモ
 毎日 あれですよ タの 八月 人の 休み 峰も
 クサ シトソエズツ⁽⁷³⁾ カズイテ⁽⁷⁴⁾ アガルスケア エネカズキテ モンナ
 草を ひびきいすつ かついて 上がるから 穂かつぎ⁽⁷⁵⁾ というものは
 シマセンカッタガネ。
 しませんでしたかね。

A ア ンマニ カツガシテノ一。 (B ンマニ カズカシテ。) ツーソー⁽⁷⁶⁾
 あぬ馬に⁽⁷⁷⁾ かつがしてねえ。 (馬に かつがして…。) もうそろ
 ソラー⁽⁷⁸⁾ ンマノ⁽⁷⁹⁾ アル⁽⁸⁰⁾ ショーワ⁽⁸¹⁾ ンマダ。
 それは 馬の 有る 人々は 馬だ。
 B ソレガ⁽⁸²⁾ マタ カラタ⁽⁸³⁾ ナレコテ⁽⁸⁴⁾ エツコシ⁽⁸⁵⁾ アッテ⁽⁸⁶⁾ コンガ⁽⁸⁷⁾ ネモ
 それか⁽⁸⁸⁾ また 体の 馬川れて⁽⁸⁹⁾ 上積みをして⁽⁹⁰⁾ こんなにモ
 シテ⁽⁹¹⁾ クサオネ⁽⁹²⁾ ゴリククレーモ⁽⁹³⁾ カズイテ⁽⁹⁴⁾ クルガ⁽⁹⁵⁾ シタ⁽⁹⁶⁾
 して 草をね⁽⁹⁷⁾ 五束くらいも⁽⁹⁸⁾ かついて⁽⁹⁹⁾ 来るのぞ。
 リヨー マルケニ⁽¹⁰⁰⁾ シタガ⁽¹⁰¹⁾ シタガ⁽¹⁰²⁾ シタガ⁽¹⁰³⁾ テヤノサカ⁽¹⁰⁴⁾ ナンニモ⁽¹⁰⁵⁾ ナンキ⁽¹⁰⁶⁾
 両束ねに⁽¹⁰⁷⁾ しなのを⁽¹⁰⁸⁾ 出会の坂を⁽¹⁰⁹⁾ ケレ⁽¹¹⁰⁾ 苦しく

(67)
ノアテ トットトットトト アガハキタ モンテスガ サー ユンダ
なくて ひとつひとつと 登って 来た ものですか、 まあ 今は

(68)
トケクテエ エネカリ一 エッテ サーンゾク カズイテモ アノ
楠倉へ 稲刈りに 行って 三来 かついても あの
サカガ コンダ アガランネヤ カラタガ ナレッコニ ナッチモアテ。
坂ガ 今度は 登られない。 体が 飼れっこに なってしまって。

A ハーハーハー。

はい はい はい。

B (笑) ソー エー (笑) オラガ ワーケー ドキヤ ヴィーナンデス。
~~××~~ ~~××~~ 私の 茅井 晴は 先生です。

A フ アノ コロノ ンマテノガ エマノ コーランキト… (Bハ一。)
あれ あの 塾の 鳥というのか 今の 耕耘機と… (はい。)

アルイワ アノ… ジドーザイ ホラ ユガタ…ナシダ… アレッテンダカ…
あるいは あの… 自転車の ほう 小型… 何を… あれといふのか…

アノ ノセル ニ ノセル ジドーザイ ナシタカナ ユーネック…
あの 荷を 載せる 自転車は 何といふのか、 ありますか。

ソー エッタヨーノ モンテ アッタンダヨ ムカシノ ンマトカ
そう 言ったような もので あつたんだよ、 昔の 鳥とか

ウシトカテ モノワネ エマノ クルマ キカエト オンナシ
牛とかと言ふ 物はね、 今の 車、 機械ヒ 同じ

コレ。 ダカラ アノ ンマヤ ウシノ アル シトワ アンマリ
ことで。 だから あの 鳥や 牛の ある 人は あまり

ジブンジヤ オモニ ^(クズ) シネーテモノ トーヤマヤ ^(クズ) アタリ
自分で 重荷を しなくてシネえ 遠い耕地区や 近くの

ホントノ エーノ メグラデ…。

まったくの 故の まわりで…。

B アキダケワネー ⁽⁷⁴⁾ ムムムム イー。ソノ カウリ タクサトリ一
秋だけはね、 ああ。 その カウリ 田の草取りに
ナッタタッテ ⁽⁷⁵⁾ シトツ モモシキ エンソク コーシテ アラータノオ
なつても 人は 股引 一足と こうして 洗ったのを
カタネ カケテ ヘヤカリ シテ クルガ サー オメアサン
肩に 掛けて 盆上りをして 来るか、 さあ みんな
エソクデモ ニソクデモ セナカエ ⁽⁷⁶⁾ ノシテ キテ。ダスケア コノ
一束でも = 束でも 背中に 載せて 来て…。だから この
シタノ ⁽⁷⁷⁾ ゴロアゼンノ ショーカ アッテスエネ ヒルマ クル ドキワ
下の 立前左衛門の 長か あれですよ 盆間 来る 時は
ヘー ⁽⁷⁸⁾ オヒル タベテ エラレッ ドキ オラ アノメー トーッ
もう お盆を 食べて いられる 時 私は あの前を 通った
モンダシ ⁽⁷⁹⁾ (A ンー。) ソレカラ コンタ ヨーサリヤー オヨハン
ものなし、 うん。 それから こんどは 夜は お夕飯を
タベテ ⁽⁸⁰⁾ ラレッ ドキ アッテスエネ アノメー トーッタ モンテスエネ。
食べて いられる 時 あれですよ あの前を 通り うのですよ。
(A イー。) ⁽⁸¹⁾ ソレタケドツネー トチクラカラ クルニヤ チコアタ
ああ。 それだけすつねえ 楠倉から 来るには 違う
モンテスエネ、
ものですよ。

A ソーソーソー。エヤ イー / アタリテモテ ヒヤクショーサテル
そうぞうぞう。いや 家の あそりで 葉巻を している
ニトナシテア オメー ヒヨコヒヨコト ウチエ ヘーッチモー ⁽⁸²⁾ ンダアンネ
人などは・ みんな ひよこひよこと 家に 入ってほのかに。
(B ハー。) ⁽⁸³⁾ オメアサンタ ソレ エク アノ アットドー ナンバエテモ
はい。 みんなたちは 逃を 行く あの あれどよ 何倍も

ムコードー トケクラテ ドコワノー。⁽⁸⁷⁾
向こうねよ、 極倉とまう 所は ねえ。

B ハー ナンバエテモ ムコアデシタコヨー。
はい、何儀も 向こうでしょ。

A アー ッダカラ…。 リレカラ テヤノサカテ エー サカガヒトウ
ああ だから…。 それから 出金の坂と 言う 坂か ひとつ
アルシサー。 (B リーリー。) アノ テヤノサカッテ ユーノワネー
あしね。 (えええ。) あの 出金の坂と 言うのはねえ。

コノ マエニ アノ ゼームショガ ミンナ トケシラベー キタリ
この 前に あの 銀裕累ガ みんな 土地請へに 来る
(88) アエ シタ ドキ オレニ アノ ユータガサ一 アノ カシワザキノ
あれ した 時 僕に あの 言ったかね、 あの 枝崎の
ゼームショインガ キテ ンーナ ナンカ シラベタ ドキ ナンカ
銀裕累ガ 来て みんな 何か 調べぬ 時

キテ ユータガ コレガ アラカネ アノ トキ オレ クチヨー
来て 言ったか、 「これが」 あらがね、 あの 時 僕は 正装を

(89) シテ イタカナ ナシタカナ クチヨーサン アー ナタガエ リ
して いふかな ピうであつたから、 「正装さん」 あら 着高い その

(90) アノ ナタデ アタマ スルカ (B 笑) モチローエ ヨメネ
あの 『鉢で』 頭を 剥るか 餅糰へ 嫁に

エクカ アケラモ アノ ナンタカナ テヤノサカ アケラモ
行くか 明けても あの なんか 『出金の坂』 明けても

(91) クレラモ コシニ ミナツノ タエガ ネアーテ ユードコ ウタオ
暮れても 脇に 荷締の 続えか ない』と 言う 歌を

(92) (93) オラ シテルガンタガ テバ エー オマエサマ ワケア
僕は からでいるのを「か」と言うので、「そ」、 あなたは 若い

(94)
セームショ) ヤクニンサンワ ソンガ"ンユト シ,,テルカエテ
税務署の 役人さんは そんな ことを 知っていますか? ヒ

エッタラ ソーコレ オッダツテ カシワザ"キ コノ カリワグ"ング"レーン
言つたら、「そうさ、 僕もって お嬢 この メリ羽脚くらいの

コター キーテラエ テナ コト ユーテ…。 ソー ユー
これは 聞いていますよ」というようなことを 言つて…。 そう 言う

デヤノサカナンダ"ナ"。 アサカラ バンマデ コシニ ニナツノ
牛舎の坂なのをねえ。 朝から 晚まで 腹に 荷縄の

タエガ ネー テヤ アノ ミンナ ドコノ ウチニモ ンマヤ マ
絶えが ないといふのは、あの みんな どこの 家にも 馬屋、 あ

ウシワ (B ハー。) ソノ ゴタ"ガ" ハジメワ ソマダ"タ"。 (B ウシワ
牛は その 後を"か" はじめは 馬をつねえ。 年は

サエキンデシタ…。) ンマノ ネー ウチナンテ マー ヒヤクショーガ
最近でし…。 馬の ない 家など まあ 農業か

ナランテ ユータグ"レーテ" エマノ コーワンキト オンナシ
できないと 言つてくらいて、 今の 耕耘機と 用じ

コンデネー。 (B リー リー。) ダカラ アノ ンマニ クセル クワ
ことでねえ。 そろそろ。 から あの 馬に 食わせる

クサオネー (B リー リー。) マー アノ コー ジブ"ン" エー
草をねえ。 そろそろ。 まあ あの こう 自分の 家の

チケー ドコニ クサハ"ガ" クサー カル バ"ショガ" アル シトワ
近い 行け 場所か、 草を 炎る 場所か あまり 人は

(95)
エーンダ"ドモ ト"。 ホー エ サクバ モ"テルレヨーナ シトワ
いいのを"けれども 遠い 方へ 作場と 持っていきみうな 人は

サクハ"エ エ カンケラ"。 クサカリハ"ガ" ネー。 ア クサカリハ"ガ"
作場へ 行かなければねえ 草刈場か ない。 あ 草刈場か

アーンダ"。

ないのな。

B オメアサンガ トケクラマテ エカンケラ カズ"イテ
 あなたが 柿倉まで 行かなければ" かついて
コラ ンネアガ"ンダ"…。 リッテ" マタ ウシネ ンマネ フマシタノオ
来られないのな。 そ木で" また 馬に 路ませぬのを
タシテ リヨアマルケニ シテ" リレオ マタ シタゴ"エノ
出して 両しばげに しておいて それを また 基肥の
カワソネ マタ トケクラエ カズ"イテ エカ~~~~~ (A カズ"イテ
代りに また 柿倉へ かついて" 行か~~~~~ (カツ"イテ
エカンケ ナラン。) ダスケア エキキ アー セナカネ ニノ
行かなければ"ならまい。) そ"から 行き来 あひ 舟中に 荷の
タエガ" アリマセんコレ。
絶えが" あくませんよ。

A ン。 マー アノ コッカラ オマエサンノ ジノ ウチカラ
 うん あひ あハ ここから、 あなたの この 家から
 トケクラマテ" ュート ムカシノ リス"テ" エーバ" ハンミチカ。
 柿倉まで"と うと 苗の 里数で" 言えは" 半道か。
 (B リ"テスネ) ン。 マー エケリワ ネアドモ ハンミチモ
 (そ"ですか。) うん あひ 一里は ないけれども 半道も
 (97) アルンダ"ン ハシリモ アルンダ"ン リス"ニ シテ"ノー (B アノ
 あるのな"から、 半里も あるのな"から、 里数に してねえ。) あの
 キロ" ミンナガ" エカシタスケ クナシニ エキマシタドモ ン
 境は みんなが" 行かれながら 若なしに 行きましたか" ん
 エマ ヘア" ダメテス。) イマノ キロニ シテ" ニキロカ。 ン
 今は もう 左めです。) 今の キロニ して スキロカ。 うん

エケリワ ヨンキロダ"ケラ ニキロ ニキロモ アルンダ"ンガ"ノー。
一里は 4キロならば スキロ、スキロも あるのをからねえ。

(99)
ソコン ドコエ エクサ クルサ ソアシテ リノ ナタ"アタマ
そこへ 向けに 行きも 帰りも そへようにして、そへ 鮎で 頭と

スルカ モケロ"エ ヨメニ エクカテ エー デヤノサカテノガ"
剃るか 鏡表へ 妻に 行くかと 言う 会の坂といふのか"

エクマガリ アルンダー シトマガリ シタマガリ ミマガリ
幾曲り あるのをろう、ひと通り ふら通り 三まがり

ヨマガリモ アルカ。 (笑) リノ マガリ マガリ アガリテ
四まガリモ あるか。 その 曲りを 曲って 上って
ノボッテ クル サカオ メーンチ (100) (101)
登て 来る 坂と 毎日 歩ひながらね。

B アノ サカガ" マタネ オモシロエ サカテ" (A アー。) カラミテ"
あの 坂か" まねね、おもしろい 坂で" あふ。 空身で"
アガタタッテ (102) ナンギー"ンデ"スエネ。
上がつたって 難儀なのですよ。

A アマ ソアエンタ"。 (笑) カラミ……。
ぬま まち そうなんぞ。 空身……。

B (笑) シカモ チョエット {A 二 カズイタ……。}
むしろ ちょっと {荷るかついだ……。} ヒカケニ シタ
ホーガ" ア ラクダ"タ。
方か" ふ 楽だつた。

A エヤ アノ サカノ ヤスミバ" ニー カズイタノオ ヤスム
いや、あの 坂の 休み場で 荷る かついだ"のと 休む
ドキノア" (B リー ソア。) マタ キモチ エンド"ア。
峰 ねえ、 そりそり。 まね 気持が いいのを"よ。

(105)
キタカゼガ ホドコエ ヘアツテ クルシノー。(笑)
北風か ふところへ 入って 来みしねえ。

B タスケア ムカシ ショー… アノ エカキネ エキバン
だから 芳の 人々… あの 絵書きに いちばん
(106) (107)
シャバ"ジュー"デモ"テ ミタクネー ミタドコノ ワリー エー カエテ
姿録中で" みにくい 見た所の わるい 絵を 書いて
(108)
クレッタラ アノー オトコモリ一 エ カエテ クレタテ ユー。
男れとあつたら あのう 男子守りの 絵を 書いて 男れをと さう。

(笑) (Aハーン オトコノ…。) ホアシタラ コンタ" エキバン
(ふうん 男の…。) そうちなら こんどは いちばん
(109) (110)
ラクナ ラクシナ エ カエテ クレッタラ ムツムツムツムツト
樂な 樂な 絵を 書いて 呂れとあつたら ひつむつもつひつと
(111)
デヤノサカノヨーナ ドコオ ニオド" カズイテ アガッテ
会合の坂のような 所を 堆(にぶ)ね" かついて 登って
ヤスミバ"デ" ストント ヤスンタ" ドコ カエテ クレタナンテ
休み場で すんと 休んで 所を 書いて 男れなど"とい
ハナシ オラ キキマシタガ"。 (A ンア ンア ~~~。) リレガ" マー
話しき 私は 聞きませぬか"。 (うん うん ~~~。) それから まあ
リノ ヤスンタ" ドキガ" シバ"ジュー" マー (A ゴクラクダ"。)
その 休んで 晴が" 姿録中での まあ (極樂だ"。)
ゴクラクデ ア~~~~~。
極樂で" あ~~~~~。

A アー イヤ チョード マタ アレガ" ゴゴン ナルト ヒカゲン
ふふ いや ちょうど また あれが 午後に すると 日暮(い)
(112)
ナッテ ネー。 ホー" (B ハー~~~~~ アコガ" ヒカゲニ ナルエネ。)
まって ねえ。 そうして はい。 あそんが 日暮(い) するので。

キタカゼ"ガ" キタカゼ"ガ" ソヨソヨト ヘアッテ クルシ。オラモー
北風か 北風か そよそよと 入って 来るし。 ふみどもし
アコカラ エネノ一 ン一 ニマク サンビヤク サン^ヌ サンビヤクモ
あそこから 猪の んん ニ百 三石 ミ 三百束も
カズイタカ。(B シー デスネー オマエサンタモ アコニ
かついいな"か。 そうですねえ、 あなたの所も あそこには
アッタンダスケ。) アー オー エネノ サンビヤクリクモ カズイタ
あつねのな"から。 あく あう、 猪の 三百束も カツイナ"
⁽¹¹³⁾
モンダ"ガ" カズイテ アガタ モンダ"ガ"サ エー アコア マタ
ものな"か。 カツイで 登つた ものな"かね、 ええ あそこは お
⁽¹¹⁴⁾
ソラ ホントニ ゴクラクノ テーソーダ"ヨ。 アノ ムツムツムツ
それは ほんとうに 極楽の 塗な"よ。 あの ひつもつひつと
アセ アセ エッペアン ナッテ シ~~~~~ ドキ アノ ヤスミバ"ガ"
汗 汗 いっぽいに なって ~~~~~ 晴 あの 休み場か
マタ ンマク デキテ エルカラノー。 エワオ ダ"ン ツケテ
また うまく できて いるからねえ。 岩を 級を つけて
デキテル。 アコテ" ヤスマト アレナンダ"。 アノ ケヨド" リリ
できている。 あそこで 体むと あれみのな"。 あの ちょうど もの
コロ キタカゼ"ガ"ネ キタ ムイテ エルカラ キタカゼ"ガ"
頃 北風かね、 北を 向いて いるから 北風か
ホドコエ コー ヘアッテ クルシ ホテ マー アノ テスグイ
ふところへ こう 入って 来るし、 そして まあ あの 手拭、
クビ"一 マイタリ ハチマキ シテル テスグイデモッテ コー コー
首に 卷いたり 金本巻に じていろ 手拭で"もって こうこう
コーコー シテ テーデ (B 笑) コー マワストノア⁽¹¹⁵⁾ (B シー ソー)
シラシラ して 手で シラ 回すとねえ、 こうこう

カゼ^風が ヘアッテ クルシサー。(B笑) ホアーテ マー チット ヘア
風が ほひって 来るしねえ。 そして まあ 少し そ
アノ アンギーノガ ラクン ブタ コロ マタ ウントコサト
あの 苦いのが 楽い なった 噴 また うんとんざと
カズイテ アノ コシ キッテ アガッテ クルンダドモネ。ヤスミバ
かついで あの 腰を 切て 登って 来るのだけれどもね。休憩場
ガ ミドコ ヨドコ テンジヨーマテ⁽¹¹⁶⁾ ヨドコ アッタカノア。^{(Bノア}
ガ 三所 四所 上まで 四所 あつたかねえ。 そ
ソア。) ソレ マー ヨーエジャ ネーンダテー アノ… ミンナ ソコ
そ。) それ まあ 容易^{じや} ないのだよ、 あの… みんな やん
シ ドコ カズキアゲネ⁽¹¹⁷⁾ ナランノダンガ⁽¹¹⁸⁾ ノー。
の 所を かつぎ上げなければ ならないのだからねえ。

B ソアソア。^(Aン。) ハナシガ⁽¹¹⁹⁾ マタ ヨコエ ソレマスト^モ
そ。) 話が また 横へ それまけれども、
コンタ⁽¹²⁰⁾ ネー タアカリ^(Aン。) ホレネ アノ ドヨエ ヘールト
こんどうはねえ 田上カリの それね あの 土用に はいろと⁽¹²¹⁾
ノグサカリテノガ⁽¹²²⁾ クロエメ⁽¹²³⁾ ハジマルンデスエネ。
野草メリといふのか 黒姫の 始まるのですよ。
オラ ヒリョア⁽¹²⁴⁾ ミッカグレア⁽¹²⁵⁾ タノンテテ カッテ ソアシテ
私どもは 人夫^と 三日くらい 頼んでおいて メリって。 そして
オマエサン ソレオ ミンナ ニューネ ツンデテ ホイテ オボン=
あなた それと みんな 堆(にあ)に 積んでおいて そして お盆
スキ^ネ ダスンテ⁽¹²⁶⁾ スエネ。^(Aリーエ ユト。) ソレ トケクラエ
過ぎに ますのですよ。 おこうこと。 それと 楠舎に
オメアサン ハンブン オイテ ウチ一 ソノ ニュ⁽¹²⁷⁾ シトツグ⁽¹²⁸⁾ レー⁽¹²⁹⁾
あんな 半分 置いて 家へ その 堆 ひとつくらい

(124)
モッテ キテ フエウツチ ソレ マタネ ンマネ フマセルンデスエネ。
持つて来て 各中 もれも まろも 馬に 踏ませるのですよ。

(A ット エンタ。) ハー ソレオ マタ シタコエ= シテ オマ= (125)
そういふことだ。 はい、 それを まく 基肥と して ある
エサン アノ タンホエ モーテグンタ。
と あの 田へ 持つて行くのを

(126)
A ノグサテノワ アラ ドースケテ ユー アノ クサダガネ (B
野草といふのは あれは どおめかと 言う あの 草たじがね。

(127)
ソア。) アレガ テカナカ ンマニ フマシテモ グラシグワシャ シネアデ
そう。 あれが なかなか 馬に 踏ませても ぐわしゃくわしゃと なくて
サ カワエテ。

ね、 乾いて

B アソ) ナカニ ムラタケガンガ (128)
あ その 中に ひらだちといふのか 有る? それか あんた
マタ アッタケー カゼニ ノッテ クルツガヤ クチン ナカマデ

また 暖かい 風に 乗って 来る? ロハ 中まで

(130)
ニゴアーナル。

（こべく ます

A アー アレガ エマ オレノ ヤクソーコノ アノ オヤカタドエ (131)
ああ あれが 今 私の 菓草の この あの 親子ですよ、

(B ハー。) アノ ムラタケガネー。 (B ハー。) アラ エンメーソア (132)
（はい。） あの むらだちかねえ。 (はい。) あれは 運命草

テンドー。 (B ハー。) エマ ヤクソーコノ アー ナマエカラ ュート
と言うのをよ。 (はい。) 今 菓草の ああ 以前から 言うと

エンメーソア エノケオ ノバス……。アラ ニゲーンタ。
運命草 命を 運ばす……。あれは にかいのを。

B ッテニサンチマタジキガハヨアエッテコーグサカリマストサエニヤ
それでニ三日まだ時期が早く行ってこうじて草をメリリますと、

(Aン。) ミーンナテガンラサキニンナリマッケモークサカリ
（うん。） まつなく多ガ紫にまつなく碧まつとう、葉メリ

シット。

すまと。

A ャハシアレアノンマナンカノアノノグサノドースケノ
やねりアルみの為などみの野草のどうぬけの

ノグサンナカエアノムラダチ（Bンラダチ~~~~ハ一。）ガ
野草の中にあのむらだち（ひらだち~~~~はい。）ガ

ヘアッテルト（Bハ一。）アレンマノアラヨエチヨーハ（Bハ一ハ一。）
はいっていふと、（はい。）あれは鳥のあれどよ胃腸か（はいはい。）

（134） ガエナッタンダヨ。ニガエニガエクスリガネ。（Bアレ
丈夫にまつたのどよ。にかいにかい葉ガね。あれを

ンナクイマス…。）ヤハシヤクツィーナ…ドーブウタッテ
みんな食います…。）ヤハシ薬草…動物がって

ヤクツィーヤクツイクワンカラクータホーガエントカラサ。
薬草薬草と食わないから食つたホーガいいのどからね。

エソレテアノマムラダチナルベクアヒルメシ
ええそれで豆のまあむらだちをなべくあの昼飯と

ク一コロンナッタラオエムラダチソノカマテカルナヤ
食べよ頃にあつたらおいひらだちを冬の鍋で刈るや

ナシテ…。アソソノカマテモテキウリオアホラ
など…。あの冬の鍋できゅうりをあのそれ

（135） コスッテアノ（Bン。）キガンテテノワアノカマニネー
こすってあの（うん。）きさんでといふのはあの鍋にねえ

(B ソー デスネー。) コアコアコー シテ エー ケソエデ エ
そうですねえ。こ^トこ^トこ^トして ええ け削いて ええ。

(139)
クワンケ ナンダスケテ = ゲーカラッ。

食べなければならぬのだから、にかいから。

B エヤ モチロー アノ ヒガシ (140)
いや 餅糰の あの 東の オカサンガ (141) エキ! キレル
(142)
ドキワ アノ アカエロー (143) エヤシリガ (144) タベテアテ エワシッタ
時には あの あ年の 沖ヤシガ 食べないと 言われると
(145)
テーガ マタ ヤマカラ アツイ メ シテ オリテ キテ
あうか、 まお 山から 署い 同に みて 下りて 来て
(146)
スズバネ マッテ オトツアンガ (147) エワ・シャルヨーネ (A アー。) カマテ
流み場に 徒って、 おとおさんか 言われるよ^うに (ああ。) 錦て
(148)
ヨーシテ ケズッテ (A ナマミソデー。) ソン ナカエ ナマミス
こうして 剥って 歩き場でねえ。 その 中に 生水を
(149)
エレテ コア シテ---。 ソレ マタ エマテモ ワスレラレマセン。
入れて こう して---。 それ また 今でも 忘れられません。

~~~~~。

A アー ヒヤッコエ リ オクヤマノ タベテア (150) ミズオネ ヒヤッコエ  
ああ つめない その 奥山の つめない 水をね、 ひやっこい  
ミズ---。 オラ ホーテ エーハ ホーゲンワ マー ヒヤッコエ  
水---。 私どもの 方で 言えは 方言は まあ ひやっこい  
テンタ。 ヒヤッコエ ミズ エレテ リー シテ リノ ミツ エレテ  
と言うの。 つめない 水を 入れて そうして その く味噌を入れて  
(152)  
カンモーシテ エ クーノガ ~~~~~ ソレ トッテモ ~~~~~。  
かきまわして ええ 食うのか それ とても

B ソー シテ シマエネ オメアサン ゴハンガ" ノコルト ツレ コンタ"  
そして ほいに あんと 御飯か 強き それと こんどは  
ゴハン ストント エレテ ソー シテ コー シテ オエテ  
御飯を すとんと 入れて そして こう して おいて  
タベルンデスエネ。(笑)  
食べるので"すよ。

A <sup>(153)</sup> ワット ユー アノ キオ マゲタ キノ マー エタ…。  
輪つなごと 言う あの 木と ゆげの 木の まみ 不足…。

## 注記

1. ツレー それき。裁縫のことを指す。
2. イツ [itsu] 制約
3. イソガシ一 [isogashi:] 司令官は公務員で最も若く普通語化している。
4. ガッコー [gakko:] コーは関東で普通語の才媛豪傑よりやや古いかあるいはほとんど豊かな夢のように思われる。
5. オエテノ一 オエルは自勅詞ヲ行下一段終る。ノ一は[no:] 間接助詞。感動をあらわし、同意を示めたり、納得させようとするも様で相手に訴える。親しい間柄の用上、同聲、同下に対して用いる。強烈感動訴えの時は関東の[no:] によることがある。長岡を中心とする中越地方の普通語といえる。魚沼川市西川原ではno:は温故不忘新よくまいりおこる。
6. オショアグツ [osawatotsu] 佐渡郡・中頃城郡の一朝と陣の声樂は[gwu] 等を保存している。
7. ヤマ 四畠のあるところと山島とさす。四畠はすべて傾斜地にある。ヤマエデル一は四立月の交に農作業を開始すること。
8. セキウチ 箭吾中。十二月正月前のこと。
9. オメアサン [omesan] あいな。二人称代名詞が間接助詞的に用いられる。品位はわざくさい。最も丁寧になるとオマエサマとなる。
10. アッテスコテ 「あれですよ」の意が間接助詞的に用いられる。ことなを思ひつかぬ時[en]。コテは[kote] 文末に来て強い感動と主張と時に及ぼぐの意味をこめて相手に訴える終助詞。著者のことばの中に「コトイ」「コトイネ」が見える。岩野井に「コトヨ」富山井に「コト一。コトイネ」声樂町頃城郡魚沼川市西川原に「コトイネ」柏崎・中頃城郡柏崎に「コテヤ」がある。コトヨ>コトイ>コテと変つたが。コテは佐渡、下越、中越、魚沼、頃城に広い。南魚沼郡湯沢町のコテヤ [koteya] はコトヤレの変化であろう。コテヤレとも言ふ。銘粒でも「コテヤ」といふ。IIの演47参照。
11. オーアザ [o:aza]
12. [sitorigure:] si>si ai>e 中頃城の影響でヒ>シが多い。

13. オシエル 「お針と歎えるお針御正といふのか」の意。
14. オメアサンタ お前様方の変化であるとの所の意で、司令者の家姓とする。
15. マルト 柏崎市中浜にあり、某家の屋号。漢字不明。
16. コラッタ 來られしの変化、ラベルの連用形の徑直化。レルラルは崩し落としてしまわれてひる軽い第3者助動詞で、駕員、近隣の親しい人につづくも候。主婦は主人を連用辞等として用ひる。親しく多い圓下につづくも用ひる。連用辞等が面前に居る場合はもと敬意の深い「シャル名」を用ひることもある。レルラルは室町中期連用辞等が不在の場面に主として用ひられるといつロドリゲスの文書が参考になる。在園市方面ではラルが変化してラル・ラヌと云ふところがある。これらのレルラルは共通語（現代の）の普及したものでなくもと古いものと思われる。
17. ニシ 屋号西。司令の高橋氏（屋号小西）の本家にある。
18. シモ1 拾屋の瀬の太宗女店のサ字の姓。
19. ドーサノヤ 屋号 道正の大屋と書くが、道正は「どうしよう」（何をしようか）から起つたという伝説がある。
20. オッカサン 一家の主婦で中年以上の人にいふ。
21. 1エハリ スイハリ縫い針の変化で針仕事のこと。江戸時代で宮城若崎にも行なわれてゐる事。錦織でオハリ・ハクモンとも云う。佐渡・南魚沼郡にはハシン、佐渡にはイハシン・スイモンがある。
22. ソンガーナー [Songa:]
23. エッコーメーナ [ettō:me:nā] 形容動詞の連体形。一丁前年の変化。湯院はナである。南魚沼郡では湯院・トノである。
24. リンガン [Songan] が。まろ[Songana] [Songano]のようにもきこえる。終止形はリンガダ、それの連体形が連用形がよく分らない。そんぞ、そんぞにの意。頸城地方にソンガナ、ソングナ、魚沼郡にソングダ、ソングニ、ソングノがあり、西蒲原郡にリンガナがある。江戸時代語それか（それ既）の変化であろう）。コンガダ、リンガダ、アンガダ、ドンガダと併存をする形容動詞である、佐渡のそねえに、

そのうに、その人（佐渡方言特異）南魚沼郡湯沢町の「オネー」等は「その様に」の変化であろう。

25. ワンネーデモ 織われないけれどもの変化。デモは連接の接続助詞で中頸城・東頸城系の特徴形。その影響である。昔詣の字にもよく古き老人流であり、ドモとも言い又ドモデモの中間音と思われる時もある。この場合には中間音的である。中越三奈市付近では口モノと訓る。

26. 形容動詞の連体形「普通の」の義。あとに「和服は織われる」のような意味のことばが省略されている。

27. キセルクレーワの次に「織われるようになる」のような語が略されている。

28. ネは協助詞「に」の変化。

29. ソタ"ラッ"キ 行者は変化したり消えたりする傾向がある。時はよくドキと活字化する。

30. [nō:te]。[na:te]となることもある。明治生れにはウ者便が多く、大正生れには[~o:te]というア者便(仮名)が多い。

31. コマルスケア [suKE:]は [suKE:]とも。また [suKE] のように可とえる場合もある。

32. ハダコ 肌着ではなく、夏着のひとえ物を言う。例句 サブイノニハダコ エケマエデ エタ 寒いのにひとえ一枚で居た。

33. ネアケラ なればの変化。次に「ならない」の意が略されている。ニアを終止形ケラを助詞と考えるかよい。

34. シマダスケア シはヒシの中間でシに近い。暇ださかいの変化。スケアはスケー・スケーニ・スケードともある。縫ぬ原因を表わす接続助詞で最も普通に用いられる。エニ・エネは明治生れの老人が用いる。スケア類は近世上方方言サカイ・サカイニ・サカイデの変化である。諸源は「焼ひ」と言われる。佐渡郡にサカイ・サカヤ・サケ・スキヤ・スケ・スケン・サケニ・(シ)があり、上越地方にサカイ・サケ・シケ・シケー・スケ・スカエラがあり、中越地方にスケア・スケー・スカエスケアニ・ツケンがあり、下越地方にスカエ・スカ・スカエデ、ス

カヂニ・サカニ・サカデ・サカ・サヂ(粟島)・カヂがある。サカイ  
森の外に佐渡にシ、上越にリイ・リイニ・サエ、中越にセー・ンダ  
ン・ンダンガ・ンナンガ、新潟にモンガ・ンガ・ニ・エニ、下越に  
サニ・ンダンガある。サカイはサカイテシヒモに岩手・盛岡まで、  
サカイニは春森までひびでいる。

35. ミンーナ 強調するため等二音節を長音化する傾向がある。ミを脱落してシーナと言うこともあります。38番空

36. シテテはシライテ・シラオイテの変化。

37. ホエテ をうして リシラ>ソイラ>ソエラ>ホエテ

38. ソーナ みんなの変化、割合全くの意。語頭のム・ミは変化したり脱落したりする。

39. キミ きめ(肌)の変化。手のきめかの意。

40. ヨーサリ [jō:sari] 旅。金に対する旅。古语ゆうさりの変化。  
上越・中越地方で広く使われ、なお中越にはヨーサル(刈羽郡古志羽)  
ヨーサレ(中条栗郡など)があり、上越にはヨーサ・バンゲ、佐渡  
にはヨーマ・エーマがある。新潟でバンゲは夕食と晩・夜の両義がある。  
バンゲは夕方の意として中越・柏崎地方、今晚の意で東蒲原  
郡で用いられる。

41. [Kiretsimōte] モは農事モが短い。

42. [arate]

43. [dʒidʒo:] [dʒi:ɔ:]ではないようと思われる。

44. 何年位。結婚後何年間ぐらいかの意。

45. トデー [tode:] 後者ドデーヤスミの略語であろう。中世近世語  
の時代に由来するか。(方言では西蒲原郡。青森秋田では佐科、小  
佐科の意味で用いられている。)トデーヤスミは農耕の休み(野休み  
或灌休みとも云う)の一様で、お盆(現在は八月)と稱め(社祭とも云う)  
の中間に、嫁が実家へ帰り休戻しつゝ、衣服、修理などする  
休みを云う、現在は少なくなった。内宮・上吉文中に該則されて  
いる。

46. ツズクル ぼろ(縫縫)を述べ。ぼろをボータリとも言ふ、着古し

古文版と併記するのである。

47. ノノノノ [nonono:] 形容名词 + 根助词 + 阴指助词 エと「休みであつた」などか複数されていふ。

48. コテ 10参照

49. カス"イテ 力行五段活用連用形賓役形。背負つて運ぶこと。カツグ カツイテの変化。北陸地方と新潟県の特殊形(「日本之活地圖」参照)馬にカス"カスとも言ふ。

50. トショリ 老人で、若者の姑(義母)をさす。

51. トショウガタスケーとは、若く早く、若者か実家に帰り不在となると家庭に困るほどの老齢であつたといふこと。

52. ソノツトメ トテヤスミに実家へ帰ることをさしてゐる。それを「勤め」と表現するのは、この風習で嫁が実家に帰り時には十日間以上もそこで生活することは、衣食は全く特に食と大切にしない者としては、嫁家にそれだけプラスすることと、嫁家の歓迎するところであり、従つてそれは嫁家に対する嫁のひとつのつとめとなるといふ意味が感じられるからであろう。

53. マー [mai:] 鳥の古名といふより umā > mā > ma と変化したものであろう。南北ではシマが多く、日本之活地圖作成の際の調査では伊豫城御南都にわざかに「マ」があつた。他處では青森に集中し岩手県でのびてゐる。若者 A男 はシマと言つてゐる。

54. トッサン [tottsan] トトサンの変化。オトッサンより品位は低いカツヤク(隣りの町高柳町石黒方面から来る人々使うといふ)よりは高い。トッサンテモンウの表現はトツンウを踏めた表現である。

55. ヨーガタ エフヨは中越の特色。

56. スス"シナッテ 深しく坐つての変化。形容詞は活底を失つたりして活用が單純化したり、無活用化したりする。特にシク活用にはスヌシユーといふうの賓役形がなく、シクモ共く、シ・シ一の一形となる。

57. シトリエ ひとせいの変化。ソエはソー [so:] といふ動詞の連用形リイ > エから来る名詞、リーオセオウの変化。セオウフセオーフソーソー+伊豫城・伊豫城跡・魚沼湖から新潟県につづき、岩手県に

もあり、ソウは中國城。中魚況跡にある。(日本方言地圖)

58. アレンナッテ あれにたってで終つての意。本文に××印をつけるが、言いかかへともえらかもしない。

59. トサエニヤー [tosaepjā:] とセ [tosepjā:] とし。領接条件の接続助詞、時間的連續起閑像を表わす。と、ヒするとに省略。該澤は「と端には」であろう。北陸から入って来る語であろう。今は老人語で、若者にもよく使われる。中國城郊に(タラ)サイナがあり、佐渡にトセーカ・トセニヤ・トセニヤ、佐渡外海林にサイコニヤ(但し外海林方言界には「ならば」「である」と注止められたりするようである。)がある。金剛崎にみる岐阜三重濱瀬山口にトサイガ、岐阜三重濱瀬山にトセーカ、高麗にサイナ、石川鶴見名古屋千尋舟にトサイニ、トサイニヤ、タサイニヤがある。(「日本國語大辭典」「トサイガ考」をの他による。)

60. テヤノサカ 地名古今の坂

61. ツナギ 動詞ツナグの連用形から来る名詞。繋ぎ。列を繋つての意。

62. シヨー [sjø:] [sjm:] の変化。シフシユは越後沖縄の特徴、最。人少。

63. エワッコ [ewakko] のようでもあり [jowakkō] のようでもある。該澤は「上っこ」か。ウは極えると [jmeru] [jøeru] と違うようにエ、エ、ヨと変化する地名がある。魚沼方面にもある傾向である。コは東北的接觸語か。上荷・上積みの意で、正常な分量の荷物の上に更におまけの荷を上積みすること。

64. コンガニ＝ ウンガイニの変化。形容動詞の連用形。終止形はコンガタ。こんなに。又4参照。手振で大きい形を示したものであろう。該澤は「この板に」(ロド・ゲスル在大太郎) 参考、中國地方にコナナ(こんな) コンナメ(こんなに) 三重九州にコゲン、山陰九州にコギヤン、米紀にコガイナユガエニがある、魚沼方面ではコンゲニアコゲニである、佐渡はコンゲニとコネニである。

65. ガン (gan) 準借助詞 物、の物、の。本来は格助詞であろう。ガガ基本形、を化に接觸形を加える。ガンは越後金剛と佐渡羽の外海林地方にあきが、この外が北志部魚沼羽中強城郡に、また東中國

郡・中経・下総地方にアンが用いられる。餘猿でも中経の影響でアンル行がわれる。ガングはのを、ガンニはのにの意である。これに付して佐渡郡には「ノンタ」、西領城・伊領城及び下越の岩舟郡に「ナンダ」、ナタ」という語がある。ガンは「歴後」の「ガン」ヒ古われ若駒であるが、奥羽・北陸地方から福島県まで分布している。

66. リヨーマルケ 雨來ねの意。荷物を二ヶ所でしまること。東北地方富山周辺にも分布するマルケル(来ねる)から来る説詞がマルケ。

67. ジンダ こんどはの意で、若い頃にせめて現在はの意。

68. トケクラ 地名極倉

69. ノアユー そろそろで「そんち」の意、ユーナ[イロ:]に近い。

70. ユーエッタヨーノモン 老者はその名前を思い出せずこう言った。軽自動車のことであろう。

71. オナシユト オナシユトの変化。オナシは形容詞、オナシダは形容動詞。中世語に「オナシ」があつたからその殘存か。大正七年生れの男子は「オナナジ」と云っている。上越地方(最も共通化されといふとされる)ではオナジ、オナジヒ用い、魚沼郡や越から山形・福島県にかけてオナシ、オナシ、オナナジが用いられていく。

72. オモニスル 重荷をするの変化であろう。重い荷物を肩負って歩くこと。

73. トーヤマ 遠い耕作地や山。流傳は巣山。トーヤマ一考察。

74. アキダケワネー 沢に「(鳥が使われたから)よかつた」の意が有體されたのであろう。

75. モモシキ 脱衣 農作業用の腰から下になく筒状の身代もの。ハラケ。

76. ヘヤガリ ヒルアガリの変化。ヒツヘは中越の山間部の特色。昼食を左へ手に家に帰ること。

77. シテ 「のせる」の連用形 シセハニ既に活用する。川岸を肩負うての意。

78. ゴロゼン 屋号五郎左衛門

79. ショー [シロ:]に近い。

80. ヘア [ha:] ハヤ > ハエ > ヘア 助詞 もう、すでに。長崎半上田市  
ヘー。上越市ハエ。兩側厚部岩野半上田市ハイ。南魚沼羽川群馬半上  
田じくハーと言う。
81. ヨーサリ 40 参照
82. ラレッドキ 「居られる時」の変化。聖歎のラレルは16参照。
83. デス工ネ デスは共通語の丁寧の助動詞。工は活用語の終止形や助  
詞に接続し、時には下にネ・ヤ等の助詞を伴なって、軽い感動、ア  
クション観察の物を表わす詠えの終助詞。ネは共通語的開拓助詞。
84. ソレタケドツ ソレは朝晩における他の人の時間的距離的不利  
条件を指すのである。ドツは割合程度を表わす副助詞ズツの変  
化。
85. アンネ ガン = > ガンネ > アンネと変化した語。接続助詞「のに」  
に当たる。アンは既存(64 参照)のガンの変化、ネは連接条件を示  
す接続助詞「ニ」の変化したもの。アンネは其後の特殊形である。  
アンネ ガンネは終助詞となることがある。ガニは北陸にも関東にも  
もある。ガンニ類は東頃城、中頃城北部から中越・下越にかけて分  
布するのみで、頃城地方と佐渡郡、山形柴米沢にはニニ類(ニン  
ニ、ナニ、ンニ、ンネ)があり、中魚沼郡西頃城郡にはセンニ、ヤ  
ンネがある。
86. ドラー [dō:] 「左よ」の変化か。体言や準体助詞が、ガン、ノに接続  
して活用はない。多く断ち切れて個字に詠える終助詞。同様日本に特  
しく用いられる。ア空に克る時は工と加えドー工と言う。その変化を考  
えられる終助詞ドは[ド]である。中越・西頃城郡中央の西川原にあ  
り、長崎山梨半上田にも見られる。
87. ノー 5 参照
88. アエ あれの変化であることは。
89. ナシタカナ 表示どうしたか等の意味か、シテでは「共通語訳」に近い  
意味。
91. モケローラ 調査地の土官錦根
92. ミナツ ニナツのように書きこえる。「鶴川方言集」にミナツヒ有

る。物を荷よろづ用いる特製の木へよれ。

93. テバ「と言えは」の変化。文語の已能形と同形で「言うと・言うので」の意。

94. エ 88 参照

95. ハー こゝではのうは広い〔わち〕訴えへ心が流れからか。

96. ト-1 虚いの接続に接助詞「ノ」がついた。古い表現であろうか。  
東方の意である。

97. 「アルンダン」の末尾の「ン」。「モノガ」「モンガ」(5の注85参照)の変化か。モンガは形式名詞モノに接助詞か接続の接続助詞となる「ガ」がついてできた、理由・原因を表わす接続助詞であり、こゝでは実に接助詞となるもの。アルンダンはあるのだからの意。石川半四郎志雄の「アルモンノ」(あるからの意、国立国語研究所録音資料集1968年)が参考になる。「モンガ」は鏡城及び頸城御内にある。坐下の跡後に広い「ンガ」という接続助詞体この後の変化したものである。理由を表わす助詞としては「サカイ」等の説よりも古い形であろう。

98. エカシタの「シ」は尊敬の助動詞シャルの連用形の変化したもの。前期江戸語において「エカシタ」等へのシへの形が普通に用いられるところからそのと関係がある。鏡城ではレルラレル(16参照)よりも新しく敬意も高いようである。魚況方面でも用いられる。

99. エカサカルサ サは時を表わす接尾語。行く時来る時、行きにも帰りにも、往復の意。ゆくさくを見ればとも飽かな岩室の田中によると一つ私にはれ 太窓

100. アエウ 四段助詞アエウの促音便形。音を失うる、移動する意。古語ありく・あみくの変化。アイウ(重頸城御守螺町・静岡・長野・岐阜・高知)、アイグ(伊勢・岩船町・柏崎市)、アク(頸城(御))(私田)、アーウ(信州鳥取)ヤーウ(静岡)、アラク(富山)、アラグ(山形)

101. スケ一 31 参照

102. ナンギー 形容詞、具体的に苦しいつらいさま、難儀を形容詞化(左の)、形容動詞もある、

103. リー エンダ "「もう見るのを」の変化で、「もうぞ」と人のことをば  
を肯定して見る時用いる省略句。

104. ヒッカケ = ヒはシに似た音。「引っ掛け」であろう。ヒッカケとは  
ホンカズキ（本筋的かつき方）に牴して軽い物を鷦鷯にかつぐこ  
と云う。左と云は刈草たら四糸、稻たらば五糸とかつぐのがホ  
ンカズキであるが、それを一束ぐらいたかつぐのがヒッカケであると  
云う。」は荷でなくて、助詞であると思ふ。

105. ホドコ フトコロの変化 懐

106. ミツタクネー 形容詞 みつともない。見なくなしの変化か。中領城  
から中越、東蒲原郡から東北半で今存する語云々か、其後はミットモナ  
イ、ミットムナイ、ミトメナイ と云う。

107. ミタドコ 複合名詞 佐載、外モチ

108. オトコモリ 男守り。子守りは女性の令抱をつるから男守りを見若  
しいと考える。

109. ラクンナ ラクナの言いあやまりか。

110. ムツムツ 効物 力をこめて重い物を運ぶさま。根免よく物事をす  
るさまにもさうといふ。柴下では中領城・西領城郡で「根免よく仕  
事をするさま」下題で「手の勢いよくはかどるさま」領城地方と佐  
渡郡で「まとめて仕事を精出す」と云うといふ。

111. ニオド [niodo] とさと云ふ。詠方に左存すると [njō: hodo] 左といふ。  
種裔化しき事が添えで云ふ。「におひ」の変化。縞・葛・わら等をう  
す高く積んで高のにお(堆)積立くさんじの意。上越地方と佐渡地  
方でニオ、中領城には他にニヨ、ニゴもあり、柴下又一般にニユ  
・ニヨー・ニゴーと云う。

112. エニ エニの変化。エニヒル言ふ。理由集団根拠勘穢などと表す  
接続助詞。明治生まれの老人が用ひる。接続は未詳であるが次の様な  
例から考えると、接続助詞「に」の前にあたりの者「へ」~「エ」がはいつ  
るもののように考えられる。

くれてやるに、はよ取れ取れ。(「黒姫の苦歌」)(柳崎市清水谷)  
どうしても娘にもらひたい、て言うに、向こうへゆしこんな。(「黒

姫ハ若説」)(柏崎市大字折尾輝延)

コネーウジヤ アンジゴンダ= ハーバー 帰って来る中は心配するから、わらしげ。(新潟県岩船郡朝日林高根川川会方言資料第二巻)  
高いにまつと重けてもろいそい。(新潟県富士郡「日本國語大辞典」)  
ルガは毛か表るといけないに置の上によく並べて置けよ。(伊豆大島「日本國語大辞典」)

俺は此處に居る。(愛知県南設楽郡「日本國語大辞典」)

おじさんも見てるぞ。(長野県上田「日本國語大辞典」)

同じ理由を表わす接続助詞「モンガ」「スケア」との異同についてはまだよく分らない。スケアが最も新しいもののように思われるがエニとモンガの転互については何とも言えない。

113.サ 間接助詞。サと表意に充ち時もある。確認の気持をこめて詮しかける時の語。さかんに用ひるが親しい間接の者に使い、口上などにも少し丁寧に詮す時は普通的助詞木をつけサネと言う。サは普通的といえないのでどうか。

114.テーソー [te:sɔ:] 有様属性・姿等の意か。読法不明。詮者は「傳相」ではなむかと言つた。老人語である。大正七年生れの男子からの語を教つてゐる。用例を記す。

アーノ テーソダ ダメタコテー。(あんな有様では駄目だよ。)

オラドコノ テーソー ミラクダサイ。(私の家の様子を見て下さい。(ひどいよ)。(とりちらしていざ時人へ訪問を受けた場合など)

アコンケワ ウチジュー モンガ ランテンリ エト エーテ ウチナカガ ワリースケア、アレガ ホンリ ジゴクノ テーソーダコテー。(あそこの家は家中の者が勝手なことを言って内仲が悪いから、あれが本家の地獄の有様といふものだよ。)

本文は「よい場合」の例をつか、こゝに引いた用例はみな「悪い場合」に限られている。

115 1ア- 広い[ɔ:] のよ}である。普通[nɔ:]が多いのを「が」多く訴える時は広くなるよ}である。

116 1ア- [uɔ:]

117. カズキアゲネカラと言うのが正常の表現法と思う。ここでは断定のダが介入している。～ダカラ(～のなら、であるなら)という言い方もあるから、間違いとはいえないまでと帰る言い方と思う。

118. ダンガノー ダモンガノーの変化。ダは断定、モンガは理由の助詞(97参照)ノーは訴えの間接助詞。

119. タアカリ 四極え終了後の時制。田上カリ。

120. ドヨ [dojo] せまい〇、鬼の土用

121. ノグサカリ 本文中に説明がでてくる。黒姫山麓のアカエロ(赤平)、ツキノコビロニー、ミナワ等の多くのつく換算地で跡草刈りをする。

122. クロエメ はじめ意味がわからなかつた。クレメのようにもきこえた。クロエメの前の割合にアノという读があるようである。斜音と文末化後の調査で分かつを点があるので、この割合の本文を次のように対正する。

ノグサカリテノガ アノ クロエメノ フモトデ ハジマルンデ  
スエネ。 あの 黒姫山の 麓で

クロニメ ツロイメ ツロエメ クロエメ クレメ と変化したのであろう。この方言では人夫を落とす俗名がある。黒姫山は集落の東南東にある889.5mの山で高柳町と鶴川地区とへおでている。

123. ヒリヨー 料金を支払って左のひ人夫、本左の賃金、その慣習。軽じて手帳による間食の薦など、駄賃、用例 ヒリヨータノミエッテキタし人夫を頼みに行って来る)ヒリヨーセンターカー ナックモードスマル(人夫賃が高くなってしまって困る)コドモニヒリヨーカク(手帳にお駄賃を与える)ヒリヨートリ(田舎人夫)

ヒリヨーは中越魚沼地方群馬若狭に広く今ある語。但し中越の三島郡ではヒロー若狭では日傭人夫をヒヌットリといふ。全国的にはヒヨーという語が広い。

124. シマネフマセル 馬にひませるといふのはうまやに草を投げ入れ食わさせる、ませて肥らすこと。

125. シタゴエ 下肥の意で基肥のことであろう。

126. ドースケ [do:suke] 植物名 みやまあぶらすすき ドーは節のこ

とて、節の所がぬけて折れやすいうことからの余裕といわれている。宮北町では〔do:pike〕、三島郡玄宮崎町でドニケというといふ。南魚沼郡六日町ではドニケは別の植物かりやすをさすといふ。

127. グラシグシャ 剥剥水分の多いさま。

128. ムラダチ 植物名 层形科のひきおこし。本丸にその説明かたてある。南魚沼郡六日町でもムラダチ、魚沼川市ではオガラムラダチといふ。ムラダチとは鱗がり生える多年草といふ。

129. ツガヤ〔tsugaya〕 接続助詞、瞬間的な想起関係を表わす順接条件を示す。～と。～すると。前者は「トサエニヤー」(注59参照)と同じと説明している。極めて古い表現らしく、今のはころ菴の序にも多くいよいし、太正時代の老人も知る古い語である。語源も未詳であるが、ツバ「と」「と」という、「て」等の変化した助詞であろうか。「ガヤ」については上代東国語「ガヘ」(連接「～する上に」「～する一方で」)が想ひあわせらるが、一方「ガ」は「トコテンガ」(すると)「モンガ」(から)(5の85、1の97参照)等の「ガ」と同じく接続助詞から来る接続助詞、「ヤ」は間接助詞と考えておこう。結局「ツガヤ」は「と」、「～と」と「～と」と「やいなや」の妙を意であろうか。

130. ニゴーナル 若くなるの使者便 ひきおこしに含まれてゐる成分のプロジェクトランはにかく健胃剤であるといふ。中野蘭山はひきおこしに一箱の臭氣があることを言つたといふ。

131. ドーエ〔dō:e〕 ですよ。強い断定を用賀や同上などに丁寧に訴える表現。「ドー」は注86に説明した強い断定の助詞、それには注83の丁寧觀念の許えへ助詞「エ」を含むと連説。

132. エンメーヤー ひきおこの別名。延命草。前者は薄葉江原子く草草を採取し製劑していふ。

133. シラサギ mu>N 語彙にシラサギくそつは松崎市外州羽部の老人のことばによくみるのこと。例むしろんしろ、むらおちはノガリヤ人の仲間で、若草木梁めつ滑脚にしがといふことである。

134. ガエニ 形容助詞の連用形。強く、丈夫に之意。ガエはガイの変化であろう。ガイは我意又は累(け)・経(け)・実(げ)を語源とする説があ

る方言であり、方言としては関東、北陸、滋賀・近畿地方の地方に分布している。上越地方で「縁や物が出来て強い」、魚沼中越地方で「物事が大きくなり強い」と荒川修理岩等の意味で使われ、山形福島県に「えかる」とはである。

135. ガイクスリ にかい化季成分。前述のプロジェクトランをさす。
136. カマニ「鎌で」である、「鎌に」と言つたのは、鎌の方を動かさず固定して、きゅうりを動かして鎌の刃に當てて切りきざむからであろう。
137. コーコー こに少さい身振がわつたのであろう。次にあるきゅうりを「ケツグ」動振をしたのであろう。
138. テソグ 父故用動詞 今は接続語。漢字學に「コソグ」がある。中越地方に「コーグル・コグル」という語がある。コスはコは先・木が。ソグは左讀ソク(刃物などで攻撃めにけすりおとす意)の変化か。信濃郡西蒲原郡上越地方ではヘズル、ハツルといふ。
139. スケアデ サカイデの変化。スケアーデヒもさうであろう。老人語。近世上方では「さかい・さかいに」よりも「さかいで」が多く用いられるといふ。スケアーデが南魚沼郡湯沢町に、スカデニが越後北部にスカイデ・スカデが西頸城・魚沼・西河原にあり。この類は慶國本流・富山柴木郡・徳島にもある。
140. ヒガシ 屋号 東
141. オッカサン こゝの所不明瞭で分らぬが、証書に記しかめて文字化した。オッカサンは立婦といふ名づかすことば。
142. エキキレルドキ 死剝・臓経をさう。「息の切れる時」の変化。
143. アカエイロアカヒラ 地名赤平アカヒラの変化。黒姫山の麓にあり西山のようじに鬼薪草刈りをする場所、冷たい水がわいている。
144. エヤシリ 証書に記して「冷汁」の変化をと分つた。hi>i>e i>i。冷汁は煮汁に対することは、冷水に生味噌を入れたり等を入れて汁。観の野外の作業の時ワッパ(ゆげ物の弁当)に清水を入れて味、又、石器の冷汁(ヒヤジル)は冷たく冷やしたものであるが餅類のは火を通さないけれども、長崎鹿児島奄美大島のヒヤシリも同様の味噌汁らしい。ヒヤシリ 岩船郡山北町。

145. エワシツタ 98 参照

146. メスル 回する。目にあうともいい。体験すること。

147. スズバ スズミバ（漁み場）の変化か。上に木がまいかみアカリ、や  
やキリカで漁しい所、遠い耕地や山地に分佈に行つた時、併んでリ  
食事をしておりするに適する場所。簡単な小屋を依りそれとスズバと  
いうこともあつたらしい。本文を <sup>スズバニ</sup> <sub>あす</sub> 場に坐って上部正す。

148. オトツツアン 一家の主人。こゝでは族長を指す。

149. ナマミズ 生れ。山のデツボ（湯れかちよろちよろと流れ去り、あるいは  
モロモロと溶き去りすところ、出壺か）の生れ。

150. ヒヤコエ [Sjakkoe] ひやこいの変化。形容詞づめ左い。學下には  
外にハッコイ（南魚沼郡・上越地方）シャッコエ（中越谷）がある。

151. ハベテー [Tsibete:] 形容詞づめ左いの変化。頸城地方にハベタ  
イ、ハビタイ、ハブタイ、ツベタイ、中越にハベタイ、ハベテー、  
ツベタエ、佐渡にハベテーがある。

152. カンモース [Kammō:su] 互換動詞、挽持する、かきまぜる。

カンモースは學下に広く外にガリモス（頸城地方）カヌス、カンマス  
(東關原郡) カクムス(佐渡郡) がある。東北地方関東地方岩手等地  
ではカンマスが有力である。語源は頸城地方でカエモース山形英で  
カンマワスと言うことから「かきまわす」であろうと思われる。

153. ワハハ 僵言ではヒイ、輪つね。曲木製の食器、ここんでは食器を入れる  
并當用の器具。南魚沼郡ではメンハハと言つてゐる。

## 2. 冬の仕事

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

- A 高橋 清治 男 明治35年
- B 高橋ケエノ 女 明治34年
- C 高橋ミサノ 女 明治39年
- D(用会)金持隼一郎 男 明治45年

- C オメサン ソーネ スミ ヤクニモ ジョーステ<sup>(1)</sup> エサシタシ。  
あるほどは ほんとに 炭を 燃くにも 上手で いらっしゃる。
- B ソー ソー。 ソッテ マタ スミヤキ一スル アー エカゲンネ  
そう そう それで また 炭焼きを する、 ああ いいかげんに  
オモーオド<sup>(2)</sup> ヤクカ・ヤカンネ コンタマタ エネカリタ。  
思うほど<sup>~~~</sup> 焚人か 焚かないに こんどは また 稲刈る。
- A グスケーソー。(B笑) アノ スミヤキテノモ アッテスエネ  
ぞからさあ。 あの 炭焼きといふのも あれですよ。  
ジブンデモツ マー ムシガスカンケラ マー ヤランネー  
自分で まあ 実が 好かなければ、 まあ やられないと  
ショーバエダガホ。<sup>(Bソードネ。(笑))</sup> シトガカネ クレッカラ  
職業<sup>カバ</sup>かね。<sup>(カバ) (笑)</sup> 人か 金と やみから  
ヤレナンタツ<sup>(3)</sup> マー ヤランネー ショーバエテスエネ。<sup>(Bソード</sup>  
やれなどと言つたって まあ やられないと 職業ですよ。<sup>ソード</sup>  
ソード<sup>(4)</sup>。 ) ハー マー スミノ エーノガ テキタ デタ ドキニヤ  
そうぞ。 ) はい、 まあ 炭の いいのか できと おと 時には

キモチ ヨーテ。

気持か よくて。

B ソレガ" タノシミデネー。

それが 楽しみでねえ。

A ハー。

ない。

C ソーカホー。

そかねえ。

B ソーデスコテー。 エヤ オンホ アノ スミヤキ シテ マタ  
そうですよ。 ハヤ ほんとに あの 岩焼を して、 ま

ヤスマ ヒマモ ホー コンダ" マタ エネカリ シテ サー  
休み 曜日も なく こんどは また 稲刈る して、 さあ

サカヤエ エク シガ" キマッタテ ヨー ホーラ アレア  
酒屋へ 行く 日が 滝まつたと なると、 そら あれは

オヤサンケ ナラン コレア オヤサンケ ナランテテ(笑) ナカナカ  
清まさなければ" ならない これは 清まさなければ" ならないといって、 なかなか

(A ダスケツヤー。) ハー ヨー エジャー ナカタコテー オマエサンワ。  
だからさあ。 はい 容易では まからず あなたは。

オラ ドコテ"モ アッダッタド"モ マー デ"カセキタ"ケア  
私の 主人も あれであっさりと 物 お稼ぎだけ

シネアカタスケアホ アッデスト"モ リッデモ シネアカラ シネアヨーネ  
しなかつてから あれですけれども、 それでも しなければ" しないように

(13) オメアサン シゴト カラメテルスケネ。(A ソー ソー。) アー ヤー  
あなた 仕事を持っていますからね。 そう そう。 ああ やあ

エチバン アレナノワ アッ"スコテネ ハー フユガ"コエウ シアケ  
いちばん あれるのは あれですよ。 ああ 冬圓いは しなければ

ナラント ユー アー ヘー ヨーガタ ヘー カマデモ クワデモ  
ならないと いう、 あれ もう 夕方 も 金額でも 金額でも

(14) ソトニヤー オカンネアド ホテ バンネ エキヤ フルヤラ  
外には 置かれないと、 ほら 晩に 雪は 降るやら

(15) ワカラント"ナンテテ サウキタッテ アエシテ キタンダガ"…。  
今からないとどうといって 大騒ぎして あれして 来るのを"が"…。

C エマー キカエカ" ャルスケアテヨーナ モンダ"モ ソッデモ ナカナカ  
今は 機械か すみからといつたようだ ものだけれども、 それでも なかなか  
(16) エツガシテオー。  
やせしくてねえ。

B エヤ キカエモ キカエネ オワレンガ"ンモネー (A ソーイー。)  
いや、 機械も、 機械に 追われるのもねえ (モモコ)。

エツガシースケー (A ハー。) アー。 エヤ ホンネ ムカシワ  
やせいいから、 (はい。) ああ。 いや ほんとに 若は

(17) センバ"デ" コエテ アー ジッソクモ コケバ オーヨナベ"デ" (A  
千把で 枝いて ああ 十達も 抜けば 大夜なべで

(18) ソーダ"ネ。) スタング"ン。 エーマー オマエサン キカエデ  
そささね。) あつらのを"から。 今は あなた 機械で

(20) (19) ナンビ"クモ ココ"テガ"ンダ"スケー ナカナカ…。  
何百(束)も 抜こうといふのを"から なかなか…。

C オラガ" ワー"ケー ドキ センバ"デ" コエタ モンデ"ステ。  
私どもの 若い 時々 千把で" 抜いた もんですよ。

B アー オラモ コエタエネ アー。  
あれ 私どもも 抜しましよ ああ。

C ホエテ リレカラ アシフミダ"ナンテテ アシデ" ドンドンドンドン"…。  
そして それから 足踏みを"など"といって 送で どんどんどんどん"…。

A ヨーダ"ネ ドンドンドンドント オマエ (ヨダ) コエテ オマエ。  
そらるね、 ピんとんピんとんと あんぬ (あぬ) 扱いて あんぬ。

(スス)  
アレガ マタ ホツツアラガテノガ テテ オマエ (笑) (波次オラ)  
あれか また ほつあらといいうのか 売て あんぬ (やうの)

アトシマツガ ヨエジヤ ネーテネ。

後蛇末か 容易では 無くてね。

B ヨエジヤ ネー。 オラ ウチソノウ コクノワ シトバンシネ  
容易では ない。 わたしの 家ののは 扱くのは 一晩に  
(23) ニヤクグレー コクドモ (アラー) (24) コンダ ホツツアラガ デルスケア  
二百(束)くらい 扱くけれども、 ああ。 こんどは ほつあらが 去るから、  
マエーンケ マエンケ ホツツアラガチガ フタバソグレー カカルンダ。  
毎日 毎日 ほつあら扱きか 二晩くらい カカリのな。

A ソー。  
そう。

B アー ヤ ナカナカ アッタ"ナー。  
ああ いや おがおか あれをねえ。

C ワーケー ドキノ アノ ホツツアラオトシガ ヤーテー。  
若い 暮の あの ほつあら落としか いやで…。

B イヤ ホンーネ…。  
いや ほんとうに…。

A ネムイテガソネ オマエ…。  
眠いというのに あんぬ…。

B ッ。  
うん

C ホンーネ アンガソコト オモーナラ (25) エマ ヘー ミガ  
ほんとうに あんぬ ことを 恩おうなら 今は もう 身か

ブルブル シルヨーダコテー。

ぶるぶる シルヨーダコテー。

3 ソーハー。 ホーテ アッテスコテー ソレマテ オマエサン アレー  
そうそう。 そして あれですよ。 それまで あなた あれ

トクペー<sup>(26)</sup> / ショーガ ハジメテネー (A ソーハー。) アレオ キカエオ  
徳兵衛の 長か 始めてねえ そー。 あれと 機械と

モッテ キテ シラッタ！ダガ<sup>(27)</sup> アレ メーワ オメアサン エー シテ  
持って 来て されたへぞ“か”。 あれ ンス前は あなた 結いをして

モアテ<sup>(28)</sup> (A ソーダネー。) ジュサンビヨーグレーズツ<sup>(29)</sup> シクガンダガ  
もらって そうち“ねえ。” ナミ俵くらいすつ 石巻くのぞ“か”、

オラ サンシローノ コナエタ<sup>(30)</sup> シナッタ オジジト エー シテ  
私どもは 三四郎の この間 死なれど おじいさんヒ 結いをして

モロータラ ヘー ジビヨーグレー シクトセー＝ヤー アノ タテ<sup>(31)</sup>  
もらつたら、 もう 俵くらい 石巻くと あの 「たて」を

ミー チョコチョコ、 チョコチョコト エカレルンダ。~~~~~。  
見に ちょこちょこ ちょこちょこと 行かれ子のぞ。

(A アー。) ホーシテ ヤスミニ ナルト オマエサン サツマエモー<sup>(32)</sup>  
ああ。) そして 休みに なみと あなた さつま牛と

デッケー ナベテ<sup>(33)</sup> エゼテテ ソレ マー ヒトハラ クテ ソレカラ  
大きい 锅で ゆでておいて それを まあ 一腹 食って、 それから

マタ ソノ ウスシキガ<sup>(34)</sup> オエルト コーンダ<sup>(35)</sup> ゴハン タエテ  
また その 四石巻<sup>(36)</sup> が 終ると こんどは ニ飯を 炊いて

ダエコゼー シトナベ ニテ ソーテ<sup>(37)</sup> マタ ソレ ミンナ  
大根菜を ひき鍋 煮て それで また それを みんな

タベタンダスケニー。 (A マー ソーダネ。) タスケ ムカシワ  
食べぬのがからねえ。 まあ そろそろね。 から 落ちは

ユーテ アッダコテー マー シゴトモ シタシ キカラシゴトデ  
これで あれですよ まあ 仕事も しかし、 力仕事で

アッタスケー アッテスコテネ タベタコテー。  
あつから あれですよ 食べなせんぞよ。

C マー エマ ケー モチナンタッテ ホンノ シトツカ シトツハン  
まあ 今は おはきなどといつところで ほんの ひとつか ほんつま  
グレー タベレバ チーセーー タベルガ<sup>(33)</sup> ムカシヤ マー ナナツヤ  
くらい 食べれば 小さいのを 食べさか、 告は まあ 七つや  
ヤツツ アッダーノ タベタノー。  
ハツ あれねえ 食べねえ。

B マー エネカリガ<sup>（A）</sup> オエタテテ ケー モチ セーヤ リレ マッテテ  
まあ 終りか<sup>（A）</sup> 終ったといって おはきを すれば それを 待つて  
タベタ モンダシ<sup>（A ソー。）</sup> コロバ シャゲダテテ<sup>（A ン。）</sup>  
食べな ものなし、 そう。 唐箸上げだといって さん。  
エネ コキヤゲレバ シテ リレ マタ タベタ モンダシサ。  
縁を 枝上けると 作て それを まだ 食べな ものなし。

C ホーテ カリヤゲノ ケー モチダナンテ モッテ アノ ヤマエモホリ  
そして メリリ上げの おはきなどといつて 持って あの 山芋振りに  
エクナンティッテノー。  
行くなどといつてねえ…。

B (笑) ホンーネ…。  
ほんとうに…。

A (笑)

B ダスケア ヒックショアーワ ナカナカ ツギー ツギート ヘ オエタ  
だから 百姓は なかなか ぬ ぬ ぬ ぬ 終った

(34) シータ オー マンーテ エキノ フルマジャー ツギー ツギート  
引いたか 無く、 まで 雪の 降るまでは クルマ オー

(35) ヤマーモマテ ホランケ ナラヌスケア (笑) (A ソード"オード")  
山芋まで 振らなければならぬから、 そうねえ。

ヨーエナ モンジヤ オー。 (笑)

容易な ものでは ない。

C ホーテ エマ マー キカエダ"トモ ムカシワ コメツキタナント  
そして 今は まあ 機械がけれども 昔は 米搗きなどといつて

(37) (38) クルマヤエ ヨーサリ エチジカンネ エッピースツツ ツクアンダナント  
車屋 夜 一時間に 一俵すつ 搗くのなどと、

(39) ネネー デテ エチジカン タット クルマヤマテ リノ コメ アゲ  
寝ないでいて 一時間 そつと 車屋へ その 米を 揚げて

エッタナンカ シタリネー。

行つたりなど じなりねえ。

B ソード"ソード"。 オラ アッテスエホ アノ アレー ハンダ"ワラ  
うだら そだら。 私は あれですよ、 あの あれと 半俵。

エッピース カズカンネアスケ ハンダ"ワラズツツ カズ"イテ (A ソード")  
一俵 かつがれまいから 半俵すつ かついて、 そう。

ホエテ アノ アエッタ モンタ"ガ" アッダコテシ"タスケネ  
そして あの 歩いた 先のとが、 あらわよね、 たから

(42) クルマヤバンガ クットセヤー マー ヨル シトバンジュー ツカーテ。  
車屋 置か 来ると まあ 夜 一晩中 使って…。

(A ソード") ハー。  
そうねえ。 はい。

A ホーシテ エマミテー ハタヒモノガ" エケヤ エードモ アノ  
そして 今みらいに 猛き牛かき よけねば いいけれども あの

ジブンワ オメー ワラジ ハエテ (B (笑) ワラジ ハエテ)  
時令は あんた わらじと 疲れて わらじと 疲いて。

シメジテ<sup>(44)</sup> オメー。(B (笑) サー。) ソーシテ アシカ" 4ベトアーテ  
濕って あんた さあ。 そして 逃が 淋なくて  
4ベトアーテ マ コマタッケナ。  
淋なくて まあ 困ったっけね。

B ヤー カセガ" フイテ マーンデ アノ キノアガ" ツケーテ コ  
やあ、風か 吹いて ひどく あの 木の葉か つかえて

コネー" ナンテテ ユー ドキヤ シモガレデソア<sup>(47)</sup> (A ソー。)  
(水か) 来ないでなどと いふ 噂は、 痴咲咲咲でね、 そ。

ホーテ エマ サッキナモ エワッシャルヨー" オレ ミソテガ<sup>(48)</sup>  
そして 今 あっさり おっしゃる ように ほら みぞれか

フルンダン<sup>(49)</sup> (A ソー。) アー クルマヤ/マウチニ ソーラ  
降るから、 ああ 車座の 回もうちに そうち

ツカシ ナンワテテ エクバンモ オメアサン ヨトギ<sup>(50)</sup> シタユテ。  
揚かねば ならぬいわといつて 無理 あんた 猶毛抱 しなよ。

A マー ソーネー。  
まあ そうな"ねえ。

B ハーハー。エヤー ホンネ ナカナカ ムカシ) ハナシ ショーナラ  
はいはい、 ハヤア ほんとに なかなか 萌の 敬と しようなら

エマー マンデ<sup>(51)</sup> …。 デモ マー アッ"スコテ ムカシシヨーダニア<sup>(52)</sup> ナラ  
今は まるで<sup>(53)</sup> …。 でも まあ あれですよ、 萌のようであろうなら

トショリモ コンガ<sup>(54)</sup> ユト シテランネー デテ 4リグ"レア  
年寄りも こんな ことを していられなく さて 座くらい

ヘロワンケ ナンガ。 (A ソーダ"ネ。) ッダドモ マー エマ  
捨わなければ ならぬいが…。 そうな"ね、 だけれども まあ 今は

ニワノ アイテ カンソーキノ ハン シルグレーナ モンテ<sup>(57)</sup>  
作業の 相手は 乾燥器の 番を するくらいの もので

(A イヤ。) ニワノ アイテニヤ ナラシスケー エードモ。<sup>(58)</sup>  
(そう。) 作業の 相手には ならないから いいけれども。

C ソッデモ エリガシーワ。(笑)  
それでし ゃらしいわ。

B (笑) エソガシ。(笑) ホンネ エソガシ。  
やらしい。 ほんとうに やらしい。

C (笑) ホン… ナニ ノーカ<sup>(59)</sup> キカエニ シルエヌ<sup>(60)</sup>  
なんと。 かえって 機械に するから  
エリガシーヨーナ キガ シラー。  
やらしい ような 気が するよ。

B ソーダホー。(C イヤ。) キカエヌ ツカウルスケー。 やー<sup>(61)</sup>  
そうちねえ。(ああ。) 機械に 使われるから。 やあ。  
アコノ ウチデ エッケン オエタナンテ エーバ ヘー マルデ<sup>(62)</sup>  
あそこの 家で 一軒 終ったなどと 言えば もう まで  
キケゲーサワギタモン。  
えらい騒ぎだから。

A ソー アホー。  
そうちねえ。

B ハー。  
はい。

A ヤー アノ コメツキナンテ ユーテト エッペア カツイデ<sup>(63)</sup>  
やあ、あの 米搗きなどと ゆうと いっぽい カついで  
エカンネ<sup>(64)</sup> ャツガ ハンダワラグレー カツガシラ リーシラ  
行けない 奴か 半俵くらい カつかせて そして

ヤラレルガ"ンカ" エッチャン <sup>(68)</sup> セ"ナカ"タガ" アー。  
遣られうのか" いちばん セ"ナカ"タガ" ああ。

B ツーレ オメサン ウチエ モッテ キテ ソレ コンダ" センゴクネ  
それを あんな 家へ 持って 来て それを こんどは 千石通しに  
カケテ <sup>(68)</sup> (A ソア"ダ"ネー。) ト"ミテ" アオッテ <sup>(68)</sup> (A ソア。) ソアシテ  
かけて、 (そうぞ"ねえ。) 唐突で あおって、 (そう。) そして  
タワラエ ツメル。  
僕に 話める。

A ハー。

はい。

C ソッテモ マダ" チットワ エーコテ。 ソノ ムカシワ アノ  
それで もまだ" ケレハ いいさ。 ケの 著は あの  
ウスデモ" サンニンデモ ゴニンモ トントン ツイタモンダ"テガ"  
ヨド 三人で( 五人も とんとんと 鳴いたものか" といふが、  
(B アー) ザマナ モンワ オゴトグコテー。<sup>(70)</sup>  
ああ。 体のない 者は 大変だ。

B ソア"ソア。 ソノ コロダ"ロア アノ フミガ"ラテ"ノモ アッタガ"ナ  
キ" きう。 ケの こうぞ"うう。 あの 踏み唐" といふのも あつたのは、  
(A ソア"ネー。) ストアンストアントネー。  
そうぞ"ねえ。 すとんすとんとねえ。

A ジガ"ラテ"カナ ハー。  
地唐" と言ふのかね、 はい。

B ジガ"ラテ"ガ"ンダ"カ エガ"ララガ"ンダ"カ <sup>(73)</sup> シラント"モ…。 エヤ  
地唐" と言ふのか えがらと言ふのか 知らないけれど…。 ハヤ  
ナカナカ アッダコテキ ホンネ サー ~~~~~ <sup>(74)</sup> シー。  
とかななか あれですか ほんとに ~~~~~ <sup>(74)</sup> ~~~~~。

A エマ リレ オマエ ネテテテ<sup>x</sup> オマエ (笑) (B笑) テレビ  
今は それを あんな 痴でいて あんな テレビを  
ミテテテ<sup>x</sup> コメツキ シテラレルガ"ンダ。 エーガンダトモ  
みていて 米揚さと していられるの?。 いいの?ケルビ"モ  
ソレヲモ ラクダト オモウンガ"ンダスケ (Bハ-イ,) ニンゲンワ  
それでし 楽<sup>ヨリ</sup>と 思わないのがから。 はい。人間は…  
....。(笑)

....。

B (笑) ハー ヒヤヒヤヒヤヒヤト カゼガ サム一 ナッテ キタ  
「ああ ひやひやひやひやと 風が 寒く なって 来た  
ハー バンニヤ エキダ"ローナンラッテ オメサソ ユアナレガ"  
ああ 晩には 雪<sup>ヨシキ</sup>などと 言って、 あそ<sup>ス</sup> 小あられか  
サラサラサラサラト トブルガ"ンネ<sup>(76)</sup> クルマヤガヨエ<sup>(77)</sup> シタモンダー。  
さらさらさらさらと 降るのに 車屋 適いを (おののぞ)。  
ホーエテ コンタ" ホレ フユウチノ アレオ<sup>(78)</sup> シナケ ナンスケネ  
そして こんどは ほれ 各中の あれを しなければならぬから  
ハキモンオ<sup>(81)</sup> コシャワ<sup>(82)</sup> ナンスケ ナンスケ (Aソ-。) サー ワラスグリ  
履物を こしらえなければ ならないから、 (そ。) さあ 薫選りを  
マガ" アレバ シテテ コンタ" ワラハダ"キタ。 (Aソ-ネ。)  
間か" あれば" において、 こんどは 薫印<sup>シタマサ</sup>を。 (そぞね。)  
ウスシキ ワラハダ"キ。 (Aソ-。) ハー。 ワラハダ"キモ  
伊石屋<sup>ヨシヤ</sup> 薫印<sup>シタマサ</sup>。 (そ。) はい。 薫印<sup>シタマサ</sup>も  
エーチューヤ マー バン<sup>(83)</sup> シネケラ マネアワンカタシ ウスシキモ  
一昼夜 まあ 番を しなければ 間に合わなかっし。 伊石屋<sup>ヨシヤ</sup>も  
エーチューヤ シネケラ アトノ コザコザ"ガ" アルスケ  
一昼夜 しなければ 後の 小さ"ハサカ" あるから<sup>(84)</sup>

(87)  
マネアウンカッタシ ネス"ネ オメサソ アレシッタガ"ンダ"。  
間に合わなからし、 寝すに あんぬ あれしていとねた。

C スッデモ ウケニ エル ショウ マタ" エー ガ"ンダ"ガ" ゴロスケ<sup>(88)</sup>  
それでも 家に いは 豊は まだ" いいのな"か、 五郎四九の

(89)  
オジーサンタ"ケワ ソレ オヤシテ コンタ" サカヤエ エコート  
おじいさん達は それを 清まして こんどは 酒屋へ 行こうと  
モーンタ"ガ" (B ウン。) ウケノ ショニ ミンナ シテ  
思うのな"か、 (うん。) 家の 豊に みんな して。

(90)  
カコエマテ" シテ サカヤエ エコートガ"ンダ"ガ" (B タスケー。)  
雪風い生て して 酒屋へ 行こうといのな"か、 (な"から。)

(91)  
オシマエニ ムカシン ショウ ワラーテ マエンケ クー ア  
「結局」、 (昔の 豊は 笑って)、「毎日 食う あの

(92)  
ヤクモケマテ" ユネテ エカンケ ナラン ~~~~~ (A B (完))  
焼餅まで こねて 行かなければ ならない ~~~~

(93)  
ナンテ ハナシガ" アルガ"ンネ (B 1ヤー ホンネ)  
などといつた 言いか" あるのに、 (1ヤー ほんね)

(94)  
オジーサンタ"ケノ サカヤン ドキヤ ホンネ (B ナカナカ)  
おじいさん達の 酒屋の 時は ほんとに (なかなか…。)

(95)  
「ンケア" モンダッタコテ。  
そんな ものをつたさ。

B ソレガ マタ ミンナ テシゴ"トダ"スケー (C アー。) (A タスケー。)  
それが まだ みんな チイ仕事な"から (ああ。) (な"から。)

(96)  
ヨーエジア ナカッタコテ。 エヤー ホンネ オラ エンデ"ジヤー  
容易では なからなさ。 いや ほんとい 無の 主人は

(97)  
マ一 サカヤニ デランネアカッタドモ ヤツ"リ マタ ホカ!  
まあ 酒屋に 当らぬまかづけられどり、 ヤツ"リ まあ マタの

(99)

タケントリ シタリ シテラッタモンダスケネ オーカタ オメアサン  
駄猿取りと レスリ して いられぬものぞ“から 大方 あんそ

(100)

ウチシゴトワ シトリテ シタガ ~~アウノ~~<sup>××</sup>アタマエ キミガ  
内仕事は ひとりで したが その上に きめかわ

(101)

(102)

ワリーガンデ エビノ アタマアタマネ ガニノメミテアネ ナツテ  
悪いので 指の 頸頸に 蟹の貝みをいに なつて

(103)

アカギリガ キレテ ( A リー<sup>一</sup>。 ) ソーレ コンド エドノ  
皮膚か 切れて、 ( そぞねえ。 ) それを こんど オナの

ツルベ アケルネ カネノ クサリタ<sup>ニ</sup>ヤー<sup>ホ</sup> ( A リー<sup>一</sup>。 )  
つまべを 上げ<sup>る</sup>に 金の 鎖をうね、 そ<sup>う</sup>。

ガラグラグラグラット ジャボーント オチタタッテ コンタ コー アケル  
がらがら<sup>ガラ</sup> じやほんと 落ちても こんびく こうに 上げ<sup>る</sup>

ドキガ オメアサン コレガ ヒリヒリト ~~~~ 一。 ホンネ  
咚<sup>カ</sup> あんそ こるか ひりひりヒ ~~~~ ねえ。 ほんとに

エマヲモ…。 ( A ヒリヒリト エビガ サケルヨーダスケネー。 )  
今で<sup>も</sup>…。 ヒリヒリヒ 指<sup>カ</sup> 裂けよ<sup>う</sup>からねえ。

(104)

ア一。 エマヲモ オモートサエニヤ ミガ サワサウト  
うん。 今で<sup>も</sup> 思<sup>う</sup>と 身<sup>カ</sup> ざわざわと

シルヨーダ。

するよう<sup>な</sup>。

(105)

C オマエサンタノ ウチノ エドガ フケアンデネー。  
あなた<sup>の</sup> 家の オナ<sup>か</sup> 深いもので<sup>ねえ。</sup>

(106)

A ダスケア オラ<sup>ニ</sup>コノ ( 笑 ) エドガ フケアンデ アッタエネ…。  
お<sup>か</sup>から 私の お<sup>か</sup>の オナ<sup>か</sup> 深いもので<sup>あれで<sup>す</sup>よ…。</sup>

(笑)

(107)

C エヤー……。

いやあ……。

B オラ ウチノエドワ ヴァーフコア ネアカッタ。 (A フー。)  
私の家の井戸は そんなに深く さかう。

アーハー エマ ンーナ ホモーナラ アッダコテ  
ああ 今 みんな と もうおうまじ あれがよ。

エマ / ショウ ホンネナンカ シマセシユラー。

今の ~~最~~ 事者にひと しゃせんよ。

A マー ヴィアネー (B ンー。) スイツ エッレバ グーット アゲテ  
抜 そくそくねえ。 (クン。) スウツト 入れれば ぐうっと G(?) 上げて  
クレルスケ<sup>108</sup> オメー (笑) (B 笑) セウ ネアガソダガー。  
くねきから あんな 世話をしないんだよ。

(笑)

B (笑) ヴィーダ ヴィーダ。  
ううう ううう。

## 注記

1. サシ、尊敬の助動詞「サッシャル」の連用形。一般動詞・力変動詞の連用形に接続する。I の注 98 エカシタ参照。
2. エカゲンネ形容動詞 かそり、相当 「ハいが減た」の変化。
3. オモーオド オモーホドの変化。[h]はかすかである。
4. ダスケヤー ソー の ソー 終助詞・開拓助詞 さ。よ。ね。力又はサー (I の 113 参照)との差については未詳。ソーやは南魚沼羽でも用いられ、太今井にもある。(太今井のは終助詞)
5. オンネ ホンニの変化。
6. ネー [nə:] 形容詞「無い」の連用形。
7. サカヤエエク 酒屋に行く。酒造り従業員として登録すること。十一月から四月甲午まで関東・中京・大阪方面に多く存在。三國崎と題えて駿馬場へ行く人が多かったので「上州行き・上州帰り」と言う語が使われるといふ。元保勘 (1830~1843) に古従者数が急躍的に増加したと言われる。昭和 40 年の旧里姓村の統計によれば労働人口 1409 人中古従者が 643 人 (55.6%) を占め、この中 70% が酒造工である。従者は 14 歳から古従仕に出る。
8. ヨー [jō:] 言うの変化、さまたをと言うと、さまやいなどに近い表現であろう。
9. オラドコ 私の所の意で、若者が自分の丈をさしていふ。
10. アッダドモ あれぞ“かれども”的意で「牠しかつたが」ということか。
11. アッズドモ 「それなどではちがつたけれども」という心持が、

- 1ス. シネアカラ シネアヨー木 玄鏡<sup>サカナ</sup>としろければしろいように、それはそれでそれで相当の意。
13. シゴトカラメテル 仕事を持つてゐること。縦める。他動詞、身边に持つこと。「カラマルコドモガネー」(刈羽郡刈羽村)のカラマルは他動詞で母親にまつわりつき年のかかる幼児を持つていい意。南魚沼郡湯沢町では「コドモオカラメル」と他動詞に用いる。身邊におき世話をよくみる意である。
14. ド [dō] ドーと長音にもさう。終助詞、男女とも用い、洋学風は國下の者に念を押したり注意をうながしたりして強く働きかける時用い。 「ぞ」の変化と考えられる。(南魚沼地方は「ゾ」という。)親しい同士に持しては「ゼ」の変化と考えられる「デ・デー」と用い。ドは長野県上田・広島・島原、ドーは静岡・志摩・島原にある。
15. アエシテ 仕事を片付け冬に備えてといふよることを指すが。
16. エツガシテ 形容詞たらしいの連用形+テ。終止形(この場合は経時化している)を連用形に用いる。大阪方言の言い方に似ている。
17. センバ 稲穂と同様千把抜きの語である。既出の「カラハシ」(IIの注83コロバシャゲ参照)より能率的とことからついを名でであろう。鉢のとがった櫛状の板を立穂部とする稲穂具で、大正初年まで使われた。
18. ジツオク [tsō] の意がある。十束、一束は八把から成る。
19. フタソダシ 旗尾が消えているが、「あつてのたから」の意。
20. ガンダ 準体助詞ガン+歟定の助動詞ダ Iの注65参照。
21. アシフミ 足踏み筋挽器 大正初年頃から使われた。
22. ボツアラガ ボツアラの多い語りか。24参照。
23. ニヤク ニヒヤクの[h]者を脱落。
24. ポツアラ [tsā] の者は古事記又は[sa]の変化かは未詳。稲穂きの時枝が穂からはなれず穂の一部とともに折れたりしたもの。生れを曰てついて枝と穂からはなれずの茎が後者のボツアラオトシ・ボツアラガチである。「総合民俗語彙」は「穂打ち・棒打」とする語源説があるが、茨城県・静岡県にボツカリ(木の花、なさま)、長野県諏訪。群馬県に

ボッサ（稻穀をとして残す）、左穀・くさみう）、入荷木炭・長崎県・群馬県にボッソラ（十分脱穀できなかった稻穀）があるから、接続應該が該流域であろう。

25. オモーナラ [omo:nara] ときこえる。omo:nara > mononara > omo:nara > omo:nara と変化した語であろう。

26. トクベー 屋号

27. エー [e:] カリの変化 繕い、劳働交換。佐渡郡イイ、佐渡御海村工、中頸城郡エーッコ、南魚沼郡湯沢町エー。

28. モーテ [mō:te] [mōto:te] の変化、トモはきこえないと思う。

29. ピョー [bjō:] 傑 セモヒ〇

30. サンシロー 屋号

31. タテ ミシロ (あしろ、3尺×6尺) を二枚又は三枚縦につなぎ、輪状にして、あしろを軟い土作業場の平面上に立て、扱き終った糞を糞すりまで取めておく、臨時の置き場・窯器。二枚のをニマエタテ、三枚のをサンマエタテと言い、それを八俵分、十五俵分の糞を収容できる。普通語にタテ(鰐)があり、茶や緑を入れる俵といふ。「立て」に由来するか。青森・満鉄・奈良井にこの語があり、堅翁(タテフコ)の略かといふ。(「綜合民族語言」)

タテミーは「タテ見ニ」の変化で、残りの糞を見に行くこと。早く作業を終りたい心理のあらわれを動作。

32. エゼーテ エデーテの変化。ju:te, de:ze エゼル南魚沼郡左志郡エゼル 長崎地方福島県。

33. タベルガ [tabewaga] のようになりこえる。

34. オエタシータ オエタヒータの変化か、「終つ左退いた」か。終つ左を強調した語、オエタヘタガネー(柏崎市「浦えゆく方言」)

35. ヤマーモ [jamaimo] 山芋の変化、音母音とされていく。

36. ソータ [so:a] のようになりこえる。

37. クルマヤ 水車小屋 五六ヶが共同で作つたといふ。米を搗いたり薺を打つたりする。

38. ヨーサリ タカリの変化、夜。中越地方にこの外ヨーサル、ヨーサレ

があり、中頸城郡にヨーサリ・ヨーサ・バンゲがあり、佐渡にはエーマ・ヨーマがある。

39. アンダ ガンダ(の左)の変化。中越の長岡地方の特徴。

40. コメアゲ「米を上げに」の意。つき終える米を畠からとること。

41. アッダコラン アレダコテネの変化。

42. クルマヤバン バンはボンのようにならざる。車座着。北東と違う順番。

43. ハクヒモノ ハキモノの言い継り。

44. シメジテテ このようにならざるが、諸者Bは「シメリガアガッテ」ではならかといふ。諸者Aは前述のようにならざるがもつれるよう不明瞭な発音をすることがある。

45. ケ 回想の助動詞。

46. キノア キノハの変化。ハの脱落

47. シモガレ 露枯れ時で。老人はシモツキ(霜月)といふ諺をほっていふ。十一月のこと。

48. シアル Iの法98参考。

49. ミツテ みぞれ。中頸城郡海野地方・上越市・若狭半島でミツテといふ。この外ミツタ(上越地方)ミツタエキ(上越地方)ミズエキ・ミズエキ(上越)、ミヅレ・ゾブエキ・ザブエキ・ジビエキ(佐渡郡)ミドロ(福島県)がある。

50. グンガ グモンガの変化。左から

51. マウチ 「マウルウチ」の変化。W・Rは脱落するニセがある。

52. ナンワ ナランワの変化。うの脱落

53. ヨトギ 徒施。用例 ヨーベワ オキヤクサンガ トレテ ヨトギシテシモータ。お通夜もヨトギと云ふ、普通後の「夜伽」である。

54. マンデ まるで、まっ左く、この次に「樂まそのだ」という意味のことばが省略されたのである。

55. ヨーダ ヨーナラ 珍しい表現。

56. コンガン カハ(ga)左と思ふ。

56' タリ 稲扱き後の糞に混じている葦屑など、塵。

57. カンゾーキ 粒乾燥器
58. ニワノアイテ ニワシゴトの相手。男子のする報酬等の作業の手伝い。
59. ノーカエ [nō:kāe] 剥剥あおさら。naokasiは naokapi の変化であろうか。長野県の「のうかれ」佐渡郡に「なあか」「なあしか」がある。ノー・ノーコト(南魚沼郡) ナオカ(中頸城郡中越地方中蒲原郡) ノーカ(上越新井市柏崎旧市域) ノカ(上越市)もある。
60. エネ 工の油/火香爐
61. オエタ 自動詞 終つ。
62. キケゲーサワギダモン 気恵い駆きながら。モンはモンガの駆か。
63. カツイテ～～ はつきりしまいか「カツイテエカンネーヤッガ」で、「背負って行けまい奴、つまり私が」の意の様に思われる。
64. カツガシテはカツガセラレテと言うべきところが。
65. エッケン イケベン(一喬)の変化。剥剥。イケ南魚沼郡・長岡市・柏崎市・中越地方・金剛各地・江戸。イットア南魚沼郡。イッカ山形県。イッパンナキ喜平芳平典。
66. セツナカッタ つらかった 精神的・肉体的而義。佐渡郡・関東・東北。
67. センゴク 千石通しの贈 蕪县の名
68. トアミ 唐箕 蕪县の名
69. ザマナ ザマダといふ形容動詞の連体形。体力のない土牛。語源は様か。中越地方では役に立たぬ人・弱虫とザマナシ・ザマタレといひ、佐渡郡で年老い氣力体力の衰えることをザマガノーナルと言う。同郡で力がない、役に立たない、意氣地のないことを人をザマナシと言う。米沢にザマザマシイ・ザマテナイといふ語がある。
70. オゴト オーゴトの経音化。大変
71. フミガラ 足で踏んでつく印。踏痕。唐印。「踏痕印」の略語か、東京都・島根県で言う。
72. ジガラ 地面に印を埋め固めて捺え、片を足で踏んでつく印。地唐印の略か、「総合民族語言」「地面唐印」の意である。江戸の在・埼玉・兵庫・左・右・

73. エガラ 不判。おみいはす在していいのか。
74. さきかけられたい。
75. ニンゲンワ 人間のひうものはやがれまたものと、圓、をそのと  
言ひなが、在のであろう。
76. ロー ゾーの変化 20° > 15° > 10° 経助詞 片葉・叶トのばして3倍  
主張し言えることをあらわす。用上にはては「レ」となる。
77. コアナレ コアラレ、小巣。アナレの語は富山県から新潟県東北地方  
に分布。佐渡郡はアラネ。
78. トブル フル(降り)の言い語り。サラサラトのトの影響か。トブルは  
中越地方で雪や泥の中に足をひきこむこと。
79. クルマヤ 前者河水車小屋へ行き来すること。
80. アレ 次に言うハキモノを思いあせすこう言った。
81. ハキモン はきもの。冬のはき物でワラグツ・シビガラミ・ツマガ  
ケ・ウツカケキビ。
82. コショウ 五段活用動詞コショウの未然形。こしらえる。コシラウの変  
化か、参考コシウ山形米コシャル東北地方コリー蕪城
83. ワラスグリ わら選り 蕎の不要な茎の部分などを乍又は手の形を  
した木製の用具で除き、細工に適するようによくみること。まろ1寸  
×3寸くらいの長四角の板の面に釘の先をブラシ状に並べるもので  
わらをかいやすくする。
84. ワラハタキ ワラハタキの変化。ジョーバイシという薬用の石の上で  
藁をうつて細工に適する物がさにあること、ここでは水車の軸でわ  
らを打つ話である。
85. 水車による藁打ちの見張り。
86. コサコサ こよじまと仕事。例もば薙粉こうせん造り・園子の  
粉ひきなどの細かい仕事がその「ダイセン」(大妻・第妻、主要なもの  
の意)であつたと言う。
87. アレシッタ アレシティタハ変化、傷いていた意。
88. 入デモ 宅地でもソレデモソソデモソスツデモ
89. ゴロスケ/オジーサン 五郎助は座号。説者Aを指す。

90. オヤイ 滅跡詞 がえる。
91. カコエ カコイの変化 困い、憂鬱。
92. オシマエニ オシバエニの感じもすみ、オシマエニの変化、結果とか極端なことを言わばのよろめ意味で、あとへ「ヤクモチ・テコホテ」と修饰する。
93. ヤクモチ 焼き餅。餅を焼いたものではない。エゴモチ・エリゴタングと立ち方。エリゴは薄米のことで、各割薄米などと粉にしき、こねてまみめ、中に味噌・小豆などを入れて焼いて食べる食物。
94. コネテ ヤクモチをコネテ作るのは主婦の毎朝の仕事であるのを、男がしかも前もってこねておくなど多事多忙なことを誇張しておもしろく言つたもの。
95. ~~の部分に「と言つた」のような語が入れば論理的だが、言葉が重なったため書ききれどれない。話者は「テガンネ」(というのにの意)と言つたとするが詭闘である。
96. ソンゲア そんな。Iの添え文参照。
97. エンデ オラエンデは「私の所」くらいの意らしい。わが家<sup>を</sup>し、その近辺もしくは感じかかる。これに似た語オラアタリ・オラッタリ・オラタリがあり、これは反対に近隣を立にしてそれいわが家と食ませる言い方のようである。但しここでは話者が自分の夫をさしている。尾張で近隣をインデと言つたといい、秋田半北都では戸主をイデ、津軽地方では農家の戸主を指してエテと言つたといふ。それと関係があるが、餘根では「オラエンジー」(からえんでは)とも言ひ、要するに該当は不明である。
98. ラレ 先のことを語るのに基礎の助動詞を経るには柏崎市地方の一般的傾向である。
99. ダケントリ 日産の仕事各分を代わる人、駆使取り。ヒヨートリなど。
100. ウケシゴト 屋外の仕事をはじめ家の内側の仕事。
101. アタマエ 「アウ！」といふうな音がこの前にきこえる。話者は「ソノアタマエ」と言ったと言う。「その上に」の意である。
102. キミ キメの変化、肌理である。

103. アカギリ 18里 宇治城跡アギリ・アギレ。南魚沼郡湯沢町アカギレ。  
・松の木、千葉木、椿木等、純州・鳥取州でアカギリ。
104. サワサキト 鶴岡 等々と云ふ。栗城の才と云う。
105. オマエサンタ お前様だ。『お母さん』の後親から若者十の家姓とさ
106. <sup>す</sup>アンテ 「ガント」の変化。ハテ。
107. オラドコ オラドコの変化。私の街、私の家。
108. ニーダーが簡単な水を揚げてやる意。

### 3. 養 爲

話す手

(物語号) (氏名) (性) (生年)

A 高橋 真 男 大正7年

B 高橋マツノ 女 大正元年

C 高橋初枝 女 大正2年

D(同会) 高橋春宣 男 大正15年

D ハイ ヨーセヤ ソーシキノ ホーワ マー ツンナ テードニシテ。  
はい、それで今は 薩式の 方は まあ そんな 程度にして…。

ソレカラ マー アノ エマワ アンマリ ナクナッタンデスガ  
それから まあ あの 今は あまり 無くあるのですが、

ムカシワ アノ ヨーサンガ" ヒジョー = マー ハヤッタンデスガ  
昔は あの 養為か" 非常に まあ 流行しなのですか?"

エチバン ヨーサンガ" オラ ホーテ" サカンナ コロテヤ<sup>(1)</sup> アラ  
一着 養為か" 私どもの方で" 盛んに 墓碑といえど" あれは

エウゴ"にテシタカネー。

いつ 七頭でしらかねえ。

A ヨーサンノ イチバン サカンナ ジブンテ<sup>(2)</sup> キハド<sup>(3)</sup> モチローワ  
養為の いちばん 盛んな 時令といえば" やなり、餅粉は  
ワリヤエニ ヨーサン オンカッタガソ ネアカネー。<sup>(4)</sup> (オンカッタデスネー。  
劇会に 養為は 違がつぬのでは まいがねえ。 (違がつぬではねえ。)

ホカムラテ<sup>"</sup> エウゴー ( C ソーソー。 ) ツツタテ<sup>(5)</sup> プッタドモ<sup>"</sup> ( C  
外の集落で いっぽい ええ ) あつたけれども、

モチローディー ワリヤエニ…。 ) パリ コーテ<sup>"</sup> プッタドモ<sup>"</sup> +  
餅粉でよ 剧会に…。 ) あの 食ってあつたけれども、私どもの

ホー アンマリ カワソカッタンサネ。<sup>(6)</sup> デモ センゴダッタはアカネー<sup>(7)</sup>  
方は あまり 飼わなかつたのですよ。 でも 戰後であつたからかねえ、

エチダエニ<sup>(8)</sup> フォータノワネー。<sup>(9)</sup> ( C センゴデシヨーネー。 ) ネー。  
いちどに ~~xx~~ 飼つたのはねえ。 ( 戰後でよ)ねえ。 ) ねえ。

( リアーデスコテー。 ) センゼンモ ソヤ エッペー<sup>(10)</sup> ( C チッタ<sup>(11)</sup>  
そろですか。 戰前も をんなに いっしょに。 ゲシハ

ハ一。 ) カッタ<sup>(11)</sup> シトワ アッタドモサ一ネ。 ダドモ マー<sup>(12)</sup>  
はい。 飼つた人は あつかけれどもさ。 レカリ、まあ

ブラクノ カストシテ シイツル シトノ カストシテ エッペアン  
集落の 数として、 飼育する 人の 数として いつはいに

ナッタノワ センゴダッタコレネ。 ( C センゴデスコテネー。 ) ハー。  
まつたのは 戰後であつたさね。 ( 戰後ですさね。 ) はい。

センゼンワ ソヤ<sup>(12)</sup> アノアーブラクテモ ゴニンヤ ロクニン  
戦前は そろあのあめ 塚落でし クレヤ 六人の

シーウ カーテ<sup>(13)</sup> アッタドモ アーミンナワ カワソカッタネー<sup>(14)</sup>  
おれは 飼つて あつかけれども あんなに みんなは 飼われなかつたね。

ハ一。

はい。

C カワソカッタヨーデスネー。  
飼われなかつたよですねえ。

A アノー オラガ マー アッデスユテ アノー オー<sup>(16)</sup> ジュニサンカ  
あのう 私どもが おみ あれで もよ あのう おテ ナニシカ

マー オマエサンガタ オレヨリウ マー トシガ エッペタスケア  
まあ あなたがよ 私よりは まあ 毎日 多いから

アッタドモ アノー モトワ ホレ ガッヨー オエレバ スグ  
あのう あの 落は おれ 学校か 終わる すぐに

(17) エトシキタナンラッテ ミンナ マー エキマシタコレネ。 エ  
糸引などなどと書いて みんな まあ 行きました。

ロクネンセーガ オエレ… エマノ マー… (C リヤー ソア。) モトワ  
六年生か 終れ… 今の まあ… ( そうちう。 ) 著は

A1 ジンジヨン シャーガッター オエレバ オエタ… (18) リ ) ジブンワ  
あの 鳩音小学校か 終れば 終った…。その 時令は

ンダドモ オラ ホーワ アンマリ カエコウ ( B ヘシマセンカッタ。)  
レカリ 私どもの 方は あまり 鶯は ~ ( まだせんでした。 )

カワソカッタ ネカネー。 ( C カワソカッタデス…。 ) ヨーサンツオ。  
飼われたからでないかねえ。 ( かわなからでです。 ) 番巻はねえ。

( C ハー。 ) マー カーテタ シトモ アッタドモ リヤー サカンダ  
はい。 まあ 飼っていた 人も あつかけれども そろ 盛んでは

ネアカッタ。 センゴラッタ (22) ネアカ エチバン エッペア カタノワネ コノ  
ながつた。 戰後であつたではないか、いちばん 左くさん 飼つたのはね、この

ブラクデワネー。 ( C エチバン カータノワ センゴジャ  
集落ではねえ。 いちばん 飼つたのは 戰後では

ネアデスカ ハー。 ) ハー。  
ないですか はい。 ) はい。

B オラミテアン テガシ<sup>(23)</sup> ネアモ カエコ カーテ…。  
私の家のよろに 人生か なくて やを 飼って…。

A ソーソー ホントドアノ キナミ= カエマシタコレ ハー。  
そうちう、 ほとんと あり 鶯並みに 飼いました、 はい。

B ソレデ コドモニモ マタ ポン) スカート カーテ  
それで お傍にし まあ お盒の スカートを 置って

マルド ナンカッテ コドモニ= テツタエ サシテサ。  
やがてなどと書いて お傍に けいと させてさ、

- A シカシ アレ エクリヨーシンガ" フソクシタ ソア ュー タンケモ  
しかし あれは 依料品か 不足しむ もう いふ 質問  
アッタシネー。 (B ソアデスネー。) ソレカラ ホカニ ソア  
あつたねえ。 もうですねえ。 を他から 外に もう  
 タエシタ シューエガ" ナクテ ワクアエニ アノ カイユガ" オガ"  
ないしむ 収入か なくて、 創会に あの 爲か 値が  
 エーカツタスケア ソップ" マー ミンナ カータ クモ<sup>(24)</sup> ダエブ<sup>(25)</sup> エタジン。  
良かつたから それで おみんな 飼つた、 素も だいぶ 植ねたね。  
 (C ソアデスネー。) ハー。 エマノ アノ ランジョマ!<sup>(26)</sup>  
もうですねえ。 ハー。 今 の あ の 元上山の  
 ホチナンカ カエコンシタモ ソノ ジブン (Cリ) ジブンデシタ<sup>(27)</sup>  
基地などと 開墾したのも その 時分、 その 時分で(したね)。  
ハ一 ジブンデ".... ハー。  
その 時分で".... はい。  

B ハーハー ナルホド"ネー。  
はい はい、 さすがにねえ。

A センゴウ ホトンド" マ ノキナミニ カータンダ" オアカ。  
戦後は ほとんど まあ 軒並に 飼つたのでは ないか。  

B ソア ュー ジタイモ<sup>(28)</sup> アリマシタヌー。  
そ いう 時代も ありましたねえ。

A ハ一。  
はい。

C カワニネア ショナンカ ホトンド" オアカタ。  
食われぬない 飢えビ" ほんと" 無かう。

L オラ マー カエマシタシサ。 (A ソアデスネー。) マー  
私の家は まあ 飼いましたさ。 もうですねえ。 まあ

ザラタッタナー。

さらさらねえ。

- A ハー ソッテ アリ一 ムカシワ ナッテモ カーテモ <sup>(28)</sup> アリ コア  
はい、それで あのう 薔薇は なんでも かんでも あの こう
- タナ コショーテー <sup>(29)</sup> オークシテ ゼンブアリ エケメアーズツ  
棚と こらえて、そして 全部 あへ 一枕すつ
- カゴン <sup>(30)</sup> ナカエ ( C ソアーデス。 ) イッテ ソアシテ シタ ケアーテ  
籠の中 ( そうです ) 入れて、そして 下を 替えて
- クッテ カータモ ソノゴ オメー アッデスコテー キブト  
奥川で 食べつけた後 その後 みんな あれですよ 木ごと
- クセラレルナンテテ ジョアリーキヨー エフ <sup>(31)</sup> ( C リー。 ) アリ  
食わせらねるなどと言つて 糸糸 <sup>( はい )</sup> エの
- シイクナンラテ ハヤッテ キタスケア コンド カエヤス一 ナッタテ  
銅音などと言つて はやって 来立から こみど 銅いやすく おっとうヒ
- コトモ アッタンデスネ。 ( C アッタンデシヨー ) ハー。 ソーシテ  
これ あらんますね。 ( あらんじようね。 ) はい。 そして
- ムカシワ ツバ アリ マブシオ コア ワラジモッテ ( C ワラテ  
薔薇は それ あの 萩を こ) 蔵で ( わらて )
- オッタデス ハー。 ) コー コー コー コート <sup>(34)</sup> オッタ一ネ <sup>(35)</sup> ( C  
折つねです、はい。 ) こうこうこうこうヒ 織つたのをねえ (
- ソアソア。 ) コー オショッタバッカミテアン <sup>(36)</sup> ( C ハー。 ) コー シハツツ  
そうぞ。 ) ニテ 折つねだけみたいに <sup>(37)</sup> ( はい。 ) こ) しばって、
- ソレオ コー ヒロケタシタスガネ <sup>(38)</sup> ( C ハウシタ。 ) エマ ツレ  
それを こう あげたもので“おかね”。 ( 違わせぬ。 ) 今は それと
- アノ カエリヨアマブシタナンテテ <sup>(39)</sup> アンガーン モン テキラネ。  
あの 改良 おもしがたなどと言つて、 あんなものか” で見てね。

- C ツレカラ ホレ テテ" コー シルガ"ンカ" <sup>(40)</sup> ハヤッタコテネー。 ( A  
 それから はれ 手で こう するのか" はやりましたさ。  
 アー アー。 ) ヤマン ナッタノガ" <sup>(41)</sup> ( A ヤマン ナッタノネー。 )  
 ああ ああ。 山に なつたのか" 山に なつたのかねえ。  
 オラガ" ツツ" ャー" <sup>(42)</sup> シタンデススケア ( A アー アー アー。 )  
 私ども それで 〜〜〜 じのですが、 ああ ああ ああ。  
 アー アレ アレ エツゴ"ロダ" アレ クク"リ一 コノ一 カワシモ" <sup>(43)</sup>  
 ああ あれ あれは ハツビ頃を。 あれは 隧道、 この 川下の  
 クク"リ一 アイタトシャ <sup>タシ</sup> アケタ コロ ッテスエネツノマヌマブシガ"  
 隧道の 明いと(年は) 明けた 頃 ありますよ、 その 薙カ  
 ハヤッテ キタンデスエホ。  
 はやって 来るんですよ。  
 A ソー セハ" ソラ一 センソ一キ一 ドーネ。 <sup>(45)</sup>  
 そ それは" それは 戦争中ですよ。  
 C センソ一キ一タ"カホ。  
 戦争中ですか。  
 A オラ エネ一カタモン 〜コロ... ジーゴ"ロクネン...  
 私は 戻るから その頃。 ナ五六年...  
 C ハー。  
 はい。  
 D カワシモ" アコダケラ" <sup>(46)</sup> デンサブロードー / オヤジヤ ヤゼンヤ  
 川下の あそこなら 伝三郎の 親爺や 旗左衛門や  
 エノスケノ シュガ" ホラ, タンダ"〜 オラガ" ユドモン ドキ...  
 伊之助の 虹ガ" 握られたの左"〜、 私どもの 子供の 時に。  
 A ハー。  
 はい。

C ハー シア セバ センシ…。  
はい そうすれば 戦峰…。

A ダッカ<sup>(47)</sup> ~~ ジエ~~  
ダッから +…。

D センソ-チユーダ。  
戦争中だ。

C センソ-チユーデスネ。 (A ジューシコ"ホンタ"エホ。)  
戦争中ですね。 (十四五年ですよ。) リリコに  
その頃

エーヴィー ハヤッタ。 リリ メア=ヤー ホレネ (A フン。) マブシワ  
ひとつく はやつた。 それ 前には ほらね (うん。) まぶしう  
ヨゼンテ<sup>(48)</sup> アノ (A フン。) ハリカ<sup>(49)</sup> マエタノガ (A ハー-ハ-ハ-)  
左左猪<sup>アヒ</sup>で みの (うん。) 金を 卷き<sup>ハラフ</sup>のか (はいはいはい)

ハヤッタコテ。 リレカラ コンダ コン カウシモノ アノ-クグリ  
はやつたさ。 先から こんビツは ニの 川下の あのう 隧道

アノ トシー アッデスエヌ ドッカガ マー アレグ ヘー ジック  
明く 年に あれですよ、 どちらか まあ あれど、 もう 直に

ウキソーダ<sup>(50)</sup> ドキ マエバン マエバン オレガ アノ- リ  
着そそごといふ 時、 毎晩 每晩 私が あの その

マブシオ アノ シュ) アガッテ ユラレルマデ ジュニジ ジブンマデ  
まぶしう みの 豊の 上がて 来られるまで ナニ時 時分まで

ヨナベニ リリ シタコトガ アレンデス。 (A ハーン。) ハー。  
夜空に その じとニヒカ あとのです。 (うるん。) はい。

A リア セバ センソ-チユーダ! 一。 (C センソ-チユーデスカ。) アー。  
そうすれば 戦争中ですか。 みみ。  
ジューシコ"ホンタ"! 一。  
十四五年だねえ。

- C ソノコロカラマーカイコガエーポーダッタソーンデショーカネ。  
その頃からまあ番かいつぱいがつるのでよいでしょうかね。
- A アソーダッネ。ダエタエセンソーカラセンゾネカケテ  
ああそうぞね。大体戦争から戦後にかけて  
カエコエーパー カウヨーネナッタンダネ。(Cハ一。) ハー。  
番といつぱい食うようになったのぞね。(はい。) はい。
- C ソノコロオレガオラホカニヤ(笑)オボエテネアンダドモ  
そノ頃私が、私は外には覚えて居ないのを(笑)  
(Aハ一ハ一。) ソノカワシモノシユーガアガッテコラレル  
(はいはい。) その川下の私が上からて来らぬる、  
クボタノ<sup>(51)</sup>オジジガタガオヤカタデ<sup>(52)</sup>(Aハ一。) アガッテコラレル  
久保田のお爺さん方が観方で<sup>(53)</sup>(はい。) 上からて来らぬる  
ドキオレガアシユーガコラレルマデソノマフシオ  
時、私があの私が来られまでそのまぶしと  
オッテ<sup>(Aハ一。)</sup>ホーシテシタガンガ<sup>(53)</sup>ヨーオボエガ<sup>(54)</sup>  
折<sup>(はい。)</sup>そしてしおニヒガよく記憶して  
アリマス<sup>テ。</sup>  
いますよ。
- A クボタノアレダコテエマシカノスケサソジーサンガ  
久保田のあれさま。今の鹿之助さんのお爺さんか  
(Cハ一オジーサンガオヤカタデ。) アレダコテアカ<sup>X</sup>  
(はい。お爺さんか観方で。) あれさま、あの  
カイコモ<sup>(54)</sup>オヤカタダッタコテネ。(Cハ一(完)オヤカタデ  
番<sup>(55)</sup>観方でしたさ。(はい。) 観方で  
アッタ<sup>(55)</sup>。(D~~~~) オラモマーアシトカラ  
したねえ。) (D~~~~) 私もまああの人がから

カイコテ モン ハジメテ ～～ ナロータンダ”。ハ～。  
喬といふものを 始めて 聞ったのさ。 ほい。

B ソレデ“ ケートモ カエナクテサー (A ッヤーツアーツア-) リレデ” ツノ  
それで 羊糸も 買えなくてさあ、 (そ)そらそろ。 それで その  
マータ<sup>(56)</sup> チョッキオ コシラエタリ<sup>(57)</sup> (Aツヤーツアーツア-) スルノテ<sup>(58)</sup>  
真綿の チョッキと こしらえたり (ああそらそらそり。) するので、  
ワタシナシカモ カータンデスエホ。  
わらしほビル 飼つたへですよ。

C ツアーダ。  
そうぞ。

A ヤー ダカラネー オレガ ハジメテサー アノ カイコ カーテサネ  
やあ おからね、 私が 始めてさ あの 喬と 食ってね。  
ホーテ アノ マー アノ モトウ ホレ デンザブローテ  
そして あの まあ、 あの 若は ほれ 伝三郎で  
カータコテ トショリガネ。 (C ッヤーツアーツア-) ホーテ カイコ  
食つたさ、 年寄りがね。 (そ)そ(そ)。 そして 喬と  
コータラ ホレ エチレー ニレー サンレート アノ キン  
飼つたら、 行け 一歳<sup>(59)</sup> 二歳<sup>(60)</sup> 三歳<sup>(61)</sup> と あの 衣  
スクコラネー。 (Cハー。) アノ ドキニ カワオ<sup>××</sup> キン 又ク  
脱ぐよね。 (はい。) あの 時に 皮を、 衣を 脱ぐ  
ドキニ アノ エト-コ- ダシテサーネ ソアシテ コア アッテスコテ  
時に あの 祢を こう 会してね。 そして こう あれですよ  
ソコラ<sup>(62)</sup> マー アノ アッテスコテ アノ- クワハヤ・レカラ  
そこらの まあ あの あれですよ あの<sup>(63)</sup> 桑の葉や それから  
アノ エダニ コ- カクテ ソレデコ-キヌ スクンタコテ。  
あの 枝に こう かけて それで こう 衣と 脱ぐの さ。

ツレオ オレ カイコナンテ ハジメテ コータ一<sup>(62)</sup> 〜 シラン  
それと 私は 番なんて 始めて 飼ったか; 知らない

モンタモンネー。<sup>(63)</sup> ヴァーシテ コー ヤスミニ= カカッタ や  
モノをからねえ。 そして こう 休みに かかったら、

オラ ヤスマ ユーンダネー アノ (C ヴァーヴー<sup>(64)</sup>。) ヤスミニ  
私は 休みと 言うのをねえ、 あの (C そろそろ。) 休みに

カカッタラ コー エト ダシタンダ。 ターマゲテモアテ (C 笑)  
かかったら こう 番を 出したのを。 をかけてはって

ホエカラ りん デンザブローエ リレ カエコ モット エッテサ  
それから その 係三郎へ それと 番と 持って行ってさ、

「オジジ オラ ロコノ カエコワ エナ<sup>(65)</sup> モンタエネ」テ…「ナシタ」<sup>(66)</sup>  
「おじいさん 私の 所の 番は 黒き もんですよ」といふと、「どうした」

テ ユースケ 「エマッカラ ヘーネ アガルガルレヤ ナンレヤ<sup>(67)</sup>  
と 言うから、「今から もうね 上着するのであるかなんぞ」か、

コンガシ キーセーノガ<sup>(68)</sup> エト ダシタエネー」ッタラ ホアシタラ  
こんなに 小さいのか 番と 出しはじめよ」と言つたら、 そうしたら

(笑) ワコアテラ レルノサー。 ホッテ「ドア シタンダ」ローエ  
笑つていられるのさ。 それで「どう (左の左) うるわね、

コラ ドーカ ナッタング<sup>(69)</sup>ローカネ コンガシ ナッテ コンガシ キーセー  
これは どうか あつたのをうかね、 しないに なつて、 こんな 小さい

ナリ シテ エマッカラ エト ハキタシタガ<sup>(70)</sup> アレ アノ ニワヌミ  
なりとして 今から 番と 吐きはじめたが、 あれ あの にわやみと

シテ オキテ ソーシテ ソレカラ エト ハクシダテー アノ  
して 起きて おひして それから 番と 吐くのを"といふ、 あの

デッユー ナルガシダガシネ<sup>(70)</sup> リレー スキトーリモ シネアガシネ  
大きく おさのぞのに、 それと (体が) 透き通りも (ないのに

コンガソ ターセー ウチニ エト ハエタエネーッタラ ソアシタラ  
こんなに 小さい うちに 猫と 吐き出さよと書つたら そろひら。

ワローラ ラッタケヤ 「バーカ ソーラ ソーエ モンドー。<sup>(71)</sup>  
笑って いられぬか、 「ばか それは おしゃれ ねのぞよ。」

カエコテ モンワノ一 (笑) (C笑) やスムゴットラネ <sup>(72)</sup> カワ アノ  
香といふ めはねえ。 体ひじと 皮と 玉の

キン スカンク ナランスク<sup>(73)</sup> (Cソーソー。) ソアシテ ソーエヨ=<sup>(74)</sup>  
衣を 脱ぐわけねばならぬ(おないかい) (そろ そう) そして そろいろように

A1 エトテ "ソレ アノ ヒカケテテ (C ~~~。) ソアシテ  
あの 猫で それと あの ひっかけておいて そして

スク モンドー。」 テテ エヤー ワラータ エト アッタッケ。(笑)  
脱ぐものぞよ」といつて、 ハヤヒ 笑つる ニヒカフ あつたっけ。

(C笑) ハジメテ カエココエシタラ <sup>(75)</sup> オメアサン…。(笑) (C笑)  
初めて 喜んで あんち…。

B ハー ソラ ハジメテドー。 (A キン スグ"ドコ…。) (C  
へえ、 それは 始めてぞよ。 衣と 脱ぐ ところ…。)

ソンガ<sup>(76)</sup> コト…。) (A ハー。) シリマセンカタエネ。 <sup>(77)</sup> カエコ  
そんな こと…。 ( はい。) 知らなかつですよ。 猫と

ケッター カータドモ ムクエデ カーテタスケア (Aハ-) ソンガネ  
少しほ 飼つたけれども 夢中で 飼っていたから ( はい ) そんなに

エト タシテ キン スグナンテ コト シリマセンカタエネ。  
猫と おして 衣と 脱ぐ(なんと言) ニヒナ 知りませんでしたよ。

A ソレネー オラ ハジメ タマゲマシタエネ。 (D ハー。) タマゲテ  
それとねえ 猫は 始め なまけ(れ)たよ。 ( はい。) なまけて

ホーラ ランザブ<sup>(78)</sup> ローラ モッテ エッタ。 (D ハー。) 「ミテクタサイ  
そして 伝三郎へ 持つて行った。 ( はい。) 「みて(な)さい。

オジジ」<sup>(78)</sup> タラ オジジ ワコ<sup>一</sup>テハッカ エアン。 (D ハー。) (C ン。)  
あじいさん」と言つたら おじいさんは 笑つてばかり いるのだ。  
はい。 うん。

アレ アタ<sup>(79)</sup> ヤハシ アノ ホレ キン スクニ シヤーテ アノ  
あれ やはり あの ほら 衣 脱ぐの、 そして あの

(C シカケガ ネアケラ…。) シカケガ ネアケラ 又カンネアカラサ  
仕掛けか なければ…。 仕掛けか なければ 脱がれないからさ。

(C ソアーソアー。) ハー。 ソア エーバネー アノ ソレカラ  
そう そう。 はい。 そ いえばねえ、 あの それから

オレガ キョツケテ ミテ エタガ アノ アー サンレー ヨンレー  
わなしかく 気をつけて 見て いふか、 あの あれ 三歳 四歳

ナッテ ディュー ナッテ エルト アエラ<sup>(80)</sup> 又ギカケタガ<sup>(81)</sup> ヤタラニ  
みて 大きく みて いふと 彼等は 脱ぎかけたのを やたらに

ウゴカストユート<sup>(82)</sup> スゲレーネアノガ<sup>(83)</sup> アルンデスヨ ハー。  
動かすと 脱がれまいのか あるんですよ、 はい。

B ンー。

うん。

C ソアーソアー。ホアテ ヤハリ アレ コア ムイテ クッタタッテ  
そう そう。 そして やはり あれを こうして むいて やっても  
ダメダ~~サ~~。  
ダメだ~~。

A ダメダ<sup>(84)</sup> ハー。 (D ンー。) ヤハシ アレ<sup>一</sup> やはり あれは、 (C アル テード  
ダメだ、 はい。 うん。 やはり あれは、 あ 程度

シッキガ<sup>(85)</sup> アッテ…。 ) ヤツラ コア ヒカカ<sup>一</sup>テテ ソーシテ ソ  
湿度か あって…。 ) 奴等は こう ひつかうて そして その

ズート ソノ スクヨーニ ナッテレンダ。 ソレオ オラガ ソノ  
すうヒ その 脱ぐように なつていさのう。 あれを わらしごとか<sup>一</sup> その

エ ヤスンデ キス 又キハジメルガ"ン コア ウゴ"カストユート  
ええ 休んで 衣と 脱ぎはじめるのを こう 動かすと。

ソノ エトガ" キレケウスケアホ シカケ アッタ ドコ キルスケア  
その 痴か" 切れてしまふから、 仕掛けの あつた 所か" 切れるから、

スケレー"オノガ" アレンデスヨ ハー ハー。  
脱がれないと あそんではよ、 はい はい。

C ソーテ"スネ。  
そうですね。

D ハー セッパリ シゼンガ" エーンテ"スネー。  
はい、 やはり 自然 なのがいいのですねえ。

A マー アノ センゴ" アッテ カイコテモッテ ダイブ ミンガ" マー  
まあ あの 戦後 あれで 働て 大分 みんなが まあ

アレ フクギヨー"タ" タスカッタコラネ ハー。 (C ソー"ソー。) (B  
あれ 剥業で 助かりましたよね、 はい。 (そうそう。)

ソーテ"スネ。) ハー。 ナンタッテ ホカニ オメサン カネ トル  
そうですね。) はい、 なんと言っても 外に みんな 金を 取る  
ドコガ" ネー"ンダ"ンガ" (86)  
所か" 無いのさ"から、 はい。

C ホー"テ ワリエー" アノ コロワ ソー" (87) ネダンモ エカッタ。 (88)  
そして わりあいに あの 頃は そら 値段も よからぬ。

A ネダンモ エカッタ ハー。 ネダン エカッタ。 ホー"テ コメワ ホレ  
値段も よからぬ はい。 値段か よからぬ。 そして 今は それ  
ミンナ ホレ アノ ダ"セダ"セダ"セテテ ミンナ ダサレシツア" (89)  
みんな それ あの おせおせおせといって みんな おせおせられまし。

ホー"テ ネダンワ ホレ セーフ"モ"テ キメテ エテレレバ" オメー" (90)  
そして 値段は それ 政府で 決めて いらんから みんな

ゼン エッパー モラワンネアシサエ。 ダカラ アレダ マー カエコ  
金と なきまんは 落われませんしね。 だから みれど、 まあ 奈と  
カーテ コス"カエ トリ一…。 (C シードースネ。) エマミテアーネ  
金銅で 小遣い 取り…。 そうですね。 うみをいへ  
ホカニ コーバエ エクトカネー (C アレガ" ネアカッタデススケネ。  
外に 工場へ 行へとかねえ。 それか ありませんでしむからねえ。  
) ホカニー コー キヨー ジキヨー ダツテ ネー カッタシ・ヤ ハー。  
外に 公共事業がて 無かつたし、 はい。  
(D ナルホド"ネー。) デ マー ブラク ヨケー アレ カエコ  
なるなどねえ。 それで まあ 崩落か 一層 あれと 奈と  
カータンダ" ネー ロー カネー。 (D ナル…。) ダカラ アレデスコテー  
金銅で なのは ないよろしくねえ。 するほど だから あれですよ。  
マー アノ ミンナ アレダユテー クワ<sup>(91)</sup> エウエタリサー ツレカラ  
まあ あの みんな あれどさ 緑と 植えたりさ、 それから  
アノ コンダ" タナ コショー タリ マブシ コショア" タリ マー  
立の こんどは 樹木を こしらえたり、 おもしと こしらえたり、 まあ  
オラ カエコナント マー カエコテ… オラ トコモ オレ  
私などは 奈など、… まあ 屋と言ふば 私の 外も 私の  
マゴジサンノ アノソア アノ オトートノ シトワサ マー  
祖父の おのそれ おの 爺、 人はさ、 まあ  
ヨーサンノ ギュツイ ンダツタスケ マー オキナワマデ エッテソア  
養庵の 技術=貢献、から まあ 沖縄まで 行ってさ、  
カエコ ツノ ジブン カワツタテ アンダトモ (C シー。) ツレゴ  
奈と その 部分に 賀物=贈り物といふことを"ケルとも、 うん。) その後  
オラウケン ゼンゼン カータ コタ ネーンデスマソニ ハー。  
私の家は 金然 金銅、 ことは 無いのですが はい。

(C ソーテースネー。) ソレ マー ハジメテ マー カエコ コータ。  
そうですねえ。それをまあはじめてまあ畜と飼った。  
モットン マー ホレ センソーネ エッテ キテ タンボ" ユント"  
もヒモ まあ ほれ 戰争へ 行って来て 田園か こんど  
キットバ"カソ ナッタシ カエコデモ カワソケラ シゴトモ ネースケア  
ウシハサウリに 会ったし、畜でも 飼わなければ 仕事も 無いから  
シタドモ ソッテ<sup>(92)</sup> ハジメテ オラ マー カエコテ モノモ カーテ  
やつされどし、それで ほじめて 私はまあ畜といふものも 飼って  
ミタンダ"ガ"木 ハー。  
みんなのぞかね はい。

D ハー ~~~~~。  
はい。。

B オジーサン! ダイニヤ カワソシャランカッタンダナ。  
おじいさんの 代には お飼いにならなかつたのを<sup>タマ</sup>。

A ゼンゼン カワソネ<sup>(93)</sup> ハー。  
全然 飼われない、はい。

C オジーサン! ダイニヤ カワソシャンネア。  
おじいさんの 代には お食いにならぬい。

A タンボ" 1ッポンダ" ハー。  
田園 一本占" はい。

C テガ" ネアカツタモンネ。  
人乞加 無かつたものね。

A リレデ" ウカワタ"タツテ ア) ジブ"ン カエコ) シュニエーテ  
え地で、鳩りがって あの 味分 畜の 収入といふ  
モンワ サカヤモン<sup>(94)</sup> テカセギ<sup>(95)</sup>) シュニエーネリ ヨケータツタローカネ  
ものは 酒屋者、 お稼ぎ<sup>タツ</sup> 収入より 多かるところかね、

- A ノジブンデ。コメニツグノワアンドキヤスミタッタローカ  
あの時分で。米に次ぐね、あの時は木端であるからうか。  
ソレカラカエコタッタローカテカセキタッタローカ。  
それが、磨きたるうか、お稼ぎであるうか。
- D ソードー。ミンナ~~~~~ダイブ~~~~~。  
ちがねえ。みんな大分
- A オラワスレタナー。オンナジタッタカナー。ソートアナア  
私は忘れない。同じ立派な家。相当なあの  
シユニエ！エケシメッタンデスエホハ一。  
42人の位置を占めていいのですよ。はい。
- C ソーソー。  
そろそろ。
- B シメッタヨーデスオスマッダカカイコタカ。  
占めていいようですね、木端であるか磨であるか。
- A ~~~~~ネー。  
ねえ。
- B ハー。  
はい。
- A <sup>(96)</sup>ダモギジェリインダタッチャントネアノシトリズツ  
しかし、技術は負ってちゃんとあのひとりずつ  
エラッタングサー。  
居られるのなしさ。
- B ダモスミヨリカイコジダイモアリマシタコテ。(Aハ一)  
しかし、木端よりも磨く時代もありました。  
<sup>(97)</sup>センソーデミンナデテエラスタドキヤ(Aカイコホーガ)  
戦争でみんな去ていらした時は、磨の方か

- (98)
- ヨケーダック シラン。) カエコノ ホアガ ヨケーテシタガ"ネ。  
多かったからね。
- A ソレガ エマ ホトンド ネー ナックスケネ カイコナンカ。 ( C  
それが 今は ほとんど 無く まったくからね、 属などは。
- ハー。) ウカワノ カーテルナンカ ホンノ ニサンニンデ"ショア。  
はい。 鶴川の 食っている(人)など ふんの ニシ人で(よ)。
- D ソアーテ"スネ。  
そうですね。
- C ソアーテ"スネー。 シモノノ シーバッカダ" ネアーテ"スカ。  
そうですねえ。 下野の 人々は"かりでは おいでですか。
- A ソアーツアーツア-  
そうです。
- D シー。  
うん。
- A マー カエコト ウシダ"コテー。 アノ キュニ タエタノツ  
まあ 食と 午後さ。 あの 急に 終わるのは  
カナクダ"コテー。  
家畜なさ。
- D ソアーテ"スネー。  
そうですねえ。

## 注記

1. テヤ と言えばの変化か、と言いやの変化か。
2. テ と言えばが極端に絶くある。
3. ャッタシ 助詞 声下に広く分布する。山羽部山羽球の老人はヤッパルのようを發音とする。声下には「ヤッパ」もある。りの脱落であろう。
4. ガンネー カナ 単体助詞ガン(Iの注6を参照)に形容詞ナイが直接接した。間にシ・ダを入めて言うこともある。のではないかの意。
5. テアッタ。2有る。接続助詞テ+ヲ変動詞+過去の助動詞。過去のことと確認断定する氣持である。「飼った」「飼つたのである」とでも話すやうな気がしないか、直証しておいた。この表現は南魚沼郡湯沢町にもある。これとちがめて「タッタ」といふことは餅糰をはじめとして西瀬豆郡その他の中越地方にある。タッタは富山県・長野県・愛知県・東北地方にもあり、普通過去完了の助動詞と説明されてゐる。テアッタケとなると確認断定のみに因想の氣持が加わる。
6. サ 確認の氣持をこめて教いかける間投助詞。同聲同下の並て用ひる。Iの113参照
7. ダッタ テアッタの変化。5参照。
8. エナダエニ いちどきに、いつせんに佐の意か。語源不明、「一代に」。
9. ツコータ この様にきこと。若者にむすねると「コータ」とあるといふ。言い難い。
10. 「ち」とは(ちしわ) 飼、若人があるけれども「ち」とはと書いているのであろうか、よく分らない。
11. カッタ 共通語化して促音便となつてゐる。
12. イヤ [S:] 指示して注意と促す間投助詞。「そら」とか這樣である。
13. カーテ 飼、てのア音便 IIIの4文法上の特徴の助詞について3参照。
14. フー 刻詞 あんなん、あれほど、
15. カウンネーカッタ 「ン」は尊敬の助動詞「れ」の変化。
16. オー [O:] 間投声 あそびには

17. エトシキ イトニキの変化 無引き、製名、範名エセ。
18. オエタ 終つる この次に「時にみんな無引きに行つる」のようを  
誰かが有職者なのであろう。
19. ノダ"ドモ 摭徳詞 “だけど”の意。
20. ノア [Sɔ:] 韻詞 そん等に、それほど、そして。
21. サカンダ"ネアカタ サカンダは形容動詞終止形と同形の連用形。
22. センゴ"ラッタ ダフラの変化。
23. テガ"ンネアテモ 「ン」はまちからではいっを省であろう。アテはスルヒ同  
じく終止形と同形か連用形と省う。各例。「人手がなくても」の意。
24. クワ [kwɔ] 桑
25. エエタ うえん(植えん)の変化。
26. テンショアーマ 地取大字折居地内の共用墓地のあるところ。元上山の  
ヤガ族葬している。
27. ジタイエモ このようにきこえるが「ジダイ」の言いあやまりであろう。
28. ナッデモカーテモ ナンデモカソデモの変化。何でも彼でも。從者の  
ようになさるとれる。ここは魚沼郡のかけて操者の所か從者の操る地  
名である。
29. コショアーテ Iの注32参照
30. カゴ 蔡春園の竹籠の3尺×4尺程のかご。
31. エレテ イレテの変化。入れて。
32. シタケアーテ シタオカエテの変化。喬の下の喬の喬や左の喬などと  
取り考ること。
33. クレテ クレテの変化。
34. コー コー 韵詞 左右の手を互に動かし、まぶしを折る身振をしたもの  
であろう。
35. オッタ"オ アクセントから考えて、折子でなく、織子であろう。  
オル(折子) オル(織子) の別がある。
36. オショル 折る。オルよりオショルが普遍。押し折るが滑溜か。本州の  
外東北地方解説書類似市太令の名前で用いる。
37. ニコの鳴き声不明瞭である。著者は「オショッタバッカン!」(折つ

- 左ばかりの物を)と立派するか、実際は文言化しのように思える。  
折、左ばかりみるいに」と解した。
38. ハウシタとさこえり。論者は「ハウシタ」と立派する。まぶしを這わせるように伸ばしひろげたこと。
39. カエリヨーマブシ 改良まぶし。ボール紙を組み合わせた折り込みのできみもで、一匹画に一匹の裔が米印を作り、何年でも使用できる改良されたまぶし。
40. テテシル 手でするの変化で、手で組み立てる意。
41. ヤマンナツタ 山形によつていることで、一種の改良<sup>まぶし</sup>の獨の國の形状が山形、三筋状によつているものらしい。
42. ヤー／不明 「やみの」か「山の」か。
43. カワシモ 地名 川下、川水路のトンネルのあみあたり。
44. クグリ くぐみところ。トンネル。暗渠。土や雪の堆に作られた壁道。
45. セバ サラ動洞未然形+助詞バ
46. アコダケラ はじめアゴアガタのようになさるか、論者によしかれて、本文のように分かつ。
47. タツカ なつさりとは分からぬ。なづからへ意があまいは「なづけら」の変化で「なれまら」の意。
48. ヨゼン 家持庭にある家の屋号。
49. ミカデマブシヒ言つて針金で作った毛かで状のまぶし。
50. ツキソーダ 竪きそうだとは兩端から掘り進んでトンネル工事が中で接して貫通しそうだの意。
51. クボタノオジジ 久保田は屋号、その老人の男で高齢の助役をすす。前吉エノスケル同じ家の屋号。
52. アガル 家に帰ること。仕事などやめて家に帰ること。
53. シタガンガ 養庵をしたのがの意。
54. カイコモ 「カイコノ」ではなかろう。
55. フタツタ 有つてあつたの変化。5参照。
56. マータ マウタの変化、Wの脱落。

57. コシラエタリ 普通語化した表現。コシヨー タリ などがある事の表現。
58. スルノテ 普通語化した表現。
59. キンスク 衣を脱ぐ。脱皮する。上代の観察では脱ぐはスクであるとされる。スクも本立の後にでてくる。普通化したのである。南魚沼郡ではノクといい、これは千葉県江戸川区。スクは千葉県・大分県・福島にあり。
60. アッテスコテのテはレの感じもある。
61. クワノハ 普通語化している。普通クワノハ。
62. コーターの該尾が不明瞭。かつらのらかほえんのであろう。
63. モンダモソはシランモンダモンガの略されしたものであろうか。
64. オラロコ オラドコの変化 倭の所 わか家。
65. エナ 普通語イナ(畢竟)連体詞の変化。
66. ナーシター 何した。どうした。
67. アガルガンレヤナンレヤ アガルガンドヤラナンダヤラの変化。ドヒトの中間的音声。[re]は[rə]に近い。
68. コンガン 形容動詞コンガタの連用形かと思われる。ナーカーを修飾すると考える。コンガイ→コンガ→コンガンと変化したと考える。コンガイ→コンガノ→コンガントを考えれば「ナーカー」を修飾する連体形となる。
- Iの24・64参照。コゲン(連体詞)(副詞)丸州方言 コゲンニ三重県
69. =ワヤスミ 番の第四眼 新潟県・長野県・群馬県・埼玉県。
70. こここのところは正確にきどろこヒカでよい。早口の上に高の省略がある。著者の説明に従って文字化してみる。
71. ノアエ 連体詞 なんぞ、そのどうぞ 話者は「そう言う」である。
72. ゴットラネ 接尾語“毎に”。これに似た語に「グチラ・コチラ」がある。～ごと、～ぐみ～共にの意味である。「りんごなんかい皮ぐちら食うで」(柏崎市「浦元ゆく方言」)新潟県・近畿地方にある「グチ」に似た「ラ」がついたもの。ゴットラネも同様にゴトにラ、更に副詞的=かつてでもあるのである。ニはネト就する。
73. 「ナンスク」のようになら書きこえる。ナランネアカ(ならまいではない)

か」のこの人らしいせんすいな早口の表現から歩みをゆがめると観者  
なのであろう。

ク4. ウーイヨニ そういふよろにの変化。

ク5. カエココエ 魚飼いの変化 [Kai] の変化 [kae] が終止形の [ko:]  
に向化して生れた観者である。

ク6. ツンガノ 形容動詞の連体形。

ク7. エネ I の演 83 参照。

ク8. エアン イルアンダヒ考え「いのぞ」と読したが、この話者のこ  
とぞから、イラレルアンダヒ尊稱の助動詞を入れていそつくりぞの  
がもしれまい。

ク9. アレアタ 不明 アレワマタと言おうとしたのか。

ク10. アエラ一 アイラワの変化 アイラは江戸時代後期代名詞複数、  
復讐。当地ではののしき気持はなく、同聲、同下に付して使う。ここでは「  
者たちは」の意である。後の「ヤツラ」はこれに比し見下す  
者気持のある卑語である。参考あい。彼。三重・和歌山・奈良・滋  
賀・佐賀・鹿児島。

ク11. ガ ガオ(のを)の変化。

ク12. トユート 「と言うと」で「と」を省めている。

ク13. スゲレーネア スケレーネアとも。スゲレル (腹くことかどきる) の  
否定。可絶の言い方はスゲレルヒスガレルヒも言う。

ク14. オーデ そうして

ク15. はつきりしなかつたが話者Aにきて、答の体に湿氣があつての意  
とかわかつた。

ク16. ダンガは速度加快つきしまい。I の演 99 参照。

ク17. ツア [so:] 感動詞。相手の注意と喚起する時用ひ。

ク18. エカツタ よかつた。ヨーネー、エーネー、エーネー、エーネー、エーネー、  
エーネー、エーケラ × 活用す。

ク19. ダサレッシ ダサセラレルシが此の人の人でちぢめて観者工事を。

ク20. エラレレバ ラレルは尊稱、その已然形。元語的表現。

ク21. [kwa:jmetari] に近い。

92. リッテはソッテのよろこびをこころ。それでの変化。
93. カウンター 尊敬の程度 前のBのことは中の「シャラン」より敬意はぬくい。
94. サカヤモン 滝造業従業員。トージはその指導的地位にあるものと“が一般滝造業者の意味に向く像うこと”ある。参考トージ 新潟、富山、岐阜、静岡、三重、島根、島高知、熊本。
95. テカセキ” Ⅱ銀錦地主の概観 5ヶ致人の産業の割参照。
96. ダ元 ヴィタードモ > ンヴィドモ > ヴィドモ > ダ元
97. エラスター イラシタとイナスツの混成。
98. カシラン 連絡。カシランは終助詞としたかよいかしれまい。江戸語の入ったものが。刈羽村では九十歳の老婆も使つてゐるようだ。こゝで老人、しかも男性が使つてゐる。普通語からのものではない。

## 4. 雪の中の生活

話レシ

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 高橋 真男 大正9年

B 高橋 初枝 女 大正8年

D (略号) 高橋 康宣 男 大正15年

D コンドウ フエノ セークツツノ コトデモ チョット キーテ  
こんどは 冬の 生活の ことでは ちょっと 聞いて  
ミマショーカネー。 マー フエテーハ エキガ<sup>(1)</sup> フット ヒラバノ  
みまよがねえ。 まあ 冬と言えば 雪が 落って 年場の  
フクト チョット チガイマスノテ<sup>(2)</sup> ソコラヘンノ ハナシカラ  
冬を ちょっと 落しますので、 そちら迎の 新しから  
タシテ ミテ クンナセー。  
出てみて 下さい。

A マ エキガ<sup>(3)</sup> フルノワ アレタコテ コラー (B 笠) ヤマン  
あ 雪か 降るのは あれどよ これは 山の  
ナカテ<sup>(4)</sup>…。 ダケ ヨー ホレ ア) シンブンヤサー テレビ<sup>(5)</sup>  
中で…。 だから よく ほら あの 新聞やねえ テレビで  
モッテ アラコテー ア) ゴメータ一<sup>(6)</sup> ア) サンメーター フット  
あれどよ あの 三メートル、 あの 三メートル 落って  
オーエキタナンテ エードモ サンメーターナンテ ウカワテ  
大雪がなどと 言うけれども、 3メートルなど 鶴川で

サンメーターナンカ エキ エッペー<sup>(7)</sup>ダト オモワンガ<sup>(8)</sup>ネー。 { D  
シメーター くらいと 書は 多いと 思わないかねえ。

ソアデスネー。) タイテー ヨンメーター。 マー サンメーター  
そうですねえ。) 大抵 四メタニ。 まあ シメーター  
グレータ<sup>(9)</sup>ケラ タイシタ エッペー<sup>(10)</sup>ダト オモワンネ。  
くらいから 左にして 多いと 思わないね。

B シミズダニノ ショウ ヨーエダ<sup>(11)</sup> ネアカッタデスコテネー。 (A ア  
清水谷の 人は 容易では ありせんてひるよねえ。 ああ

ヨーエダ<sup>(12)</sup> ネアカッタ ハー。) アレ カヨーテ キナス<sup>(13)</sup>タングスケー。  
容易では おかつた、 ほい。 あれを 通つて 来られたのだから。

(A ソア ソア ソア ソア<sup>(14)</sup> アー。) ハー。 アノ アレーネー (A  
そらそらそらそら、 ああ。) はい。 あの あれを ねえ。

カンジキ カケテネ。) カンジキ カケテ (A アー。) ホーキテ  
かんじきを かけてね。) カンジキを カケて、 (ああ) そして

アレーネー (A アー。) アノ カクマキニ ナワ トーシテ  
あれを ねえ。 (ああ。) あの 角巻に 繩を 通して

モローテ ホーキテ コー クビノ ホコ<sup>(15)</sup> ツバッテ。  
もろって そろて ねこに 頸の ここで はうて

A シバッテ。 ソアタッタネ。 ソノ エウェ<sup>(16)</sup>ミノ<sup>(17)</sup> ミノホシ<sup>(18)</sup> カブッテ  
はうて。 そらそらね。 その 上に 篠帽子と かぶつて、

(13) テンボ<sup>(19)</sup>クラニ。 (B ミノホシ カブッテ ハー。) ソアシテ  
頭上に。 ( 篠帽子と かぶつて、 ほい。 ) そして

ガッコーエ カヨータンダ<sup>(20)</sup>ネ。 (B ハー ガッコーエ カヨエマシタ。  
学校へ 通つたのね。 ) ほい、 学校へ 通いました。

ソアシテ オヤドモウ ミンナ オク<sup>(21)</sup>テ キタンダ<sup>(22)</sup>。 ダースケア  
そして 観達は みんな 送つて 来たのね。 ねから

シミズダンノ ショーワ ヤダツテ コノ ガツカラ ハナレラタンド。  
清水流の く人は いやがとあって この 滝から 離れられた。

コノ ミナ ツケルダケテ<sup>(14)</sup> ヨエジヤ ネーン。<sup>(15)</sup>  
この 道を いけるまで 容易では 無いかう。

B オラガ ドキワ キット オツツテ クルナント コト ネアカタカ  
私がもの 時代は きっと 送って 来るなどといふ ことは 無からぬかも  
シレマセント。  
それもせんよ。

A オソラク ネアカタカ アノ コロワネー。  
おそらく 無からぬ、あの 場はねえ。

B ハー ャー ャー。  
はい そうそう。

A ソーシテ モトワ アダコテ アノ エキガ" エッペア フッテ ガッコーガ"  
そして 昔は あれどよ あの 雪が 友さん 踊り、豪校が  
ホレ クジハジマリガ デキネードサ (B ソーソー。) ソーシテ  
ほれ 九時始まれば 皆来なくてさ、 (そうそう。) そして  
(B オソー ナッテ キテネ。) オソ ナッタ ドキア エッペア アッタコテ。  
遅く なって 来てね。 ) 遅く なつた 晴は しばしば あつたさ。

(B ソーソー。) ソレカラ ノタノ アノ ホレ タヤノ ナダレノ  
そうそう。 それから 野田の あの ほれ 田屋の 雪崩の  
(16) デタノワ アレ ~~ エツタッタケナー。 タイショ一 サン…  
出たのは あれ いつだつたつけねえ。 大正 三…  
(17) ナンネンダコ一ネ。 アレ ニガツノ エッカタッタネー。  
何年だろ? あれば 二月の 何とかであつたねえ。

B オラ エネアカタソダ" ネー タロカ ソノ コロ。  
私は 戻らぬのでは まいをうか、その 場。

- A ソーダックローク。  
そうぞく、なぞうか。
- B オラ オボエガ<sup>(19)</sup> ネアガンネ。…エタンダ<sup>ナ</sup>。  
わたし 記憶か<sup>ハ</sup> ないもの。(いや)居たのを<sup>ハ</sup>。
- A エヤ エタッター。(B エタンダ<sup>ノ</sup>)。 エタンダ<sup>。</sup> シー オラガ<sup>。</sup>  
いや、居たのを<sup>ハ</sup>よ。(居たのを<sup>ハ</sup>。 居たのを<sup>ハ</sup>。) ウム、わたしと<sup>ハ</sup>か  
エタッタ<sup>(20)</sup> ア サンネンセー<sup>ノ</sup> ドキタ<sup>モ</sup>ン エラッタコテ<sup>。</sup>  
ああ 三年生の 暮らしの 居られたさ。
- B ソー セヤ オラ ゴネング<sup>レ</sup>タッタスケ<sup>ノ</sup>ー。  
そろ すねば<sup>ハ</sup> わたしは 五年生くらいがつからねえ。
- A アレ フット マエンチ フット ホーテ エマミテ<sup>二</sup> ガッコー  
あれは 降って、毎日 降って、そして 今みちいに 学校は  
デンキガ<sup>。</sup> ネアテシヨー ホアッテ ランプ<sup>。</sup> ブラサゲ<sup>テ</sup> シタ<sup>。</sup>  
電灯か<sup>ハ</sup> ないでしよう、 そして ランプを ぶらさげて 下の  
キヨー<sup>シツ</sup> ゼンブ<sup>。</sup> ランプ<sup>。</sup> シタ<sup>。</sup> ソジ<sup>メ</sup> ナクテ マ  
教室 全部 ランプに したの。 それでも 見えなくて、 あ  
ニケ<sup>ノ</sup> ホアワ<sup>(21)</sup> クローケ<sup>。</sup> ネードモ オラ シタッタスケ<sup>。</sup>  
ニ階の方は 着く ないけれども、 私どもは 下をつるから  
メーノア<sup>テ</sup> ホアテ ジュギヨー ヤスンダ<sup>。</sup> アラネー アノ  
見えなくて、 そして 授業を 休んだ<sup>。</sup> わたしがねえ、 あの  
ニグツ<sup>ノ</sup> オソ<sup>(22)</sup> ナッテカラ フリダ<sup>シ</sup>タンダ<sup>。</sup> ソレマ<sup>テ</sup> エキワ  
ニ月の 遠く なつてから 降り立<sup>した</sup>の<sup>。</sup> それまで 雪は  
ナニモ ネアカッタ<sup>。</sup>  
少しも ながつた<sup>。</sup>
- B ソン ドキ ナカヤマガ<sup>。</sup> エッシューカン ミナガ<sup>。</sup> アカンカ<sup>タ</sup>ンテ<sup>ス</sup>テネ<sup>。</sup>  
その 時 中山山下か<sup>ハ</sup> 一週間 道が 明かるが、 なんですかね。

- A アー ソーダッタネー。  
ああ、そうぞうねえ。
- B ソーデスッテ。エッシューカン ミケガ" アキマセントシタ。  
そろですって。一週間 遠か 明けませんでした。
- A ア- アン ドキ アレ アノ アレダ"コテ アノ ヤマダ"ナダレ)  
ああ、あの 時、あれ あの あれどよ、あの 山田の 雪崩の  
(B ハー。) ドキ ジンカガ" (B ソー ソー。) エッペー<sup>(24)</sup> ツブレタコテ。  
(はい。) 時、人家が そろそろ。たくさん つぶれなさ。  
<sup>(25)</sup>  
ニンゲンモ シンタ"シネー。ホテ ココラカラ ミンナガ" アノ  
人間も 死んだしねえ。そして この邊から みんなか あの  
(B ソー ソー。) ホレ アッダ"コテ エキホリ エッタコテー。ハー。  
そろそろ。あれ あれどさ 雪崩に 行ったさ。はい。
- B <sup>(26)</sup> シタリ アッタ モンワ ミンナ エガ"レマシタ。  
二人(八年の)有った 者は みんな 行かれました。
- A アラ オラ ジンジョーサンネン) ドキダエネ ハー。  
あれは わたしどりか 高齢三年の 時ですよ、はい。
- B サンネン) ドキデシタカネー。  
三年生の 時でしたかねえ。
- A ダ"スケア オマエサマガタ" <sup>(27)</sup> ママダ" エラッタ ウケタ"。  
だから あなたが生は まだ 戻られぬ わけだ。 (B エラッタネー。)  
エラッタ コー ガ"クネン= (B ソーダ"ネー。) エラッタ アー。アノ  
戻られぬ、高齢年に そろそろねえ。 戻られぬ、ああ。あの  
ドキウ マエンチマエンチ ガ"コエ エクノガ" ジュージタッタコテ。  
時よ 毎日毎日 漢族へ 行くのか 十勝だなさ。  
(B ソー ソー。) ネー。  
そろそろ、ねえ、

B エキガ" ヘー フレバ ジュージテシタコテネ。 (A ジュージダッタ。)  
雪か も 墓碑は" ト峰でした。

ハ一。

はい。

A アレカラネー エマ アンマリ フランネー。 アンガ" <sup>(30)</sup> コト  
アルカラねえ 今は あまり 落ちないねえ。 あんな ことは  
ネー ネアカネ。  
ありじや ないかね。

B フランガ" ンデショアネ。  
落ちないのでようね。

A ダッテ アノ トシモ ダドモ アッテスゼ アノ ジブンワ ニグラツ  
だって あの 年も しかし あれですか あの 時分は 二月  
ダガサー ショーグツガ マー ミンナ <sup>(31)</sup> イチグラツダッタ。 (B ソー ソー。  
だがさ、 正月が まあ みんな 一日であつた。 そうそう)  
シットキオクレダッタンダスケア ニグラツノ ショーグツダスケーネー  
一日遅れだったのだから ニ月の 正月だからねえ。

アレ マダ イチグラツノ サンジュー イチソウガ トシリナンド  
あれは まだ 一月の 三十 一日が 年取りまだ

ガ ソノ ジブンワ マダ ユキガ ネアカッタンデス。 (B ソーデスネ。  
が、 その 時分は まだ 雪が なかったのです。 そうですね。

アラ ニグラツノネー エッカカラ フリダシタカナ。 ニグラツニ  
あれは 二月のねえ 何日から 落り出したか、 二月に  
ヘッテカラ フッタン~~。 アン ドキワー マー アノ キヌ  
入ってから 落ちんした。 あの 時は まあ あの  
キューゲキニ フッタンダガネ。 マエンチマエンチ フッタンダガネ。  
急激に 落ちんじがね。 毎日 每日 落ちんじがね。

マエンケマエンケ サンジャクグレーズツ フットンタ" アノ ヒトバンニ  
 每日毎日 三尺くらいす、 路なんが、 あの ひと晩に。  
 6 ソレマテ フラン アノ一 ヒトキリ アウエガ アッタシードスネ。  
 それまで 路らない あの しばらく 間いか あをそですね。  
 (A マーソー ソー ソー。) デ エキガ カタマタ ドコエ (A アー。)  
 あをそそそ。 それで 雪か 過まつた 所へ ああ。  
 フットスケー アッタデ コーエガ"ンダ。  
 路ながら ああまつたと こういふことだ。  
 A フ ソーダッタネー。 (B ハー。) エヤ コノ エキテ モノガ  
 ああ、 そりぞりねえ。 (B はい。) いや、 この 雪と いうものか  
 ソー ナントカ マー ヨノナカガ ススンデ アノ ブンメーガ  
 そら なんとか…、 まあ 世の中か 進んで、 あの 文明か  
 ススンデルンダ"ガ" (37) クワガクガ ススンデルンダ"ガ" (38) ナントカ ナラン  
 進んでいるのを"か"、 科学か 進んでいるのを"か"、 なんとか ならない  
 モンカノ一 コノ エキガ一。 エキサー フランケレバ マー  
 ものがねえ、 この 雪か。 雪さえ 路らされば まあ  
 コエラモ マー アノ (B マー エー ドコデスコテ。) (Eー  
 ここらも まあ あの (B まー いい 所ですか。) ハハ  
 ドコダ"ドモ、 (B ソー ソー。) マー エチバン コマルノワ コ  
 所だアレども、 そろそろ。 まあ いちばん 困るのは この  
 エキホリ。 マー ミチミケフミワー <sup>(41)</sup> コノゴスワサー アノ  
 雪が届いた。 まあ 道踏みは この頃は あの  
 ブルガ"キテ マー アノ ジョエツ シタリサー フミカタメテ  
 ブルドーザーが来て まあ あの 路雪 したりさ 路筋を固めて  
 クレルスケ、 マー ヨー ナッタドモ エキホリワ ヨー エジャー  
 崖地から まあ 良く ながれども、 雪振りは 容易でよ

ネーコテ ハー。  
ないさ、 ねい。

B ～～ ヨーエ ジャ ネー デスネ。  
容易では ないですね。

A ソレヨリ アノー ミンナ ホレ テ"カセギシテ シマウスケア  
それより あの みんな ほら お様さして しめから  
(42)  
アレデスコテ オンナショバッカン ナッテ、ト ヤギノエエイ アタマエ  
あれですか 女衆ばかりに なでいと 屋根の上の 頭(棟)に  
アガルノガ ネー ～～ ドー ショーを ネーンダ"。 (B ハー。)  
上がる者か 無い ～～ どうしようも ないんだ"。 (B はい。)  
(43)  
ソーサイテ マタ ハツエキン ドキヤ オッカネースケアネー。 (B  
そして また 初雪の 晴は こわいから ねえ。  
(44)  
オッカネアスケア。シタガ アエテマススケアネー。 ) ハー。 ソーサイテ エマ  
こわいから。 下が" 明いていますからねえ。 ) はい。 そして 今  
(45)  
クズヤテ" ホリオトスター ツサガ タッテルテ"ショア" ミンナネ  
かやびき屋根で(雪を)振り落とすと 机首が 立っている(よう)、 みんなね  
ドコ) エーモネー。 タカラ ナカナカ ヨーエタ" ネーンダ"  
どこの 家もねえ。 だから なにが 簡単では ないの?。  
オッカナーテ ハー。 マー サンメーターグレー) エキタ"ケヤ  
こなくて はい。 まあ ミメターくらいの 雪なら  
エードモ マー ヨンメーター コセバ ヘー ドー ショーも  
いいけれども、 まあ 四メーターを 超せば もう どうしようも  
ネーコテー、 (B ～～ ネー。) ハー、  
ないさ、 ねえ、 はい、

B マー ホントド" エキホリテ" ソトネ エネガ ナリマセソスケホー。  
まあ ほんと 雪振りで 雪みに 底抜ければ そりがんがうねえ。

A ソアーソアーソアーソアー。マー オーエキノ ドキワ ヨンジーンチグレア  
そうそうそうそう。まあ 大雪の 時は 四十日くらい

ツズクスケホー エキホリガ一。  
続くからねえ、 雪振りが。

B ソアーネー。  
そねえ。

A カンジキガ" ミンーナ ヘー コワレテ シモアーテ (B ハクガ"ンガ"  
かんじきか" みんな もう こわれて ほって はくのか"

ホー。) ハクノガ" ネー ア。エマ マー ホレ ワリアエニ ア  
ない。) はくのか" ない ちち。今は まだ ほら 寄り合ひに あの

ンー アマゴ"ガ" (B ン ソアーソアー。) ヨー ナッタスケア エードモ  
んぬ 雪具か" ( うん そうそう。 ) 良く あなたから いいけれども

(B ソアーテスネ。) オラ ドキヤ アレダッタコテ 元ト ムカシヤ  
そりですね。) わたしどうの 晴は あれど、なさ、 元 若は

(B ミノト<sup>(48)</sup>) ホレ ミノトホ (B カサダ<sup>(49)</sup>) カサダスケア  
蓑と ほら 蓑とね ( 蓑だ。 ) 蓑だから、

フブ"キン ナレバ コラ マッテ<sup>(50)</sup> サブ"テ コゴ"エシムヨー<sup>(51)</sup> ダ"。  
吹雪に されば これは ほんとうに 寒くて 凍死ぬようだ。

B ソレ ミンナ シンナカエ<sup>(52)</sup> モッテ ヘアッテ (A モッテ ヘアッテネ。)  
それを みんな 囲炉裏に 持って 入って、 もって 入ってね。

カワカシテ マタ アシタダ"。  
乾かして まだ あすだ。

A ソアーソアー。ソアーシテ ミンナ ア) ナガグツ<sup>(53)</sup> ア) フカグツ<sup>(54)</sup>  
そろそろ。 そして みんな あの あの 深靴

(B フカグツ。) ツクッテネー ホー<sup>(55)</sup> テ アレダコテ (B ナンリ"クテモ  
深靴 ) 作ってねえ、 そして あれどさ、 何足でも

シダ"ナエ。<sup>(55)</sup> シダ"ナエ ブラサゲッタ。 ソシテ ツノ マー アノ  
火棚に。 ) 火棚に ぶら下げていた。 そして その まお みの

フカグツノ ナカ ワラ ホレ エレ <sup>××</sup> (B 答) エンネテツア<sup>(56)</sup>…。  
深靴の 中に 藤を ほら 入れ 入れないと"さ…。

ソアテ オラモ アノ アレ シタ モンダガ<sup>(57)</sup> アノ オレア  
そして 私ども あの あれ じと もやうか、 あの わねしは

アシノ ギヨー サガ<sup>(58)</sup> ワリ一 ワケデ<sup>タ</sup> オードモ (B(答)マカ<sup>カ</sup>…。  
足の 行作か" 惠い わけでは ないか" 曲か…。

マガ"ルンテ"ネ フカグツカ"ネー。 (B ソア ソア<sup>。</sup>) アー。  
曲かるのでね、 濡靴かねえ。 そうそう。 ああ。

B トンデモホー ドコ ハイテ<sup>(59)</sup> ハー。  
とんでもない 所を 着いて、 はい。

A ソア ソア ソア ソア ヨコッショー ハイテ。 ソレデモ マー  
そろそろそろ。 横側を 着いて。 それでも まお  
アレダコテ アノ ヨキホリニ アノ オマエサンガタモ ツ  
あれださ あの 雪極<sup>ク</sup>に あの 両脇<sup>カ</sup>左も <sup>ハ</sup>  
ツマガケテ<sup>(60)</sup> ハカタデ ショー<sup>オ</sup>。  
爪掛けといふのを 着かれたでようね。

B ガッコーエホ (A ハー。)<sup>。</sup> ハー。  
着換へね。 (B はい。)<sup>。</sup> はい。

A ツマガケネー。  
爪掛けねえ。

B ハー。  
はい。

A ハー。 ソレカラ アノ ダイモチナシカニ<sup>(61)</sup> テンニヤ ホレ  
はい。 それから みの 大物などに 去るには ほら

オソカケ<sup>(62)</sup>。

おそかげ。

B オソカケ。

おそかげ。

A ハー オソカケ ズイブン アエシタコテ ツカータコテ。  
はい、 おそかけを すいぶん あれしさ、 使ったさ。

B アレ オソカケッタテ フツカモ ハケバ キレッタモアシ。  
あれは、 おそかけといつもって ニヨモ 疲れは 切れてしまし。

A ソー ソー ソー ソー。 ッタドモ アレガ" アノ マタ アノ ワランジト  
そぞそぞそぞ。  
しかし、 あれが あの また あの わらじと  
アラ ナンダ" (B ナガグツ ハー。) フカグツト チゴーテネ  
あれは 何だ、 長靴だ、 はい。 深靴だと ちがってね。

アシノ ケアリガ<sup>63</sup> エー~~~ (B ハー。) ダカラ ソノ一 ドーケー  
足の 反りか いい~~~。 (はい。) だから その 途中で

シルニヤネー ミチオ アルクニヤー マタ アレノ ホーガ" エンダネ。  
するにはね 道を 歩くには また あれの 方が いいのだね。

ダエモキ シクナンテ ドキモ エーシサー。  
大物と 行くなどといふ 時も いいしさあ。

D ハー。

はい。

B ガッコーエワ アシャ<sup>(64)</sup> アレ ハエテネー クツ<sup>(65)</sup> ハエテ (A ハーー)  
学校へは ~~~~~ あれを 疲れて 薙靴を 疲れて (はいはい)

ココエ アノ アレ ナンデーナー (笑) (A シガラ...) シガラ  
ここに あの あれを 何だったかなあ、 ながら ながら

(笑) シ アレ ハエテ ガッコーエワ カヨータユテー。 (A ソヤー)  
さん あれを 疲れて 学校へは 通ったさ。 (そ)

「アーッアー。」 アノ コロウ エマヨリウ エキヤ フッタントデスコネー。  
「うう。」 あの 嘘は 今よりは 雪は 路なのですよねえ。

A フ、タヨーナ キガ シマスネー ハー。 (B ターテースだ。) エマ  
降らぬような 何か しますねえ、 はい。 (そうですね。) 今は

アング<sup>(68)</sup> サンジーンケモ ツズケテ エキ フルヨーク コタ  
みんなに シナカル 続けて 雪の 降るような ことは

アンマリ ネー ヨー タ” ネカネー。 (B ~~ ネ。) ア! ジブンワ  
あまり 無いよでは ないかねえ。 ( ---ね。) あの 時分は

アノ シトバンニシマク サンショク フルナンカ  $\times \times$  (Bヘキテシ。)  
あの ひと晩にニ尺 三尺 距るなど 平氣で(も。)

ヘーキ シジュー アッタガンネネー (68)  
元気、 始終 あつたものねえ、 はい。 そして あの をね

フツー カンジキ ジャダメ デ"サー スカリッツ(P)  
 モア  
 普通の かんじき でよ 大きな すかりというのを(B すか~~。) すか----。 もう

シツ カケタコテネ (B ソア-ソア-) ア) ユンゲ<sup>(71)</sup> キ  
ヒヒ かけたさね。 ソウ ソウ。 あい こんち 木の

デッケー (B ハー。) ツカオネー<sup>(72)</sup> ハー。 アレ アノ オラ サイショ  
大きい はい 輪をねえ、 ぬい。 あぬを あの わなしよ 最初

アレ カケッコト ~~~~~ (ク3) クビー カケテネー コー<sub>p</sub>-コ<sub>p</sub>-コ<sub>p</sub>-コ<sub>p</sub>- (ク4)  
あれを かけすこと ~~~~~ 頃に カケテねえ、 ンクンクンクン

シテ……。(B ハー。) シノ ホーカ ラクダアンデホ。(B ソーリー。)  
して……。(B はい。) その 方か 楽音といふのでね。(B そうさう。)

ホー・シテ アレニスコテ エワムケアカラ ホレ オリイイ カコア /  
そして あれですか。 上向から まら 指原の 爰枝の (75) (76)

(77) ミチツケガ マエアサゲ<sup>(78)</sup> テルノヂ アノ ソレア コイテ<sup>(79)</sup> アエ<sup>(80)</sup>  
透けヶ丘 金朝 去るので あの それか 流いで 苗く

A ソノ アトカラ マー オラガ アノ デックア ユドミカラ エッタ  
その 後から まち わたしどもかアノの 大きい 子どもから 行、左  
モソダ"コテネー。  
ものが"されえ。

B ソア デスネー。  
そうではねえ。

A エマ ソレ マーマー ブルガ" キテ クレ、スケー マー ヨクワ  
今は それ まあ、まち ブルドーザーが 来てくれるから まあ 良くは  
ナッタンダ"ドそ…、  
なつたのな、れども…。

B ヨク ナリマシタコテー。  
よく なれ、れなさ。

A ハー。  
はい。

D エキオロシニ シャベルガ" ハヤッタノワ イツブロデスカ。  
雪降ろしに シャベルガ" よやくの、よ いつ頃ですか。

B ハー。  
はい。

A シャベルワー アレモ ダイブ" オソイワネ。 ミンナ コア マ  
シャベルは… エルも 大介 違いよな。 ミンナ こう お  
オラ エカン<sup>(81)</sup> ナルマデ<sup>(82)</sup> コンスキタスケネー。  
私たち がたり年になよまで 木釘ハリだらからねえ。

B コンスキタスケネー。  
木釘ハリでしょからねえ。

A シャベルノ ハヤッタノワ アルニヤ ブタドモ ココエラヂ" ツカウヨーン  
シャベルノ よやくの、よ 大介によ 有汽笛れども こころで ほりよに

ナッタノワ

なつたのは、

B エキガ ムコーエ エカシスケア ダメナ モンダナンテテネ  
雪か 向こうへ 行かないから がめる ものなどと書いてね、

A ソア・ソア・ソア・ソア ハー。  
そうそうそう、 はい、

B ツカワソカッタソテススケア。  
使わなかつたのですから。

(83)  
A アレワネー ナンダローネー。  
あれはねえ、 あれぞろうねえ。

B マー オラガ ガッコーシダ"エフ コンスキバッカデシタ。  
まあ わたしのもの 季候時代は 木助ばかりでした。

A コーンスキダッタネー。 (B ハー。) ハー アー シャベル) ハエッテ  
木金助をつねえ。 ない。 はい、 まあ シャベルの 入って  
キタノワ スット オソ一 ナッテカラダネ。  
来たの本 ずっと 違く なってからだね。

B オリー ナッテカラソノテショーカネー。  
遙く なってからなのでようかねえ。

(84)  
A ハー オリー ナッテカラダノー ハー。 ダ" マタ アノ  
まい、 違く なってからだねえ はい、 しかし まあ その

(85)  
コンスキテノワ マタ アラー アレテスモンガ" アノ ラクダシ  
木金助といふのは まあ あれは あれですから、 あの 楽しみ、

(86)  
ムコーエ ナゲンニワネー (B ~~~~~。) ヨケー エクエニ  
遠くへ 抜ける。ほねえ、 余計 ところから、

ハー。 マタ エキテノワ ホレ ウエカラ オトスノワ  
はい、 まあ 番といふのは なら 上から 落す。よ

87 ハヤエードモ シタオ <sup>88</sup> スケルノガ ヨーイダ ネー。 (B シタオ  
早いけれども 下を 空けるのが 容易で ない。 下を  
スケルノガ ヨーイダ ネー。) ダッケー セーパロシ テマー トッテモ  
空けるのが 容易では ない。 ) から やなり 手間と ひとつも  
コンスキノヨーナンデ スースート ムコーエ ナゲタ ホーガ<sup>(89)</sup>。  
木鍛のよろこんで すうすうと ぬこへ 投げた 方が<sup>…</sup>。  
(B ナゲタ ホーガネ。) ハー。 アラ アノ タエラナ エタネ  
投げた 方がね。 はい。 あれは あの 幸らる 枝に  
コーエガ ツイテルケ ナゲズレーヨーナ モンダドモ ナレルト  
ニ 柄が 付いているから 投げにくい ような ものだけれども 駆け込むと  
ユート アレ マタ ワリアエニ ハヤエ モンデスワネー ハー。  
いと あれは まだ 割合いに 早い もんですよねえ、 はい。  
コンスキ オモニ アッダコテ アノ モトワ ホレ エタヤダッタコテー  
木鍛は 主に あれださ あの 若は ほら いたやぶつさ、  
コッケワネ (B ハー。) エタマトカ <sup>(90)</sup> ブナデ <sup>(91)</sup> コシャータ <sup>(92)</sup> (B ブナデネ  
こちらはね、 ねやとか ぶでて こしゃれど、 ぶでねえ  
. ) ハー コシャータモソデスコテ。 ドコノ ウチデモ コレ  
。 はい、 こしゃれどもです。 ピコの 家でし これで

コンスキノ ヨンキヨーヤ ゴキヨーワ ミンナ モッテタコテネー。  
木鍛ハ 四丁ヤ 五丁ノ みんな 抱いていたよねえ。

B ソー ソー ソー ソー。  
そろそろそろそろ。

A エマウ アンナ コンスキナシテ ツコール <sup>(93)</sup> ウチワ スクノアテ  
今は あんま 木鍛など はわれる 家は サシくて  
ホトンド シャベルニ ナリマシタ ハー。  
ほとんど シャベルに なりました、 はい、

- B シャベルニ ナリマシタスケアネー。  
シャベルニ なりましたからねえ。
- A エトノ ガッコー！ エキホリナンテ モンワ ネアカッタ ネカ。 アラ  
昔の 学校の 雪掘りなどといふ ものは なかつてはないか。 あれは  
ダレカ タノンデ" ムラテ" タノンデ" ムラテ" (B シー ソラ  
誰かを 頼んで" 村で" 頼んで" 村で" うん それには  
ムラテ" タノンダ" タンデ" ネマーテ" シヨーカカネ。 ヘー ガッ コー  
村で" 頼んだ" ので よ ないでしようかね。 が 学校の  
エキホリニンソク…。) タノンデ" ャッタソダ" ネー。 アンナ  
雪掘り人達…。) 頼んで しづのぞねえ。 あんな  
エキワリナンテ" (96) エマミテアニ ミンナ アイ カクブライ  
雪割りなどといつて 今みんなに みんな あの 各集落  
コータエゴータエニ エキホリ コエナンテ ネアカッタヨーダネー。  
交代交代に 雪掘りに 来いなどといふことは 無かつてよどねえ。
- B ネアカッタデスネ。 ハー  
無かつてですね。 はい。
- D リレデ" コーガクネンガ" テツダエ シマシタ。 (A ア コーガクネンガ  
それで 高等年か 手伝いを しません。 ああ、高等年か  
テツダエ シタネ。) センセーガ" ンナ デラネー。 (B リマソア。)  
手伝いを したね。) 先生が みんな でてねえ。 もう。
- A センセー デテ…。 エマ マー コドモナンカ アイ (D ウカエマセンシ  
先生が 出て…。 今は まあ 子供など あの ほいません。  
。) ツカワソヌースケアネ (97) ミンナ ～～ドモネー。  
使われないからね みんな ～～ けれどもねえ。
- B ガッコー！ エキホリテガソウ ニンソクデ" ヘー キマッテタンダ" !  
学校の 雪掘りといふのは 人足で も) 汗あつていたのさね。

A キマッテタ。ダドモ エマミネー アノネー ガッコー！ エキホリテ  
決っていいな。しかし、今もねえ あのねえ 学校の 雪振りで  
マー アノ ネン＝ ナンクエモ マツテ クルガサー アノー  
まあ あの 年に 何回も 回って 来なかさ あの  
アッダエネ アノー コーシャ！ ア キヨー シツ！ ～ナンカ ニカエ  
あれではよ、あのう 校舎の ああ 教室の など ニ階の  
タケ） オッカネー エネ （B オッカネー。） アー。 ソレデ アノ  
高いのは こわいですよ、 こわい。 ああ。 それで あの  
アタンデモッテサ アノ ナダレドメア シテ アルロモサ アレ  
トタン板です、 あの 雪崩止みは して あるけれどもさ、 あれは  
オッカネーデステ。 （B スベルスケア。） ア オンナショモ セーツタガデ<sup>(98)</sup>  
こわいですせ。 すべるから。 ああ、女性も 言つたので（あって）、  
エヤ ワケーショデモ オッカネフネ ハー。 （B ～～～ スケア。）  
いや 青年でも こわいわね、 ほい。 ～～～ どから。  
コトニネー ハツヨキン ドキトカサー アメアガリ！ エルンダ<sup>(99)</sup>  
強ねえ、 初雪の 崩しかさ 雨上がりの やみんな  
ドキワ （B ストント。） サート ワレテ オケルスカ  
時は すとんと。 さあ、 お出で 落ちるから  
オッカネアサホ。 マー コレカラ アーエー コーキヨー～～～<sup>(100)</sup>  
こわいですよ。 まあ これから ああしる 公共の  
タテモノワ ヨーエジヤ ネーガネ。 ワカエショガ エランネアシ  
建物は 容易では 無いかね。 青年が どうぞお入りし、  
ワカエショガ ホトント～～～。 オンナショバッカン ナルスケネー ハー。  
青年が ほとんど。 女性ばかりへ なまからねえ、 ほい。  
キヨネン アタリダタッテ サンクニグラエ ホッタローカ ニクエ…。  
去年 あたりだつて 三回 くらい 握つたところか 二回……。

- B ヒナカズツダスケア サンクエグレー キタンダ ネアカナ ハー。  
 半日すつさから 三回ぐらい 来たのでは ないかな、はい。
- A サンクエ グレー キタカネー。  
 三回ぐらい 来たかねえ。
- B ハー。  
 はい。
- A ダエフ キマシタコテ。 アレガ"ネー アノ マー アノー  
 大分 来ました。 あれがねえ、あのまああのがう  
 (102)  
 ケーガッコー／ タエーックン／ ホーム アッレスドモ マ ショーガッコー／  
 中学校の 体育館の 方も あれですけれども、まあ 小学校の  
 タエーックンワ アンマリ アガ"ラ ンテ" エースケアネ (B アガランテ"…)  
 体育館は あまり 上がらなくて いいからね、 (あがらないで"…)  
 アラ マー エマ／ ツクリダスケアネ。 ソレカラ ショーガッコー／  
 あれはまあ 今の 造りがからね。 それから 小学校の  
 アノ アレデスコテ アノー キヨー・シツ／ ホーワ アラ マー  
 あの あれですさ、 あのう 教室の 方は あれはまあ  
 アノ タエラダ"ト エー"ガ"ネ タエラダスケア ワリアエ エードモネ  
 あの 幸らが"ヒ いいが"ね、 幸らが"から 割合いに いいけれどもね。  
 (B ソアデスネー。) ケーガッコー／ネー (B アコワ ターケー  
 そうですねえ。) 中学校のねえ、 (アコワ ターケー  
 デススケアネー。) キヨー・シツ／ ターケー／カラ オッカネアサネ  
 ですからねえ。) 教室は 高いから こわいでですよ、  
 ハー。  
 はい。
- B ネー。  
 ねえ。

A コノ エキテノガネー マタ ナントカ ナレヤ エードモ マー  
この 雪といふのがねえ、 ま左 なんとか なれば いいけれども、 まあ  
エケネンニ アレデ"ショー コノ マー エキデ ツイアス ロードア  
一年に あれで(よ)、 この まあ 雪で 費可 学傷。  
ジカンテモ ソアトーナ モンデスデー (B ソアデ"スネー。)  
時間といふのも 桐多々 ものですせえ、 そろですねえ。  
(103)  
ア一。 マー オラナンカモ コッテ エキホリサ ダ"レカ マカッテ  
ああ。 まあ 私なども これで 雪振りさえ 誰かか 引き受け  
クレレバ アノ フユウチ ドッカエ カセギニ エカレッドモ (B 笑)  
くれれば あの 冬うち 冬うち どんかへ 嫁げい 行かれりけれとも  
マカリテガ ネースケー (B マカリテガ ネー。) シカタネー  
引き受けが 無いから 引き受けで ない。 仕方なく  
ウチニ エルヨーナ モンデ... (B ソアデ"スネ。) ハー。 ソラ  
家に 居るよくな もので... そろですね。 はい。 それば  
マタ エッテ アッレスコテ フユウチニ カネ チットグ"レー モロアテ  
ま左 行って あれですか、 冬うちニ 金と シレグ"らい 貰って  
(104) キタッテ ガンギ ツブ"シタダ" (105) ケンカンカ" メー ノメタタ"ノト  
来ても、 雁木を 游びながの 玄関か" 前に のめつながと  
エーハ ソラ オメー カネ モロアテ キタタッ ドー=モ  
言えば、 それより あれも 金と 貰って 来ても どうにも  
ナリマセンスケー ハー。 マー コノ エキノ マー アノ  
ありませんからねえ。 はい。 まあ この 雪の まあ あの  
ソンシツワ オーキー テッケー ネ。  
損失は 大さいね。 でかいね。

B テッケー デスネ。  
でかいですね。

A ハー、  
はい。

D ソーテースネ。  
そうですね。

A コレカラ マー エー、 コーソー、 オ マー ケー、 ネアケレバ ワケ  
これからは まあ 家の 構造を まあ 変えなければ 岩々  
モンガ マー エネー、 テ コトニ ナレバ ナオサラタガ マー  
者ガ まあ 屋ないといふ ことへ なれば なおさらなガ、 まあ  
ケー、 ネアケラ ナンガ<sup>(107)</sup> マー オロシトカ ツノモン<sup>(108)</sup> マー オラ  
変えなければ ならなか、 まあ 「おろし」ヒカ 「つのもん」 まあ わかじどもの  
エンテ<sup>(109)</sup> ツノモン (B オロシ。) エードモ リエ モン  
あたりで 「つのもん」と おろし。) 言うけれども、 こういう物を  
モガンケラ トッテモ ヤリキソネアドモ マー モグッタ、 テ エマ  
もガ なれば とても ヤリきぬといふけれども、 まあ もぐといつても 今  
ユータヨー、 ネ トーフヤ ダイコン キルヨー、 ネ スパント  
亥のよろに 夏齊や 大根を 切るよろに すねんヒ  
キラレレバ エードモ アト フサケルニ ケーヒヤ カカルシサ  
やられれば いいけれども、 あとを 塞ぐのハ 経費は かかるしさ。  
ヨーエダ オー、 デスコテ ハー。 ソレト エキノ タメネ エタム  
容易では ないですさ、 はい。 それと 雪の ため、 いたむ  
ヤネネー コノ マー ホ<sub>x</sub> アノ アラコテ シューリヒモ ソートー、 ナ  
屋根ねえ、 この まあ あの あれださ 修理費も 相当  
モンヂスチ<sup>(110)</sup>。 (B ネー、) エマ エ、 ケバン タカク ナッタ、 ワ  
ものでせ、 ねえ、) 今 いちばん 高く なたのは  
コノ カヤブキダスケアネー。 (B ソーテースネ。) コレワ マー  
この 薙草からねえ。 そうですね。 こたは まあ

カヤジタエガ ホレ アノ アッデスユテ アノ テガ ネアスケア  
茅 자체가 なら あの あれですよ あの 人手が無いから、

タランスケア ターケー (B ハー。) ドコエ モッテキテ コンダ  
足らないから 高い ところへ こんどは

オメアサン ジンケンヒガ ショクニン) テガ タコー ナッタデショア。  
あんな 人件費が 職人の 年間か 高く なつたでよう。

ダカラ トテモジャネーガ ナカナカ コレデ ヨアエジヤ ネアレス。  
だから とてもじゃないか なかなか これで 容易では ないですよ。

(111)  
オメアサンタ ソレデモ マー シタノ ホア アノ シモオ  
あんなの所は それでも まあ 下の 方 あの しもやを

モガタスケア…。

もがれたから…。

B ハー シモオ モエダスケア ズット アッデスドモネ。 (A コレカラ  
ほい、 しゃを もいたから おと あれですかねども。) これからは

アンダカラ エキニ タエスル…。 ) オラ ドコワ ホレネ  
石から 窓に 対する…。 ) われしの 所は ほらね、

グルグルート オロシガ オレデ エルデショア。 (A ハーハー。) (笑)  
ぐるぐる、 ピ 「おろし」が 下りて いりでよう。 (B ほいほい。)

A ア ソー ア ソレガネ ショー ショー アノネ メンセキガ  
ああ そう、 ああ それかな、 やはり あのね 面積か

デッコアテモネ ソノ ツノモンガ ナケレバ (B ナケレバ。) イーンデスヨ。  
大きくてね、 その 「つのもん」が なければ (B なければ。) いいんですね。

(114)  
ソー セバネー アノ ホレ エキホリガ ラクダ。  
そ (B すればねえ あの なら 雪振りが 楽だ。)

(115)  
B オラガ オロシカラ アレノ コノ ユツラノ アワエガ オラガ  
われしの家の「おろし」から あれの この 小面の 間か われしの

セーヨウ ターケー デスンガ。  
背より 高いですから。

A アーアー ソーネ。  
ああああ そうね。

B ソーシテ ソレダケ ホー モンニ ナレバ (A アーアー。) ズット  
そして それだけ 無い 物に なれば (A アーアー。) すと  
ラクデスコレ。  
樂ですか。

A コレオ コノ ヤネオ カエリーザシテ マー エマ ホレ アノ  
これを、この 屋根と 改造して、まあ 今 ほら あの  
エロエロ マ アノ オー エキ ホルニ ヨーエジヤー ホーテノデ  
色々 まあ あの おう 雪を 摘るのに 容易では まいといふ  
モッテ アノ クズヤネ アタン カブセルノガ ハヤッテ クルテ  
ので、あの 茅屋根に トタンを かぶせるのか はやって くれて、  
コレガ マー アノ カネモ マー ソートー カカルシ マー  
これか まあ あの 金も まあ 桐も かいかみし、まあ  
ジヨーディヨー アタリマデ マー ヤツモ エキガ スクネースケサ  
上条 あたりまでは まあ やつて 雪が やないからさ  
エードモ ウカワデ コヅ ドー ュー モンダカ。ウシロデモ  
いいけれども、鶴川では それで どう いう ものか、 後ろでも  
サガツエ エル シーワ エードモ ソーデ ホケラ コンドワ  
下って いる 家々は いいけれども それで なければ こんどは  
コノ シタエ オッテ クル ユキデ オカナカ コレデ コレ  
ンの 下へ 落ちて 来る 雪で つかつか ンれで ンれを  
(120) 又ケルニ ヨーエジヤ ネート モーテー。  
(121) ハケるのに 容易では まいと 思って

(122)  
B ヴィー・シテ ナジヨー・ネ・カ カテアーデスト。 (+ ア ソアーデ・ショア。 )  
そして 大変 壊いそりです。 ( ああ そりでしょ。 )

オッタ エキワ カテアーデスト。  
落ちる 雪は 壊いそりです。

A ウエカラ オチルガ"ンネ ソアーデスコテー。 ソッテ タショア ホレ  
上から 落ちるもの そりですさ。 それで 多少 ほら  
トケテ ユッダ ホレ アノ スイブ"ンガ" シタエ オッテ クルカラ  
溶ゆて こんどは ほら あの 氷分か 下へ 落ちて 来るから  
ソレガ"、コンタ" コールスケア ソラ マー カテア ワケデスコテ  
それか" こんどは 氷ろから それは まく 壊い わけですさ、

(B カテアーデスト。) アー。  
（壊いそりです。） ああ。

(123)  
B ダ"スケア ナゼガ" ツケハ" ソレクサ ヨーサリテ"モ ホランケ  
だから なされか" 突けば" それこそ 夜でも 振らなければ"  
ナラン。  
ならない。

A ハー・ハー。  
はい はい。

(124)  
B マー ミズノ キク ドコワ エー デ・ショアードモネ。  
まあ 水の 朝く 所は いいでしょがね。

A ハー・ハー。 ソレデ" グ"ルグ"ルト マー アタンネ シテ ヘーキンニ  
はい はい。 それで" ぐるぐると まあ トタンに して 幸均に  
オナルヨー = シネアケラ エイモ カシガル。  
落ちるよに しなけれは" 家も 代負く。

B ~~~~~ネー。  
ねえ、

A リラネー エキノ ケカラテヤ モノスゴーイ ケカラ アノ  
それはねえ 雪の 力といえば ものすごい 力 あの  
ジーリヨー アルンデステ。 オラー アノー オレヤネー アノー  
重量か あそんですよ。 わたしは みのう、 わたしひねえ みのう  
マーアンマリ カラタガ ジョーブテ ネアンダスケー ニサンネン  
まあ あまり 体か 丈まで ないものから、 ニ三年  
ホランデ オイタラデスオ ～ダ～ ウシロノ ホ ホッタガ"マエ  
搔らないで おいたらですね、 後ろの 方を 搔つたが 前の  
ホーク エー ヨア エー ヨット(126) オットラ エー ガ マッテ カシガ"ケマッタ。  
方は いいわ いいわといって いたら 家か まるで 何んでしょ  
(ロハー。) モノスゴー カシガル。 タカラ セッパシ アノネー  
はい。 ものすごく 何んく。 から やはり あのねえ、  
オタメ アタン カブ"セト シテワ ゼンブ" カブ"セネットユトオー  
トタンを かぶせるならば 全部 かぶせないとねえ、  
カタッポー アタン カブ"セルト オチルデショー カブ"セネー  
片方 トタンを かぶせると おちるでしょう、 かぶせないと  
ホーク オチネー カラ カナラズ エー ワ カシガリマス。 (B)  
方は 薙ちないから ッす 家は 何んります。  
ソアデショーオー。 ) ハー アレ ソートアーノ ジュリヨー"スカラネー。  
そうでしょうねえ。 はい、 あれは 独歩の 重量ですかうねえ。  
マーコッテ ココニ トシヨリンバッカン ナッテモ マー エラレルヨニ  
まあ こねで ここに 年寄りばかりに なっても まあ 居られるように  
シルニヤ マー ヤネサエ モランケラ エラレンガネ。 ダカラ  
するには、 まあ 屋根さえ 流らなければ 居られるがね。 だから  
ソア シンニヤ エキニ タイスル マネオ マー ドアユー  
そう するには 雪に 対する 屋根と また どういふ

(127)

フー＝ シルカ マー イーワ イマ ユータヨー＝ ツノエン  
風に するか、まあ 家は 今 言ったように 「つのもん」  
ソーエ モンク モエテ" シモーテ ナルベク アノ ウチノ  
をうい; ものは もいで" しまって なべく あの 家の  
アノー ヤネオネ ウエエ アガランテ" エーヨーネ トシ トッテ  
あいう 屋根をね 上に 上がらないで" いいように、年を とつ  
カラ マー ヤネノ ウエ アガレインテッタテ トテモ トテモ  
から まあ 屋根の 上に 上がれなどと言つても とつも とつも  
コラ オメアサン アガラレル モンジャ ネー ハー (B…ネー。) タエラナ  
ンねは あんた 上がられる ものでは ない、はい、ねえ。 平らな  
アガラレル モンジャ ネー ハー (B…ネー。) タエラナ  
上がられる ものでは ない、はい、ねえ。 平らな

(128)

ドコサモッテ オメアサン (B 笑) アノ タガ"タガ" シテノガ  
所さえも あんた みの タカ"タカ" しているのか。  
オヌエ ヤネ アガ"テ エキ ホレナント エーバ" トテモ デキネアガ  
あんた 原根に上がらて 雪を 摘れなどと ねえは どう できないか。  
ソーア セバ" タシヨー ワケア" ショガ" エナクテモ アル テードワ  
そ) すれば" 多少 若い 人んか" 居なくとも ある 程度は  
マ ガンバッテ エラレンダ"ドモ アノ ヤーネノ エキガ"  
あ かんばって 居られるのがされども、あの 屋根の 雪 カ  
ホランネー ヨーン ナレバ" コレー ドー シタッタテ" エランネアテコト。  
捕られないように なれば これよ どう じるところで 居られないさ。

マ オエオエ ユレカラ マー アノ アタン カブ"セル クズ"ヤニ  
まあ おいおいと これから まあ あの トタンを かぶせろ、茅屋に  
アタン カブ"セル… コレカラ マー エヌ ホアホア"テ  
トタンを かぶせろ… これから まあ 今 方方で"

ヌッテルスケア カルヨー＝ ナルト オモ一ネ。 マタ アタンノ  
やつているから やるよに なると 思うね。 また トタンの  
ホーカ " やスイ ~~~ ハー。 カヤ ~~~ ダイタイ エマネー  
方か 安い、 はい 萩 大体 今はねえ  
カヤ カイテアタッテ ネー カヤ ネアーデ"ショア ダイタイ カラン  
茅を 買へなくても ねえ 茅は 無いでよう。 大体 メラモ  
モンダモン  
いものだ"から

## 注記

1. ヒラバ 山間部に対して平野部を言う。
2. ヤマソナカデ… 次に「住方がない」といふようす心持の表現が省略される。
3. ダケ {dake} シヤーダスケア>ダスケア>ダケ>ダケと變つたか。
4. ヨー {yo:} セまい{O} よくのウ音便。
5. アラコテ アレタコトイの変化。あれぞさ、なんぞさの意。
6. この辺界はてとうえにくい。
7. タイシタ 副詞 たいして、程度の差しさま。後ろに打消表現を伴う。ここではオモイソネを修飾する。本巣岩船頭や松岡半蔵島津宮城半島船頭にあるように、タイシタが肯定の済句を修飾することはない。またタイシタという形もあるがタイシタより用いられることは少ないと。また連体詞タイシタもある。タイシタユターネー(左いしづことはない)
8. シミズダニ 清水石 銀杏から又川鶴川の下流にある大字名。鶴川小学校の学区から野田地区の学区に變つた。
9. カンジキ 構 雪の道・雪の山野を歩く時ほき物の下に結びつけて雪中12脚が揃そろひ様にしたり、あさりには雪を踏みかためて雪上の道をつけるなりする。木・竹製のL形の輪状の用具。
10. カクマキ 角巻。毛布の防寒具。ここでは四角の毛織物を三角に二つに折り、折り目によわを通し、肩から胸をおおい、頸の所でよわ

を結ぶ。後妻ら女性が用い、安全ピンで前をとめ、刈羽郡内ではマワシカッパとも言つたといふ。

11. エウエ ウエ(上)の変化、「恵えう」もエエルとある。エウエ(静岡県)  
エウエ(漁業況況湯泥町・宮山岸・島根県) ウエ(岐阜県・静岡県志摩  
紀州・和歌山)
12. ミノボシ [minoboshi] 篠帽子 タツノケ(和歌口のほんぢんじす  
げ)またはクゴ(和名不明)で継み、頭と胸をおひう。長さ1m余  
りの各の雨具。その裏側は精巧に縫まれる特徴の模様がある。近頃  
の歩き用として現在も作られ使用されている。
13. テンボクラ 木・山などの頂上、ここでは体の頂上つまり頭の意。  
テンボク(滋賀県で頂上)。餅菓ではテンボ・テッパンとも言い、木  
のウラ(うぬ・梢)はシンボクヒも言う。ラは接尾語。
14. ミチツケル 雪の積ったものを踏みつけて通れるようになると。ミ  
チ(オ)フムヒシいい、名詞にエキフミ(雪踏み)ミチフミ(通踏み)  
がある。上越市ではエキフミ、佐渡郡ではエキフミ・ミチツケ。
15. 語尾がはつきりしないが「ンガ」(理由をあらわす助詞)があまり  
文脈上考えら。
16. タヤノナダレ 調査地点から5km北、柏崎市大室向屋小室山田(当  
時刈羽郡野田村に属す)に、昭和乙年(1927)2月上旬に起つた  
豪雪崩。一戸を残し八戸が全滅したといわれる。
18. [pigatsu] 善通[-gwa~]なのであるがこの場合[-ga-]であつた。善通  
該化したものであろうか。
17. つかみにくい音声がある。話者の主張に従つて文字化した。
19. ガンニ 終助詞。「なつて、範疇がないもの」というに近く、理由を  
述べて訴える表現となつてゐる。該漢は「ガニ」で「ガンニ・ガン  
ネ・アンネ」となつて用いられている。「ガ」は格助詞から來る準體  
助詞、「ニ」は格助詞から來る接続助詞であり、「ガンニ」は連接の  
接続助詞として「のに」の意味に多用される。「へー シヨーグツモ  
クルガニ、ヤダーハー」(もうお正月も来ないというのに、こんなに  
大雪がかるとは>いやねえ)の「ガニ」や「の」と「アンネ」

も遙接の例である。

これを順接の接続助詞と見て、「舉りが来る<sup>が</sup>に、すれを進み」(伊豆新島。落城樂はガニニ)、「日本國語大辭典」による)のように、故に・から・のでの意味に用いられ、遙接のものを用法があることを「日本大辭典」(山田善助著)がかいじいをいふ。19の「ガニニ」は新島の例文とちがい、後件を置いて、終助詞と見つけている。しかし理由とのべる點は同一である。一行とんで前にある同一説書の二七は「オラ エネアカッタンダ オータロアカ ツコ コロ」という判断の理由をここでのべているとみることができる。

といつて「ガニニ」を單純に疎遠の接続助詞とは言えない、  
ンダドモ、コノ エキジャー マーンデ ツモルバ、カダ<sup>ガ</sup>ンネ。エ  
カンネヤーヨーオ ナレヤ カナンスケ エカ一ネ。(明治39年金井作)  
(然し、この雪ではほんとに積るばかりだらう。行けまいように  
されば帰るから行きまますよ。)

もつとゆへくして行けと言わせてことわる場合の表現である。形の上では終助詞であるが、此時からは遙接の如く、順接の如く、そこに微細な表現である。駆手の希望に立ち始理由を遙接的で余情と一緒にさせて訴える終助詞に見つけてある。

20. モン 順接の接続助詞で理由をへて主張する表現と思われる。理由の助詞「モンガ」とはちがい、「モノ」という名詞から生れた江戸時代語なので“あろう。せる用語とは限らない。

21. 発音かはつきりしない、「コーグネー」のようにもきこえる。該音にをしかめをところ、「クローグネー」と讀えてくれる。クラクナイの変化。クラクとそのう音便形の混成語形か。

22. オツー 二月下旬の寒ではなく、寒は1又月ごろから積るのに、2月という遙い時期に降り立つをといふこと。

23. ナカヤマ 地名 鶴川地亘から丹那山村へ通する中山峠。

24. エペー 八戸をつむときいといふ。

25. ニンゲン 十八人をつむときいといふ。

26. エキホリ 跛雪すること。主として家庭の上や側面の雪を振り落し

たり振りのオホリする状態、「北越方言」に説明されてゐる。中越の山間部の用語。上越地方は屋根についてはエキオロシ、道路上や家の側面についてはエキウリ、中越地方半斜面でもエキオロシ、佐渡部と下越地方はエキカキと称し、窓の溝淺と付記して用語とすることができる。参考 山形県エキオロシ・エキカキ・エキハギ

スラ、シタリ二人、エキホリのお来る人が二人いる家はの意で、一人は自家の除雪に残す必要があること。

28. オマエサマガタ 諸者男 A が五六歳年長の女姓諸者 B C に向っていゝ最高の精神の差高代名詞複数。

29. ラッタ られる 諸者 B は自命左右の勤使と言うのに敬語を使つたが A のことばにひかれてもって間違つたか、口を意識してそれを敬うためと言つてかいわれたであろう。

30. アンガツ あんち 形容動詞の連体形。「ア(イ)ホナ」の変化か。I の又4「ソンガソン」IV の68「コンガツ」参照。アンゲナ(中越中林存氏による) アンウケナ(中越中林存氏) アケナ、アガイナ(上越小林存氏) アナナ・アンナナ・アンナン(西頃城郡幸魚川市春海町、大坂勝男氏による) アンナ・アンナン。アソノン(佐渡郡) 南魚沼郡湯沢町ではアンゲナ・アンゲン。

31. ミンナ よそではみんなの意。

32. このあたりから B のよなりしている筋旅が飽きてひずかりはじめた。このあとあらわれる泣き声はそれである。

33. 「毎日三尺」 前述山田の雪崩の時、一丈五尺(約4.5m)の積雪の上に一丈五尺の新雪が積、と伝えられてゐる。

34. ヒトツキリ 一切りの変化、一時、僅言では無い。シトツキリ(勘定次郎・東京御) シトシキリ(寄生虫)

35. アワエ ちかい、間。隙間や物や場所の間。

36. は、さりしたい発音。古い固い音の上に新しい新音が積み重ねて「唇唇齊齒(アイヒンチ)が古じてことりことり」といふことを簡単 12音 と 1 てある。

37. 38 「シダガ」を諸者は「ガントモシガ」(のだからの意)と言つてい

- ると主張するがそのとは思わない。
39. サ 副助詞「さえ」の変化か。南魚沼郡でも僕も。
40. コエラ こちら・こいらの変化か、右語「これら」の変化か未詳。
41. ミチフミ 14番題
42. ヤネノユエノアタマ 「屋根の土の頭」で屋根(藁屋根)の最高部のグシ(棟木)の部分をさす。
43. ネア一の名がほつきりしない。アーノ直後に「ンガ」(からの意)のようす考かあうようであり、又名は「ドーキン ネーンダ」にも見える。
44. オカネア 危険で恐ろしい。越後佐渡・関東中部・東北地方。
45. シタガアエテル 平地の窓がやたら多く、地上と屋根との高さの差が大きいこと。
46. サスガタツ サスは右語・建築用語「投石」民家の「斜め材」「通常ひき木をささえる金掌状のもの」という。(建築用語辞典)サスガタツとはサスの勾配が強く屋根の傾斜が急で高いこと。
47. アマゴ 雨具の変化。
48. ミノヒロヒト掌で編んだ山みのであろう。他にフシンミノ(著縫蓑)・マワシミノ(圓し蓑?)といつて軽い布物に着用するやう手の小籠を装飾性の加わったみのもあつたという。
49. カサ マンジューガサ・トンカリ笠等色々あつたという。清承後では雲の端ショーナイ帽子とかいふやうという。
50. マツテ 副詞マルテの変化。
51. シム 初めのマ行五段活用。頸城地方ではシグ。
52. シンナカ 園竹裏・地竹。「虫の呻」の変化。南魚沼郡湯沢町ジロ。
53. アシタダ 「ま左翼の覆くの左」の意。
54. フカグツ 葦で編んだ長靴型の雲中の履物。越後に古い。南魚沼郡湯沢町でフンゴミ・フッゴミと表す。
55. シタナ 大棚 園竹裏の上スル竹の高さの空間に吊した五尺四方位の木を組み合わせた格子状の棚で、各期季の地の季節に、収穫物を上にのせて吊るす。これは吊したりして乾燥させる器具。現在

も使用していふ家がある。

56. はっさりしたい、エンネテツヤーとされる。被者に名をすと「エヌヌテツヤー」と云う。「入れ玉でさ」で深靴の中に入れて敷けば暖くはないのに、それを入れ替えてさの意味になる。
57. アレシタは「暖い足」の意であろう。
58. ギョーザ 行儀作法。行儀・行儀。中越ギョーザイ、上越地方佐摩郡、南魚沼郡山形岩谷一サ。
- 59 トンデモネードコハク 鐘錠句 薩フカグツの奥先端半で足先を入れて履かずルースに履くと、靴の底で長い縦の筋状の部分半で底のように靴の形が崩れてしまうのをおもしろく表現した。「ヨコナヨーハク」とも言ふし、前にはこれを「ギョーザガワリー」と表現したものである。
60. ツマガケ 蓋織雪靴の一種。爪掛け。ツマカケワラジの略か。次にあるオツカケと同一物か。構造は説明しにくい。三島郡、鹿島でいう。
61. ダイモチ ダイモジのようににじこなれる。大掉・大物。ダイモチヒキ(大物引き)の略か。「修羅に大材木・大石をのせて引くこと」と「北越舟運」古事記。
62. オンカケ ウンカケとも言う。革織の遠古用の名の複物。からじとウツ(足の爪先と手足の上部とを包むためにわらじの上部にかけたる蓋織のもの)とを組み合わせた手縫物。現在川着先の山入りにはくない。ウツカケ 中頃城郡・長野県上田 オツカケ新潟県・喜山郡・長野県。
63. アシノケヤーク 足の通り。経く骨のこと。
64. アシャイ 不明。「足に」か。
65. ワラグツのこと。打ちそない硬い革で編みスクワットの浅いはきものでかかとの方が露する。近寄りに使用する。通常にかかとを包みぬけにシガラをつける。このツツは現在も使用する。東北・長野県辭焉其也。
66. 踏み者 2 3 個の當や旅行用の蓋織の物、シガラミ(柳)又はシブガラ

この変化か。「北越雪譜」にシブカラミ カウエル。南魚沼羽湯法門で  
ルシブカラミと言つた。

67. ニのアカリカラバイクハ音が入つてくる。  
68. アンゲア アンゲアンのようにならう。注30に由る形容動詞の連用  
形である。

#### 69. ガンネ 注19参考

70. スカリ 深雪をかんで道をへくる時にカンジキの下などに重ね重ね  
はくを用ひる雪中用具。ここでは木の轆を縄であんをものとなつ  
ていいさか。他に山竹を丁字にわけたもの二つを輪状につなぎ合つた  
ものもあつた。二つの(左左)轆の各々の先端に紐をつけて両手でそれを握りながら歩いた。二輪のよろに紐の両端を結び轆にして首にかけ(手が左右なくよい)て使うことなり。『北越雪譜』にも  
も風がある。スカリツツはスカリと書いての意か。スカリと言うものとの意が不明。この人独特の罕用法であろう。

71. コンケ こんな 連体形 コンガンとも。1の6K、4の68参考。  
72. ツカ 轆 新潟県・山形県・福島県・秋田県。  
73. ほつきりしない。諸者は「カケエトシラシカタ」と言つたと説明す  
るが、「掛けること」の名がわからぬ。  
74. 道をへくる身振があつたのである。  
75. エワムカエ 上向 家の名。大字折戸のゆ。  
76. オリイ 折戸 銀鏡の傳する大字の名。  
77. ミナツケ 朝夕集落間の雪をかんで道をへること、またそれをする  
人。  
78. アサゲ 朝 東北地方新潟県長野県福島県湯路。  
79. コグ コザクとも。孤航の多い雪の中を漕ぐように歩くこと。水や  
草木の繁いところをさす。全國各地、コザクは魚沼地方頸城地方米  
沢地方。  
80. アエイ ありく、あるくの変化。歩きあわる、歩了あわる。歩行は  
アエフ、エーフといふ。アイイ静岡県・南知多・豊野県・岐阜県。アーヴ  
信州・鳥取県・島根県。

81. エカン エーカンとる があり。エーカン 山梨県甲斐市
82. コンスキ ぶるやいわや。核に核をつたる階層同様、「北越寒磯」に似たるものある。「木の筋」の変化があることは「木筋」に階層が添加したか未詳。コエスキ 烏羽郡、コイスキ 柏崎市中頸城郡柏崎町、コスキ 三島郡佐渡郡長野村岐阜県美濃市橋井半石川町福島県、クシキ 南魚沼郡エキスキ 佐渡郡、スコ 佐渡郡小木町。
83. ナンダロード一 めり羽郡刈羽村自身の調査者の妻は、「断定であります半信半疑の時に刈羽村ではこういふ表現をする」と言う。
84. ダ ダードモ (ケルとも)と有難いことをか。
85. モンガ I の法 97 で説明した理由をあらわす接続助詞。こゝでは「軽いですから」の意か。守頸城郡加賀村(旧称)の用例をここで挙げておこう。「オラトールモンガモッテテヤル。(私は車をから持つて行つてやる)
86. イニ 接続助詞 からめて エホとまることである。I の法 112 参照
87. ハヤエ [hajē] 早い
88. シタオ シタエオ の様にきこえる。「下へ」と「下を」と言ひながしがであろう。下を空けるとは、屋上から家の側面に抜けあろしを雪を壁面から振りのけて雪の側面を除き、かつて窓の明かりをとる作業のこととて、大きな労力を要する。「雪振り」という语はこれに由来らしい。
89. ポーク… の名は「よい」のようなことはか初期でれている。
90. エタヤ いわやかんでであろう。
91. ブナ ぶな 植物名
92. ユシャータ ニレラえを。終止形はユシャウヒモユシャーヒモ。II の 32, 41 の 29 参照。
93. ツユール ツカワレル (尊敬) の変化した形か。
94. ナカツ 村人が割りあてられて並償ですることには気がつかない。
95. …「として特定の者があつた」の意味の後の前略されたのである。
96. エキワリ 雪割り。道筋などの雪を割り踏くこと。江戸は春によつ

て雪が降り止みと（大抵四月）丹鶴川地区全地域から人夫400人程が歩動いて部落道、村道、柴道の除雪をします。これをエキワリといいます。

97. ハカワンネー 不可能のこと。

98. セーツタガデ 言つたのであつての意が、話者は「ソエタロモ」(そう 言つたけれども)と主張するが、そうはさせとれない。牛頭城跡では「えう」とセウナ、セウテ、セウ、セウ、セワンなどと「えう」(制詞)と「えう」を組合した勘詞がある。こゝもその影響を考えてよいと思ふ

99. ヨキ[じゆ]と[じゆ]の中間の如き者。

100. コヤキヨー この次に「ジヨ」より前者多かずかに生える。土ガ。

101. ヒナカ 半日 中越地方富山石川岸辺畿中頃のことは 経団の意味で本州岩城郡及び庄島半島。

102. アレストモ 「それほど高くなくてよいけれども」の意。

103. マカッテ 引き急げて。う行四段のマカルの連用形マカリテの促音便形。マカス(毎す)を自動詞化して作、左側新音語。差せられて、引き受けの意で促音といふ意識はない。

104. ガンギ「ガッギ」の感じもする、魚沼地にかけて換房のところを促音とする地名である。雁木・縁側。家屋のサシキ・チャノマ(ヨコザヒル言う)、時にはニワ(住家をする部分)の前面に母屋から抜き出しあ庭の下の部分を言う。玄関から上午をカミガンギ、下午をシモガンギと言うことがある。カミガンギは普通中三尺余りの板敷であり、畳を敷くこともできる。屋内に入る雨や日光を防ぎ、室への通路となり、物を乾したり、子供の遊び場所となることが多い。シモガンギは四足の木の土階が多く、農業社会、冬期には野菜・薪など置く場所ともなる、「北越方言」「江戸の町にいひ、座下(おましら)を逃後に雁木又は庇といひ」とある。高田長治新潟市等で庇先の庇を人道として通行しているガンギはガンギの發展したものである。ところば「によれば西鶴茶部では「庇の土階たるもの」をガンギといふが、こうしてガンギは進歩的復古、長野半下水井郡、福井県に有

3. 「越後方言考」によればガキ・ガキといふ形もあるといふ。中村故郷の庇の形が雁の字に似ているからとガンギの説得と復讐している。南魚沼郡湯沢山でモガンギと言ふが、同地では別にガッギといふ説があり、これは物体や場所にあるざざざざの形状、階段状の上下左右の差を意味する。ガンギの説得と関係があるが。
105. ツブシタ ツブレタ（年勅例）と言うところを地勘例で名へ表現する。「死んが」といふところを「殺した」といふことから南魚沼郡湯沢町に名づかと思ふ。
106. ゲンカン genkwan と言わざがつを。
107. ナンカ ナラナイカの変化 3行音はよく脱落する。
108. オロシ 下屋のこと。オモヤ(母屋)とシモヤ(作業場などの中庭)との主屋(本家)について、本家よりひくい屋根を持つ建物の部分の総称。玄関・流し・ガンキ・峰には名所、仮壇を置く部分・物置などとかオロシと云ふことがある。次のツノモンも同じものとさす。語源は下ろしてある。楠木半神墓川岸宿崎井でも言う。
109. ツノモン ツノモノとも言う。主屋から空をあけていふとで言うか。ツノモロ(角室)が説得と復讐した老人があつた。
110. オラエン 私どものあたり。この辺。説得不明 オラエンヂとも。皿の池97番空。瓦張インヂ近隣。
111. シタ シエに同じ。家屋をほほ玄関を境として上と下に二分し、廊下、茶の間の方をカミと言う止めし。ニワ(拵業する部屋)のある方をシモ・シタと言う。カミシモはつまがつていろがゆかやつちかの屋根のゲシ(様)の高さもちがい、峰に床の高さもちがうのか。明治初期半ばの建て方であつた。
112. ツジス むすと便利にむつな之意。
113. オレテ オリテの変化。
114. セバ するの未型形ナバ
115. コツラ 屋根の軒の最下端・軒先。「小面」からか。中頸城郡・長野県下水内郡でも言ふ、雪下ろしの雪の量が多くなれば庇の上はもろろん、コツラまで雪の中へ埋まってしまう。除雪して「コツララダ

- 以上この二の困難でをここでは説いていき、
116. リレダケ オロシ・ツイモンをさしている。
117. クルテ クレテの変化、
118. ジョージャー 旧上條村 松崎市 上条地区、
119. ウシロ 家の後ろの地面が化粧斜して傾く等として障害の便物等と  
々。
120. スケル の手、傾く。
121. オモテ 息子と言ひ切らず、全然を残す表現。
122. ナジマー ノカ ないへん。どんまにか。叙述の副詞、伝聞しにことについで想像してその様とのべる表現である。下に「息子を」「女と」との表現がある。「まにせんにか」からあれ互といわれて「ナジマーノカ」の変化。妙羽郡、守護城湖岸崎地方にある。南魚沼郡湯沢町では「ナジマーノカ」。
123. ナゼ なされ。ナデの変化。柴下にはナデ、ナゼ、ナザルが広く分布し、なされの発生と統轄では「ナゼガツク」(窓)と言ひ、南魚沼郡湯沢町では「ナゼガツル」(糸)といふ。「ナデ」といふ語は東北地方新潟郡高田村在郷高山集にある。
124. ミズノキク 水を家の周囲に流しゝみ池のように溝えて消寄することができる地形の家名の意。
125. カシガル 傾く う行五段の副詞。東北地方新潟郡高山集。
126. オッタラ この辺界などでよく生きとれまい。オッタラ、オル(居る)はこの地方は倭の名前から、「と言つていをら」が極端にちぢまつて表現であろう。
127. イーワ エーワと言うのが普通の發音であるが標準音紀念として石碑等のようになつてしまつた。
128. タガタガ 副詞 老人病人の聲を人などが坐りとかぶせかけて老人病院からしていふ言葉や仕事など何かのうちはかとうな言葉、「紅葉物」にある言葉である。
129. テコト テコトダと言つていふようにも思える、あるいはコトガ経助詞的につり弦の新空俗えとつてるものか。

## 5. 冬の樂しみ

詠し手

(田名号) (氏名) (生年)

A 高橋 真男 大正9年

C 高橋マツノ 女 大正元年

D(田名号) 高橋 春宣 男 大正15年

D マー フユワ やハドリ エチバン タノシーノワ ショーグツツデショーシ  
まあ 冬は やはり いちはん 楽しいのは 正月でしょうし。

マー ショーグツニ アルノワ やハドリ イロイロノゴケソーカラ  
まあ 正月に 有るのは やはり 色色の 御馬也走から

ハジマッテ ギヨージニヤ マー サイノカミダトカ ナンダトカ  
始まって、 行事には まあ 賽の神<sup>(1)</sup>とか なんとか

マー イロイロ アリマシタガ ソコラヘンカラ ハナシ ハジメテ  
まあ 色色 有りまいか、 そこら辺から 詠しと 始めて

クンナセヤ。<sup>(2)</sup>

下さい。

A ソーデスネ。 マ ヤマン ナカノ コトダスケ<sup>(3)</sup> タイシタ アノ  
そりですね。 まあ 山の 中の 事<sup>(4)</sup>から 大した あの

オモシロエ コトモ ネアカタド元<sup>(4)</sup> (D ハイ。) ムカシワ  
面白い 事も えがきをくれども よい。 昔は

アレタコテネー アノ フエン ナレヤ マー サッキモ ハナシ  
あれですよ あの 冬に ミルば、 まあ さつきも 詠しが

デタヨー ナニワブシガ クルノガ タノシミグレーン ~~~~~<sup>(5)</sup>  
出たよに 浪花節か 来るのが 楽しみぐらいいの -----

エマミテヤ テレビヤ ラジオワ ネーシネ。

今みたいに テレビや ラジオは 無いねえ。

C ソーデスネー。

そうですねえ。

A ホッテ ホビキテノガ アッタ。<sup>(6)</sup> (笑) オメササンガタ…。  
それで 宝引きといふのか ある。 あんた方…。

C オラ ツノ ホビキワ ワカリマセンエネ。<sup>(7)</sup>  
わろし 吾の 宝引きは 分かりませんですね。

A ホカホー (C ハー。) ハーン。  
そうかねえ。<sup>(8)</sup> (はい) ふうん。

C ソレテ アノ コエキノ トシニネ (A ハー。) キタムケー<sup>(9)</sup>  
それで あの 小雪の 年ね、 (はい。) 北向の

ホーワ ユトシワ コヨキテ ダイモチガ ハヤルテナシテ  
方は 今年は 小雪で 大様か はやるよおビ<sup>(10)</sup>  
(ハー。) キーラサ ダッテ コヨキダケヤ ダイモチナシテ  
はい。) 聞いてさ、 どって 小雪ならば 大様なビ

ヒカソネアニッテ ワラワタ ユトガ<sup>(11)</sup> アリマシタ。 (A ンンンー。)  
引かれないのにとあって 焼われた ことか ありました。<sup>(12)</sup> (うんうんうん。)

ソノ ホビキテノワ (笑) オラ ケケンガ ネー…。  
その 宝引きといふのは わたしは 経験か ない。

A ソータ ホビキノ コト ダエモヤ ユータコテネー。 (B ハー。)  
そうぞ、 宝引きの ことを 大様と 言ふよねえ。<sup>(13)</sup> (はい。)

アノ ムカシノ ソー アノーッ シカク！ アナ！ アイタ ゼンオ  
あの 昔の そら あの 四角の 穴へ 明いた 錢を

エッペー コー アレグコテー ヨシテテサー マー エロエロンガ<sup>(11)</sup>  
たくさん う あれがさ 寄せておいでさ、 まあ いろいろのか

アッタドモ ホー テ ナワ エッペー コシヨーテテ リーアシテ ヒツケテテ  
あつたか、 そして 繩と たくさん こしらえておいで そして 繕びづけおいで

ホー テ オヤダナンテテ ツレオ オヤン ナッタ モンガ ヒーテ  
そして 親などと書いて それを 親に なつた 者か 引いて

ミナ シバタユテー。 ホテ ダイモケタナンラテ。<sup>(12)</sup>  
みんなが引ははよねえ。 そして 大母などと書いて…。

C ソラ ンダー オトツアン<sup>(13)</sup> ハナシ キキナスッタンテ オマサン  
それは それなら おとうさんは お話を 聞かれないので(あって) あれは  
ヒータ コトナンカ ネー ンデ ショー。  
引いと ことなど ないでしょ。

A オラ ドキモ アリマシタコテ。 (C リードスカ。) ハー オラ  
わらじのちの 墓も ありますさ。 (C そうですか。) はい わらじの  
ドキ ホレ アノ ホレ アノ アコノ エノスケノ アノ オトツ  
壙、 ほう あの ほれ あの あそこの 伊文助の あの お父  
ツアンヤ<sup>(14)</sup> アノ ショガ ワケー ドキ アノ (C リードスネー。)  
さんや あの 人々が若い 時、 あの ケウですかえ。  
オラ マダ アノ マー ワケー ドキダッタ。 ワケーッテ マーマー  
わたしはまだ あの まあ 若い 時だった。 若いといつても まああ  
コドモミテーナ マー ガッコー アガッタ ジブンダガ マダ アリ  
子どもがたいす、 まあ、 学校に 上った 時分だが、 まだ あり  
マシタコテ。 (C ハー。) ハー。 マー アノ オクノ ホアニヤ  
ました。 (C はい。) はい。 まあ あの 奥の 方には  
マー アレガ アッラコテ ブカンダッタ ユータコテー。  
まあ あれが あれだよ 盛んだったと 言った。

- C ～～～ マヂネー、 (+ ハー。) ～～～ メシタコテ。  
までねえ。 ( はい、 ) まあさ。
- A マー アノ ムカシヤ ホレ エマト チゴーテ アノ タイシタ  
まあ あの 勝は ほら 今と ちがって あの 大した  
ソノ ゴラクテ モンガ オー カッタスケ アーエノガ エイツノ  
その 嬉樂といふ シカク 無からなから、 あそひのなか 錐一の  
アッラコテ アノ ゴラクダッタコテ。 (C ソアーデスネ。) アー。  
( あれどさ あの 嬉樂であります。 ) そりですね。 あそ。
- C ソシテ アノ オヤガ ソアーリヤ ワラジオ エロリ ) ハタデ  
そして あの 銀河 草履や わらじと 間接裏へ はんで  
クミナガラサー (A ハー。) アノ ムカシバナシオネ (A ハー。  
組み立てるさ、 ( はい。 ) アノ 一番難をね。 ( はい。 )  
) シナヌッタノオ (A ハー。) アノ ワタシナンカ) センパエ)  
されど ( はい。 ) あれ イヒシタとの 絶筆  
シトガ ミンナ カタリナヌッタ (+ ハー。) アー エー ハナシオ  
人か ( はい。 ) 该りなさう ( はい。 ) あれ 言う 言ふと  
キータ オボエガ アリマステ (A アー ソアーダスネ。) コタツエ  
聞いた 記憶か ありますよ、 ( あれ そりだね。 ) こちつに  
ハエッテテ。 ( 笑 )  
はいってて。
- A タモ (16) イカシ ) ショウ (17) ヨク マー アレオ トショリショウ マー  
しかし、 一昔の 人よ よく あれ あれと 年寄り達は まあ  
アノ クチズタエデ マー エータンダガ エロエロナ コトオ  
あれ 以後えて あれ 言うのをカム、 いろいろ發 ことを  
シカシ オボエタモンダネ ハー。  
しかし 覚えたもんね、 はい、

C ヴードスネー、  
モロコシ。

A アレオ フエン ナタ、ショーグツカ" キテ エテ ホラ オメサン  
あれを 冬に なつて 正月か 来て そして ほら、あんな、  
ウチカラ デタ トショリショガサ アノ トマリー コラ、テ ホエテ  
家から おと 年寄り達かさ、あの 治りに 来られて、そして  
コタツ(19) メグラデ"サー モトワ オエ ムサド"コダ"ナンテ(20)  
こいつの まわりでさ、昔は おい むさ床だなどといひて  
ゴーヤナガシオ(21) ヒータ モンタ"コテネー (B ヴァーヴァー。)  
ものすごいのを 教いを ものさねえ、 そう そう。

ホエテ ツコエ エテ アノ ムカシバナシ ユーテ カサッシャエ  
そして そこには 居て あの 昔 話を 言って 聞かせて下さい  
(23) ナンテ ヌーテ ヌート…。  
いまだと 言うと…。

C マー ムカシバナシワ ネダッタ モンデスコテ。 (A ハー。)  
まあ 落ち葉は ねがつた もんです。  
トショリノ カオサエ ミレヤ (A ヴァーヴァー。) ムカシバナシ  
年寄りの 痛負され 見れば (A ヴァーヴァー。) 落ち葉を  
ネダッタ モンデス。 アノ ショワ カタル ホア シナサルシ (A  
ねらは そのです。 あの 人々は 痛る 方と されし、  
アーヴー。) オラ ソノ マタ シタデ" ネラッタ (25) ホーデスエネ。  
まあ ああ、 わたしもその また 下で、 ねがつた 方ですよ、

A アー ヴァーヴァー、 ホア" デ キクノガ"ネ タノシミ"一、  
まあ そろそろ、 それで で 開くのかね 楽みて…。  
C デ" サースーナンテ ユーテ キキナガラサ (A ヴァーヴァー。) リ/  
で、 まあ うどと 言て 開きながらさ。 (A ヴァーヴァー。) その

サー スー ガ キコエナク ナルト オヤシュー ツーテネ (+ ハー。)  
サー スー ガ 間にあなく えどと、親類は それでね (- はい。)

ア ネタナンテノテネ (+ ハー。) ハナシ ヤメナス、タンダ ハー。  
お 痘をなどといふてね、 (- はい。) 言ふと 上かられんの字 ない。

A ソマ-ソマ-ソマ-。 ハー ヨー アラコテー アノ…。  
そろそろ そろ、 はい、 よく あかんさ、 あのう…。

D ツツムカシバナシテモ キカシテ クンナセーネ。  
その 著教でし 情かせて 下さいよ。

C ハー、  
はい。

A オラ モー ダイブ ワスレッキモータドモ。  
わくわく も 大今 志れてしまつたからどうし…。

D オモイデリテモ アリマセンカ。  
思い出のしでし ありませんか。

A ア ヨク アレ アレラ オカア アノ ミジケーノテ アノ オラ  
あの よく あれ あれでは ないか、 あの 結婚のて あの わらし  
エマ カンゲー テ ミット オモシロエカラタト オモーノワ アノ  
今 考えて みよと、 おもしろかなかと思ふのは あの  
下レ ヨー トショリガ アノ アノ一 ウエカラ ナンダタカ  
ほら 良く 年寄りが あれ あれ 上か 何をつか  
カミカラカ (笑) (ニ笑) アエガ キタトカ シモカラ タエガ  
上からか、 あゆか 来るとか、 下か 金剛カラ  
アガルテ キタトカッテ エマ カンガエレバ タエナンカ カワソ  
上て 来るとかいって、 今 考えんよ 鮎ヌヒ ニの  
ナガエ 不ンネ アガルタ モンタカト エマデウ マア  
アハ、 みんとも 上なぞ そのうちかと、 今では まだ

ムカシハナシダスアゴドモ。ホエテ アリ アエト タエト  
昔おなじからだけれども……。そして あの 魚と 魚と

(31)  
ケンカシタナシテキ ブツカシテ ナーガ ヨケネーガ ワリートカ  
喧嘩したくとおもってた、ふつがて お前か よけないのか 悪いとか  
オレガ ヨケネーガ ワリートカ エッテ ケンカ シタラ ヤナギ!  
俺か よけないのか 悪いとか 言って 喧嘩を したら、柳の  
シタテ コケガ ナガメテタトカ ティテ (笑) ホアテ タエワ  
下で こち(魚角)か 跳めていたとかと 言って、そして 魚は

アリ ケーサエ スルドモ ナカナカ アリ オー ナカナオリ  
あの 仲裁を すうけれども そがたか おの んん 仲直りと

シネアデ ドー ショーも ノアテ ホアテ オレガ ワリーンダテ  
じひで ピョ しょも なくて、そして 俺か 悪いのと  
(32)  
ユ一 オレガ ワリーネー テ リアシタラ アー コケガ  
お 猥か 悪くないと思って、そうしたら おあ 魚角か  
ソーエタナンテッテ ノエ タエ! スルコト コケヤ カマエヤ  
こう 言つたそビといつてね、魚と 魚の する ことは こちや がまいは  
センテ ユータナンテ (笑) ソンガ! ハナシオ シトクチバナシ  
しないと 言つたそビといつて、そんな 談を、一に語る  
キカシテ モロアタリサ。 (笑)  
聞かせて もらつたりさ、

P ソーニスカネー、  
そりでですかねえ、

A ヨク ムカシノ シューウ シカシ アー ユー ソノネ ヒトクチバ  
よく 落の 人は しかし ああ い) そのね 一口詰  
ナシダドモサ ナカナカ オモシロエ ハナシ シタモンダゴテネ。(笑)  
ナシダゴテ ナカナカ おもしろい 話を (たものナシ) ねえ。

D ソアーネー。

そくねえ。

A ナンカ コー エマン ナッテ カンガエテ ミルト やっぱり ソレ  
なじむか こ 今 なって 考えて みひと やほり それ  
ニモネー ソレナリノ ソノ マー ナンカ コノ エミオ モッテ  
にもねえ それなりの その まあ すにか ンの 意味を 持って  
エルンダ"ドモネー。(笑) や ムカシノ シュウ ホンネ アレタ"  
いろのな"けれどもねえ、 やハ 著の 人々は ほんとうに あれを  
アキゴトトカ ショーグツダナンテ エーハ" エロエロノ ムカシバナシ  
欲事とか 正月な"のと 羞えば" いろいろの 著教を  
(33)  
サッシャッタコレ。  
されどさ。

C ソアデスネ ハー。 マー ヨー コタツエ ハエッテ キカシテ  
そりですぬ はい、 まあ よく こねつて 入って 開かせて  
モロアタ モンデスコレ。  
もうた ものですさ。

D エチバン オモイテ"ン ナル フヌ! やっぱり アソビテ イイマスカ  
いちばん 思い出へ なる 冬の やより 遊びと いいますが  
タノシ一 ヨーナ コトテバー ナンデショーネ ソノ ジブント  
楽しい ような ことときかは" 何で"ようね、 その 時分と  
シマシテワ。  
しまじこは。

A オラ ユドモン ドギー…。オマサンタ ドーダッタエ オンナショーワ。  
わらしたちの みどもの 始は…。 あんたが"なよ どうで"しき せの人ひよ。

C ガッコーエ デ"テル ユロノ タノシミテバ オラ ユラー  
学校へ 出ていの い頃へ 興しぐ"といわは" わらじともの い頃は。

スキーが アリマシタハアオー。 (A ソア スキーハ アレ アッタネ)  
スキーが ありますから。 (3) スキーは あれあります。

ハー。 (A フリ ジブンワネー。) スキーが オカシテシタ。  
はい、 あの 雪はねえ。 スキーが 盛んです。

(A スキーも アッタシネー。) デ アノ一 ムラデ  
スキーも あります。 デ あの 木で

ヒヤクチヨーグレー ジャ ホーテショーカネー スキー カーテネー。  
百くらいでは 無いでほのかねと スキーを 買ってねえ。

(A ソア ソア ソア ソア。) ハー ガッコー / スキーテ / ガ  
そろそろそろ。 (はい、 根枝) スキーとけりか

アリマシタンダエネ。 (A アッタネー ハンコー オシテネー。)  
あります。 (34) あるねと 判と 押してねえ。

ハー。 (A アッタデスネー ハー。) リレ ハエテ / タ / サンノー /  
はい、 あるんですね (はい。) ぬを 覆いて 郊外の 山王の (35)

ヤマエ (A ソア ソア ソア。) スキー / レンジュー = エキマシタコテ。  
山へ そろそろそろ。 スキーの 練習に 行きました。

(A ホンニ ソアダッタネ。) センシュダナンテ ナマエ (A ハー<sup>(36)</sup>  
ほんに そろであつたね。) 遅手などと 名前を はい、

ソアタネ、 ) ツケテ モロアテ (+ ハー。) アノ タングツ =  
そろそろね、 ) つけて もらって、 (+ はい。) あの 短靴に

ツツシタ ハエテサ (+ ソア ソア ソア ソア。) ソアシテ ワタエレオ  
靴に下と 覆ってさ、 (そろそろそろ) そろそろして 編入と

ジブンテ コシアゲ シテ ミジップ シマシテネ (+ ハー。)  
自分で 片上げと して 縫りく しましてね、 (はい。)

ホアテ リレオ キテ シバラク アレデスガ エッシューカンを  
そして それを 立て いはらく ひじにすか 一週間も

ニシュー カンモ サンノアーノ スキー ジョー エ カヨウ<sup>カヨウ</sup> カヨエマシテ  
ニ 遊び場も 山王の スキー場へ 通いまして、

グンノ スキー タエクワガアリマシテネ…。  
筋へ スキー 大会か 打りましてね…。

- A ワリアエニネー エマヨリモ カエッテ アノ スキー / リナンカワ  
割合いにねえ、 今よりも かえて あの スキー乗ったね  
ハヤッテタ ジャーダッタネ ガッコーデネー、 (ソーデスネー。) ハー ガッコア  
流行しているようだったね。 お校こねえ。 そうですねえ。 はい 学校  
ーデ アノ スキー タエクワエ アッタシ タイツァー ジカンナンテノワ  
で あの スキー 大会か あんし、 体操の 時間などといふのは  
ホレ アノ スキーノリ / ジカンガアッタンデスコテ ハー、  
ほら あの スキー乗の 時間か どうのですか、 はい。  
C フエン ナレバ タエソーノ ジカンテノワ ホトンド ヤマ  
冬に おれは 体操の 時間といふのは ほとんど 山へ  
スキーノリ = ~~~~~ タエネ。  
スキー乗るに ~~~~~ ましよ、

A スキー タッタネー ハー。  
スキー たっなね はい。

D ナルホドネー。  
なるほどねえ。

A フエノ アソビナンテーバ コドモ / ドキワ オマエサンガタ  
冬の 遊びなどといふば 子どもの 時は あなた方  
オシナショウ ナンゴダ<sup>(37)</sup>。  
女の人々よ お手伝ひ。

C ハー ナンゴ<sup>ハ</sup> オテダマ ナンゴテ エーマシテネー。  
ハイ ヒンゴ<sup>ハ</sup>、 お手伝ひ ヒンゴと まいもんねえ。

- A オオテダマオ ナンゴ エータネ ナンゴ エータ、ソレカラ  
 お年酉を なんごと 言ふね、 なんじと 言ふね、 それから  
 (38) (39)  
 ギンナン エッチャヨー／＼ アツビガ アッタ、  
 銀杏、 いちょうの 遊びか 玩な、
- C エッチャヨー フクロニ エレテ モッテネー。 (A ハー、) ソシテ  
 いちょうを 袋に 入れて 持て行つてねえ、 (B ハー、) そして  
 (40)  
 カンギリナントテ、ソレー (A ハー、) コー (A フーフーフー ットー、)  
 かんぎり そとと書いて それを (B ハー、) ニ (B フーフーフー ットー、)  
 リレ コアーット トルンデス。 ソレ オトサンデ トレバ ミンナ  
 をぬる ニヤツコ ところです。 それを 落さないで とれど、みんな  
 ジブンノ＝ ナルンデシテネ。  
 自分の物に そろひでしてねえ。
- A ヘ アー ソンゲンノ アッタネー。 ソンゲ／＼ アツビ…。  
 ヘ、 ああ、 そんののか あはねえ。 そんを 遊び…。
- C カンギリテ エーマシタ。  
 かんぎりと いいました。
- A カンギリトカ ナントカ…。 ソレカラ ホレ アノ イ マー  
 カンギリとか えへとか…， それを ほら その ま  
 ナツ マタ フエモ コー アノ ユキン ナカ アナ ホッテテ…  
 夏に、 また そも ニ あく 雪の 中に 穴を  
 (42) (43)  
 アラ インテラカラ… アナエッチャヨー ~~~。  
 あれは そんといつのかず 穴いっちょ ~~~。
- C アナエッチャヨー テ エーマシタネ。  
 穴いちょうと 言いられたわ。
- A ソンガ／＼ アツビダッタネカネー ネー、  
 そんを 遊びでも、なつて行くが、ねえ。

C ハー コー キヨリ オエテ ソコノ アナエ コー エレルンデ…。  
はい、こゝ 距離を 留めて その 穴に こう 入れるので…。

A ホーテ エッパー ヘアレバ フッチャ トル ソー ユー マー ルールモ  
そして いつぱい 入れよ こちちは 取る、 そう いう まあ ルールモ  
アッタシ リレカラ ヒトツタケ エレレバ アト ミナ トレットカ  
あらし、 それから ひとつだけ 入れよ あとと みんな 取られるとか  
ノー フタツ エレテ アト ミンナ エンネアヨーン セバ  
ねえ ニツ 入れて あと みんな 入れたいように すれば  
ミナ トラレットカナンテ ソンガノ エロエロノ アレガ ルールガ  
みんな 取られるとかなどと そんな いろいろな エロエロ ルールガ  
アッテ ソンガソノモ アッタ ネカ オンナショウネー。  
あつて、 そんなのも あつて といひか、 女の人達はねえ。

C ソーデスナー。 コノ ジュイテグワツノ ミッカン ナルト ハンニヨー<sup>(44)</sup>  
そうですねえ。 この ナ一月の 三日に 奇るヒ 様庭の  
ニラエ<sup>(45)</sup> メーエ ミンナ オリー ノドモガ アツマリマシテネー<sup>(46)</sup>  
に前衛門の 前に みんな 折戻の 子どもが 集まりましてねえ。  
(A ハーハー。) ソーシテ ギンナン モッテテ (A ギンナン モッテ  
はいはい。) そして 銀杏と 振って行って 銀杏と 振って  
ハー。) アソビマシタデスコレ。  
はい。) 遊びましたです。

A ハー,  
はい,

D ンー<sup>ー</sup>  
うん,

C アー エーノガ マー タノシミデシタネー。  
ああ いうのか まあ 楽しみでしたねえ。

- A アノ ジブン ギンナン ギンナン エチゴー ゴセンダッタ ネカネ。  
 あの 命は 銀杏 銀杏は 一合 五錢<sup>アラハ</sup>のでは無いかな。
- サンセンカ ブセンダッタ ネカネ,  
 三錢か 五錢<sup>アラハ</sup>のでは無いかな,
- C ゴセングレー シマシタネ。  
 五錢くらい しまさね。
- A ゴセングレー ダッタネ ハー。  
 五錢くらい<sup>アラハ</sup> はい,
- C ゴセングレー ダッタデ シヨーネ。  
 五錢くらい<sup>アラハ</sup> でようね。
- A ハー。エチゴーズツ カカエ アエッタモンダ。  
 はい。一合<sup>アラハ</sup> 買いに歩いたものだ,
- C ナンカ コメ一 エッショ一 ギンナン エッショーデ カエ一 キタイン  
 なんか 米 一升 銀杏 一升<sup>アラハ</sup> 買いに 来たなど  
 テテネー。(Aハーア) ナンダ ギンナンテヤ ターケー モンダナ  
 レ言つねえ。う。 さんと 銀杏というものは 高い 物だな  
 ンテ ユーテマシタドモ…。  
 どと 言ってまけたけれども
- A エマ ソレ ギンナン エチキロ ナナヒヤクエンモ～ コメナンテ  
 今、おそれを 銀杏は 一キロ<sup>アラハ</sup> 七百円 米など  
 アシモトニモ オヨバン。  
<sup>ア</sup> 底下にも 及ばない, (B 笠)
- D コトシワ センリョーデスト。  
 今年は ちあです。
- A ハー～ギソナンキ エエナケ ナラン。 (笑) (B 笠)  
 はたち～銀杏の木を 植えなければ ならぬ。

オトコ、コドモワ マー スキーノリ フエワ マー スキーノリダタ一。  
男の子どもは まあ スキー乗り、 各々 また、 スキー乗りなどねえ。

スキーノリノヨーナ モンダクタノー、 マー ガッコージャ 不レ  
スキー乗りのよだ ものなどねえ。 まあ 学校では ほら

ドッジボールタトカ (C ハー マー ドッジボールネー。)  
ドッジボールヒカ、 はい。 まあ ドッジボールねえ。

アンナノガ アッタドモネー ハー。

あんたものか あれだけれどもねえ。はい。

C ソアデスネ。 マー ソレカラ ワタシナンカガ ガッコーエ  
そうですね。 まあ それから われしなどかい 学校へ

デタバッカリノ コロワ ヒバチガ トコロドコロニ フタツカ  
あがうそばかりの 頃は 右手か 左手に 二つか

ミツツグ レーシカ ネーカラ アタル シトナンカ ソー アタッテ  
三つくらいしか ないから あなた 人など をんに あなた

ランネー (A ソー ソー ソー ソー。) モケロアーブラク  
居らなくて、 (E も も も も。) 錦旗部隊

キタムカエブラクッテ コー ワニナリマシテネー。 (A ハー ハー。)  
北向朝顔といって こゝ 輪に まわしてねえ。 (はい はい。)

(49)  
ソーシテ オンナノコデモ ナシデモ アシガキタダンテ カタシ  
そして 女の子でモ 先んでモ 足搔きなどといふ 片足で

モテ ホーキテ アエテオ (A アシガキガ アッタネー。) ハー  
もって もして 硬骨を…。 (足搔きか あつとねえ。) はい、

アレガ一 アッデスコテ ゲンキ エカタシ…。  
あれか あれですか。 ええか よかっし…。

A アシガキテワ アノ アンノ アスビワ…タシカ アシモケテガ  
足搔きといふのは あの、 あの 適合は… せしかに 足掻ちといふのか

アッタコテネー。ヒトリガ"アシモウ" (C笑) (D シヤーツヤー。)  
あつたよねえ。ひヒリガ"足と" 持って。  
そぞう。

ホアーテ コー ユロバス ~~~~。  
そして ニシ ころばす。

C ユロバシゴクラテシタネ。  
ころばしごこでねえ。

D ~~~~~ マシタネー。  
まえねえ。

A アハホレ デッカー コドモ! オメー アハ (D アシモタセラレテ  
あの ほら 大きい 子どもの あれを あの 選ぶ持らせられて、  
笑) アシモタセラレテ ナンギ"テ" (53) ナンギ"テ"ネー。  
足と持らせられて、苦しくて 苦しくてねえ。

C エラエラヌラエラ…。  
やらやらやらぬと…。

A エラエラ…。  
やらやらと…。

D アレミンナサセラレマシタネー。  
あれをみんなさせられましたねえ。

A アー エー アスピガ"アッタネー。アシガキタ"カ アシモタダ"ナント。  
ああ いゝ 遊びが あつたねえ。足搔き"カ 足搔き"など…。  
エトモ フエダスケ アッタコテ アハ ウンド"ジヨニバ"カ  
もつとも 冬"から あれど"さ あの 運動場に は"かり (54)

エタリ シタスケアソソナ モンタ"コテ ハー。  
いきり じゆから みんな ものぞ"さ。 はい。

C リシテ オンナハ ユド"モウ ワー ツク"テ リコ"テ オテダ"マ  
そして 女の 子どもは 輪と 作って そこで お手配を

シテ マシタシサー。

してしまったしさ。

A ソー ソー ソー ソー。 エマノ コドモ~ ナンゴ~ ナンテ ナンゴ~ ナン  
タッテ エマノ コドモ ウカランド~ エ。  
(55)  
言つても 今の みどりは 分らぬいだろうね。

C ウカラント~ ショアーネ。  
分らぬいでしようね。

A ハー。  
はい。

C ソー シテ エマノ コドモ~ アー エ モンテ~ アシビ~  
をして 今の みどりは あいの もので あそびに  
デマセんモンネー。  
多せんものねえ。

A ツ~ ナンゴダタッテ ミンーナ ジブンテ~ ツクッタモンダシ~ ネー。  
その なんごなつて みんな 自分で 作ったものがからねえ。  
(57)  
C ソー ソー。 オヤノ ダイジナ アツキ コツリ (A~~~~.)  
タッテ キの 大事~ あすきを こつき  
モケタシテ (A ハー。) ツクッタモンデ サーネー。  
持ち去して (はい。) 作ったのですかねえ。

A ソー ソー ソー アツキン ナカエ ンナ エッテネー。 ゼンゼン  
タッタ、 あすきを 中に みんな 入れてねえ。 金然  
(59)  
アスビガ キガウガ~ エマノ アスビトネ。  
遊びが 違いますよ。 今の (60)遊びとほね。

## 注記

1. サイノカミ 賽の神。造祖神の祭り行事。どんど焼き。餅粒奉落の行事として大人たちの夕により子供達も参加して行なわれる正月行事。必ず14日夜に山正月用の小豆を煮るが、その煮え立つ當時に杓子で小豆を少量すくいとて15日のスミウケの行事の準備とする。当日15日朝大人たちは山に入り、賽の神の山火のかなりの大木を切り落とし、旅者商旅鳥居所宿の、道路に近い畠の上に運び、この木を心にして盃寄竹(爆発を防ぐためといふ)と門松しめ飾り・わらとうず高く積んで用意する。同日夕方これから焼き、書初めをやき、餅を焼き、皆は前夜用意した小豆を賽の神の火・煙に会わせむ。火の煙の魔く方向で豊山と表すことが昔はあつたといふ。煙の会わせむ小豆は数人の人々が最高の家の立ち寄り、先代によつて豊山を立つたといふことである。これをスミウケ・スミエケと言つてといふ。隣郡夷隅城跡松立山のスミスリ(墨塗り)行事との関連やその民俗学的意義等についてはまだまづらかでよい。
2. クンナセー 下さい。補助動詞。ナルはこの地方の標準的表現。餅粒の標準的表現の助動詞ルルラルには命令形はなく、このナセーで表現する。
3. スケー 接続動詞 か; ので。隣町の「さかり」の変化。この地方の標準的表現。大正末のこの説者はもと、隣町の接続動詞「工二」を保つらしい。
4. ネアカタ 無かつ。ない。終止形[ne:te]の簡化した形である。

5. ~m の所は「モンテ」と言つてゐる人が多し地名といひが、きこえよい。
6. ホビキ [hobiki] hɔ:b̥iではない、遊びの名。宝引。(宝は開物) 中世近世の正月の遊戯「宝引」の地方化したものが、福引の一種。古本の組の一一本にタマ(昔はいわゆる元禄と銭・現在は五円硬貨など)を多く縁石へけ、それを引きみてることを競う。昔は賭博的に行なつたところ。今も老人クラブの金興などにすすニヒルあすといふ。この説は富山城下和松山福引然在者とあるにあらず。該源については「宿吉采蘋」に、ホウは福の鳥房ホウカラさんとあるといふ。松岡塔でも福引とホビキといつてゐる。(「秋田方言」による。) 鎔板のホビキの發音はこの説の該源に取喩とよえよるのかあろう。
7. イ 丁寧観察を表わす助詞 I の 83 参照
8. キタムケー 中堂の後
9. グイモチ 前半ホビキの別名。宝引きの様子がグイモチ(大搖・大物引き)の 61 参照)の重いものと引くに似てゐるので、諺諺的におもしろく言つたものか。該音はこの諺諺と知らず誤解を蒙られたのである。
10. ワラワタ レ(愛称の助動詞適用形)が優秀化してゐる。
11. ヒツケテテ [ʃi] > [ʃi] はつきりしない、「付けておいて」と思われる。該源は「引け付ける」であろうか。文語動詞他助詞下 = 段落用ひつけの一種落可化したもの。参考 ツツケル(富山牛軸物山牛)ヘツケル(岐阜)ヘツケル・ヘツツケル(飛騨)
12. シハラコテネー ヒハラコトイネーの変化 [ʃi] > [ʃi] コテーについでは I の 10、ネーについては I の 83 参照。
13. オトツツアン 中年以上の一家の主人を呼ぶことば。大正末年生れの女性 C が大正七年生まれの A に対して使つてゐる。79歳の高齢度の助詞として A はオトツツアンと呼んでゐる。また之を見て主人として活動してゐるからであつた。いわば中流以上の家の主人を呼び得である。トツツアン、ツツアンはこれより品位が下がる。
14. オトツツアン 79歳の高齢度の助詞をこう呼んでゐる。
15. ウム 草履などとわらで編み作ること。「縫ひである。南蛮深部湯足

町では草履やわらじに「いはつ」<sup>ツ</sup>と云ふ。藁靴は、いはづと云う。

16. タモ タドモ (タケモともに脚音) の変化。

17. ショ [ʃo] 全身、このでは絶り身。

18. トヨリショ [tojorisō]

19. オエ [oe] おい感動詞。ホレの変化が、「おーい」であれば、[o] とよろと思われたから、ホレの変化を考へておこう。[h] 方の脱落はこの方言の特徴である。

20. ムサドコ 置の一種。本床・野郎床に対して、土地産のちがややイワスゲ(和歌山ぬきらん)で織った墨表を使い、藁の網縄で締め。布のヘリとはけず、「ヘリ団をかく」と言って、单には「ぬきよ」に表の縫の部分を編んだ床と言う。現在少佐になり、むさ苦しい床の意をと言う。ムサイ(きなまし)中頭城郡・佐渡郡・金剛各地

21. コーギナガン すごいもの。ゴーキダの連続形+形容名詞ガ+ゴーキの語源は強気。豪氣かと云ふ形。程度のはげしいまで、こぞはるい意味が繋がっている。刈羽郡・魚沼地方・三島郡にあり、群馬県・伊豆利島・福井県名へ他西日本にもある。

22. ヒータ 敷き坐の変化。ここは中頭城郡に似て hi>fi の変化が多いのが、それがその邊で織った墨表。ヒシの混交の少ない柳島市四市域で青年半で一般に「方団をヒク」と言つていい。

23. カサッシャエ キカセサッシャレの変化か。あるいは下一般通用にはラッシュルが接続するから、キカセラッシュルの変化とすべきか。表て聞かせるユーテカセルと言う。サッシャル・ラッシュルは尊敬の助動詞で「ナサル」よりも左のものと思われる。

24. ネタタ タはや [ra] の感にかかる。

25. ネラフシ ナフシは [da] より [ra] に近い。

26. ナー 「で」とい助詞で終止する。感情を残り表現。抑揚は  $\overline{\text{ナ}}$ 。

27. サースー 著述の隣り手の会話のことば。この語は頭城地方と共通である、中魚沼地方はサース・サー・サスケ、長岡市や左志郡でサンスケ、南蒲原郡見附市でハーハー、佐渡郡でサーシであるとい

）。佐渡では、金槌を打つことを「サソとつく」と言う。

「さそうろう」の変化か。江戸時代後期動詞（幼児語）に「さそう」がある。

28. オモシロエカラ 終止形を連用形に用いたり。

29. アエ 船 アエノアイ>アエ アエは津軽地方秋田県・宮山半島舟半島根県島根県山県にある。アヨは山形県・宮山半島。

30. ホンホ ホンニの変化 本に。

31. ナー 二人称代名詞 固聲以下にかけて用いられる言語の低い語。中越地方、房舟半島・諸浦で用いられる、古語の残存。

32. ウリ一 意く、終止形を連用形に用いたり。ワアリ・ウレ（山形県）ウリ（東北地方、新潟県南魚沼郡糸魚川市・鳥取県）

33. サッシュル 動詞「する」の尊敬形。まさる。「さしゃる」の変化。サヘルより軽く、それより敬意が高い。但しサッシュルと命令する場合は敬意は軽くなる。室内江戸語のことば。方言では関東地方北陸地方にとかれ。

34. ハンコー [HANKO:] 判子は自己字で、該源は枚行・枚行であるといわれている。[KOO]の関東は「行」の関者と保存していることとなる。

35. サンパー 山王 地名 旧鶴岡村にあり、鶴岡地区から中山峠を下ったところにある。

36. タングツ 勇峰よりやく使用するようになつたゴム靴の絶縁靴。

37. ナンゴ お手玉・お手玉あそび。布の袋の中に小豆三四粒入れるもの、ウスタビガの蒴の中に小豆三四粒入れるもの、(からからと考かする)、エゴノキの実を布の袋に入れるもの、布の袋に小豆を入れるもの(石ナンゴ・男ナンゴと言ふ)などがある。またケンボナシの実を入れるものもあったといふ。その遊びを「シーオートル」と言つたといふことである、「ひーひー取る」である。「日本言語地図」によれば新潟県中越地方から千葉県まで日本を横切って南北にナンゴといふ語が分布し、茨城県から福島県にも分布してゐる。江戸から高まつた語で、該源は「何箇」であろうと言う。

38. ギンナン 銀杏 餅糰ヒトでは「エクニー」と(いぢよ)より古いことはあると思うと高橋テヌイ氏(明治34年生れ)が言つてゐる。後

- 古木よりいぢよの木を「ギンナレキ」と書いていることはそれを示す一つの例か、南魚沼郡湯沢町では大正初めエッチャードと書いていた。
39. エッチャード [ettsɔ:d] いぢよ。福城地方、南魚沼郡もエッチャード、松岡学 エッチャード草原早イチヨ
40. カンギリ 遊戲名 出し合つをいぢよと先ずてのひらにのせ湯山で土台を上に積みやこのひらをひきかえしていぢよとつかみとり自分の所有とする遊び。語源不明。
41. コアッテ こうやっての変化か。40で書くと勘紙を身振でしつのであろう。
42. ナンララカラ ナンラダカラの変化。何と言うのがその意。
43. アナエッチャード この会話の中で「復讐丁札」とあるあそびの名前。地上多くは常に上にわざり穴を作り、遠くから互に出し合つをいぢよの実を経験に投げ入れて入つたものを自己の所有にする遊び。江戸時代の同様の遊びに「穴打(穴撃)」・「穴一」というものがあつた。ムクロジ・セゼ貝・小石・木の実などを投げ入れて「穴うち」と呼んでいたのが、錢・穴一錢と聞いふ様にまで「ナイト」と呼ばれるようになつた(日本国語大辞典)とか、又一二を争う意味の方へ諺の感じが移つたため「穴一」とよばれようになつた(総合民族語彙)といふ説法がある。この地方ではいぢよの実を使ふことが多かつたため更に変化して「アナエッチャード」の音が生れることとなる。
44. ハンニコア 地名 拝庭
45. ニラエ ニロエモレ 屋宇
46. テヤ といいやの変化か。
47. ギンナンキ ギンナンノキの変化であろう。
48. ウエル ウエルの変化。
49. アシガキ 又傳の遊び、片尾とひをしてから丼手をとおす遊び。「新語記」に書かれていゝ、「日本方言地圖」によれば「岬越地方・魚沼地方の特徴形、南魚沼郡湯沢町ではアシンガキ。
50. アエテ アイテの変化、丼手。
- 50' タシカ力 創陶 タシカニよりや確実性が強く推量の心持と探る表

現。こうした表現は室町時代の五音の詞から見える。

51. アシモチ 片足ヒビの揚げてひの足を他の足供に持たせて走る走り。  
「足持ち」である。
52. ゴカラ 梅尾流 くらべ。くら、じっこ、「脚剣舞」や江戸の文書にみ  
られる語。
53. ナンギーテ 多種難儀を形容詞としきの終止形と連用形の間にあ  
る改方言にしていふ。
54. バッカ バカリの変化。
55. ドヤー工 ローワーの変化。ローワーは推量の助動詞。「左」を介せず活用語  
の終止形に接する。工は丁寧貌を表す助詞。
56. アーエモンデ ああいうもので、昔の文書へ蓮花をナンゴなどと表  
す。はじめアミモンデのようになりとれたりして今にくりことな  
であつたが、刈羽郡刈羽村古事記の調査者の妻の助力でこのようにみ  
字化したことなどが見え。
57. グンネーはタモンネーの変化である。
58. アツキ [Atsuki] 活用ない。小豆。古事記の残存であろう。赤草松名  
・色葉室額称「アツキ」。アイヌ語「アントゥキ」。島根県アツキ。  
豫かずも「アツカル」といっていふ。
59. シは才の誤りか。
60. ガ 終助詞。ガ一と表記化することもある。感激をあらわす。

### III. 愛知県北設楽郡富山村中の甲

収録・文字化担当者 山口 幸洋

## A 収録地図とその方言について

1) 地図名。 愛知県北設楽郡富山村中の甲

2) 収録地図の概観

富山村は、離島を除いては日本で一番小さな村である。昭和51年1月現在の人口は、わずか274人、80世帯である。村が小さなので農協もない。

富山村は、愛知県にとっても東北端にあって、長野県天竜村、静岡県水窪町に接する山間の避地である。昭和12年開通した国鉄飯田線大嵐駅から徒歩15分であるから鉄道の便には早くから恵まれたけれど自動車の乗り入れは遅かった。佐久間ダム完成に伴ってできた湖畔道路はかなりの悪路で、自動車によって愛知県、隣村、豊根村と往来できるようになつたのは昭和50年の県道「津具—大嵐停車場」線の開通まで待たなければならなかつた。

富山村は、佐久間ダムの人造湖の奥部の一角に位置する。大嵐駅は静岡県水窪町地内にあるが、周囲に民家は3戸しかなく、大嵐駅直前の吊橋を渡つたところが、静岡、長野、愛知の三県の県境地図である。村は佐久間ダムに下つて、その半数が水没してしまふといえ、あまりにも小さのが、それだけ隔絶した存在であるともいえる。これらのことからも、この地図の特異性は想像されるであろう。

この地方には天竜村坂部の「熊谷家伝記」をはじめ、あちこちに似たような書物があることご知られており、富山村にも「田辺年代記」という田辺家伝来の記録がある。それによると、正平元年(1346)に紀州田辺の人、田辺藤四郎国量が最初に市原に住んだ。市原は、同じ富山村となつてゐる。漆島、河内(水没)、大谷等とともに、「熊谷家伝記」に記されてゐる生々しい事件の主舞台となつてゐるが、それによつてわかる通り、この地方は当時の武士達が集団をなして、「世を忍び、名を忍んで」移り住み、切り開いた安住の奥地であつた。たゞえば現在の富山村在住の全戸が祖先をたどつてれば、150年前

の古い家につながることもある。見方にもよるが、村の全戸がおそらく南北朝時代の武士の集団の子孫達だと見えるかも知れない。

### 3) 収録方言の特色

#### ① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

この地方の方言は「遠三信国境地帯方言」として、ほぼ独立した区画名称を与えて良いと思われるが将来の課題であろう。少なくとも、愛知県富山村、豊根村、長野県天竜村、静岡県水窪町、佐久間町は、併存する複数の方言を有する特徴を持ち、この地域を愛知的、長野的、静岡的と三分割するのは容易ではない。又、この地域を一括して三県のどれかに属せしめると結論づけることも不可能である。やや有力な見方としては「非愛知的」であることかもしれないが、富山、豊根を非愛知的とするとならば、奥三河の広大な地域「北設楽郡」全域も、非愛知的と言わなければならなくなると思う。それのようなわけで区画上の位置を一言でいうのはむつかむずかしい。

隣接諸方言との関係としては、長野県天竜村坂部と殆ど同一方言と考えられる（坂部方言を詳細に調べてみたので決定できなだけである）。次に天竜村平岡、富山村では現在も、動詞過去形の～ツが健在である（天竜村より、静岡県水窪町方言の状態に近いと思われる）。しかし、～ツが天竜村で比較的使われなくなつたのは最近だろうから、この違いは本質的なものではない。富山村方言が水窪と異なり、天竜村に近いといふ最大の特徴は、「連母音の融合」があるという点である。

#### ② 音韻上の特色

アイウエオ順のモーラ表と、標準的な音声をしめす。

|   |   |   |   |   |    |    |    |   |        |   |
|---|---|---|---|---|----|----|----|---|--------|---|
| ア | イ | ウ | エ | オ | ヤ  | ュ  | ヨ  | ワ | ヴェ(ヴォ) | ヴ |
| カ | キ | ク | ケ | コ | キヤ | キュ | キヨ |   |        |   |
| ガ | ギ | グ | ゲ | ゴ | ギヤ | ギュ | ギヨ |   |        |   |
| サ | シ | ス | セ | ソ | シャ | шу | ショ |   |        |   |
| ザ | ジ | ズ | ゼ | ゾ | ジャ | ジュ | ジョ |   |        |   |
| タ | ナ | ツ | テ | ト | チャ | チュ | チヨ |   |        |   |

|       |       |       |   |
|-------|-------|-------|---|
| ツア    |       | ツオ    |   |
| ダ     | テ     | ド     |   |
| ナ     | ニ     | ヌ     | ネ |
| ハ     | ヒ     | フ     | ヘ |
| バ     | ビ     | ブ     | ベ |
| バ     | ビ     | ブ     | ベ |
| マ     | ミ     | ム     | メ |
| ラ     | リ     | ル     | レ |
| ン(撥音) | ッ(促音) | ー(長音) |   |

具体音声について東京語と異なるものを個条書き的に述べる。

まず、母音では、ウ列音の母音が私には異様に感じられる。されば私などのウが〔ɯ〕であるのに対し、当方言のは唇を横に張り気味に強く構える〔ui〕（但し、丸めない）であることによるからだと思う。

次に全般にこの方言には、ハゆる母音無声化が行なう。語末あるいは、無声子音の音節の前の、キ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ビ、ブの母音が有聲音として発音されるわけであるが、その「有声化」が特別に強いうように感じられる。これはかなり耳につく特徴であつて、同じようにそれが「有声化」するとハゆれる名古屋方言、大阪方言よりも強いうらに感じられる。

次にこの方言では/ai/, /ɔi/などのハゆる連母音が融合する傾向が認められる。その具体的な姿は/ai/, /ɔi/ともに[ɛ:]となる場合と、中間的な発音ともいって[æ:]又は[ɛ:](/ai/の場合)、[ʌ:](/ɔi/の場合)となる場合と、更にそれらとの中間的な発音で、表記に迷うような発音とがいろいろにまでって実現する。又、融合しないで[ai][ɔi]と実現することも少くない。/ai/にくらべて/ɔi/の方が融合しないことが多う。[æ:][ʌ:]のように発音は、私には、「中途半ばな回帰」の現象ではなうかと思える。も、とも「回帰」という現象が必ずしも新しいかどうかということとは別問題である。[ai][ɔi]とも[ɛ:]ともいう傾向がずっと以前からある。ハつでも回帰しているといふ「抑え」を持った融合、

それが連母音の融合（広義の連声化）の本質であろうと思う。

そのような現象に類似の融合化（広義の連声化）は、ほかにもある。それは助詞「は」（ワ）、「を」（ヲ）の接続や、用言仮定形における融合発音である。「山は」「山が」が、ヤマーと発音され、「道は」「道を」が、ミチャ一、ミナヨーと発音され、「行けば」「良ければ」が、イキヤ一、ヨケリヤ一と発音される「融合化」も、ハッでも、ヤマワ、ヤマウオ、ミチワ、ミチウオ、イケバ、ヨケレバと回帰しうる特性を持った「融合」であるようと思われる。ただし習慣上、仮定形はハッとも融合形で実現しやすく、「を」の場合には融合しないとハラことは、方言的理由によって存在すると思う。

拗音は、そのような「融合形」や、擬音語や、漢語外来語に主として認められる。

なお、[ɛ:]は、アエー、[kɛ:]は、カエー、[ø:]は、オエー、[kø:]は、コエー、と表記する。[ɛ:]と[e:]は区別せず、エーと表記した。

馬瀬良雄氏は、論文「天竜村一大河内の方言」（民俗資料報告書『大河内の民俗』所収）のなかで、富山村方言にきめめて近ハとみられる天竜村大河内の母音について、ノセ／は殆ど[ɛ]（広いエ）であり、ノオ／はくつに近ハと述べておられた。富山村方言も結局そうではないかと思われたが、確かな観察をしてはない。なお、テープで聞いた限りでは、ノオ：／とハラ音声が、明らかに[ɔ:]であると感じられることがある。

当方言の単独の/e/は、語頭において本来[je]（本稿においてはイエと表記した）であるが、感動詞や問投助詞のエーは[e:]と発音されていく。また、「上」「(冬を)すえる」などノウエー/とハラ連続においては[jjuwe]/[suweru]のように[we]と発音されたことが多々。それほか「買え」「食え」のようなワ行四段動詞の命令形、「買える」「食える」のようなワ行四段動詞の可能動詞形において[we]が実現する。これらは、ウェと表記した。次に助詞「へ」は[we]と発音されることが多く、時には[uwe]のよ

うに実現することもある。

次に単独の「〇」は、語中で「WO」と実現する。〔jIW〇〕(塩)、〔kAW〇〕(顔)の如くであるが、これは、音韻としては「〇」と対立しないから、ウオとハラモーラを認めるとは不適当である。また、助詞「を」がかなりはっきりと「WO」と発音されていふことも、「語中」とハラ範ちゅうに含まれる事柄だと思う。

モーラとして挙げた、ウヤ〔wjɔ〕は、「買えば」に当る、カウヤーのような例から拾つたものである。

モーラ表のうち、同様の特殊条件下で実現するものが他に、ツア〔tsa〕(例、ショーアイツツア(正一さん))、ツオ〔tso〕(例、ゴツツオ(ごちそう))、ペビブヤボ(擬音語等を除き、一般单語では促音の後でのみ実現する)、ラリルレロ(語頭に実現することが一部外来語以外は極度に少ない)等がある。

ガ行音子音は、語頭で〔g〕、語中で〔ŋ〕である。

ハ行音子音は、ハヒフヘホを通じて〔h〕でそれもやや有声気味な場合が多く〔h〕とみられる。当録音中でも〔hatah〕(畑)、〔hıtotsu〕(一つ)、〔hutari〕(二人)、〔hokha〕(ほか)等が観察される。

なお、ハヨリッダテのような濁音の前の促音が数回観察されたのは注目すべきことで今後掘りさげて調査したい。

### ③文法上の特色

敬語は殆どなく、文末部のネーの使用なども殆ど近年の習得とみられる。文法的な特色は静岡県水窪、佐久間地方とし、意思・未来推量のズ、推量のう、ズラ、伝聞のチヨー、過去のツ(ズ)等がある。詳しく述べ、拙稿「水窪一 語法にみる遠州山地方言のサンプル」(「国語学」34所収)にゆずり、ここでは過去形のツ(ズ)に付けてのみ記しておく。

この方言で、動詞過去形を、行ッツ、見ッ、飛ンズのようにハラニ付けることも注目すべき特徴で、行ッタ、見タ、飛シグの如かたとある種の区別を持ってゐることは重要な事実である。又、行ッタッ、

見タツ、鷹ンアツツと、こう語法もある。私は、この三種類のいいかたについて、これを「過去形」(へツ)、「完了形」(へタ)、「過去完了形」(へタツ)であると見て、論文「静岡県方言の過去表現について」(国語学75所収)に発表したことがある。また、ツルタには他称(ツ)と自称(タ)の区別もからんでいるとみられるふしがある。この見解は、日本語におけるテンスの考察に問題を投げると考えられるが、タツの区別、更に、タツの意味については、方言の話者の意識調査がむつかしいので、自然談話の観察から、たくさんの事例を採集して帰納的に解決することがもつとも望ましいので、今回の資料のように、～ツ、～タ、～タツの事例が沢山採集されたことは、たいへん喜ばしい。

なお、形容詞過去形、指定助動詞過去形、動詞否定過去形については、すべて～カッタ、～ダッタ、～ナシタであるのが本来の姿である。もしもそれを、～カッタ、～ダッタ、～ナシダという例があれば、それは、脱方言的な実現の側面であり、決して、ヘツ(ズ)と文法的に区別されていいわけではないと思う。この点を誤解する向きがあるといけないのこの場でお断りしておく。

その他、前記拙稿「水窓」に述べた特徴としては、「知らぬいで」「歩かないで」に当る「かた」と、シラテ、アルカデという美をあげることができる。

語法とこうより、慣用法とこうべきかもしだれなが、ムカシムカシ(昔々)とか、ワラッテワラッテ(笑って)とか、オーキーオーキー(大きい)のような「こだみ語法」が非常にさかんである。

次に、語順は決して常に順序正しくない、ということも今後の課題として研究する価値がある。

次に、動詞連用形を用いる名詞的用法がかなり活発である点を指摘したい。タベガワルイ(食事が少ない)、オキガワルイ(早く起きた)、カミサヌオカミ(神様を拝むこと)、オミキアケ(お神酒をあげること)等の例がみられる。

次に「語法」の特色として、相手の話を聞く人は、しょりに「どう

だ"そうだ"と"うあ"づちを打つことが多いことをあげることができる。

## B 録音内容の概説

近頃の村の老人達は、「見知らぬ顔」の他郷人と話をするときは、すぐ言葉を改めて、て「み」なことばを使い（標準語使用を含む）もしやすい。土地の人には、地のことばで打ちくだけて話をすることはむつかしい。しかし、なかにはどんな「世間者」が来ようと方言でしか話せないといふ人や、相手がだまつて「こも一人でしゃべる」というような人もいる。私は、方言のみがますの飾らない会話の場に遭遇するためには、そのような人を探すことがひとつ的方法であると考えてたし、一方、できるだけ硬くならず、又、エせず、話し手の気持に負担をかけない形をとろうとすることと、機関を頼らぬ「民間」で一スで、ひまで達者な老人を探した。そして老人と話すには、たゞえ方言が通じないことがあっても、私は私の方言で話をすことが相手に警戒をさせない、ひとつ的方法と考えた。

今回は、なにぶんにも話者の選定が幸いしたと思う。第一部は、話好きなおばあさんと、おじさんと「組合せ」である。このとき私は別のおばあさんを呼びに行つて席を外していった。

第二部、三部は、この別のおばあさんを加えての三人の話合である。私は同席してたが、できるだけ黙ってた。序お、新手のおばあさんは金唄の名手であるとのことで第三部では特にお願ひして唄も入れてもらつていて。

第一部～第三部を通して、特に話題は注文とつけねか、たせいが、これといってまとまつた「面白・話」は出なかつたけれど、家族、近所隣りの、いわゆる日常の身辺雑事の話しあいに終始してゐる。しかし、これほこれほりに「自然」な村の日常生活、村人達の物の考え方をうかがい知るための一面对よく写してみると自負するものである。

録音年月日 昭和 50 年 9 月 6 日  
録音場所 愛知県北設楽郡富山村中の甲 武田初夫さん宅（全部）  
話し手 （第一部）

武田ふさ（女）明治 32 年 同所生れ農業従事、他所での経験なし。方言保有度かなり強いと思うが、間投助詞ネーの使用は近年の習得か？。言語明晰。

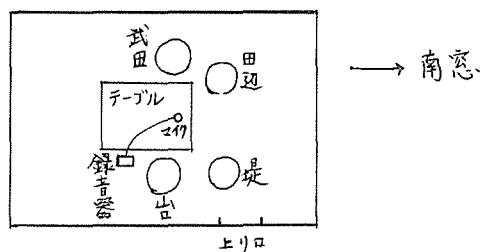
田辺正一（男）明治 34 年 富山村川上生れ農林業、他所での経験なし。方言保有度申しぶんないと思うが、ことば使ひはおとなしく、乱暴ではない。村会議員と、短期間村長の経験あり。今、老人クラブ世話役。

（第二部）（第三部）

武田ふさ、田辺正一と

堤ふじよ（女）明治 39 年 富山村市原生れ農業従事、他所での経験なし。現在、中の甲在住。方言保有度申しぶなく話し好き。性格もほがらかで気さく、歌好きで、盆唄などの他古の民謡の名手といふ。

録音環境 武田ふささんの自宅居間で、きめめて自然な雰囲気のもとで行なわれた。第二部、三部における話者の配置は次のようである。



# 1. 身辺雑事

訪し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 武田 みさ 女 明治32年 富山市生れ

B 田辺 正一 男 明治34年 "

D 武田 初夫 男 大正4年 富山市生れ <但し部分的にのみ登場>

E 武田 やす恵 女 大正13年 " " "

B コノ「マコモ オレ」サクマノガッコ デルトキニ「マーイ  
この孫も俺、佐久間の学校を出るときにまあ今  
~マントコワシコトカネーテ「ヨソイ テニヤー ナランシメ  
の所は仕事かないからよそへ出なくちゃなうない(が)ほ  
~=-= オマエ「ギテ クリヨーヨ、チエッテ」イタガソース  
~12月 お前は来てくれよ、て言へ いたが、(まは)い  
~ルテーッテ  
下から見て(音記)

A マー ナガイキョー セニヤー ソンダッチャッテモ「マーアン  
まあ 長生きを せねば 押して言へてもまああん  
~マリ ソー「アリケンヨニ ナルマテ「イキチャーカナンイエー  
まり きく歩けないよじに なるまで せきでは がなわぬいぬ  
B マー ソイデモ ハチジューノレーマジャー イキニヤー ソイデ  
まあ それでも ハチ ぐらいい チビハ 生きねば それゲー  
~モ モッテネー ハチジューノレーマジャー マー ソイデモヒ  
も もじね ハチ ぐらいい までは まあ それゲー  
~チジユーエー サンノレーカラ / アミノメオ イエー「ト  
七十 42 三 ぐらいいから の あみの目を ね と

～ツイタ ヒター タイゲー ハナジュー／ コエガ カカラニヤ  
ツリた 人は ないかい ハナの 声が がくじねは  
シナンゾ”  
死なないぜ”

A 「ホーカイエー マーオレ イヤ  
えかね まお 僕

B オバーク モー ハナジュー／ ヨニ ナッタツラ  
おはあは もう ハナの 余に たつたろ；

A 「ダレー  
誰？

B スキノ オバーイエー  
杉乃 おばあ ね

A 「ソーダツライエー アノオバーク オバーモ オジーモ イウラ  
とうだつたろ； ね あのおばあは (いや) おばあも おじいも いくさ  
サッソク シンドードエ シタテオジーワ アノ オカシー ゼンソ  
なんも 早く 死んだよ 下の おじいさんは あの あかい ゼンモ  
～ツチユータカイエー  
くっていいのかな

B 「アー ゼンソクダツツイエー  
あー ゼンソクだつたよ

A 「コーユー トコノ コタツニ スワッテテ 「セーテ セーテ ソレ  
こいじやー 所の こちつに 坐って (せきぞ) いれ せきぞしれ それ  
～キリイエー ヨルー ソレカラ シタノオバーモ アイ ヒトリ  
つきりぬ 夜， それから 下の おばあさんも ×× 一人  
～バカ シタニ オイテモ ショーネーテ ハツガ ユウェーテ ツレ  
ばかり 下に おひとも しがむかひいかん 初夫が 上へ 連ん

～テ ゴニヤー ヒオ アブンネーッテ ツレテキテ オイテ チヤ  
テ 来なくては 火が 危ない ハ 速かにきて あひて 茶  
ヘンマ！ ア！ ムコーン スバニ ネケーテ オイテ シヨンベー  
の向の あの 向きの 隅に 寝かして おひい 小便  
ヒーテオキ ア！ ハツ オキテクリヨーヨ、 チューモンダーテ オ  
（ハ 起きて、 あの 初矢よ 起きてくわ、 ） おひい 小便  
ヘキテ シヨンベン フタレー モッテキテ ヒーラシテ ネケーテ  
キテ 小便を（するの） たりいき 持ってキテ （小便を）させて 寝かして  
ヤッタラ ドーカ セツナフテ ショーネー＝ ロクシンカン ツ  
やたら どうか（何故）せつなくて（苦い） しかたがいいから 六神丸 を  
～リヨーヨ チューモンダーテ ソレオ ノマシタライエー ソーヤ  
（ハ） ハ おで 飲ませぬ ね おで  
～タラ ベー アサ ベー シンタッタエ アンケ＝ サッソフ シ  
（ハ） も 鮎 も 死んで言つたよ あんたに 早速 に 死  
ヘンデモイエー サッソフ シンタッタ  
（ハ） ね 早々と 死んだ

B ハチジュークレーナ  
ハ ブラック

A ドーモ ハチジュークレー ナッタモ シレン エー ソレガ キ  
（ハ） モ ハハ ブラック ナカモ シルカ キ  
（ハ） オバーテ マズ アスビーヤナイカ ハラナカ アルキヌイツ  
強い あはあさんて ます 遊びに たゞ 本内も 歩きぬいた

～カイエ  
カイエ  
B アー ソーダ ツイエー ソーダ、ツ  
（ハ） ソーダ、ツ  
（ハ） ソーダ、ツ

A エー キハイ オバー ダーツトイ 「イエー」 リレガ マス ムカシ  
 ねえ 気の強い お婆 女たよ ね ものか もす 者  
 ヘカラ アンマリ ナニカ ヤリツケン オバーダカ ナンダカ  
 が あんまり 何か やりつけない お婆 なんか 何か  
 コドモガ ア！ オレ！ コドモワ ヘー テカ！ ナツカ  
 み抜か あの 累の み抜は じ 大きく だらぐか  
 リツヨントーモ ミズクニントーモ ショーネー サカリテ 「イ」  
 リツ代達も みすくに達も 困る さかりて いく  
 ヘラカ アト一 オッテ アリッテモ ミリヤー エートモヤ ソレ  
 らか 後で ま、 歩いても 見れば 宮と思は セ  
 ~オ ゾ ワリヤイ コ= ナラッコネー エ アソビ一 イク コホ  
 で × わりあい オに ならずには 遊び、 行く、 予定  
 ヘリ一 イッテ 「ボンボン ボンボン イッテシマウ マー メシテ  
 リー リー 不ンボン(ササギ) リー(ぼ) チア 御飯 リー  
 ナケ=ヤー コンダイ  
 ナルハハ(アラ) 来ないよ

B エー ソー ソー ソー ソー  
 あ、 やうやく

A ア！ コドモー ミツケンテタイ  
 あ、 み抜けないから (み抜けの面倒を見るに付けていいから)  
 B アー コドマー スクナカッタデイエー  
 あ、 み抜け サカッた が、 よ  
 A エー ソイテ ミツケンテ オリヤー マタ リッチャントーカ  
 え、 やれ、 見慣れてないから 俺は 又 リ、 ちくま達か  
 コケチャー コマル ソレーマタ ミズクリントーモ カメッテ  
 ャンヒ(例句) 困る よく又 みすくに達も 一緒に

コトヤー コマルトモテ ハチテ<sup>(1)</sup> ナシ テー=モ シニナ  
倒れでは 困る と思つて 家へ 何に つけても 行くな  
コト<sup>(2)</sup> オミエタリイエー イフラカ ニヤケオ キッタリセリヤー<sup>(1)</sup>  
ことや 游びたりぬ いくらか 烟草 や、タリ すいは

アレタシ<sup>(3)</sup> ワリヤー ヴ=ナラット ヘッコー アサ<sup>(4)</sup> オキテ  
あわでか 刻合 舌<sup>(5)</sup> からずい け、こ 朝 起きて

メシヨー フッテ ヨガ<sup>(6)</sup> アケルト メシヨー フッテ ヘッコー  
飯で 食<sup>(7)</sup> 夜<sup>(8)</sup> ありふと 飲み食<sup>(9)</sup> 食<sup>(10)</sup> け、こ

スズシ<sup>(11)</sup> マニ アスビ<sup>(12)</sup> ポンポン ポンポン カ<sup>(13)</sup> サー モッテ  
涼しい 内に 遊びに さっさと 傘を 持って

イッチャッテ ドーモ<sup>(14)</sup> コドモワ<sup>(15)</sup> クニナランモンダッツエ  
行っては どうも 子供は 苦にならないもんだったよ

B コドモワ ヒトリタタテ<sup>(16)</sup> エー  
了は 一人 ちうじからぬ

A オー オレガ ヒトリ、キリ ヒトナタモンタデサ<sup>(17)</sup> ワリエー<sup>(18)</sup>  
えん 私か 一人、きり 成人したので ゆりあい  
フンナランモンダテ<sup>(19)</sup> アハ<sup>(20)</sup> ハツオジー<sup>(21)</sup> オバーワ<sup>(22)</sup> ナンタッツ<sup>(23)</sup>  
昔に つかないが、 あハ 初 お爺の お婆<sup>(24)</sup> 何だらん

~ガエ コドモ オトコ<sup>(25)</sup> オンナノコワ<sup>(26)</sup> ヒトヅモ<sup>(27)</sup> ナガッショーエ<sup>(28)</sup>  
よ ふく(といえ) 男(いや) 女 の子は 一人も なか、たうじか

~ンタデ<sup>(29)</sup> オトコ<sup>(30)</sup> コバッカタ<sup>(31)</sup> モンタデ<sup>(32)</sup>  
男の るばかりで、たので

B アー ノータッツガエー<sup>(33)</sup>  
ぬ、 キンヒタなぬ

A エー ヨッタリトカ<sup>(34)</sup> オトコ<sup>(35)</sup> コガ<sup>(36)</sup> アッテ<sup>(37)</sup> ヒトネタショーエ<sup>(38)</sup>  
え、 四人とか おの 了はか お、へ 肩でたうじか



「<sup>フ</sup>ネッコネイチー<sup>(4)</sup> ミツガ ステ<sup>°</sup>/オバー ドーカ<sup>フ</sup> モリオ ツ シー  
寝すいいて ミツ(人名)か ステ<sup>°</sup>/お婆さん ハジカ 子守を X キリ  
～ツケンテ イヤダメカエー イヤダメカ サハシ<sup>°</sup> ミコナイ ピス  
つけないから いやだのか ね いいからか サハリ ようていよい ピス  
～フ= ピズクニヤ リツヨガ<sup>フ</sup> ショーネ<sup>フ</sup>セーッチューエー<sup>フ</sup>  
フ= ピズクニヤ リツ代<sup>フ</sup>か しがたがないさへ言ひ ね ハ  
～コ一 カサ一 モッテ ホ<sup>フ</sup>ホ<sup>フ</sup>ホ<sup>フ</sup>アスピー イッチャッタ<sup>フ</sup>  
こう 傘を 持<sup>フ</sup> ささと 遊びに さ<sup>フ</sup>遊びに  
～ガ アンキナ<sup>フ</sup>タタイ<sup>フ</sup>エー ハイ  
が 美味<sup>フ</sup>だったよ ね も

B フアーリーリーリー<sup>フ</sup>  
あ、<sup>フ</sup>じた。

A ソーヤッテ アスピー イッチャッタ<sup>フ</sup> アー シヨーナカッツ  
ソーヤッテ 遊びに さ<sup>フ</sup>遊びに シヨーナカッツ  
ハツオジノ オバー<sup>フ</sup>アスピー アリカナンズ<sup>フ</sup>ワイエ アー<sup>フ</sup>  
ハツあ翁の お婆<sup>フ</sup>ー<sup>フ</sup>アスピー 出<sup>フ</sup>歩<sup>フ</sup>か<sup>フ</sup>まがたよ  
チヨットモ アスピー イフ オバーテ<sup>フ</sup> ナカッツエー ホン<sup>フ</sup>モ<sup>フ</sup>  
チヨットモ 遊びに オバーテ<sup>フ</sup> ナカッツエー ホン<sup>フ</sup>モ<sup>フ</sup>  
ドージー イカナンズ<sup>フ</sup>ワイエ<sup>フ</sup> アー トシカ<sup>フ</sup> イッタラエ ムカ  
ドージー(家<sup>フ</sup>)へ 行<sup>フ</sup>か<sup>フ</sup>まがたよ トシカ<sup>フ</sup> イッタラエ ムカ  
～シャ ドージー イッタツカ<sup>フ</sup>ナ<sup>フ</sup>マ<sup>フ</sup> イマ<sup>フ</sup> ウチデ<sup>フ</sup> オガ<sup>フ</sup>ヤー<sup>フ</sup>  
ドージーへ 行<sup>フ</sup>ったもの<sup>フ</sup>まがたよ<sup>フ</sup> マ<sup>フ</sup> 今<sup>フ</sup> 家<sup>フ</sup> オガ<sup>フ</sup>ヤー<sup>フ</sup>  
イーテ<sup>フ</sup> イカニヨ<sup>フ</sup>チユッテ サハシ<sup>フ</sup> イカナンズ<sup>フ</sup> イカニ<sup>フ</sup>オ<sup>フ</sup>  
良いから 行<sup>フ</sup>かないよ、<sup>フ</sup>言<sup>フ</sup>、<sup>フ</sup> サハリ<sup>フ</sup> 行<sup>フ</sup>かないよ、<sup>フ</sup>言<sup>フ</sup>、<sup>フ</sup> エ  
～バ一 メショー<sup>フ</sup>ウチワ<sup>フ</sup> テナンズエ<sup>フ</sup> ハツオジー<sup>フ</sup> オバーワ<sup>フ</sup>  
婆<sup>フ</sup>さん<sup>フ</sup> ハハハハ 家<sup>フ</sup> 出<sup>フ</sup>歩<sup>フ</sup>か<sup>フ</sup>たよ<sup>フ</sup> 初<sup>フ</sup>歩<sup>フ</sup>く<sup>フ</sup> ハツ<sup>フ</sup>歩<sup>フ</sup>く<sup>フ</sup>

B タガ オンナシュー ウチ= イルト ホント シコトバッカシダ  
タガ 女の人は 家= いと 本当に 紅葉ばかりで

～テエ シコトバッカシダ オンナシューク  
からね 紅葉ばかりで 女の人は

A 「仕一 ア! ケンイツアントコエー タレ、カカーンタツ  
ねえ あの 健一さんのところへ 誰の あがみさん にだつた

～テエ ツ! ココ! オバート ドージ! オバート キョーテー  
うか その ここの お婆さんと トージの お婆さんと 兄弟

～シユーテ ケンイツアントコエー ヒトリイッタ オバーカ。ア  
ー 健一さんのところへ 一人 行った あはあさんか あ

ヘツツキョーワイイエ ケンイツアントケー ゾノオバーカ。ケン  
、た イジヌイ 健一さんの戸へ うのあはあさんか ほ

～イツアント カカーカ。キタトキンナラキョーカエー マンタ  
ー サムの あがみさんか まひ野に まうだ うじでかわくま また

「イキテタ」キョーカエ オリヤー サハハシ シランカ。  
生きてた もうたがね 僕は さはり 知りたいから

B ソースルト ナミツサノ ナンタナー  
ミツサノ ナミツサ(入多)の ノルタナ

A カカタカエ

あがみさんだから

B アー ツネサブローサンジャ ネー アノー ケンイツアノ オシ  
ホ、 常三郎さん つまつま あの ぼーさんの あじい

～＝ アタル  
は あたり

A ゾノヒトカ マンタ ナンタキョーカエ ドカ ケンドー オ  
ズノヒトカ まだ 何で うじでかわくま どこか 駐道モ

トール デチシタ = ウチガ。 ピッテーイエー ピッテー ソレカ  
 通す 道下に 家が あり 収え あり それか  
 ~ラ ケンイッツア / オバーが。 マニダ オカーガ ケンイッツア  
 S 健一さんの お婆か まん あがみさんか 健一さんの  
 ~ル カカーガ ワカーフテ キタチュー モンダ"ド"カ コー  
 あがみさんか 若く 来ていつのイ"ド"カ コー  
 ナナメ = オリチャ一 イッテエー ソーヤッテ ナンダ"チヨーワ"  
 ムジムジ 下りては 行てぬ 行てて 行た"う"だ  
 ~イエ ケンイッツア / ウチオ ヘールトコ / ミチ ウチガ。 ア  
 ネ 健一さんの 家を 入るところの 通 家が あ  
 ヘッタラ ゾコ= トショリ / オバーが。 ココ / オバーワ"ド"ン  
 ったら そこには 手寄りの お婆か ここに お婆は とん  
 ~+ オバーダ"シランガ。 ソ / ケンイッツアントコ / オバーワ  
 な お婆が知らぬいか その 健一で人々が行の わがは  
 マニダ イキテタツツッチュー カイ  
 まだ 生きていた、 いよ

### B ホホー

(注)

- A ピー ソーイッテ ケンイッツア / オバーが イマハナスガイイエ  
 ふ、 そーい、 健一さんの お婆か 今 話すが  

B ピー ホーク  
 五、 そーか、

A ピー ソイテ キョーテーダ"ド"チヨー  
 ふ、 そーい、 兄弟 いそー

B ピー ソークソーク  
 ふ、 そーくそーく

A ココノ ココノ オバート アリ ケンイツソアリ オバート ア  
ニニの ニニの お婆と おの 建ててくの お婆と お

～シユーハ オバーが シューヨニシ キョーテー シューカ。ア  
の衆の お婆か。 十四人 兄弟衆か。 あ

～ナヤーハエ  
ナハス

B ソーカイ  
ソカイ

A アレ ソレタモニアテ プロガジャーネー プロセットカ ナント  
アレ ソレアカシ プロガ ではない プロセ(老熟) とか 何とか

～カ ユーホーエモ イッタ。 トヨセ イフタリモ アー オトコ  
ハ方ハモ 行た トキナセ 何人モ あ、男  
～シユーハ キヨタクニ シトモ アッショーワ  
衆の キヨタ(人), トモ 人モ あ, ちうだ

B ウン ソーソーソーソーア  
ソム ソカイ

A エ ソユーシトモ アッショ - シューヨニントカ アッショ -  
X ソウム人モ あ, ちうだ 十四人 とか あ, ちうだ

キヨーテー シューカ。  
兄弟 カ

B ソースルト ナニモ ソーダツラカナ - ドコ オーカワイイ  
ソスムと 行チ ソダツラカナ - ドコ 大川 へ さ

～モ ソイシャー オラントコノトモ イッタツラカイ ドー  
くのも ソイゲハ 俺の所の とも 行たうか さ

～モ ソーダツラカイ  
モ ソダツラカイ

- A ソーカソーカ  
ソカソカ
- B ソノ クネオオバーオ オイテ<sup>7</sup>・タダ<sup>8</sup>イエー オラントコノモンニ  
の カネヨお婆<sup>9</sup>さ 置<sup>10</sup>て行<sup>11</sup>くんだけ 倦<sup>12</sup>ん戸<sup>13</sup>の者<sup>14</sup>
- ツイテー  
ツイテ
- A ソーカソーカ  
ソカソカ
- B カクゾ<sup>15</sup>オシーノ コタカ ナンカタカテ  
カクゾ<sup>16</sup>お爺<sup>17</sup>の 子<sup>18</sup>か 何<sup>19</sup>か
- A ソノ カーカ<sup>(6)</sup>カラ コケーダカ<sup>20</sup> コッカラ カーカミタカイ イ  
の 川上(家<sup>21</sup>)から ここへ なが ここから 川上 ながへ い  
～ツモ<sup>22</sup> オバー<sup>23</sup>モ<sup>24</sup> アル<sup>25</sup>チヨー<sup>26</sup>エ  
た お婆<sup>27</sup>も ある うそ
- B アー ウチカラ コケー キタタ<sup>28</sup>  
あ 家(川上)から ここへ まこと
- A コケー キタタカイ ソノ オバー<sup>29</sup>モ<sup>30</sup> ハツガソユガホヒョー<sup>31</sup>  
ここへ 未<sup>32</sup>女のかい の お婆<sup>33</sup>も 初夫がもし言<sup>34</sup>いか 蔵標<sup>35</sup>ニ  
アル<sup>36</sup>チユ<sup>37</sup>一ガイ  
ある うそ
- B アー アノ オトノ<sup>38</sup>トーン<sup>39</sup> オトノ<sup>40</sup> ト<sup>41</sup> オトノト カイテ  
あ あ の おトノ(人<sup>42</sup>) あトノ<sup>43</sup> ト<sup>44</sup> おトノヒ カイテ  
イツモシヅエ  
うそた せんがよ
- A エー ソーユー シトガ アノ アル<sup>45</sup>チ<sup>46</sup> ホチヨー<sup>47</sup> = アル<sup>48</sup>チ<sup>49</sup>  
え そいじ 人か あ あ ホチヨー<sup>47</sup> = 蔵標<sup>45</sup> = アル<sup>48</sup>チ<sup>49</sup>

～一 ガイ エー  
ひよ ね

B アー ソーソーダ オトーカ ヨワカタナ一 ヤエクボノソー  
ふ いじか お父か 弱がくね 八重久保の き  
～ヤッテ ナンダツツソ アノ イッシュー -----  
や 何て たせ あの 一生

A ソーカソーカ ソーユヤー ハツカ ソノ カークミカラ キツヒ  
ソハシカ ソリニハ 部夫か その 川上 から 来る  
～トガ アルフーテ アノ アツチニ ホヒヨー＝ アルッテ  
人か お様で あの あすに 築橋＝ ある

B アー ソーソーダ ソレタモニタ"テ" ナウ イコ"イタ"テ ソノ  
ふ いじか いじか いじか なは(8月)から その  
シタデ(家)の おトノサオ ナンダツツラ アノー オトノッチュ"テ"  
シタデ(家)の おトノサオ ナンダツツラ あの おトノ, ライ

ナオ ソイタツツワイ ココニ イキタ オバー"カ" イコ"イタ"テ  
多 つけた, イ ここに 生きた お邊か よく 動いた, エ

ヘエー ソノ オシーカ アノー カラタシ ヨワカタモニタ"テ"  
わ その 五爺か あの 体か 弱がくね  
ナンショ イコ"カシテ" シヨーナカタタイ ハカシタモニタ"テ"  
てにかく 仲かくね イ おだか

A アー ソーカソーカ  
ふ ひか そか

B ゴタ"イカ ロフタ"イ サキズラ"イエ  
五代か 六代 前だろ? よ

A ソーカソーカ ウラー サハ"ハ"ソノ ホヒヨーヤナイカ シラ  
ソハ ソハ 僕は サハソウ その 築橋や何か、 ジロ

ハシガ<sup>ハツガ</sup> マス<sup>ボンメーッチュヤ</sup> ボヒョーウオ<sup>キレーナ</sup>  
 がいか<sup>初夫か</sup> ます<sup>盒前</sup> いえは<sup>モト</sup> 墓標を<sup>モト</sup> キレーナ  
 ソー<sup>キンデ</sup> ケッコ<sup>フイチャーフ</sup> マタ<sup>マズ</sup> カミサマオ<sup>カミサマオ</sup>  
 シ<sup>シキスイ</sup> ハニ<sup>モリ</sup> 拝<sup>モリ</sup> いは<sup>モト</sup> チル<sup>ナ</sup> キ<sup>モト</sup> 神様<sup>モト</sup>  
 ソー<sup>タ</sup> エー<sup>カミサマ</sup> オカケタワエ<sup>シマツタヤ</sup> ケッコ<sup>ソノ</sup> ナナオ<sup>ナナオ</sup>  
 シ<sup>シハ</sup> ハニ<sup>モト</sup> 神様<sup>モト</sup> おかけたよ<sup>モト</sup> ハニ<sup>モト</sup> その<sup>モト</sup>  
 タナ<sup>ナ</sup> ナニ<sup>ケ</sup> ケッコ<sup>フイテ</sup> シマツタヤ<sup>ボンメー</sup>  
 棚<sup>ハ</sup> 行<sup>ハ</sup> と<sup>ハ</sup> 拝<sup>ハ</sup> しまつ<sup>ハ</sup> 盒前<sup>ハ</sup>  
 ナンショ<sup>カミサマ</sup> オガム<sup>アサモ</sup> ドコ<sup>イッタモ</sup> ヤー<sup>ヤー</sup>  
 と<sup>ハ</sup> かく<sup>ハ</sup> 神様<sup>モト</sup> 拝<sup>モト</sup> 朝<sup>モト</sup> ピニ<sup>ハ</sup> 行<sup>モト</sup> 大<sup>モト</sup> は<sup>ハ</sup>  
 カミサマ<sup>オガミ</sup> イフ<sup>イフ</sup>  
 神様<sup>モト</sup> 拝<sup>モト</sup> いく

B アー<sup>イーコンタ</sup> アー<sup>ナン</sup> ケンチャワ<sup>ドモ</sup> マー<sup>マ</sup>  
 あ<sup>ハ</sup> 良<sup>ハ</sup> 行<sup>ハ</sup> の<sup>ハ</sup> ドモ<sup>ハ</sup> ど<sup>ハ</sup> も<sup>ハ</sup> ま<sup>ハ</sup>  
 ヴラントコジャ<sup>ヘ</sup> ヨメガ<sup>マツルコト</sup> シテルダイ<sup>マ</sup>  
 僕<sup>ハ</sup> の<sup>ハ</sup> ジ<sup>ハ</sup> ジ<sup>ハ</sup> 嫁<sup>ハ</sup> (嫁<sup>ハ</sup>) 祭<sup>ハ</sup> こと<sup>ハ</sup> いろ人<sup>ハ</sup> (色<sup>ハ</sup>)  
 ハツランガ<sup>ア</sup> アー<sup>シテウ</sup> チャ<sup>ヨメガ</sup> ネーワタヤ<sup>オレ</sup>  
 登<sup>ハ</sup> か<sup>ハ</sup> い<sup>ハ</sup> か<sup>ハ</sup> あ<sup>ハ</sup> セ<sup>ハ</sup> めの<sup>ハ</sup> ち<sup>ハ</sup> 嫁<sup>ハ</sup> (未<sup>ハ</sup>) ない<sup>ハ</sup> う<sup>ハ</sup> 僕<sup>ハ</sup>  
 ハ<sup>カ</sup> マツリ<sup>サ</sup> オレガ<sup>オラントキ</sup> ヨ<sup>コドモ</sup> ガ<sup>ヘ</sup>  
 登<sup>ハ</sup> き<sup>ハ</sup> サ<sup>ハ</sup> 居<sup>ハ</sup> い<sup>ハ</sup> とき<sup>ハ</sup> い<sup>ハ</sup> 子<sup>ハ</sup> そ<sup>ハ</sup> イ<sup>ハ</sup> カ<sup>ハ</sup>  
 チャント<sup>ソユ</sup> プセオ<sup>ツケ</sup> テ<sup>アルモンタ</sup> デ<sup>コドモ</sup> カ<sup>ハ</sup>  
 ち<sup>ハ</sup> ん<sup>ハ</sup> い<sup>ハ</sup> 麻<sup>ハ</sup> つけ<sup>ハ</sup> あ<sup>ハ</sup> の<sup>ハ</sup> て<sup>ハ</sup> ほ<sup>ハ</sup>

A アー<sup>コドモ</sup> ソレカラ<sup>ウラン</sup> キンショ<sup>モ</sup> オレガ<sup>マツ</sup>  
 あ<sup>ハ</sup> そ<sup>ハ</sup> も<sup>ハ</sup> か<sup>ハ</sup> 僕<sup>ハ</sup> の<sup>ハ</sup> 近所<sup>ハ</sup> も<sup>ハ</sup> 僕<sup>ハ</sup> 祭<sup>ハ</sup>  
 ハツガ<sup>イマ</sup> ジャ<sup>ハツガ</sup> オレ<sup>テ</sup> ナ<sup>テ</sup> ニヤ<sup>ーッ</sup> テ<sup>ユ</sup> ウ<sup>エ</sup> レ<sup>エ</sup>  
 った<sup>ハ</sup> が<sup>ハ</sup> 今<sup>ハ</sup> い<sup>ハ</sup> 初夫<sup>ハ</sup> 僕<sup>ハ</sup> かけいは<sup>ハ</sup> て<sup>ハ</sup> 言<sup>ハ</sup> よ

A マツルモニダテエー オー アシマガ イテシ ヘータイ  
ヨウ 爰る から ぬ さあ 痛が 痛いし 兵隊  
ヘウエ コドモガ イッテ イッペンニ サンニン イッタマエ  
ヘ みえか 57,2 一夜 三人 行く人間よ  
ヘータイウエ イエー ソノレスヤー オジーガ オレガ オカ  
兵隊へ ひい とれるすには お爺か 僕か 持て  
~ ハッテ オガミヌイテ フレタ オジーガ  
52 持みぬへ くれた。 お爺か

B アーノーダッタ アーノーネ

A オジーガ オガミヌイテ フレタガ ソレカラ ナルタケ 「イマー  
お爺か 持みぬへ くれたか おか 今は  
オレガ カミサマグレーワ オガミエルモニダテエー オキヤー  
鏡か カネヌギドリ おもにやがアキラのんつてね お茶を  
カエテ オガムドーチュヤ イーッテ オレガ オガムテ ハッタ  
持て 持も そつて言は 良い て 僕か 持てから 良いって  
ソーアッテ ドーシテモ オガマセエナス (B イーワ  
そう言って もうしても 持ませ得なかた 良いよ

~ イ ) ウジガミサマヤ センゾサマヤ ウブスナサマワ オレ  
氏神様や 先祖様や 産土神さまよ あれ  
ヘガ アッヂテ オガムカイ センゾサマラ ハツタマ  
か あ、さす 持も さ 先祖様(おじゆは) 初走たら

B アー ソノボーガ イーワ  
お、 もの方か 良いのか

A テメーテ  
自分で

- B パー ソノトーリ オラントコデモ ヨメガ ハエ一 ヤルコト=  
 あ、 あの通り 他の 所で いと 嫁が う； やる：とは
- A パー ソータソータ ドコデモ ソータテエー  
 あ、 いじりそん えいじ そんじかね
- B サッパリ オヤナセワワ ヨメガ ヤラニヤー ヘー ドコデモ  
 さっぱり 親のせがは 嫁が やらねえ う； やらねえも
- ソータガ ドコデモ ソータガ オヤナセワワ ナンダワイエ  
 そんたか そ：れい そんたか 教の せがは なんだよ
- ヨメガ ヤルモニタテエー  
 嫁が やるもにたてえ
- A パー パー アタリマエタテー  
 あ、 あり前なが
- B パー ソーヤリヤー マタ トシカ ジョッテ= マタ ヨメニ  
 あ、 そじやねは 又 年か 寄てが； 犬 嫁に
- ヤッテ モラウタキタ  
 やって もうだけた
- A ソータソータ イソコオバーも ナイカ フジンカイノ ナニヨー  
 そんたそんた 破子お婆も 何か 姉人会の 何ぞ
- × ヤルトキニヤー ナニカヤ コーヤッテテ オレト イソコサ  
 やるときには 何か こゝから オレヒ 破子さん
- ヘト コッチジャ一 ヤッテ ウラントケー ヨー テテキテクレテ  
 こゝちばは やって 僕のところへ よく 出てきてくれ
- テテキテクレテ ガッコイ イッショニ イッテエー ワスレエン  
 (Refrain) 学校へ 一緒に うそでね オナシ
- ～ガエ コケー テテキテクレテ ドーユー モニダカ  
 よ こゝへ 出て来てね うそいじゃな

B 「ナガ」 ナツアツカ ナツアツカ タウカツツエー  
何が 血圧が 血圧が 高いだけ

A ハヤク コロント シンタツテエー バカナコトン アツモンドツイ  
早く ころんと 気に入らんからね ばかだから わたくちよ

B シヨンナイ アキヨーテー シューミナ ジュショーガ ミシ  
しがない。あの兄弟 はみんな 命命か 短  
～カカツソイデ イソワ ナガイキョー シタホータツエー  
かかん。そひて 磯子は 長生きや いか方をかうね

ハタラクシュー ウチジュー ケッコー シンジャッタ  
働く衆 けこう 死んじゃった

「アードーも ----- 「ドーも<sup>(9)</sup>  
あ、ども ども

D オアツオーゴザイマス  
お暑いございます

B ゴツツオーン ナッテ -----  
ごとうい な、

D ヨクマズ キテフレテイエー  
よくます 来てくれました

A キノーヒトガイや キノーヒトガタダヒトリテ ヨッ  
昨日の 人がね 昨日の人 が たぶん 一人で 寝  
ヘテ フレタラ オカナイテ コトワットモッタラ ショイツア  
て ぐれたら 見つかって 断わろうと思つた 正一さん

へが キ \*  
か 来た

E オアツーゴザイマス ドーも  
お暑いございます (田辺さんに)

B オマツリーゴサイマヌ

お暮； ございす

D マズ イキルエ キョウク

まず 湿氣るね 今ねは

B アー イキルエ ウレシカラタ ミンナ ヨンベ シンジンセテ  
ぬ、 湿氣るね うれしから みんな 昨夜 信ぜて

クレタラ アメガニ キノー カエルジブン=ヤー クルニヤー  
くわいたら 雨か、 ルハ ナコ ビタ には 未だいは

ナニタツツカ。

何だったか

E キタツツカ。

未だ、け

B マーズ オツキサマテ<sup>7</sup> コリヤ フリヤセンゾ<sup>7</sup> ナンチュッテ  
まず お月夜 フー こねは 降りやしないぞ、 たゞと言へ

ナニ= ジュニ=シジブンカラサニ<sup>7</sup> ハジメテ フットイテ<sup>7</sup> イエー  
ナリ<sup>7</sup> 十ニ峰<sup>7</sup> 比喩<sup>7</sup> 始め 降つてあいてね

D アー オツキサマタツツカエ<sup>7</sup> ソーイエ オレモ<sup>7</sup> カイエ<sup>(11)</sup> ヘー  
ぬ、 お月夜 なうたかね そじさ 働き 給<sup>3</sup>入<sup>1</sup> 入<sup>3</sup>

~ルトキニヤー マース<sup>7</sup> ホシバッカダン<sup>7</sup> マズ<sup>7</sup> コリヤ オシメリヤ<sup>7</sup>  
モリ<sup>7</sup> ま<sup>7</sup> まほがりな<sup>7</sup> ま<sup>7</sup> こね<sup>7</sup> あご墨<sup>7</sup>

~一 ナイダチャートモッテ<sup>7</sup> カナシュー<sup>7</sup> イタラ<sup>7</sup> イヤ<sup>7</sup> ナニ  
ないんだな と思へ 悲しんで<sup>7</sup> いたら<sup>7</sup> ね<sup>7</sup>

「ハルカ サンシツ<sup>7</sup> イテ デレルシ<sup>7</sup> ナツラ<sup>7</sup> イエ<sup>7</sup> ナンカ<sup>7</sup> オチ  
長く 蚕室<sup>7</sup> ハ<sup>7</sup> 出<sup>3</sup>み<sup>3</sup>よ<sup>1</sup>ハ<sup>7</sup> ナ<sup>7</sup> た<sup>7</sup> か<sup>7</sup> 落<sup>7</sup>

~タス<sup>7</sup> ワイエ

なすんでね

B 「ア」 ソーダ、ツライエー  
あ、 うなづく

D 「シユーイチジ」 チョットスキ=キタッツ  
チー時 ちよと すき(雨)また

B アー シューアチジ チョットスキタッツ オレ シュニシント  
あ、 チー時 ちよと すき(雨)また 篠 +=の時

~キ= 「オキタラ ドモ フットデ  
い 起きたら でも 降, 去る

D 「ア」 ソーカソーカ ..... \*

あ、 うかうか、

A 「チカ グ、コー」 キューリョーシツ ナンチューダカ アノー<sup>ア</sup>  
行か は枝の 室 ベトロウガ あ  
「ウシロ= ベンショダカ ナンダカ マッタ フットエー マタ  
後に 便所をか 行いか 建てた 建てたぬ まだ  
ガ、コー /  
は枝の

B 「ホーカエ  
うかね

A 「ア」 アノー 「シユーカイミョ、チュータカ ツフットコ  
あ、 あ、 行く 集会所っていのか 行く所の  
~ / 「ウシロエ ヨソ、ダイワサダメイ ソージャネーカエ  
後へ 他所の 大工さんよ えしゃないか?

B 「ホーカエ  
うかね

A 「オ」 マス ナイカ ベンショダカ オナヤー ワカストコダカ  
い、 す 何か 便所をか お祭モ わがすまけたる、

ツツタ ワイエ

作った よ

B アホー カ オレ ナニシロ キヨネン ナシニー ウンドーカイ  
あそか 俺 なにしき 去年 何に 運動会  
イッタキシ イキソメンダ  
行ったきりで 行きつけないのだ

A ウンドーカイ イエー<sup>ト</sup>  
運動会 ね

B アー ジューガツイ イッカタカ (A アー ソー カ)  
あゝ 十月の 何日なんか ああ そうか

A マー コトシャー イキャーシエンドエ アノー ヨコバヤシ  
まあ 今年は 行くこともできやしないよ あの 横林の  
ヒコーキ オロストコアチュー チューテ  
飛行機 を おろす所(ヘリ発着所)だぞ いって いから

B アー ソコジャー ショアラメー トショーリシェーワ イキャー<sup>ト</sup>  
あゝ そこには 仕方あるまい 羊寄り衆は 行きは  
～シンドー<sup>ト</sup>  
しないぜ

A トショーリヤー コショーモ カケテーカ アツイトコニヤ イーエ  
羊寄りは 腰 でも かけたいが 畏い所は ほることか  
～ンデエー<sup>ト</sup>  
できないからね

B ソー ソータ アー<sup>ト</sup>  
ソーダ ソーダ

A ネー ドーモ  
ねえ ども

- B アー トテモ アソコジャー シヨーネーウイ  
ふゝ とても あそこじゃ いかでが ないよ
- A イキャー シーエンイエー コッチナラ スズシートコン アルカ  
行くとか できやしないよ こっちたら 満しい ところ あります
- ～エー ドーモ  
ね (あそびは) ども
- B ソーザソーダ トショリヤー スフルトコ ナケニヤー トテモ  
そばぞば お寄りは 坐るところ なければ とも
- カナワシ  
かない
- A イエー イキャーシエンドイ  
ぬ 行くとか できやしないよ
- B トテモトテモー<sup>ー</sup>  
とも とも
- A イヲ ハコンテ クレテモ ゾー コショーカカルモ/カラ  
いの(私)運んで(運んで)くれても そ; 腹をかける ものが  
スズシーモ/マテッチャーネーテエー  
満い 施設 まで(用意せよ) とは(捕ら)ないかしね
- B ソーザソーダ トテモ シヨンナイ  
そば とも じようかない
- A ツノヒコーキ オロストコニヤ ア/ ヘリコブター オロスト  
ツの 飛行機を あろす所には あの ヘリコブターを あろす時  
キ=ヤ ソノカゲン ナルモノン アッチャーネーマンナッ  
ルは その 景に なよほんむか あ、それは(ヘリの) じやまに ナッ  
ヘチャウワケテエー<sup>ー</sup>  
てしまひけでからぬ

B ソーリー ユーガイモ クート ナニヨーセル 「ウチヨー」 タ...  
キッジ タガミモ クレ 何で たる 家ビ 建て

ヘテサ一 アリ一 ヤスムトコ オチャ一 ワカヌダカ ナンダカ  
テマ あの 休む所 お祭 ハガシのハ 何をか  
セレトコン アルワイエ アー ソレテ ソレタモンタデ トテモ  
する 所か ある よ あ えむ もうでから これ

ソリヤー ナンタデ  
ソルハ ジケルから

A コノ ケンドーカラ シタイ アルカイ  
この 駿道が 下に あるか?

B アー ケンドーカラ シタイ ヒロイ ミチヨー ツブッテ ソ/  
あ、 県道が 下に だ、 道を 行って その  
シタイ イッテ ---- モトノ アリ タンボノ アトイヤエー  
下に さて もの のの なんばの 後に よ

A サー コノコロテ イカンモンタデ サハハシ ドコカ。 ドーマー。  
さあ この駅は 行きたいので さけり どこか どこか  
ヘタ一コト一  
タリニタ

B カシノ アリヤー ナンタイ タノヨシサマ! タンボタエー  
カシ あれは 何で タノヨシサマ(人名)の 団んぼタエよ  
オームカシワエー  
大吉はね

A タノヨシサマ  
タノヨシサマ

B ブラジルイ イッタ、ツワイエー  
ブラジルへ 行った よ

A イッチャッタカイ

お、ちやんか?

B ブラジルイ イッタツワイ アノー マキノシマカラ キティル  
ブラジルへ 行ったよ あの マキノシマ(204)が 来た

ムコガ オラヨリヤー ウエダツライ アノー タノヨシサ  
婿が 僕よりは 上なろうよ あの タノヨシサ

コニ オンナムコガ アッテ ムコ ムコガ キタツワイ オラ  
子に 女の子が あ、 婿 婿 きたっけ 僕

ヨリ ドーモ ガッコーウ ユウエダツラトモヨ  
ぶり うも 原校は 上なろうと思ふよ

A ホー

お

B ナオ ナオ ナンツツカ オベーワネーが マー マキノシマカ  
名を 名前 何と言ったか 覚えは ないか まあ マキノシマ カ

ヘラ キテ アノー ソーダ マキノシマカラ ムコガ キテ ソレ  
シ 来て あの おひで マキノシマカラ 婿 来て それ

~カラ ブラジルイ イッチャッタエー  
から ブラジルへ 行ったやう

A ブラジルチユヤ アノー ナニモ ブラジルチュー トコイ  
ブラジル、言ひなは あの 何も ブラジル、200 所へ

イッタツカエ アノー ヨシミサノ コタダガ タケルサ エー  
行つて あの ヨシミさんの 子女(めの) タケルさん エー

アノヒトモ イッタツヨ - チュ - エー  
の人も 行つたやう(200) エー

B パソソソタ

お、(200)

A ア /ヒトモ イ.. ショ - チュ - エ -  
あの人も 行く まだ とおね

B ア - イッペシ キョ.. チュ.. テ エ -  
あ 一度 来たって 言、ね

A キタッショ - エ - イケーナ <sup>(12)</sup> コン ナニヨーシテ クラス シラ  
来たそだね どんな こと 何をして 暮すか 知ら  
~ンガ タケ  
ないが タケル

B イッタトキヤ - エラカッタダイ ケンシリシチュッテ マー<sup>マ</sup>  
行った時 たいへんだったのさ 原始林、と言へ まあ  
フツー キョコトン ネートコエー イッテサ ソリョ - キリ  
通常 カムコトの ない ところ さて イケテ イケテ キリ  
~ハラッテ ナンダナー ド、カエ ソ / ブラジルデモ イー マ  
払い 行でやる どうかへ その ブラジルモ 良い  
~チーオ ヒトトコエー ベッソーオ カットイティヤ ソレー ナ  
町を 一ヶ所 やね 引き出せよ 驚くといふね それへ と  
~ンショ アノ - ヤスバ - イッチャ - クルケナドイ ハイッタ  
にかく あの 休みに さうは まる えんじょ。 入った  
トキヤ - エラカッタダイ カイコンセニヤ - ナランモンタニエー<sup>マ</sup>  
時は たいへんだよ 開鑿 じかいは なまくらがさね

A ア - ソーカソーカ コ.. ベ - コイタ エ -  
あ ソークソー が が が が

B ア - ソーヤッテ ナシロ アッチノホーフ キュ - リョ - ヤ  
あ ソーイ ナシロ あ、あの方は 給料 や  
~スイモンダテ ア - ツ - トチノ ヒト - ツカッチャ - イヤイ  
寝てゆけ もの と 人と 疲れていね

ヤル ター エー アー ヤスイ キー キー エー ソー ター アレ  
やるんだね ぬう 実い 給料 うた ええ あれ

タケ ハナレテモ トバヤマ ワスレタコト一ネチエツツソー  
でり 舞はれても 富山 忘れたことは ない、七三、九九

ヰテ エー

(家) 未だね

A テリヤー コドモノ シューワ ワスレンタダイ  
出れば 子供 は 忘れまいよ

B パー ソー リー ター<sup>ア</sup>  
ぬう ええ

A ソー イッテ ヤッタ ハナシタツワイ  
ええ せた 話 だらだよ

## 2. うわさ話など

話し手

(略号) (氏名) (性) (年齢)

- |                            |
|----------------------------|
| A 武田 ふさ 女 明治32年 宮山おまれ      |
| B 田辺 正一 男 明治34年 "          |
| C 堤 ふじよ 女 明治39年 "          |
| 〈Y 山口 幸洋 男 昭和11年 郡岡屋新居町生れ〉 |

C ..... ゴザイマス  
ございます

B オアツー ゴザイマス  
お暑い；ございます

C ネトッテ ネタボケテ ハイッテキマ  
窓で；寝ぼけた 入った

A ヨツ キテフレテ イーアンバイデ ゴザイマス  
よく 来てくれ 良い寒暖で；ございります

B イーアンバイデ ゴザイマス ソラソラ ゴロゴロ  
良い寒暖で；ございります それはいい；ござります

C ア！ チョット カセケダモンデネー ネビエオ シテヨー  
あい ちよと 風邪気でからね 疲労だと いわゆ

B ア ホ=ホ=  
は 本当に！（もしか！）

C ハサ ハラガ イタカッタ  
けさ 腹が 痛がん

B コッ クヨー ト ヨット ショーエ  
こ、とも 少し じかさい

C アノ ハラガ イタカラモニダイ モーヨット ネオオテネ  
あの 腹が 痛がんの

エー ネトーッテ ネー、トッタラ オバー、チャ ドーモ 「ソイシ」  
ゆえ 宿へて 寝入っていだ お邊ちゃん でい えい

マードコモ ヤメルジャ ナイシ ソリヤ キョットアイ  
まみ どこも 痛むのは たま ものは たし

カジ、テ コストモッテ  
カジ、(アホ) 来よ、と心、

B オー ソリヤ ソリヤ ナニヨリタ、  
あ、 そりや いわは 何よりだな

C ナンショ コノ アシノ ブアイガ ワルテネー カシマレンテ  
とねがく この 足の 具合が 変くれぬ 正座 できないが

B アーバ  
えん

C キョット カシマーッテモ コレ キョットコ一 カシマーレル  
もし 正座(へき) こす カし シ こす 正座 できよ

ヘドモ カシマッテ オレン  
けむり 長く 正座(へき) いじめられ

B アーバ ショーネーワイ アノ アシガ イテー トテモションナイ  
えん しかしながら わの 足か 痛い(うは) とても困る

C トミガ イリヤー ロウナコト ナイワイ ケサモ ロージンノ  
年を とねば ふくたま みいよ 今朝も 老人の

コトーネー ヤッ テレビ"デ" ヤットツツワイネ  
事始め ×× テレビ"デ" ヤッたよ

- B 「アーッ」「ソーソー ソーソー ソーソー」 アソコ / 「トーカイ」「トーカイ」  
 五、 インバ　ホウノ　東海　東海
- ～シ / 「ロシンホーム」  
 市の 老人ホーム
- A フジヨサ イソガシカツラ  
 ふじやさん いそがしかつら
- C イソガシフネー ネトッタ ワシャー ネトッタ ネトッタ  
 いそが な (私) 寝とた わいと。 寝とた 寝とた
- A ネテ オッタ  
 寝て おん
- C ナコット ネストモーテネー ナコット ネビエタカ ナンダネー  
 なこっと 寝よじて思つてね なこつて 寝冷えか ぬからね  
 ハガ イタカラタモニア シラン イシャイ イッテキタモ  
 今朝 電か 席からひいて 知りたい 座名。 うなぎまたのう  
 ヘンダインネー
- A ワリ一  
 すみません
- C ソンナコタナイ  
 そんなん
- B マー ラフ= ラフ= オイテ ---  
 まー 楽= 楽= オイテ(下さー)
- A ワリ一ネ ソリ一  
 すみませんね えむは
- C ナニ= トシガ イッタラ ズラガ ワルフテ ナニ= ネブクテ  
 行 タカ 寄たる 飲飲か 飲くテ ナニ= 眠くて

ショーカヌー  
ショウカヌー

B マーラフ= ----- アシガ<sup>イタクテ</sup> ショーケー=  
馬 案= 足か 痢<sup>イタク</sup> しめつけられから

C フサオサガ<sup>ナニ</sup> ナニカ<sup>ケンサカヌー</sup> キヨ<sup>ヤハ</sup> テクル、  
彦夫 女か 何 何か 検査かね 今日 やくくれる、

～<sup>テ</sup>一  
？

B ウンウン  
うん

C ユッテ<sup>コハシモ</sup> ナベテ<sup>クワ</sup> キリ<sup>イク</sup> テー<sup>ネ</sup>  
言って 食べて 痛き おじりでさへてね

B ホー<sup>シュー</sup> ジ<sup>シュー</sup> ジカラトモ<sup>タエ</sup>  
ほう 十時 十時かど思<sup>タエ</sup>たよ

C エー<sup>アハ</sup> グシ<sup>ゴシ</sup> ナンパンテ<sup>ハ</sup>  
え あの 九時 五十何分ハ

A ドコイ<sup>イロヨツテ</sup> ネー<sup>一</sup>  
どこへ 行ったって？

C イロヨ<sup>オイシマサエ</sup>  
行ったよ お医者さまへね

B シンルイスラ<sup>一</sup>  
新規患者

C タレ<sup>一</sup>  
失<sup>タレ</sup>か？

B シンルイスラ<sup>一</sup>  
新規患者

- A 「ジレネ」  
誰ですか？
- C ア「フ」 「ゴハン タベルト クワーヒトショイ ショッテ  
あの フ ごはん 食べると 燥で 一晩寝い 背負、ア  
キテーテー アスカラ ケンサオ ヤッテ フレルッテヨ  
来へ たよ 明日が 検査で や、( くれる、てよ
- B ソノ サキ ハチガツ ヤッタキノ ケンサノ ケッカテ  
その さきに 八月 は や、( 時の 検査の 結果
- アユーフ=ナッタ  
ぬの は な、た
- C ソーダソーダ コサキモ オフササト フターリテネー工  
ソーダ ソーダ このさき(以前) お父さん =人 てね
- A エー  
え？
- C アノ オフササト フターリテ ヤバテ モラターネー<sup>1</sup>  
あの お父さんと =人で 役場で 貰ったよね
- A ヤバテ ナンテネー  
役場で 何と？
- C フターリテ イタツネー<sup>2</sup>  
=人で 役場で
- A イツネー<sup>3</sup>  
何時(いつ)ですか？
- C ワスレターパ  
忘れたの！？
- B ハチガツ  
八月

- C ハチガツ ハチガツノ オワリタツカネー<sup>ト</sup>  
 八月 八月の 終り たつかね
- B アー ハチガツタ マイトシ シンタイケンサ<sup>ト</sup>  
 ぬ 八月 毎年 身体検査
- C シンタイケンサジャネー アノ ケンカラダカ アノキテクレテヨ<sup>ト</sup>  
 身体検査じゃない あの 身からだか あの 未てくれて  
 ナニカ オハナシ キーテ フレタツタネ<sup>ト</sup>  
 何か おはなし キーテ フレタツタネ
- A ア ホーカネ<sup>ト</sup>  
 ぬ そひかね
- C イロイロ ニト キーテ クレテー<sup>ト</sup>ネ シャシンオ オツッテ<sup>ト</sup>  
 いろいろ こと 開いて くれてね 写真を 送る  
 フレタツタネ<sup>ト</sup>アルヨ ソノ シャシンカ<sup>ト</sup>  
 くわなうけ あよよ その 写真か
- A ゾーダッタ<sup>ト</sup>  
 ぞうだん
- C ワスレタ<sup>ト</sup>  
 忘れたの！
- A イツイネー<sup>ト</sup>  
 いっ ですか？
- C オフササガ<sup>ト</sup> ワスレタ<sup>ト</sup>  
 オフサさんか 忘れた
- A イー<sup>ト</sup>  
 え？
- C イマ ナンネンモ マエタ<sup>ト</sup> ヤツバイ コイシキツテ<sup>ト</sup>ネー<sup>ト</sup>  
 今(今は)何年も 前で やつバイ 徒歩で 来い、と言ふ

- ソーイッテ クレテヨ カシコト キーテクレテネー ソー  
 リ言ふ クれぬ 老のこと 聞いてくれぬ う  
 シテ ナンタワイネ ゴクローダッタチュッテ アリーナード  
 い 何ですよ こちあらわしたく言つて あの ちゆくと  
 A アリ ヒロシサンが ソンショーヤルジブンダエー<sup>ヒロ</sup>  
 あい 34才か 神戸 やる頃ね  
 C ソージャ ナカツラ ハヤシサン ナタスカルケテ <sup>ヒロ</sup>  
 うじゅ 岩城太郎 林(市) 北川太郎(ひがし)34  
 ヒサシサンタツラカネー<sup>ヒロ</sup>  
 さく てうとうかね  
 B アリ ヒロシサタツラ  
 あい 34才だ  
 C シャツ シャシンオ ツット <sup>ヒロ</sup>ウツイテ オツシテ オフレタウエ  
 ×× 写真を ×× 写し 送って くれた  
 ヒロ シャシンガ  
 あるよ 写真か  
 A ハーダツカネー<sup>ヒロ</sup>  
 うだつた  
 C ナツダンネ エー コンナフーシテ ウツトルテ  
 夏だから 之 いく月(ヒ) 宇, ひみ  
 A ホー ヘー ワスレヲ  
 ほ; へ; ま  
 C オフササ ワスレタ一 レタケ トシガ ワカカナイ  
 オフサさん 忘れた! ものたり 手が 若くはな  
 A ハカシコタ一 タント ワスレタッテ ソリヤ ワスレヲ  
 老の こたは 多く 忘れた, へ もの 忘れた

C ナガチャシテ /

さぶちゃんて言ひの ...

A (15) ボン オドリ = コイ・チュッテ バンナ / セーネンノシュー - /  
盆 踊りに 来い、と言ひ みんなの 青年の象の

アソコエ ボンウタ ウタウヨー = コイ・チュッテ アソコエワ  
あそへ 盆唄 見よじに 来い、と言ひ あそへは

イッタ ヴ オボエタガネー フフシマヤエ レコードイ フキコ  
シテル(ニセ)は 覚えているがね 福島屋(家)へ レコードイ 吹き:

ヘンテ ツリヨーテーネ ソノトキニヤー イッタ オボエタガ  
ムズ くね、てぬ その時、いは シテル(ニセ)は 覚えてるか~

ハ一 ゾコノ ヤクババイワ ワスレタ  
ミ みの 従場へ(シテルニセ)は 忘れた

C ナ= ヤクバエ イッテネー フターリテヨー イッテー ソレー  
何 従場へ シテルニセ 二人でぬ シテルニセ

ヒロニー ントコエ キタツツネ ヒロニー ントモ ナニカネー  
弘 兄 の所へ 来たけ。 弘兄直も 何かね

イカダントキノ ハナシガネー キテ ソイテアノー イカダノリ  
絶の 時の 話かね。(渠の人)まで それい 絶乗り

ヘウタ一 ウタツタリ ナニヨー シテネー ホイテ  
現を 見たり 何かで いは それ

A ドーモ ヤクバイ イッタワ ワスレタ アスコノ フフシマヤ /  
どれも 従場へ シテルニセ 忘れた あそこの 福島屋の

ニケ一 ウエ イッテ  
二階へ シテル

C ---- オバサンタツカネー  
おばさんだいたかね



C カナバノシューーカネ  
後場の象から

A キズケーナ  
気遣いね

C キズカイニモ ナイワイ  
気遣いでも ないよ

A キョウ キョウ  
× 〇

C シタノン シタノ=ネー アノ シュウトコツシッテ ヤツタマタ  
下の口 下の口ね あの 富画室で ねえ

～テ ナニカ キーテクレタマテ  
から 何か 開いて 小さから

A キョウノホーガ キズケーネーガネー アリヤ カネコサンガ  
弓 の方か 気遣いね あれ 金子さんか  
シタニ= イタカゲンタカ キョウノ ホーワ キズクネーテ エー  
下の 口か てつか るの 方は 気遣いなって 良い  
ヘガネー ナニカ コナタマ コノコロ ナン ピラー ツレタテ  
ハセキル 何か このあたり これほど ×× ピラモ くわから

～ネー イラン ヘ ヨミエンタテ ヨミエンテ イラシタユタ  
ぬ うるさく も 這ひながら 读めかいが 寝てない、言ふ

～ラネー オバー ソシナバカナコト ユーシャーネー モッテケ  
アセキル お婆か えみたばかにこと うじんじんたか 手、手

～テ イラン ドーシテモ シーテショーカネー ヘ モラッタケ  
（アセキル）要うかん うじても 強いて うじかん うし 貸しきれ、

～ド アリヤー アシナモリ モラッタマテ アリヤー チヨキンウガ  
アド 五十九 あくともの 貸しきつて 五十九 限余を

ツドヤー リリクウオ ヨコセル ナンデューコト キクガ  
積みは 利息を よこす なめて言う ことを 間か

C ロージンノ シューカネー ロージングー／ シューガ アネー  
老人の 象がね 老人側の 象か あのは

アノ オカネウオ モラヤー イマ イチジネー アノ ツムト  
あの お金を 貰えは 今 一時ね あん 積みて

アノ リシオ リシカ オーキーチュッテ  
あの 利子を 利子か 大きいと言つて

A リソウ エー ソイデ オリヤー ヨミエンド イラシッテュッタ  
料局 ね サホー 施は まめにいかず 要らないって言つた

～カネー  
けね

C フツー／ シュー＝  
ふうの 象に

A ナンデモ フレタガッテ フレタガッテ オイデ モラッテキタン  
何でも <+たがって (Retreat) より あってまいか

ヨビヤー センタイ  
えみは けないよ

Y エーコトン カイテ フタタニ=ネー キット  
良い事か 書く あなたにね まっ

A アレ ユイ= カネコサンか ハルカ シタ= イタタカ カケン  
函小 上に 兼子さんか 長く 下に いたつか その加減

～ダカネー キヨフノホー コバヤンサニ ヤフバノホー イクト  
だのかね あの方 小林さん 後陽の方 行く

ヨーカ フル、キリウオ シャベッテ アーシテテ アリガトゴザ  
用か ある だけを シャベッテ ありて ありがとうござ

～イマシタ、チユッタ、キリテ、マ、シャベッタコタ、ナイ  
「ました、と言、た、キレイ」まあしゃべったことはない

ヤクバノホー キズケートメッタ ヤクハイワ イカン キズケ  
後場の方が 気遣いな(い)めたい 後場には 行かない 気遣

～ナヨ、コロヨガナケニヤ  
「な、よほと、用かなければ」

C ソイテアノクニササハオバーサオバーちゃんオシカイ  
「い、あの、お房さんのお婆さんお婆ちゃん押しかけ食

～チユーテオバー オシカイイヨ、チユッチャ一  
「うじいが、お婆、押しかけ食う、う、うは

A ヤクバノホー キズケーナキョフノホーがキズケガナエー  
後場の方が 気遣いたるの方か 気遣いかない

～カネー キョフノホークP1 ナンチユーダカナカヤノムス  
「などね、るの方はあの何でいが、ナカヤ(屋号)の息

～コヤナイカワアノアソコノオカーサントイッショ=オカ  
子などはあのあそびのお母さんと一緒にみゆ

～サンワトヨカワイイッチャッタカネイッチャッタカ  
さんは豊川へう、う、う、う、う、う

B ガッコーイシヨダツツエー  
学校一絶句

C イッショダツツカネ  
一絶句

B P-イシヨダツツトシガヒトリアレダガ  
五、一絶句、う、う、う、う、う、う

ガッコーイシヨダツツ  
学校一絶句

C アー ヴー ガモ シレン  
ぬ ゆかも しゃれい

A グガ ナニョー オバー サンケ タカヤ / オバー サンガ アノー<sup>ナリテ</sup> 何を お邊さんか ナカヤの お邊さんか ぬ;  
カミゲート/<sup>(ア)</sup> オバー サンウォ マメナカタ キフカ<sup>マ</sup> マメナカ  
カミゲイトの おばあさんで 元氣がいい 開くか 元氣か  
~ チューテ マメ=ヤー ネー<sup>タ</sup> ユ<sup>タ</sup> ワリヨー<sup>タ</sup> ユヤ  
~ えりか; 元氣(健康)では ないで 言へ くれて 言え  
~ 一コナイア ア/ ウイツアニモ ダイテ ソンショーサンニ  
ば このあいだ あの 宇市さん(木長)にも 出いで 木長さんは  
~エ マメナカイ チューテ コンタ ホタモチヨー モ<sup>タ</sup>テ イ、  
ぬ 元氣かい、と言うから 今度は ポタ餅で たまご  
~ヘン コイエッタラ ヤスイコト<sup>タ</sup> イエ<sup>タ</sup> アノシトモ タン  
度 来りよって<sup>タ</sup> お安い ご用意<sup>タ</sup> あの人も(手が)沢山  
~ト チガワット ガコイ イッタ<sup>タ</sup> ネー<sup>タ</sup>  
達かず、 学校へ 行かうね

C ゲンキ エーシャナイカ ア/ オバサンワネ<sup>タ</sup> ハツミワ ゲン  
元氣 良い じゃなにか あの おばさんには ハツミワ 元氣

~キナ ワシノ ニーサンナン グメナセ<sup>タ</sup>  
だ。 私の 親さん 〜〜〜 頭目<sup>タ</sup>よ

B イフラタカ コンタ サキヨー ヤメツラ ネコンタカ  
~~~~~ 今度は 滅と やめん<sup>タ</sup>ろ; 犯<sup>タ</sup>んだか

C サキャー ヤメチャッタ^タ テ ヤメチャッタ^タ カ^タ ナンショ ジャベ^タ
洒^タ やめチャッタ^タ テ やめチャッタ^タ カ^タ といかく いは^タ
~ルコトーネー ア/ ハナスコト^タ キライナ ニーサンタモ^タ
るこ^タをね あの 話す こと^タ きれいな 久さんたか

～ヨーテヨー ナンショ ハナショー センチュー = シント ゴハン
ぬ といくく 話す してい、ううのうに 洗山 こはん

タベルッテ ゴハンモ タベルシネ
食べる、て 食べても 食べとしゆ

A タレネ

誰が？

C ア / = -

あの 兄さん…

A ヨウナッタカイ

よく な、た、て かい

C ヨウナッテ キタモンデネー
よくな、て 来たのね

A ハー ウレシーネー

ほふ うれしいね

C オカゲテ ヨウナッタカイ キトルヨ ----- コナイタモ
おかげで 良くね、た、て (言、て) 来てます これいいも

イッタラ タイガオイ イチシチ アソンダ ア / オキトタマツル
いつたら たいがおい 一時 過ぎて あの 遊きていたって

～マサヤ オジガ アソビー イッテ クレタッテ
また 政治 おじさんか 遊びー い、て くわたり

A ヨカッタネー

よか、たね

B ア / タイカツジャ一 モー ア / サケテ ナセリヤー ソイ
あの 体格一は もー あの 酒一 行すれば ソイ

アスムヨー一 コツジャネー一 ----- タイカツワイーテー
アスムヨー一 体格一は ないよ 体格一は いいからね

C タイカカ一 イーガネ一
体格は 良いがね

B ナシロ サケガ スキテ
なしろ 酒か 好き

A アシナヒトガ ヤムナシチャ一 モー コリヤ ハリタッテ ヤリ
あんな人が 痴れなんて言はば もう ニリヤ ハリバッテ ヤリ
～ソーナ=ガ、コーやナイッカワ オカネヤナニヤ一 カマワコ
うなに 学校 なんかは お金も 何かは 楽ゆす
ヘネー アレ一 テテテテ テスエテ ネー²
あれ 出て 出て 出で

C オサケガ スキルテ
酒か 過ぎるか

B サケガ スキルテ イカン アノ一 ソノ ナシヤ一 アシナ タ
酒か 過ぎるか いけない あの; その 何は あんな 体
ヘイカクナラエ一 ソリヤ一 フント一 オニニ カナボーッチュ
格 ねえ それより 本当に 本当に 気に 金持、つい
～ヨーナ タイカクタン アリヤ一 マー フント エー タイカ
よくな 体格 たん あくは まあ 本当に 良い 体格
～タタ一
だよ

C イー タイカクタナ一
良い 体格 たぬき

A ヨーナテ キタカイネ一
(病院から) 良く(なれ) 来たのかしら

B パー ヨウテ キタ ドモ サキヤ一 ヤマルト ハヨーシカ
いい 良い 来た。でも 酒は 止まると 調子いい

イーダアレテ サキヤ一 ヤマレト ヲシガ イーダー /
良いのん あかべ 通は やまと 諸子が 安んじなあ

C アノマント ヲシガ イーダーネ
のの 飲まねと 諸子か 安んじなあ

B アノマント ヲシガ イーダ
あゝ 飲まねと 諸子か 安んじのん

C アノイヤダーテ ヲットモ ホシフナイ、テ ユニナ
あの(通は)いやだら、て 少し 欲しくない、て 言うがな

B ホイテ・ヤメタカ
えりい やめたか

C ヲットモ ハシホシカナナイヨ、テユ
少しも 飲もう 欲しくない、て 言

B ホンタソレタトヤ一 マタ ハチジエ-ガライマテ イキルナ
本当は えかたてね 又 ハチ ハシエ チテ 生きるな
～ オシーマテワ サキマテ
お爺さんまでは 猿

C ハチジエ-マテワ イチャ-シンワネー
ハチ チエは 生きやしないよ

B イキルゾアレテ サメリヤー
生きるぞ あかべ(通す)やめやは

C ソレー ハイルラカネー ハナスコトカ
ソレ(テ-アレコ-タ-) 入るがうかね 言はずことか

Y ウン オバサンニネー ハタ一 ハタ、テ ハタ一 ハタ、テ
えん おばさんには 歌を 歌を 歌を 歌を
モウワートモ、テ
覚おひと 四, 1

C ウターカネ マス コマル
歌をかね なれは 困る

Y ウタカ。ウマイチユーティ
歌か。いまい、うひがい

C ウタウ マス トシカ。タメタヌー コトシ ボシニ ウタハテ
歌じこは ます すか(寄つかう) ためたぬ 分身 盒に 歌うて
バヌッカネー コンキーヨ
ふた けひと 麻ゆのよ

A コンキーカイ ショーチューハイ イッパエーモ ノビヤー ウタイ
恋ねみかい じょじゅの 一杯も 飲めば 飲めば
～エルカ

歌ふか、

C ショーチューナン ノビヤー ヨケー タメタヨウ ウタースキア
じょじゅの なみ 飲めば よりい ためたよ 歌は 好き

～ガネー ワシャー スキテヨー アノー ヨルネー ネドコエ ア
がねー 私は。 好きでね あの 夜ね 寝室へ あ

～ハイマノネー ナンチュー テー テーブジャナイ アノー
のう 今のね 何といか ×× テーブ じゃない あの

プレヤオヨー モッテトイテ ハイマシンシキノ ウタウォ
プレヤー もの 持って行くと 今の 新式の 歌も

～ネー カケチャーヨー ネブタフナル マー ネムタスキテ マー
ね カケテはね 眠たくなる(マ) まあ(マ) 眠たす(マ) まあ

ソレモ サンマイグライ ヤルト タダ ネー、チャウヨ
それも 三枚 ぐらい やると ダル(自然) 寝入る えり

Y エーハ ウターキキナガラ ネリヤー ネー ウターキキナガラ
良ぬ 歌を 開きなが; 寝小け; ね 歌す すきなが;

ネリヤー ソンナ ゴショーラクチカ キモチガエーワネー
音小は えんは 後生樂 えいが 気持かえむ

(C) キモチが イーモ / ナンニモ ホカノコト カンガエント
気持ちが 良いもの 何でも ほかのこと 考えない こと

B ソ-ソ-ソ- ソレテイ-タ"イネ
ソイソイソイ ソホテ良ルルル

C ソレシカ カンガエンタ
小さいか 見えないのを

B ソー・ソー・ソー ソレテ イーワイネ
といとい それそれ 良いよ

C ジブンワ イーワイネ ノースルト ハット アサネ メガアフ
自分は 良いよ どうぞ ハント 朝ね 回か西く

ハイ ナンショ ゴシハン=一 エガアフネ イマノトコ フヨ
も) とんかく 五時半12時 目が西くね 今の所 なよ

~以卜 衣477~又衣
~眠<ti, tia

ソレデタレノウタガスキヤシノイマワイマノシトワ
歌の歌か好きアホの今は今の人

(エーハーハ フュン＝カーテキテ フルモンドイネー ア /
え、へ、へ ひくい まつせ くわくわ あくわ あくわ)

=シカワミネコ！ウヌー イマー イートモーテ キフタシ
西川峰子の歌を今は良いと思ふさくのなげと

ソンナニ アリ ウマカ一 ウタヤヘニ
うんぬい ぬの うまくは うたひはしないよ

B y''_1 - y'_1 \neq 0

Y ソリヤー アノミトラビタイナ ワケニ イカンケドネ
ソリヤア お人達 みたいな わけに いかないけれども

C トッテモ ウタヤシンニ ソリヤ ショーバイニネー ソレー ツ
と、とも 歌いはしないよ ソリヤ 南をいね(おとこ) ゼレニ
~イナヤー ウタットリヤー アノ ウタウワネ オモシロイナー
ハズ 歌っておれは あの 歌は 面白いわ
トモテ キフタケノコトデ
と思ふ キくだけのこころ

A ソーダソーダ オモシレーナートモテ ホント キフタケ
ソーダソーダ おもしろいよ と思ふ 本当 キくだけだ

C キフタケヨ
きくだけだよ

Y テレビン アノ エヌエイチケーノネ ノドジマンオ ミトル
テレビ あの NHK のね のど自慢(大分)を 見てますか?
オヒルニ ヤルノ
お盒に やるのを

C アリヨー ミヌキヨ
あれや 見続けていますよ

B ニチヨー
日々

C アリヨー ナシミヨ イッシューカンネー マズ ホント ニチ
あれを 集めていますよ 一週間は まず 本当 日
~ヨー= ナシミ ワシャー ハイ シロートノドジマントネー
日= 楽(2) 私は もう ううと のど自慢 とね
アリヨー カゾウタガセニヨ アリヨー ミナンジコターナイヨー
あの 家族歌合戦 ねえ ふかで 見ながらニヒメ まへよ

マイシュー

第四

Y ア-ユ- シロウトノネ- ウタッテ ナカニヤ- オバ-サント
アユ- ルトノネ- ウタッテ ナカニヤ- オバ-サント
ホレルトのね 歌う ながはは おばさんと

カ オバ-サントガネ-
カ おばさんとがね

C ヴ-ヨ
えいですよ

Y イッショ-ケンメ- ブ-テ ウタウナ- ホント= ミトルト
一生懸命 ブ-テ 歌うなは 本当 ミトルト
ホント=ミトルト

C オモシロイネ オモシロイヨ- ホント(イマ/ =チヨ- =モ)
おもしろいね おもしろいよ 本當 今 =チヨ- =モ

B ハナジ- =タカ= ナルヒトガ ウタッテ
ハナ= カニ= なる人か 歌う

ワカイ フ-オレテ ウタッタゾ-
若い 好きで 歌うぞ

ハナジ- =タ- オドロイタ-タナ- カオツキガ- ワカスギテ
ハナ= タ- 驚いた なみ 夢つきか- 若すき

マ- ウタウ
まあ 歌う

C イッカイ ウタウェソ-ナトモ-テモ ド-モ ウタウェンネ-
一気 歌えて; ないと思へも もの ゲンヌ

ウタッテ ミテ- ウチ ソシナ オ-キ- オト タ-イテ ウタヤ
歌う ミテ (私の)家 (やう) いは 大きい もの 歌う

~セシネ- ナ=モカモ マフ ウタッテ オリヤ- ソリヤ-
しゃいしゆ やまかも 又 歌う おはい もの

イフラカ ウタエルガ^ノネー
ハクシカ 那^タズミハキヒタ

Y マー ウタモ・エ-モ=ソ ホント=ネー ウタモ エ-モニア
ぬ ぬも 良いのか 本当のね。 ぬも 良いのか

B ソ-ソ-ソ-ソ-
ソ-ソ-

C ウタガ⁽⁴⁸⁾ イ-ニ^ノ ワシヤ ダイスキ^ノ ワシ ソイテ^ノ アノナ-
歌か、 歌いよ 私は 大好き 私 ソイテ あのね
オレガ^ノ シンデモ^ノ ナイテ フレンナヨ^ノ コドモガ フルト^ノ
俺か、 歌へても 泣へて くれよなよ お嬢か、 まみて う；
ユ- ナイテ フレンナヨ^ノ ナウ^ノ- ダイキライ^ノ ダシ^ノ オレガ
言。 泣へ くれよなよ まみては 大嫁いなし 僕か
シンダラ^ノ ウタ- ウタ^ノ テ フリヨ- ッチ-^ト ソイシヤ^ノ-
歌くん^ノ 歌を 歌^ノ くれよ まみて ソイシヤ^ノ
ウタ- ウタ^ノ テ^ノ ネー ナ-^ノ カネ^ノ ミチコ^ノ ウタ^ノ テ^ノ リ^ノ
歌を 歌^ノ(やよ) ね といよ^ノ ミチ子の(…が)。 歌^ノくれ

～-，ナ- ワシヤ- ソノホ-ン ウレシ-
～-^ノ 私は。 ソノ方か^ノ かれい

B マ-ネ- ハナシニ-カラシ ナリヤ- イ-ゾイ
まあは ハナカラシ^ノ なれば^ノ いいぞ

C ワシヤ- ナウ^ノ- ダイキライ^ノ テ^ノ テ シンダラ^ノ マ-⁽⁴⁹⁾
私は 泣くのが 大嫁い^ノ たからな^ノ て さくで^ノ まあ
ウタ- ウタ^ノ テ フリヨ- オレ ダイ^ノスキダ^ノ テ ユ-ガネ
歌を 泣くのが 俺 大嫁^ノ たからな^ノ う；
ソノホ-ガ イ-ヨ- ナイタリナシカ イヤダ^ノ ワシ ソイテ^ノ
ソノ方か^ノ 良いよ 泣くが なみか いかが^ノ 私 それ

- ネー ウチモ リ ジ"ヨ リノトーリ ア! ユイア.. テナ-
 ぬ 家(のこり)も 行くよ その通り あ! 言ふあつね
 イヤナコト ユーノン キライタ"ネー エー イチバン ワシャ
 いやなこと さうのが きれいなからね えー 一番 私は
 ノリヨー キライタ"イ エー イエーコー ヤルノン イチバ
 ノホド きれいなよ えい (?) やるのか 一番
 ハン スキダ"テ ソー イーチャー"ネー イチバン ソレガ イーテネ
 好きなが うきがいは 一番 それか 良いからね
 A ウタ=モ アルテ"ネー ワシャー" ワタシャ ウタズ"キ ウタワ=ヤ
 飲むのも あるからね 私は 私は 歌好き 飲むね
 ハー オラン ワシガ シンタラ" ウタ" ヤレ" チューコト ユー
 おらぬ 私が 飲んでる 歌だ やれ ついでに 言
 ヘテ"ネー ネー ソイテ" ウタ= スキナシター ウタガ"イーターネ
 がいだ ねー やけい 歌(うた) 好きな人は 歌が 良いんだよ
 C ウタガ イータイ"ネー
 歌か 良いんだよね
 B ナ=シロ ハチジ"ー"カラ スキリヤー ウタ- ウタ"テモ ナ"
 ナルハチ ハタかす すきねば 歌で 歌でも ナ
 ヘンデモソー ウチノシュー ナントモ オモワンタ"イ ホントノ
 くわい ちのくわい 家の象は 何とも 思わないさ 不当の
 コト- エ"テ
 こを 言って (家の名は老人の名を何も思ってないの意)
- C ホント= ソリヤー オモウンタ"テ
 不当ハ それは 思わないで
- Bウー ア! ハチジ"ー"カラ ナリヤ マー ソレカラ ヨ
 ぬ ハタかす ん ナキタ" チヌ そめかす 余

~ フンニ イキタマ"キャー ツリヤー モー"ケモシタ"ガネー マー
 分に 生きたてのは 仲は 倍りもつ がね
 ハチミューー サカオ キョーー イガフジヤー フサニヤー モ
 八十の 取き / ひらの 医学フジエ 越せねえ
 ヘ テネー トモーナー ワミ / オモニヤー
 ハヒルヒ ヒルヒ ハム ハヒルヒ
 C オラノ オッキー オバー ハハチミューー ハハチミューー = シカシ
 篠の 大きい ハハチ ハハチ ハハチ = かも え
 ヘレン ナリナツタガネー センダ"コ" ヤルテ"モ ナンテ"モ ハタ
 トヨー も なくなつがね 送滑を やるの"モ 行カセ 故
 ヘバ"カリ ハコ"シテ"ネ ハカミヤー"ネー イニ / イウェ"テ"
 ばかり(次) 洞(穴)の為 ハコ 若いね その 上 ハ
 フンタタ"=
 踏んだ人です
 B ノー"ソー"ソー"ソー" ノー"ソー"ソー"
 ノー"ソー"ソー"
 C イシ / ウウェ"テ"ネー イド"= コンナ フミイミシ ア"テヨ ノ
 石の上 ハコ ハコ こんな 踏石が あ、ア"テ
 ヘ イテ"アノー"ソレー ア"コ" カケ"テヨ ソイテ" フンタタ"= コ
 ナ"テ あの あれ 灰汁で かけた わけで 踏んだ人です ハ
 ヘ サゴサゴサ フンタ" コ" ヤ"テ コ" ヤ"テ アシテ"ネ フムト
 サゴサ 烟草" え" え" え" え" 足"ね" 踏
 ハタ" オナレダ ハテ" アノ モアンタ"テ"ネー ハカミヤー" ノ
 向かに 落ちるやで 手" あの 何んなくとも ね お"ス え
 ヘンタ" アノー モクシ"モ / ハ"タ"モ"ン アノ ナンタ"モ"ニタ"イ
 人ね あの 木綿物 ハ"モ"の"モ" あの 行カセ

エー ゴナガナガナリ フンデ ノイテハイ クート モニチラカイ
ね カナナナナ 踏んで ぬけたと なし 捨みかけ
レテ ノーヤッテ ホイタダガ ノーヤルモ ウツアノ オバー
ノヒヤク 干したのが うやまつも 歌! あの おばあ
~サンワ ムキソテ ムキフミキカイニ ハジメルトネ オーキー⁷
さんは 麻 (?) 美踏み機械(よみけい)はじめるとね 大きい
オトタ"イテ ノノ チヨーシガ コトメ"テ マス ウツアズ
音 お(手)の その 調子づけが 必要なごとく うす 歌を出す
~ワイネ ホント オモシロカツガ ソイテ ナガイキヨーシタニ
よ 本当の おもしろがちか うれい 長生きとしたよ
ソノオバーワ ソノオバーサンワ
ソノお婆は ソノお婆さんは

A アレ! オミトサクニハ ハチシユハチノ オバーガ ナシタ
あれの おひとさんって! ハチハの お婆が 何者
ヘドークネ オメー ボンウタ イマテモ ウツウチヨーワネ
うながよ お前 盆唄 分でモ 歌う どうぞよ
メワ リローーホー メニシテ
目は 両方 見てね~って

C ウタウラ
歌う五三

ナ アノ ユッチャ一 ワルイガ ヨーサ ヤカマシスキ。クヨーネ
あの 三、四 わらわ 夜 やかましそう うなづく
~テ一ネ ダンナン イコイテ クルミンナカガ イコイテキテ
~ 仕事をして (ほり) くるのに 人ひとが 仕事をして きて
ネーラトモ一=ネー ボンウタウオ ヨーサ ウタウタ ノー⁷
寝入る;と思ひのにな 盆唄と 夜 喰うて そ

ユー トシヨリワ ヨセ⁽²⁰⁾タ ユウェン^トネー ポンウタ一
う おはりは よせ とは うわい、てね 盆唄さ

ウタウ

唄

B ヤハリ ナガイキョー セルクレーナラ ソーダナ
やひり 長生きで すこくいいなう そだ(ナガイイのた)な

A ヨーサ ハルカ ウタツナ ヒトツヤ フタツナラ イーカネー
夜 長く 喰たみ 一つや 二つ だら 這がね

マタ ハルカ ウタツテ ショーガネー^ト カツオサン ヤルヨ
また 長く 喰て 困る、て 脇壁さん(きわみさん)(唄を)

ヘナ^ト ココエ キテ パユー^ト オモシロエーラカッテ ユ
やなよな、て(脇壁か)こへ 来へ あゝ言ひの 面白いなろうか、て 言
ヘナ^ト ナラシコトカ^ド アルラド^ト ナンニモ ナラシダフイヤ
うのひ。 若い なまなまか あるなろよ 何にも 苦になら人のす

C アノ スキジャー ナガツツ^トテナ^トア^ト オバーサン ワカイ
あの 好き^トテ ナガた、てね あの おはあさん 若い
ヘトキ=ヤー ウタフ^トスキジャー ナカツツ^トチユーウイネ
おはいは 歌は 好き^トテ ナガた といふよ

カツオサン オカシナモニタ^トイ
脇壁さん(きわみさん) じきしたもんちよ

A オカシナ ボンウタ ハルカ ウタツテ ションナイ^ト一ガエ
おかしてまこと。 盆唄さ 長く 喰て いかにか~まい といふかね

ソリヤー マー ショーネー^ト一^トテ オレ ユツタガ^トホントニ
イム まめ (よいかまつた) 俺 まつかー 本当に

ショーネー^ト一^トグライト^トウラ ユータガイ カツオサガ^トマズ^ト
"よいかない" といふほどのことだ。 俺 言ふんでよ 脇壁さんか^ト まづ

- トッテモ ハルカ ウター ウタッテ ショーネー⁷₇
 と、ても 長く 喰⁸き 吸⁹って (よみがへる、)
 ヨナカニ ウタットルダネ ヨナカモ ヒルマモ ナイダ⁷₇ネー オ
 夜中¹⁰に 喰⁸ていいふくには。 夜中も 全¹¹身¹²も ないん¹³には お
 ハバーサンジャー
 ばあさん では
 A フニモ ナルコトか ネー⁷₇ ヨケー ウタウダ⁷₇ ア / メカ⁷₇
 若¹⁴にも なることか ないから よけい 喰⁸んで。 あの 目¹⁵か
 メーンジャー カナシーカ⁷ ハラセー ヨケリヤ - イーテ⁷₇ チュット
 見えまいの¹⁶には 悲しいが、 腹¹⁷さす 良¹⁸いねは 良¹⁹いが、 って
 C ソイテ⁷₇モ ソンナカ⁷ イータ⁷₇ガ⁷ネー マズ⁷ メカ⁷₇ ワレイ⁷₇テ
 そひでん そんのか⁷ 良¹⁹いん²⁰ひいては ます⁷ 困²¹り 悪い⁷₇ (そひで)
 フニシテ⁷₇ネー ナンショ コマルホータ⁷₇タ⁷₇ネ
 若¹⁴じてね とかく 困る方 在²²たぬ (そひでは すとました)
 B ソー⁷₇ソー⁷₇ソー⁷₇
 そー そー そー
 A コマルトモ⁷₇テ フニセリヤー ヨケー ショーカ⁷ナイテ⁷₇イ⁷₇
 困²³と思²⁴る キム²⁵キム²⁶ よけい 困る がうぬ
 B アー⁷₇ソー⁷₇ソー⁷₇ソー⁷₇
 あー そーそー
 A ナツデ⁷₇モ フユデ⁷₇モ コンナ⁷チーサイ ウル カシワモ⁷₇
 身²⁷べし 冬²⁸ても こへづ 小²⁹さ⁷₇ ×× 柏餅³⁰
 スキテ⁷₇ フユデ⁷₇モ ナンテ⁷₇モ バサフボイ イキャ⁷₇ カシワ⁷₇
 わき²⁷ キム²⁸ 冬²⁹ても 行³⁰く 水窪³¹へ さけ³² さけ³³ 柏餅³⁴
 ~ カ⁷テキ⁷ フリ⁷ - ヨ⁷テ⁷ マ ナンシロ⁷₇ ソンナコトカ⁷₇
 も 罹²⁷ キム²⁸ くれよ²⁹ キム³⁰ オホ³¹ なれしろ³² そくわむか³³

「ニナルフーナう ふやナイカ カシワモチノウリ
芳はなよひに (良い) (も) ノム 和餅の 売
ヘヤエ一 ネーだ= いだラ カシワモチー カッテ ソーイ
店ぬ たのいのに (水産へ) おひな 和餅を 実 (と) いひ
ヘチャ一 チューモンセル、テ ソンナコトカ 「ニナルダケアタダイ
けく 注文す (あ) そんみにか 狂はなむで行なよ
イエ一 ネタケリヤー ネル オキタケリヤー オキル ハチジュ
ねえ 鮎(ハタハタ) 宿の 起きなげねえ 起きヌ ハチ
ヘーハチタツテ トビヤマジユーテ イチバンノ トシウエタツヨエ
ハチツテ 富山 じゆで 一番の 年長 大 (おお) よ
ソイテ ボンウタ ウタウ ソイテ ヨーサ ハルカ ウタツテ
イホヘ 金唄を 唄 (うた) いホヘ 夜中に 長く 唄 (うた)
ヘカラ キテ カツオサン ヨショートモ ユエズエー トシヨリ
(勝利せんぐ) 来テ よセ とも 言えずね 早寄り
ヘアツテ ソー ー
だから や
C ウリヤイ イマノ トシヨリワ ナンダネー トシ アノー シロ
やりあい 今の 事 (こと) リハ 何 (なん) もの いろ
ウトノドジマンデモ イマノ ハヨリノ ウターウタウシャーナイ
うとのどじまんでも 今 (いま) 流行の 歌を 唱 (うた) ないかね?
Y ウン ソータズネー
えん やうなね
A ホンシャ カミノナオツツアン ハヨリズラカ チンカラカフヨー
いホヘは カミの 直 (ただ) さん 流行 (うつろ) いか パレル (する) よ
ヘナ オドリヨー アソコテ オドロテ フマランガ リヨー ホー
ナ オドリヨー あそこ (そこ) おどろ (て) フマランガ リヨー ホー

- A ミュー ソロサニ
足を 手放さない
- B ヒョイト ビチャ - ティテテ ヨカツカ - マタ テテ キタ
ヒョウト ビチャ - ティテテ ヨカツカ - マタ テテ キタ
ヒョウト ビチャ - ティテテ ヨカツカ - マタ テテ キタ
ヒョウト ビチャ - ティテテ ヨカツカ - マタ テテ キタ
- C イマー マタネ - キツツナッタヨ - タ
今は 又ね 庄へん、くよん
- B セントウチャーエー ネテバ、カレタ、ツヅ - ホラ アレ イマ
先ではね 従へばかりでけ ほら あか 分
- C キツツ ナッタヌラ
競く わかんない
- A バカ = フルキタッタイ ⁽²¹⁾ コーユート ハタ - ノイジャ -
はかば 歩くようになつた = こひじく 風毛 出しては
- B ウノガモリタ
ウノ(人名)が守りた
- C エ - モリッテ ソイテ ゴハンニ アサハヤク ナンショ ハチ
え 小手 = ごはんに 朝食 = といふく 家
ノシュー オコスッテ - ネ ソコラ - アケテネート アケタリ
の食と 起すといふね そこら あけて ないと 開けたり
タタリシテ オコスッタ - イソマ - ネシンテネ ツカツテ
開けたり (て 起こすと言ふん せんせん あ 疎らぬね、とね。(伊津川)使
- モノ ワカリヤシンワネ - ヤセマー - テ ソイテ ア / ソノトキ
モノ わからぬ(な)いよ やせてほし うれし 五の その時
ハイ ゴハニ タベルタ - ネ タベルタ - マタハ - ウノサカ
も ジルギス 公文書へんかく 食べるくんまで まく うノサカ(人名)か

ア/ ピョー = ンガ アトオキテ タベルト マジ オゼンオ ダイ
あの 病人が あと起きて 食べると 又 小腹も 取れ
~チャーネー マジ ナンダ、テヨ グリヨー 42、テネ グリヨー
~はね 42 又 何だ、42 小腹、42, 42 小腹
~タ一 ユワンガ ア/一
とは えつないか 20

B 2" 2
生可

ソノネー オウンオ ダス、テヨ アノマニ コンダ ニーワ ナ
おねえ お椀を ます、でよ あの子が 今度は 先は 何
ヘンダゾー オロスタゾー ソンナナ ダベルトマタ オナカ一
だぞ (戸棚から) おろすんだぞ そんなのは 食べると 又 おなかで
コワスト コマルッテ ュートニー ソレカラ ショーガナエー
こわすと 困る、こ いいとね ソレカラ ショーガナエー
ヘテ キゼワシナイコト シテ イマサラ マイオ カッテモ
て 気にしない事で い 今更 薙毛を 飼っても
ソシダイタナ

A タシカニコノコロ キセワシナツ ナツナヤタイ ソーヤツテ
でしかば こねじぬ 気がんじてく たぶ、ちむ、れよ うじゆ、て
オカシ一チンカラカフヨーナ オドリ アリヤー オリヤー^{アリヤー}
おかし一 片正利モ丁ヌフジハス 道り もれいは 通バス
イマ ハヨリズラカツヤー ソリョー ミルツイ
今 流行 ナラガス それ みるツイ

B マー タ、ハ^アリ
モモ ハ^アリ

A カシタ一 チガウ オドリヨー オドルテ
若ヒは 違; 踏り飞 踏み込

B エーデモ ネテ バッカシ イツガイ エーデモ ネテバッカシ
寝ても 寝て ばかり いたよ 寝ても 寝てばかり
イツガ イマー キツクナッテ キシ一
いたが 分は きつくね またよ

Y イマノ ナンカラカクトワ ドーユーコト
今ノ ナンカラタリヒテ どういじニ?

A イッホー アシテ タテ イッホンアシテ アゲテル イマノハ
一本足で 立て 一本足で 上げて 今 流
ヘヤリノホーが オカシ一 オドリガネー うがうネー カシノ
行の方か 可笑い 踏りかね 違ひは 若の
オドリタ一
踏りとは

C ノーソー チガウネー
ノーノー 違ひは

A イエオ ビテモネー
給と 給もね

Y アーノーク ナンカラカイテー ソイテ オドルカシ
死の いなか ナンカラカイテ(片足跳び) いなか 踏み立かぬ

A オドリガ チガウ カシタ一 リヨー アシテ タトイチャ一
踏りか 違; 若は 両足で 立てあひは
テテ ヤツツガエ一 コーヤツチャ一 ナンダカ オトコシーン
手て やつがぬ こうちは 行いか 男の人か
アーニタ一 イガ キガチカ。テルテ イガ ナンダカ オカ
あの人は 良いけど 気が違ひぬ 良いが 行いか つか

ヘジー ジー + モニ シュネー ヘーティ イルテキタ シブン = ャー
いいよ! ね もんては 兵隊 は 行って来た (アフハ) くわくわ
ジュー オ コー キリッショウ カタ カツグマ マネオ シツカ。 イ
銃を う 賽得 よく ×× かくく 亂世と くわく 今
ヘマ ヤラン ソシナフニ= ジュー オ カツガシ キリッショウ ハ。
やうたん そんみにい 今を カツガシない 乱世よく ハ。
ヘント コー カツイジャ一 イマ ヤラン ソリヨー ヤラン
ヒト う 担へハエ 今 やうたん ソホド トトロハ
ソレヨリ ナンショ コー オドルマネオ セルネー アレオ
ソホドリ とけかく う 駆けまわす トコトコ あれで
イエオ ミルラカネー ネー アレ イクラカ ミシ ミシヨーナ
絵を みるだろ? ね ね 五糸 いくじ糸 ×× 見ないよ! ね
フシテ ミルダイネ 家ー
振りとく みるだろ? ね

3. 盒唄のこと、七キ夫のこと

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生年) | |
|--------|------|-------|-------|---|
| A 武田ふさ | 女 | 明治32年 | 宮山月生丸 | |
| B 田辺正一 | 男 | " 34年 | " | |
| C 堤ふじよ | 女 | " 39年 | " | |
| Y 山口章洋 | 男 | 昭和11年 | 新尾行生れ | > |

C 「エー シンゾーカ ナンダネー ヨワルダカネー ナンダカ
えい 心臓か 何だかね 足の力のかか
声か 続かないね 伝たか

「コエカ ツズカシエー

声か 続かないね

A 「イマデモ オドルラネー オーキラオ モッテ オドルヤツモ
今でも 踊るどころか 扇を 持つも

ソーレソレ

"ソーレソレ" (唄の名)

C ソーレソレネー

ソーレソレね

Y ソノ オーキオ モッテ ヤルノモ ソレモ ボンニ オドル
の 扇を 持つも やうのも ねむし 盒に 踊る?

C (唄う) ソーレソーレ ヨーアイトセー オンド トルコガ トリク
"それせん よいとせ 音頭 とる子が トリく

~タビレタ ヒロイ オニワテ ソージョーマカラ コラ ソーレソ
たびれた 広い お庭で 袖を 枕 こら それそれ

～レ ヨーイトセ" ツ チャー ソレ ヤルダネー
よいとせ" ヒ いっては それ やるんだね

(唄う) "カイナサレヨ ウタイナサレ ウタデ ゴキリヨーカ
"かいなされよ 歌いはれよ 疾て ご器量か

サガリヤセヌ コレソーレソーレ ヨーイトセー・テ ヤ・タネ
サガリヤセぬ これ それ よいとせ" って や, たね

(唄う) "ボンニヤ オイデヨ ヒチガツア オイデ コリヤ
"盆にや おいでよ 七月は おいで ニヤ

シンタ、ホトケモ ボンニヤ くる ホリヤ ソーレソーレ ヨーイ
死んで 仏も 盆にや くる ほりや そら そく よ
トセー"
とせ"

Y ムカシノヨーナ ウタダネー ソリヤー
昔のよじみ 歌ひね そりや

C (唄う) ソロタ ソロタヨ オドリコガ ソロタ イネノ デホヨ
"摘めた 摘めたよ 踊り子か 摘めた 猫の 出穂よ

ヘリヤ マタソロタ コレ ソーレソーレヨイトセ"
りや 摘めた こ も もれ よいとせ"

"ア イネノ デホニワ デモラガ アルガ コラ ソロタ オドリコ
"猫の 出穂には 出もらか あらか こりや 摘めた 踊り子

ヘニヤ モラウ ナイ コリヤ ソーレソーレ ヨーイトセー" ~~~~~
いは むらは ない こりや それ それ よいとせ"

ウタワニヤー オモシロイガ コンキスキテ ウタヤシン (23) コドモ
歌わばか 面白いか 痴ねまびへ 歌えない 了承

ヘモ ミンナト サソッテ ウタウトキャ オモシロク ノトシモ
もし カルバモ 言葉へ 歌う時に 面白く 今まも

ボンニ イ・テ オド・タタ
盒に ハッテ 疲れたよ

A コンキードコジャ ネ-ヤレ
疲れる どころじゃ ないよ

B ア！ ヒトラジャー コエガ ツズカンデ エライワイ
あー 一人 では 声か 続かないから 大変だよ

C ヴチャ一 ヨメヤナイ トテモ イキャシンガイ カタマチダッテ
家は 妻なんか といで 行きはしみいかね ～～～～ 云々^{云々}
オラ ボンドコジャネー、チュヤ オレ イッテイッテ オドッタ
俺 盒^{くわ}（くわ） つけてたん つて言ひは 僕 う（Ref） 疲れた
～リシテ オドッタガイ クタビレルコタ一 クタビレタッタ
りへ 疲れたよ 疲れる^{くたくた} 疲れた^{くたくた}

キヨネンワ ヨバンがヨバン イキヌイタダン
去年は 四壁が 四壁 行き遅げた^{はづけた} へじけた

A ヨフネー
よくぞ

C マー ダイブ ダメダニ= ヨワ・テネー ヒチジュー= ヒチジュー
まあ でいぶ 頭痛だよ（体が）弱^{いわ}くね 七十^{しち} 七十
～ニモナリヤー
ルも なれば

B マンダズラ ハチタ
まだぞろ（六十）ハタ

C ハチジャ ナインネ マー ニガツノ ムイカカ クリヤー マン
ハビタ ないですよ まお ニ月の 先日が くれは 満
ヒチジュー^タ
七十^{しち}

- B ソンネ＝ナルカ
ソルナ
ナルカ
- A ヒチジュー
ヒチジュー
- C ヘー イマタネー =ガツノ ムイカツチニヤー^ー
も 今ねは 一月の 六日、七日には
- B ノーカネ
ノーカネ
- A ワカイワネー^ー
若いわね
- B ウン ワカイ
え 若い
- C ワカカ ナイ= マーハイ オトーサン= ハヤフ ナクナラレテ
若くは かいつけよ まあ も あくまで 早く 駄なれ
- A コッペー コイタデ
苦勞 したが
- C ヨンジュー／ トシ= ナクナラレタ
四十の 年= 駄なれ
- B ヨンジューダッカイ アー ナンキオ シタナー
四十だんか ぬ 難儀を しただ
- C ホント ナンキオ シタデ ワンヤー ホント ドンナコトデモ
本当に 難儀を したが ねほ 本当に どうなことでも
がマンガ デキル チュコトイネ エー^ー
我慢か できます、でも これ以上 取
- B ソリヤ ノーリ
ソリヤ ノーリ

B ソリヤ 「オシナダテ」 ヤリヌイタガ オトコシュー・ジヤ ヤリヌケ
ソルヤ 女をかう やり抜いたか 男 では やり抜け

ヘンゾウ

フツモト

A コッペー コイタテネー
苦勞 したからね

C ソイデ「ゴーモ ワカンガネー」「ゴーガ ワカンダニ」「ガマンガ
ソイデ 腹も たもないけれど 腹が たまないんだ 我慢が
デキルモンダイネー
デキルモンダイね

Y オトーサンワ マタ「ドーシテ ソーユー ハヤク ナシカ ケガ
オトーサンは 又 ドーシテ ソーユー 早く ナシカ ケガ
～カ ナンカタッタ ピローキタッタ
か 何か だった？ 痴氣だった

C オトーサンワ「ショースラカタガネ アノ」「コドモガネー アノ
オトーサンは 運悪がたんでですよ あの まだがね あの
～～「センソーニイタヨー アノ一 ムスコガネー イッテ ア
戦争 いっとう もの 気子がね さう あ
～ノ一 ゲリノ ピローキ=トツカレタネー トツカレタヨ
の 下痢の 痴氣の とつつかれたのね とつつかれてよ

ソイデ「ワシ」「ドーカ アー ジブンデ アーナル カケンダカ
ソイデ 手心 ドーカ ビシカ ×× 自分で あくらる 加減 なんか
ワシニ アノ一 トヨハシノ アノ ガッコーエ「ニユーアインシート
私 ノ一 あの 豊橋の あの 学校へ 入院して
ヘルテ」アノ一 ツツミクンガ「ニユーアインシトルテ」「メシカイニ
るか； あの 提携病院 入院 していまか； 面会に

キテ クリュー・テ ユーモンテ マー ワシ= イッテコイ・テ
チク <れ, エ ハジケ まあ 和也 57, 2 こい, エ

ユレテ イッテキテ クリュー コンドナー タイインスルトキヤ
言, エ 行, 2 来, エ れ 今度ね 退院 さゆは

～ オレ イッテフルテ イッテクリュー・テ ヨシ ホイシャ
庵 57, 2 くるが; 57, 2 れ, エ エレ さゆは

ウシ イッテフル・テ ワシ イッテ キヌ・ツカネー コント
私 行, 2 くる, エ 私 57, 2 キタ カヌ 今度

タイインタ・クルモンタデ ソイシャー オレ コンタ イッテ
退院 57, 2 い, エ さゆは 猷 今度 行, エ

フルテナ・クル・テ イッテ ニモツウオ ショ・テキヌ・ツワ
くるからな, 言, エ 57, 2 荷物を 背負, エ キタ, エ

～イネ ソレニ イクラカ バイキンガネー キヌ・ツカナ・ンタカ
えり, エ いく, カ バイ菌かね 来た か 何だか

オトーサン ヨウガ・タモント クロード ヨワイ タチアモント
お父さん (体か) 弱か, 大きい 腸の 57, 2 +を だから

～ネー ザー ソレニ ト・ツカレテネー ゲリニ ナ・テヨー ソ
ぬ さあ それニ トリつかれてね 下痢 1= だ, てぬ ど

「しが モト ロウマクオ ヤンダ・タモントデ アレ シンカ
やが もと 肺膜を 痛んだことがあるので あれ 心か

ショーブ= ナカ・タモントデネー タダ ホント ナンダ= メア
丈夫で 57, 2 た, エ エ ほんとに 何ですよ 目で

アケタナリ テ, コー スンジャ・タ・ツカネー
あけた, キリ と, い; 清んじゃ, た けども

ゞ ソノコロ コレガ ア・タグネ テンシワ
ソノコロ こか, エ, た, いすね 電車は

C テンシヤ + カルタモニダテ ワニャネー ア / サカベーチュ
電車 ながくつて 私は おの 坂部へ
トコイ マズ ダンレモ ソシナ ビョーキダモンダテネー キチャ
所へ ます 話も みんな 病気だからね 来てい
フレンラ ダンレモ キチャ クレン ソノトキヤー オーアレガ
くわかいばは 謙も 未ちゅ くわかい そいひは 大荒れか
シテヨー デンキモ ケーチャッテ ナイモンダテネー ナクテホ
（れぬ 電気も 消えたら、て ないのでは なくて
ヘント カナシ一 メオ ショ= ソーヤッテ ア / - チューシャ
本当に 悲しい 目を しまじょ えいやへ おの； 三射
ヘデモ ヤッテ ヤラニヤー ショーが ナイモンダイネー ワシャ
でも や、て やらねば しようか ないので ね 私は
サカベー イッテヨー アノー ムカシャー アノー ウォースキ⁽²⁴⁾
坂部へ うづぬ おの； 若は おの 大木

～一 イッテ

へ う、て

A エー オースキー^o
え、 大木 に

C オトーサン コーヤッテ オレニヤー ワシ イッテ チューシャ
お父さん こひや、て 居れぬけねば 私 う、て 三射
ア / リンケル アレ ナンチュー・ダカイ カンフルダカイ アレ
あ、 リンケル ぬれ 何と“のかな” カンフル おな あ、
～オ ヤッテ ヤルテー ア / モラッテキテ ヤッテ ヤルダイ
モ や、て やるから おの 貰ってき、 や、て やるよ、
～タラ ハヤフ イッテキテ リューチューモンダイ ワシャー
またら 早く う、てキテ くれ ～、の？ 私は

ア / サカシベマテ イッタニ リアルカイ コカラソコ
あい 坂部 ちー 行たよ ニ里 所なかみ ここから そ

ヘイ イーテ モラ、テキテヨー ハチヌイテ ヤッタツガネー^{（洋服）}
へ 行て 買って きてね ヤハナ けでね

マー ジューコンチ ネナシニ ヨルヒル ネナシニ ワシャーア
まく すみじ 寝すね 衣笠 犬子は 私は あ

～ / オカイコモ アッモンテネー エー ネナシニ オッテ
の お蚕も あたつ うわぬ え 寝すね 尾

カンヒョーシテ ヤッラ ア / マニタ オンナノコガ ヒトリ
看病して やたう あい まひ 女の子が 一人

「イマ オンナノコワ タスカタガネー タスカタッタン ア /
今 女の子は 助かる げでね 助かる か 五の

～ - =オウナヨ ア / =オウナ オカーサン / ワシャー ア /
体をこわすなよ あの 体をこわすな お母さん 私は あの

～コロ ハラウオ ニカイメ = シジツシタトキダイ トテモア /
後 腹や = 因みに 手術 なときたよ これも あの

オッカチャン / カラタガ ツズカンデナ - = オウナヨッテ ア /
お四人の 本か 痛かぬかじね 体をこわすなよ 五

～ / - ユツワイネ ユツガ ア / - ソイテモ ミチコワ
の 言たよ 言ったか 五の もうても ミチ子は

タスカタガ ソ / オトーサンワ ナクナタ ソイテ カンフ
助かるか えの お父さんは なくね うね カンフ

～ル ヤッタケド ワシャー マー ハ / ソノジブンニヤ キト
やたけで 私は あ ぞの その 僕には キト

ヘモア / タベルモナナイ モシテネー オトーサンワ タベエンモン
もあい 食べよものは ないのでね お父さんは 食べられたいの

ダイ ショーナイテ コムキウオネー コムキノ 人々 やツオ
しかたが“ないから 小麦をね 小麦の 取たやつて

アノ オフイ！ コノシタ！ オジーサンガーヌ シンセキン ア
あの 奥の この下の おいしさくか 親戚か あ、

ヘタモンダテ アノー ザイショイ イッチャ一 フンデキテ クレ
丸 17 あの 在所(里方)へ さ、ね 交換して くわ

ヘルモンダテヨ コーカンシテ フレモニタイ ソノ リンゴウ
る の ね 交換して くわ の その リンゴを

ヘネ ユカキー コンナ ユカキー イッハイ モッテキテ オト
ぬ さるへ こんな さるへ い、ほい、 すよ、まき お父

ヘサン タツサン マビヨーネ アノー ワシアノ コレオ コレナ
さん ちくさん 食べなね あの 私 あの これで こむ

ヘラタベレッタラ マズ オマエ ソンナ ナニュー マズ ドー
△ 食べなね、 あ、 ます 之前 うんと 何と ます と

ヘセツモリタテ オカネオ ドーセル ツモリタテ ソリュ
する つもりで、 お金と どうす つもりで、 うれ

シンハイガツツワイネ アンジヤーナイ アノー オトーサンワ
ペ配 した よ パ配 ない あの お父さんは

チットモ ゴハンワ タベリヤ シエンタモン ナニモ タベリヤ
少しも こばんは 食べることはできないんだもの 何にも 食べは

シエンタモンテ コデモカエシ テオカヤシ ⁽²⁵⁾ ノーヤツツガネー
（得ないのが）から 粉でも返し 手を返し どうやった いたずら

アノ タベテ モラタツカ ソーヤッテ ナンシロ ジューゴ
あの 食べて 貰った か そいや なにいろ 十五

ヘンチ エー ヨルヒルナシ ト ミットモナイ ソノヒガネー
日々 え、 夜昼 なし × みとも（なりふり） がまゆめ その日がね

A エー ジューゴンチ カンヒョーシテ ヤッタラ マズヨウ オカ
え、 タヌ日 看病 て やつたら まだよく お母
へーサン！ ア！ オッカチャシ！ ミガラワ ツズブツツツワネ
さんの あの お母さんの 身は 続くって言ったよ
へー カラドガ ツズブッテ ユツツワイネ ユツツカネー ジュー⁷
体が 続く、 と言ったよ 言たかね +
へゴンチ！ バンカタネ ナンツー タタメオ アケタッキシネ
五日の 晚方ね 何といふか たぶん 日で 開けたままね
タタ デヤフガ トマッチャッテヨ ソノ バンカタ オカシカ
自然に 液が 止まっちゃうね もの 晚方 おかしが
へツワイネ ア！ ハイ オーアレガ シヌトキモ ミズガ テナ
たよ あい も(矢張)大荒れか (矢張も(川の)水か) 生き
へツテネー⁷
+ 742

B アーハー ソーダッタネー⁷
あれ えだらね

C ミタイッチュー モンタイ ソレオ ハハ ハーテテテ ミタンネ
見たい、ついので もの × 這って 見たんや
ソリュー コーヤッテ ハーテ デテミルトサイニ マズ オーキ
矢張り こいや、 這、 出てみると ます 大きい
へー ミズダナーッテ ユーテ ----- コリヤ タタ コー テナ
水でなあ、 言、 (不明) ニリカ 自然に ニ (小便か) 出
ヘツタッチュー モンテネー アノー ソユヤー ワシン フイテ
やめ、 てついのでね あの うう言えば 私が 戻る
ヤルテタラ マー オリヤー / ソンナアノ キレーニシテ
やるから、 まあ 僕はね うそで あり きれいい

フレンテモ イー、クニーラー コイテ オリヤ キレ一ニシテ
くわかても 良い、いいじ（は） シナフ おれは きれい（は）
フレンテモ イー、クニードー ソノトキカラ ナコットモ シラ
くわかても 良い、（は） ソノトキカラ 少しも （気が）つか
ヘンダーネマキレーナコタ イランテナ トト フイトイテ
ないんだよ まあ きれいな必要な ないから 少し 挙げとひ
ソリョー ソノトキ ユツタワイネ アノナ イマ ナンモ
くわ ソノトキ ハルメ カムナ 今 行け
ナイトキダン イチバン オレ、 イーキモノワ イーキモノワ
ない（は）か 一重 疲れ 良い筋めは 良い筋めは
アノー オトサンニ ヤハテソリョーッテ ウチノ アトノ カカ
あい（は） あとさんには やへくれ、（は） 家の あとの カカリ
ヘリオナーエ アリヤー ウーサンニ ヤレヨー ミチコガ ヨウナ
モロス あれは ウーさんには やれよ ミチ子か よく（は）
ヘタラ アノー オンナノコガ ネコンドッタガ ヨウナタラ
モロス あの（女性）女のふか 猫（ねこ）でいるか（女性）よく（は）
アノー イツモ ジョーカイニ キテツレーツアイニヤ
モロス リツモ 常会（は） 着て行く、 と
アリヤー アレ= ウエト シタノ モンペー フワ= コシヤ
あれは あれに 上と 下の モンペと 簡单服（は） こじら
ツテ ヤレヨツテ ユツテ トト ユイオキタケガネー
モロス やれよ、（は） 言（は）（女性） ちょっとした 遺言（のこごと）かね
ソリョー トトモ オリヤー ユイオキタヤー オモワシタ
モロス 歩しも 疲れ 遺言（のこごと）かね 思（おも）ひ（は）
ヨウタモニテ
彼（かれ）たものだからね

A アー ソ-ジ"ワイイエー
スル キハタク

C ソ-ヤ-テネー コレ イノマニ オニ ナタデ⁽²⁶⁾ ココエチーット
ソロヘテム ニル 房間 ハ ? 佐太ア ニニヘ サレ
ソコトッタイネ マー ドテモ オマエモ カラドガ ツズカン
ソロヘイタモ キル テモ ト前モ 緒か 緒か
ヘテ ココニ ネヨツテ トコトモ ネソメンテ ココニ ネオツ
ガシ ニニ ネヨツテ カレモ 緒つけハリテ ニニ ネヨツ
ヘテ ユツカト オトツツア トヨツモ オレ ネブカーナ
ツ 言, たか X お父さん カレモ 僕 晚くは な
ヘイテ インショーチンメーダ"テ オリヤー ヨリナツテ モラワニ^ヤ
ハカラ 一生懸命 ハカラ 僕は よくな, ハ 落小ハカラ
ヘー コマルテツテ ワシ ユツテネー ユツテヨ⁽²⁷⁾ ソーシテ イノ
困るから, ハ 私 言, ては 言, ハタ うひへ 后
ヘマイ イテ ナニカ シトツタラ ホイカラ フサカ オカチャ
間に 行, ハ 何か (ハ) いつか そなが ふさか お母さん
オカチャ ハヤキテ ミヨー オトツチャ アノ メオ メオ
お母さん 早く 来, ミヨ お父さん おの 目毛 目毛
アケテ オルカ ピヤクガ ナイッチューラ キテミタラ ソーダ
五ヶ ハラカ 肌か ない, ハ言ハ, ハ笑ハ, ハ笑ハ
ヘツツ タタ スート ミヤツタケ トマッチャツタ ヨツツチャ
ハタ ハタ すうと 肌 ハタ 止, ハタ, ハ止, ハ
ヘツツ コーヤツテ マズ オカチャガ ナンダゾー シンセツニ^ヤ
ハタ ニシテ ます お母さんか 何だよ 頭
アノ デレカ コンネ= シンセツ= シテフレモノガ
ホの 誰か こんなに 新鮮^{アヒ} してくれよ 老爺^ハ

アラッチャ オカゲニ ヨウナルトーチュッチャ一 ウレシガ
ぬうか おかげで 良くなるよって言へば 嬉しが
ヘテネー ソーイッテ オーテ シンジャツ ナンモ オニ=
てね いと言へ いて 死んじや、 何にも 俺に
ユイヨキモ ナンモ ユヤーへンデネー ヨウナルトモタモン
言い置きも 何にも 言わぬ てね 良くなると思つたので

二

- A ワカクテ シンダーネー ワカクテ シンタ
若くは 死んでからな 若いは 死んで
B ジューガツ ジューガツ ハツカツツナ一
十月 十月 = + 日だった
C ヨンジュー シテ シンタ
四十四で 死んで
B アー ソーフラツラキータタケニ ヨンタツチュッチャ一 ミン
ぬ、 もうだなろ； 開いただけで 呼んだて言つた
ヘナ= ホメラレタテ ソイテモ オリヤー コドモニ ソーイッテ
なれ ほめられたから それとも 俺は 子供に そ； と言へ
マー アンナー チカラガ カナシーコリー カナシーガ アノー^一
まあ あんたのは 力が 悲しいことは 悲しかか あの
オトッチャンワ ナンダドー アノー シニバナン サイタト ユ
お父さんは 何だよ あの 死に死が 咳だと 言
ヘーモンタ アンナヒヲ一 ヒトノ ワルイヒトダテ ナンダ一 ア
； ねた。 あんな人は 人の 悪い人だから 何だよ 出
ヘノ一 アレン ナルワ アリマエダツテ ユウレルト アンナ
の あれに だらうは あり前だつて 言わないと あんな

「イッショーサワバスヒトノイーヒトアウラーフントタ
一生~~~~~人の它の人々俺はおおは食

ヘベモノガタベレナシヌッテミナユッテクレルガナーヒト
食べ物か食べられたがた、てみな言へくれるかね人

～ニユウレタターナナーナーハンナチガイヤアレアレ
～言われてとは(言わつたりは)あらぬないくな違ひ云、あれあれ

ヘガシニシニバナガサイトユーモンターテコドモニチカ
死に死の花か咲いて言ひて言ひて3次にカ

～ラーオトスナヨショーガナイテナーッテオレユッタツリガ
と落すなよしがないんだからな、て俺言ったか

ヘネーホントソーターテネーデンナソーイッテクレテマー
ぬ本当にはどうかさねみんなそし言へくれてね

タベモノガタベレナシヌッテアノシトガシンナツナツタ
食べ物か食べられたがた、てあの人か死ん…なくだらう

～テユッタラタベモノガタベレナシヌッテソーイッチャ一
て言つた、食べものか食べられたがた、てどう言つたは

クレツモンターテイネーワシワソレタキヤソレタキヤソノ
くれたのではね私はそれがなければそれは

ウレシカタドーチュットテワシンソイデコノフミテモネー^{モネー}
うれしかったぞ、言へ私がそれがこの組でもね

ショージキテアノシトノイーシトタツタンタヒヒコ
正直であの人の良い人だからたた(?)

ヘミキョーウオアレキョードアレネーナニカノハイキュー
とあれ丁度あれね何かか配給

ヘジブンテイネショージキナヒトデ、チユッテニネンタツカ
の貰うね正直な人づって言へ二年五六年か

サンネンカ やラシテ フレテネ オラマー ソーイッタ オト
ミヌカ やらじて くわくは 俺まふ そいだ お父さ
ヘナ トテモ ウチガ タマランテ⁷ ヤッテケレンテ⁷シラ ア/
ム とても 家が たまにかうが、 やつてけんないが、 てき、ちく あ
ナンゾイ コノ フジノ シューワ ウチガ⁷ ヤレニヤー ア/
何ですよ この 組の 象は 家が やつてけんない あの
イッテ⁷ アシノヤイ イッテ⁷ ヤッテ⁷ ヤルテ⁷ シコトワ⁷
ス⁷ 天の宮(尾音)へ⁷ や⁷ や⁷ や⁷ や⁷ 仕事は
ナシロ ヤッテ⁷ フレニヤー⁷ ショーガナイ⁷ チューテ⁷ フ⁷
なにしろ や⁷ や⁷ くわくは じよんかたいって言ふが⁷ たぐ
パンナガ⁷ ソーイッテ⁷ オシツケラレテ⁷ マタ⁷ ヤルヨー=ナ⁷
みくわか⁷ もじ言⁷ よりしつけられへ⁷ また やるよに⁷ 万⁷
ヘタ⁷ チュ⁷ チャー⁷ ソーイッツワイヤ⁷ マー⁷ ソイデ⁷モ⁷ ソレナ⁷
元⁷ え⁷ ほ⁷ ひは⁷ キ⁷ 言⁷ たの⁷ ま⁷ あ⁷ え⁷ も⁷ え⁷ ね⁷
ヘシモ ソー⁷ イワナンダ⁷ マズ⁷ マタ⁷ オト⁷ ナ⁷ コトシ
も⁷ キ⁷ う⁷ 言⁷ かがたか⁷ ま⁷ 又⁷ お父さん⁷ 分⁷
モライ イッタ⁷ ミシナガ⁷ ソーイッテ⁷ フレルテ⁷ テ⁷ マー⁷
莫⁷ い⁷ た⁷ みんなか⁷ もじ言⁷ くわくは⁷ ま⁷
ソイデモ⁷ ソイタ⁷ モンテ⁷ ウレシカツガネ⁷ エー⁷ ワシャー⁷
え⁷ も⁷ も⁷ か⁷ うれしかがたけとね⁷ え⁷ え⁷ ね⁷
ハイ コドモニ⁷ ソーイッテ⁷ ユイキカシマ⁷ ショーガナイ⁷
む⁷ み供⁷ う⁷ 言⁷ う⁷ 言⁷ い間⁷ かせたん⁷ ですよ⁷ ど⁷ しよ⁷ も⁷ い⁷
ア⁷ イクネ⁷ モダ⁷ オレヨリ⁷ ヒト⁷ シタ⁷
ホ⁷ いくゆ⁷ (人名)もだ⁷ オレヨリ⁷ ヒト⁷ ヒト⁷

- C ヒトガイ一ツ ヒトガイ一ツアリ ショ - ジキタツツ
 人が良か 人が良からず あの 正直丸
- B アーマタシャーヒトノンキナヒトダツツテエー⁷
 人、のんきな 人だらけ
- A コーポコイタネースミオキタヤー スミオアイタデネー⁷
 苦勞をしたね 炭を切るは 炭をやめたか
- C ヤハリナンショコシナキワヨキテスミオヤイッチャーネ⁷
 やハリ とにかく こんな木は 爪で 炭をやめては
- エーヨキテウケフチュー キラニヤーキレンラソイテ⁷
 爪で ウケフチとからねば カレハトイ
- ヨルガヨナカデモワシャーハイジュニシハシテモイ子⁷
 夜か夜中でも私に まう十二歳年 一
- ジデモグットオーキナヤマイヨーハカシャーハカツ⁷
 時でもぐっと大きな山には若は ×××
- アカショーツケチャーリツテエー⁷
 松明きかけは歩くから
- A エーハカショーツケテ⁷
 ねえ松明でかけ
- C ソコアブンナカナイツテネー アカショーワットトイチャーツケテ⁷
 そこのあたりないてね 松明で割りかけ
- B ヤハリソラシブロハイセンジチュー⁷
 やハリそのラシブロハイセンジチュー
- A ランブナンテモッテナガッテツケサセナンタデネーハカシ⁷
 ランブナカヘもといたがてつけさせながらからね 巻

シユ - 7

象は

B ソリヤ センジ^フニタモ^{シテ}ナシロ エー^カン ナカ
ソリヤ 戯^フアサヒ^タのイ^タ なにしろ 安^スか威^カ(かわ) なか

ヘ^レ ツセ

ツセ よ

C ソイ^フモ^シタ^テ ヨルガ ヨナカ^テモ ソ/ ケ^ブトメイカニ^フ
ソイ^フモ^シタ^テ 夜^カ 夜中^アモ ソ/ 煙^ス止^ム い^タカ^ムく^ス
ナランタ^フ カマエ^ネ ト^ツテモ ト^トイ^フ イチリモ アル ヤマ^ハ
ナランタ^フ 金^ヘね と^モ 遠^シ 一^モも あ^ス 山^ハ

A ヒト^ノ イカシヨ^ナ ホーダ^ネ エー^フ
人の 行^カいよ^シな 方^アス^ル え、

B ノーダ^ノーダ^ノ
ノ^ミノ^ミ

C ソレ ヤリヌイタ^テネー^フ
それ やり抜いたからね

A オカシ^一ホーダ^テネー^フ コ^ノ
おかしい 方^アス^ル ねこの

B =シ^フ -
=フ

A ハシ^ンタ^ノ オフ^ノホーダ^ネ一^フ
ハシ^ンタ^ノ(地名)の 奥^ノ方^アね

B =シ^フ一^ネン/ ソレ^テ ナシロ シュ^一ガ^シノ^フ イツウガ^カ=
=十年の ソレ^テ なにしろ 十月の 五月の
オーマー^スキガ^フ キタ^ツカ^フ リ^レオ ミタ^トキ^フ-
? が 来た^カ が それ^を みたときには

- C ソレオ ミタワケ エー
それぞ みたわげて ねえ
- B アノシグン 「オーキナ コイオ トレ 「トレルダケテ」 ワシラン
ぬ北境 大きな 鯉と ×× とれるだけだ ねらか
オーキナ コイオトッテ トヨード 「ビョーキガ ワルイ。トユー
大きな 鯉と とた 丁度 病氣か わるい つむ
ワケテ「アニタントコ カクリオ シテキタツテ
わかれ あなたの所の 隔離だ して きた が
- C エー「ソイタモント」 サーテ ソレオ アトデモ ヒトツテ マズ
えー えでか さて それと おとども 一人で ます
ショードフ ヒトツテテ ヤッテヨー ア/
消毒 一人で やってさ あ
- B ウーン ソーダ、タター
うん そだったのを
- C フントニ ホント ウリアイ ホカノ シューカ ナンチユータカ
本当に 本当 わり高い ほかの 象か 何といふか
ドージューシテ クレルモニタイネー ソイテ ワシャー フント
同情 いふ くろまつづけ そや うれし 本当
ヒトツテ ショー ショードフヤナンカオ ヤッテ カナシミオ
一人で ××× 消毒 など で やつ 悲しみ で
シタデネー ソイテ ナニカ アッテモ ホレタテ フントニ
したがふ えぐい 何か ふくも おいでか 本当に
ワルイ ビョーキガ アリヤー ソノシトコイ オリヤー
悪い 病氣か 五十一 ソノ人の所へ 疾病は
イッテミテ ヤリタイ ソーユーダネ ソイテ ドンナ コトデモ
行きなれ やりたい ういじんたよ おとへ さんね こころも

オリヤー ガマンガ デキルゾー ソーイ、ナヤー ユーカボー
俺は 我慢か できるよ そ、言、うは 言、うは

A コッペー コイタデーネー^ト
カツラ した からね

C ソイデモ イマ一 オカゲテネー ウンカ。イーテネ
ソハモ 今は おかげでね 運か いいわ

A ソーソー^ト
くろく

C トテモ イマワ ウンカ。イー^ト
ソモ 今は 運か 実い

B アー ウンカ。イー イマーイー^ト
あ、 運か 実い 今は 実い

C ヨメモ イーシ エー アノ フサモネー マーエー イマモ ウ
嫁も 実いし ね あの フサもね まあね 今も 家
ヘチ = ナート アノ ナヨイ ヘヤカ。ナケニヤ ショーカナナイ
に サし あの ちょっとした 部屋か なければ 困る

~テ ヌッテフレテ マー コドモが ソレオ オバーナン ウン
~達で くわへ まあ みゆか。 くわで おばあちゃん 運が

~ガ イーテ ナガイキョー セ=ナ= ダメタッ チューウイ パノ
良いから 長生きを しないければ ダメだつていよ あの

ナ=ヨー やリ モジ= ヤルジャ= ナイシネ ワシン マタ^ト
何ぞ ×× ? やるのでは ないしむ 和か ま

ホント ワカイシュー！ キニイランヨーナコト ユーコト イ
本当に 茂い家の 気にならないよなこと ううなこと

~ヤナモニダテネー マズ ユーナリニ ナットルテネー ホントニ
やだもんからね ます いじめりに なってからね 本当に

B ウン ソリヤーマー トミガヨリヤー ソレガ イチバンヨイダ
 えん それ ちめ みが 寄れば そなか 一馬 良いんですね

C ソレガ イチバンダモノネー エー アー ドケ ナニョー イ
 それ 一馬 そのね えー あー どけ 何で 极

ヘウエルダカ フヨットモ シランチニヤ 「イモートガ ソレオネ
 えるのか カレモ 先づかいといえは 妹か それでは
 マス ホント= イーナー アネントー アンキナモニダッタ
 すず 本当に 長いのみ 姉さん達は 気楽だもんだって

ヘガ ソレテ ナケニヤー ウマカ一 イカンヨツテ ユーダーホレ
 か それ それだけ うまくは 行かないよ、 いじんでおな
 ハラワ ホント シンセツ= ダイジニシテ モラヤ マー ダイ
 纔は 本当に 親切ハ 大事ハ いじえは チム 大事

ヘジ= ベツニ シテモラワンデモ イーガ フツー= シテモライ
 ハ 8月(大事)してもわななくても 長いが 3.5月(大事)

ヘサイセリヤー ウレシートモトヘル、 4ニガネー
 さえすれば 嬉しいと思ふ、 いふ けれども

B マー ヒヤフショーオサー アノ ウチウチジヤ マンダ ヨメガ
 チム 五時 をさ あの 家へ では まだ 嫁が
 ナシア= 〜〜ガ フート ヤルヨニ= ナリヤー マー ヘタナ
 何たゞ ちし やよよんに たれまつ チム 下手な
 フチオ ダサット ノーダシガ アリヤー ソーダンシテヤレ
 口を 出さないで 相談か 云れば 相談 いやや
 ホカノコリー
 ほかのこり

C ノーダソーダ ノーダソーダエー
 うだ うだ

B マー シハング イナバン エー＝
ヨク ヨハング －ホ キー ハナ

C イナバン エー＝ ソイテ クロットモ イマントコジヤー オリヤ
－番 ヒーバスモ ヨナゴ ホレモ 今人てこ ハは 完

～一 フント＝エー アノー クナコトモ カナシーコトモ ナイ
は 本当に ね あの 苦なことも 悲しいことも ね
クロットモ エー ソイテ ウチガ イナバン ヨウテ ウチガ
少しち め キナゴ 家か －ホ ナカ 家か

マズ ザイショガ アソコタガ トマッタコタ ナイテネ イ
ヨメ 左所(里方)が あそこなか 止むところは ナイカナル(左)行
～テ ウチガ イー ウチガイー ハイ ウチー イ、トキヤーハイ
家か 良い 家か も 家へ さくときは も
トコー /ベテ フレイヤー アルシ ノゴガ ハイ ノコイ
床を のべて くわくは あらし ほんか も きへ

ヤツバノシタイ マコガ テトルガネー オンナノコワ アノコガ
後場の下に まよか むでひがわ 女の子は まゆか

ハイ トコー マズ /ベテ くし リバーチャン ハイ ネルカイ
もう 床を ます のべて くわ あはあちゃん もう ねるかい
/ベテ くし マタ アゲテ くし トコー マズ ヤリヌイタデネ
のべて くわ また 上げて くわ 床を ます ヤリ抜いたからね

～一 アノコワ ハイ ヨーユーヨーナ モンダイ ワシャーマー^一
あの子は も やういじよが もうなよ 亂は まぶ

ドコイ イッテモ トマッタコタ ナイ ウチー トマッタコタ
ドヘ さくとも 油すたこは かい 家は 油すたこは

～一 ナイダテネー マー ホンナ マコガ トコー /ベテアル
ないんだかう まみ さんか まよか 床を のべて みる、

~タッテ イーニャナイカラッタヤー ナーが ユッタ、モネ
て言ったへ 良いじゃないかって、今は 先か 言った、でもね
~- オリヤーマー ウチカイ 14バン イーティ イフヨウカラッタ
俺は 七 家が 一番 良かる 行くよ、と言、今は
~- スノウ キカラッタ トマッタコターナイ ソネーナラ ホイ
すぐ 来ちゃった 沢山のことは みんな風なら それ
~テモ ウチノネーサンラ ウレシーライッカラッタヤー ミンナ
でも 家の 姉さんら 姫しいだろ) と言、今は みんな
~シ ユッカラ一 クレルガネー
が と言、今は くねくね

B ウン ソーネイ
ん うれし

C ソリヤ ウチホド イートカナイゾイッカラッタヤー
えぬ 家ほど 良いことは みんな、と言、今は

A アニコウ オトナシ一 コタニエ一
長男は おとなしい 子だね

B マコガエ ウン イーコタ
まかね うん 良い子だ

C マコガネ マコモ オトナシ一 コタ アノカ一 マ一 ツイマー
まかね まも おとなしい 子だ あの子は まあ つい ため
ズート ナニ ユッタコターナエ一
すう、こ 何(ひつ) 言ったのは まあ

A オトナシ一 コタエ
おとなしい 子だね

C オトナシ一 コタ アレカ
おとなしい 子だ (?)

B サー コリヤ マー コレテ ナンダガネ アー ヤハリサ
さあ こりや ま これで なんだがね あ やハリサ

ココーテモ

ここでも(山口に、この度旅金を送る前にうけがすことは)

A ウレシカッタネー ヤタラノ ヒトガ オリヤー ウタイエン
うれしかたね やたらの 人か 房けいん 歌うことは出来ないのに

B オカイコーナ カルテルシサ
お畜をさ 飼てろじさ

C マー ロフ= ウタヤーシンダネ
ま ろふ = 歌いはしないよ

A ソイテモ 彳ラカ ウヌッテ フレリヤーネー イタテネー
ソイテモ ひらか 歌う フレリヤー ハナカラハ 良いんだからね

B ホントニ ウレシカタ
本當に うれしかた

Y オヒルン ナッチャッテ マー ホントニ ユツブリネー シテ
五金に なちゅ、 ま 本當に ユツブリ して
イタダイテ アリガトゴザイマレ
アリガト、 ございました

B ココーザ カイコン ナッタデ マタ グワトリ一イカニナラン
ここはさ かいに なって 又、 桧取りに ハクねは ねは

Y モーシワケアリマセシタネー イツマテモ ナラトアリ
申し訳ありませんでした イツマテモ ナラトアリ
ナマエオネー ユツテクダサイ ジブンデ ユツテクレシ オハサ
名前をね 言ふて下さい ジブンで ユツテクレシ オハサ

ヘンカラ
へんカラ

- A ワシノ オカネ
私ノ オカネ
- Y ウマレシトミオ ウマレタトシ
生れ元 まで 生れ元
- A ワシャー ワシノナワ ユウンデモイーガ コノオバサンノナウテ
私は 私の名は 言ひなへれ いいが このおばさんを名づく
- C ユヤー イージャン オフササ
言ひなへ 良いじゃかん オフササ
- A ワシカネ ワシャー メージサンジュー ニネンノ イガツノ ツイ
私かね 私は 明治32年9月の 9月の 1日
- ～タチ ウマレタ コノ オバサンガ タイショーダモンダテ オハ
(12) 生れて。この おばさんか (歌の方) 大将 だいぱう おは
- ～サンノ タタツイネー
さんの お(まきのか先)たゞ
- Y ソイダケト オバサンノネー
だいたて おばさんをね
- C ユツツ ツツツツツツ
言ふ え
- Y ナマエオ ジブンテ ユツツ コエオヌココエ トリタイワケ
名前で 自分で 言つた 声をね ここへ 月かりんわけ
- C ソーイツタ ナマエオ ユヤー エーワ オフササ
名前を お名前で 言えはつ 良いよ おフササ
- A ワシャーマードーテモ イーガ
私は お どうぞ おいか
- B マー ナマエオサエ ユヤー イータ ダケタフサ
まへ お名前で さえ 言ひはい 良いから 我のフサ (と)

Y オバサンノ ナマエヲ ナシテ—ダヌ
おばさんノ ナマエヲ ナシテ—ダヌ

A ナシダツナ
ヌカ フナ

Y ソイジヤー コニタ オジサン
ソイジヤー コニタ オジサン

B ワシウ メージサンシユ—ヨネンウマレノ サンガツヨーカウマレ
和ノ月 明治 34年生の 3月 5日 生れ

タナベ ショ—イチダンネ
田邊 正一 大阪

Y サンガツ ヨーカデスカ ソイジヤー オバサンヲ
3月 8日 生れ ソイジヤー おばさんは

C ジネ— ジサンシユ—キ—ネンノ ジサンシユ—
明治生 39年の 明治 39年
キ—ネン ニガツ ハイカラマレタガネ— ツツミ フジヨ
2月 6日 生れ 大阪 月 3月

Y アリガト—ゴザイマレタ ミシナ ココワアリ— セーレキニヲ
アリガト—ゴザイマレタ ミシナ ココワアリ— セーレキニヲ
カナカノコ—ユ—ウケ シモナカノコ—ウケ
上中の甲 乙 いもけ? 下中の甲 乙

B エ— ナカノコ—デス アザツネ ナカノコ—デス
え 女性 中の甲 乙 学はね 中の甲 乙

注記

1. ニヤケの語源は「煮焼き」つまり「煮たり焼いたりした」という。
2. ヒトナルは「成人する」、ヒトネンは「育てる」に相当する。
3. 「泣いては」の意味でナフテモといつていることは確かであるが、このいいかたには武田ふささん独特のものがあると、田辺さんはいふ。
4. 「買わずにいて」とカウツのネイフ、「行かずにいて」とカコネイフといふ。カウツコナイフ、イカコナイフの変形だろう。
5. このあたりの ケーは [KE:] のように母音エは広く感じられる。
6. 「川上」は大字の名称であるとともに、田辺正一さんのお宅の家号でもある。
7. 「仕事をする」「働く」事を イコク(働く)といふ。
8. ビニガニトノといふ名のよく働いた女人がいるところから、生れた子供にトノといふ名をつけた話である。生れの子に、ビニガの長生き婆さんの名をつけるとか。これに類する習慣は富山県には、ちょいちょいある。
9. この時、武田ふささんの息子夫婦、初夫さんと、やすゑさんが外から帰ってきた。
10. 「通した」とトイタと通常いふ。トイタ或いは、トイータは、その融合形。
11. 垣に飼(垣の葉)をやることをも、カウといふ。
12. ケーの母音エは、ガアリない。
13. コズと言つていらぬかも(れまいが、コズときこえた)。
14. このネットソンは、提さん自身の(自分の)動作であるゆえに疑問がある。田辺さんに伺つてみると、確かにツと言つてゐるが、「言いまちがい」に近い言い方であつて、それゆえにそのあとで、ストッタネットソとくりかえして「言ひなして」いるのだといふ。そしてこのように「言ひまちがえる」ことは稀にはありうるといふ。
15. この仰所には、は、きりと発音上の区切りをつけられた。
16. ミオボュタは、オボエツと言いかえることはできない。

17. カミガイトは「上垣津」と書き、武田ふささん宅の家テである。
18. このイハ、中古的にきこえた。
19. この促音も、ヌーテのヌ[ヌ]の母音が落すたしのと思うが、ラシフの如きなものと考えてよいかどうかわからぬ。
20. このセハ[ジ]に近くきこえる。
21. 「はじめて歩くようになる」ときアルキタツ、赤ん坊が「はじめしゃべるようになる」ときをシャベリタツという。
22. 「やせろ」と強調氣味に、また、や、侮蔑氣味にいうヤセマールの疎形。「しゃべる」に対するシャベリマール、「食べる」に対するタベマール等がありうる。
23. ウタヤシンは、本来「歌いはしない」の意。ここでは「歌えない」の意味になつてゐる。
24. ウオースキのよじに詰頭で[wo]があらわれたことは不可解。
25. ノーの発音は[ソコ:]のような母音がうががわれる。
26. 富山村地内の水没した部落の名。親戚のことか。
27. [ソコ:]のような発音。

(付) ふと示した符号は、特に著しいイントネーションの感じられる下降を意味する。

下降調の文末助詞ナ一、ネ一がつく場合、その直前の拍がいかがる場合(たとえば長音拍であっても)でも卓立する。このような文末アクセントは、遠州、三河山村地帯の特徴的事項である。

昭和55年 1月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘3丁目9番14号
電 話 東 京 (900) 3111(代表)

國立國語研究所刊行書一覽

國立國語研究所報告

| | | | |
|----|--|-------|--------|
| 1 | 八
丈
島
の
言
語
調
査 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | 言
語
生
活
の
実
態
—白河市および付近の農村における— | " | " |
| 3 | 現
代
語
の
助
詞
・
助
動
詞
—用法と実例— | " | 2,000円 |
| 4 | 婦
人
雜
誌
の
用
語
—現代語の語彙調査— | " | 品切れ |
| 5 | 地
域
社
会
の
言
語
生
活
—鶴岡における実態調査— | " | " |
| 6 | 少
年
と
新
聞
—小学生・中学生の新聞への接近と理解— | " | " |
| 7 | 入
門
期
の
言
語
能
力 | " | " |
| 8 | 談
話
語
の
実
態 | " | " |
| 9 | 読
み
の
実
驗
的
研
究
—音読にあらわれた読みあやまりの分析— | " | " |
| 10 | 低
学
年
の
読
み
書
き
能
力 | " | " |
| 11 | 敬
語
と
敬
語
意
識 | " | " |
| 12 | 総
合
雜
誌
の
用
語
(前編)
—現代語の語彙調査— | " | " |
| 13 | 総
合
雜
誌
の
用
語
(後編)
—現代語の語彙調査— | " | " |
| 14 | 中
学
年
の
読
み
書
き
能
力 | " | 400円 |
| 15 | 明
治
初
期
の
新
聞
の
用
語 | " | 品切れ |
| 16 | 日
本
方
言
の
記
述
的
研
究 | 明治書院刊 | " |
| 17 | 高
学
年
の
読
み
書
き
能
力 | 秀英出版刊 | " |
| 18 | 話
し
こ
と
ば
の
文
型
(1)
—対話資料による研究— | " | " |
| 19 | 総
合
雜
誌
の
用
字 | " | " |
| 20 | 同
音
語
の
研
究 | " | " |
| 21 | 現
代
雜
誌
九
十
種
の
用
語
用
字
(1)
—総記および語彙表— | " | " |
| 22 | 現
代
雜
誌
九
十
種
の
用
語
用
字
(2)
—漢
字
表— | " | " |
| 23 | 話
し
こ
と
ば
の
文
型
(2)
—独話資料による研究— | " | " |
| 24 | 横
組
み
の
字
形
に
関
す
る
研
究 | " | " |
| 25 | 現
代
雜
誌
九
十
種
の
用
語
用
字
(3)
—分
析— | " | " |
| 26 | 小
学
生
の
言
語
能
力
の
發
達 | 明治図書刊 | 2,100円 |
| 27 | 共
通
語
化
の
過
程
—北海道における親子三代のことば— | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 28 | 類
義
語
の
研
究 | " | " |

| | | | |
|------|---|---------|--------|
| 29 | 戦後日本の国民各層の文字生活 | 秀英出版刊 | 400円 |
| 30-1 | 日本言語地図(1) | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ |
| 30-2 | 日本言語地図(2) | " | " |
| 30-3 | 日本言語地図(3) | " | " |
| 30-4 | 日本言語地図(4) | " | " |
| 30-5 | 日本言語地図(5) | " | " |
| 30-6 | 日本言語地図(6) | " | " |
| 31 | 電子計算機による国語研究 | 秀英出版刊 | 450円 |
| 32 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)
—親族語彙と社会構造— | " | 品切れ |
| 33 | 家庭における子どものコミュニケーション意識 | " | 350円 |
| 34 | 電子計算機による国語研究(II)
—新聞の用語用字調査の処理組織— | " | 品切れ |
| 35 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)
—マキ・マケと親族呼称— | " | 450円 |
| 36 | 中学生の漢字習得に関する研究 | " | 5,000円 |
| 37 | 電子計算機による新聞の語彙調査 | " | 品切れ |
| 38 | 電子計算機による新聞の語彙調査(II) | " | 2,800円 |
| 39 | 電子計算機による国語研究(III) | " | 700円 |
| 40 | 送りがな意識の調査 | " | 1,500円 |
| 41 | 待遇表現の実態
—松江24時間調査資料から— | " | 900円 |
| 42 | 電子計算機による新聞の語彙調査(III) | " | 1,200円 |
| 43 | 動詞の意味・用法の記述的研究 | " | 5,000円 |
| 44 | 形容詞の意味・用法の記述的研究 | " | 3,000円 |
| 45 | 幼児の読み書き能力 | 東京書籍刊 | 4,500円 |
| 46 | 電子計算機による国語研究(IV) | 秀英出版刊 | 700円 |
| 47 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)
—性向語彙と偏値観— | " | 700円 |
| 48 | 電子計算機による新聞の語彙調査(IV) | " | 3,000円 |
| 49 | 電子計算機による国語研究(V) | " | 900円 |
| 50 | 幼児の文構造の発達
—3歳～6歳児の場合— | " | 品切れ |
| 51 | 電子計算機による国語研究(VI) | " | 1,000円 |
| 52 | 地域社会の言語生活
—鶴岡における20年前との比較— | " | 1,800円 |
| 53 | 言語使用の変遷(1)
—福島県北部地域の面接調査— | " | 2,500円 |
| 54 | 電子計算機による国語研究(VII) | " | 1,000円 |
| 55 | 幼児語の形態論的な分析
—動詞・形容詞・述語名詞— | " | 品切れ |
| 56 | 現代新聞の漢字 | " | 3,000円 |

| | | | |
|----|--|-------|--------|
| 57 | 比 喻 表 現 の 理 論 と 分 類 | 秀英出版刊 | 6,000円 |
| 58 | 幼 児 の 文 法 能 力 | 東京書籍刊 | 5,500円 |
| 59 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VII) | 秀英出版刊 | 1,300円 |
| 60 | X 線 映 画 資 料 に よ る 母 音 の 発 音 の 研 究
——フォネーム研究序説—— | " | 2,500円 |
| 61 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IX) | " | 1,300円 |
| 62 | 研 究 報 告 集 (1) | " | 1,700円 |
| 63 | 児 童 の 表 現 力 と 作 文 | 東京書籍刊 | 6,000円 |
| 64 | 各 地 方 言 親 族 語 彙 の 言 語 社 会 学 的 研 究 (1) | 秀英出版刊 | 2,000円 |

国立国語研究所資料集

| | | | |
|------|------------------------------|---------|--------|
| 1 | 国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17~24年) | 秀英出版刊 | 45円 |
| 2 | 語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例—— | " | 品切れ |
| 3 | 送 り 仮 名 法 資 料 集 | " | " |
| 4 | 明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目 | " | " |
| 5 | 沖 繩 語 辞 典 | 大蔵省印刷局刊 | 3,500円 |
| 6 | 分 類 語 彙 表 | 秀英出版刊 | 1,800円 |
| 7 | 動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集 | 秀英出版刊 | 1,700円 |
| 8 | 現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告) | " | 500円 |
| 9 | 牛 店 安 愚 楽 鍋 用 語 索 引 | " | 1,500円 |
| 10 | 方 言 談 話 資 料 (1) ——山形・群馬・長野—— | " | 6,000円 |
| 10-2 | 方 言 談 話 資 料 (2) ——奈良・高知・長崎—— | " | 6,000円 |

国立国語研究所論集

| | | | |
|---|-------------------|-------|--------|
| 1 | こ と ば の 研 究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | こ と ば の 研 究 第 2 集 | " | " |
| 3 | こ と ば の 研 究 第 3 集 | " | " |
| 4 | こ と ば の 研 究 第 4 集 | " | 1,300円 |
| 5 | こ と ば の 研 究 第 5 集 | " | 1,300円 |

国立国語研究所年報 秀英出版刊

| | | | | | |
|----|------------|------|----|------------|------|
| 1 | 昭 和 24 年 度 | 品切れ | 12 | 昭 和 35 年 度 | 350円 |
| 2 | 昭 和 25 年 度 | " | 13 | 昭 和 36 年 度 | 160円 |
| 3 | 昭 和 26 年 度 | 160円 | 14 | 昭 和 37 年 度 | 220円 |
| 4 | 昭 和 27 年 度 | 160円 | 15 | 昭 和 38 年 度 | 250円 |
| 5 | 昭 和 28 年 度 | 品切れ | 16 | 昭 和 39 年 度 | 品切れ |
| 6 | 昭 和 29 年 度 | 200円 | 17 | 昭 和 40 年 度 | 250円 |
| 7 | 昭 和 30 年 度 | 品切れ | 18 | 昭 和 41 年 度 | 300円 |
| 8 | 昭 和 31 年 度 | " | 19 | 昭 和 42 年 度 | 300円 |
| 9 | 昭 和 32 年 度 | " | 20 | 昭 和 43 年 度 | 品切れ |
| 10 | 昭 和 33 年 度 | " | 21 | 昭 和 44 年 度 | " |
| 11 | 昭 和 34 年 度 | " | 22 | 昭 和 45 年 度 | " |

| | | | | | |
|----|----------|------|----|----------|------|
| 23 | 昭和 46 年度 | 450円 | 27 | 昭和 50 年度 | 700円 |
| 24 | 昭和 47 年度 | 450円 | 28 | 昭和 51 年度 | 非売品 |
| 25 | 昭和 48 年度 | 品切れ | 29 | 昭和 52 年度 | " |
| 26 | 昭和 49 年度 | 600円 | 30 | 昭和 53 年度 | 800円 |

国語年鑑 秀英出版刊

| | | | |
|----------|-----|----------|--------|
| 昭和 29 年版 | 品切れ | 昭和 42 年版 | 品切れ |
| 昭和 30 年版 | " | 昭和 43 年版 | " |
| 昭和 31 年版 | " | 昭和 44 年版 | 1,500円 |
| 昭和 32 年版 | " | 昭和 45 年版 | 1,500円 |
| 昭和 33 年版 | " | 昭和 46 年版 | 2,000円 |
| 昭和 34 年版 | " | 昭和 47 年版 | 2,200円 |
| 昭和 35 年版 | " | 昭和 48 年版 | 2,700円 |
| 昭和 36 年版 | " | 昭和 49 年版 | 3,800円 |
| 昭和 37 年版 | " | 昭和 50 年版 | 3,800円 |
| 昭和 38 年版 | " | 昭和 51 年版 | 4,000円 |
| 昭和 39 年版 | " | 昭和 52 年版 | 4,500円 |
| 昭和 40 年版 | " | 昭和 53 年版 | 4,600円 |
| 昭和 41 年版 | " | 昭和 54 年版 | 4,800円 |

日本語教育教材

| | | | |
|-------------|-----------------|---------|------|
| 1 日本語と日本語教育 | 国立国語研究所 文化化序 共編 | 大蔵省印刷局刊 | 650円 |
|-------------|-----------------|---------|------|

| | | | |
|-------------|----------|---|------|
| 2 日本語と日本語教育 | —文字・表現編— | " | 850円 |
|-------------|----------|---|------|

| | | | |
|-------------|---------------|---|------|
| 3 日本語の文法(上) | —日本語教育指導参考書4— | " | 450円 |
|-------------|---------------|---|------|

| | | | |
|-------------|---------------|---|------|
| 4 日本語教育の評価法 | —日本語教育指導参考書6— | " | 450円 |
|-------------|---------------|---|------|

| | | | |
|-------------|-------------------|-------|------|
| 高 校 生 と 新 聞 | 国立国語研究所 日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円 |
|-------------|-------------------|-------|------|

| | | | |
|-----------------|-------------------|-------|-----|
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会 国立国語研究所 共著 | 金沢書店刊 | 品切れ |
|-----------------|-------------------|-------|-----|

| | | | |
|----------------|-----------|-------|--------|
| 国立国語研究所三十年のあゆみ | —研究業績の紹介— | 秀英出版刊 | 1,500円 |
|----------------|-----------|-------|--------|

日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

| 巻 | 題名 | プリント価格 |
|------|------------------------------------|---------|
| 第1巻 | これはかえるです——「こそあど」+「は～です」—— | 30,000円 |
| 第2巻 | さいふはどこにありますか——「こそあど」+「が～ある」—— | " |
| 第3巻 | やすくないです、たかいです——形容詞とその活用導入—— | " |
| 第4巻 | なにをしましたか——動詞—— | " |
| 第5巻 | しづかなこうえんで——形容動詞—— | " |
| 第6巻 | さあ、かぞえましょう——助数詞—— | " |
| 第7巻 | うつくしいさらになりました——「なる」「する」—— | " |
| 第8巻 | きりんはどこにいますか——「いる」「ある」—— | " |
| 第9巻 | かまくらをあるきます——移動の表現—— | " |
| 第10巻 | おかねをとられました——受身の表現1—— | " |
| 第11巻 | どちらがすきですか——比較・程度の表現—— | " |
| 第12巻 | もみじがとてもきれいでした——「です」「でした」「でしょう」—— | " |
| 第13巻 | きょうはあめがふっています——「して」「している」「していた」—— | " |
| 第14巻 | そうじはしてありますか——「してある」「しておく」「してしまう」—— | " |
| 第15巻 | おみまいにいきませんか——依頼・勧誘の表現—— | " |
| 第16巻 | なみのおとがきこえてきます——「いく」「くる」—— | " |

(第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画・VTR価格1/2インチオープンリール21,000円、3/4インチカセット20,000円)

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS
SOURCE X-III

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS
IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 3)

CONTENTS

Foreword

Purpose and Outline

Text

Part 1 : AOMORI PREFECTURE (Hamlet Usitate, City Aomori)

Part 2 : NIGATA PREFECTURE (Hamlet Motiro-Ori, City Kasiwazaki)

Part 3 : AITI PREFECTURE (Hamlet Nakanokō, Village
Tomiyama, District Kitasitara)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
TOKYO JAPAN

1980